

朝来市

加都遺跡Ⅲ

— 一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ —



2012 (平成24)年3月

兵庫県教育委員会

朝来市

加 都 遺 跡 III

－ 一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I －

2012 (平成24)年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



遠景写真（北上空から）



遠景写真（東上空から）



加都遺跡全景（東から）



加都遺跡全景（南から）



遠景写真（西上空から）



加都遺跡全景（西から）



加都遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）



遺跡全景（北から）



空中写真（東上空から）

巻頭図版6
A・B地区



A・B地区空中写真（南上空から）



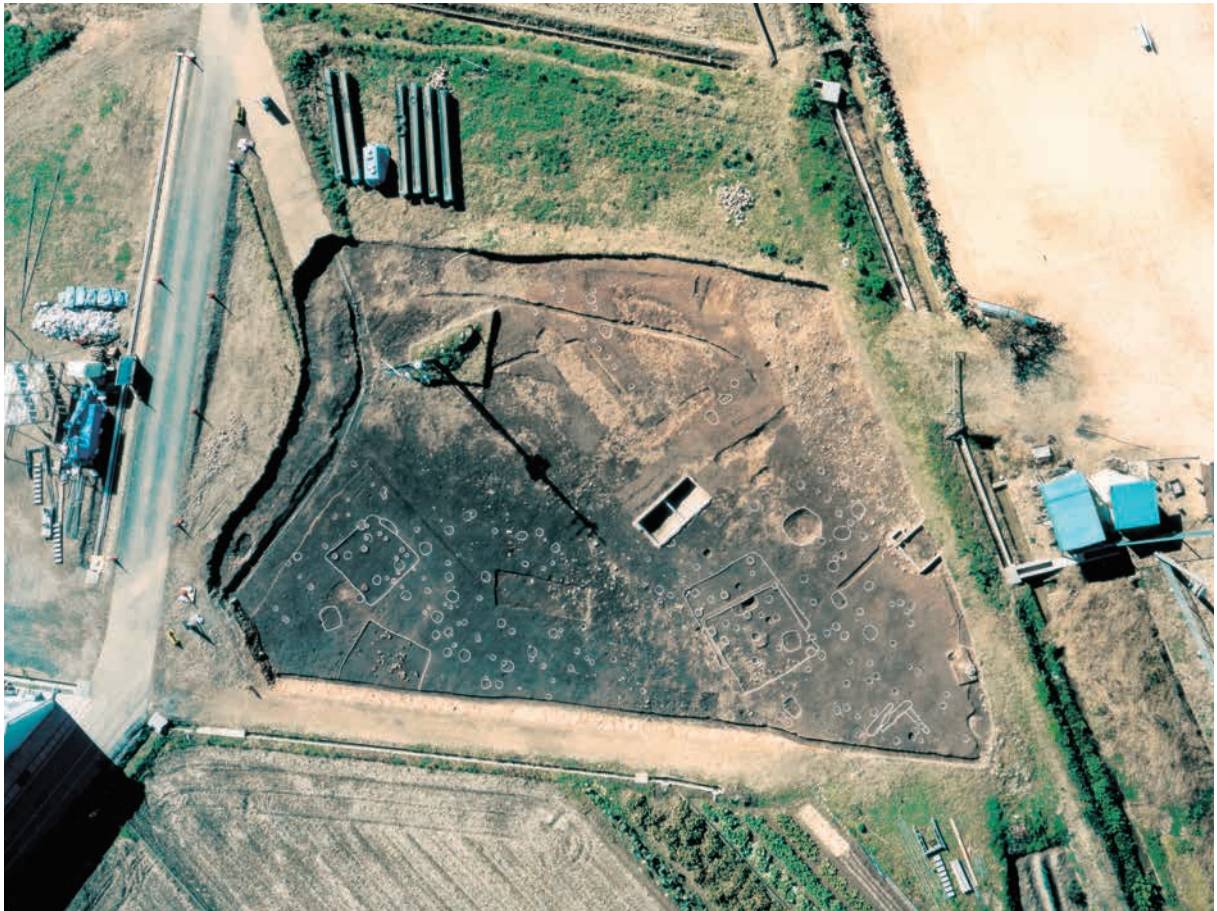
A地区空中写真（北上空から）



空中写真（東上空から）



SH05



空中写真（北上空から）



全景（東から）



SH06・07全景（北から）



SH06南北アゼ断面



SH06東西アゼ焼土坑断面



SH06焼土坑検出状況（南から）



SH06焼土坑断面（南から）



SH06焼土坑焼土断ち割り



SH06土器出土状態（北から）



SH06・07全景（東から）



SH07鋤先出土状態（南から）



SH07中央土坑断面



SH08全景（東から）



SH08土器出土状態（東から）



調査風景



SH09南北断面（東から）



SH09南北断面（北東から）



SH09土器20~22 (西から)



SH09土器23 (東から)



SH09全景 (西から)



炉跡断面 (東から)



調査風景



豎穴住居跡出土遺物



SH01出土遺物



SH02出土遺物



SH03出土遺物



SH04出土遺物



SH08出土遺物



SH09出土遺物

例 言

1. 本書は朝来市和田山町市御堂に所在する加都遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所が計画・施工する一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴うものである。
3. 分布調査は平成12年度に、確認調査は平成14年度に、本発掘調査は平成16・17年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。
4. 確認調査は吉識雅仁が、本発掘調査は山本三郎・吉識雅仁・吉田 昇・渡辺 昇・山上雅弘・長濱誠司・深江英憲・池田征弘が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用し、水準は国土交通省設定の2級基準点ならびに3級基準点を使用した。
6. 基準点の測量ならびに平面図の図化は(株)アコードに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。
7. 遺構写真は調査担当者が撮影した。巻頭図版4の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は(株)アコードに委託して撮影したものである。
8. 整理作業は、平成22・23年度の2ヵ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。
9. 執筆は本文目次の通りで、編集は島田留里・高瀬敬子の協力を得て渡辺が行った。
10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1-1-1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用ください。
11. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示をいただきました。感謝致します。（敬称略・順不同）

朝来市教育委員会・枚田地区・田端 基
中島雄二・山根実生子

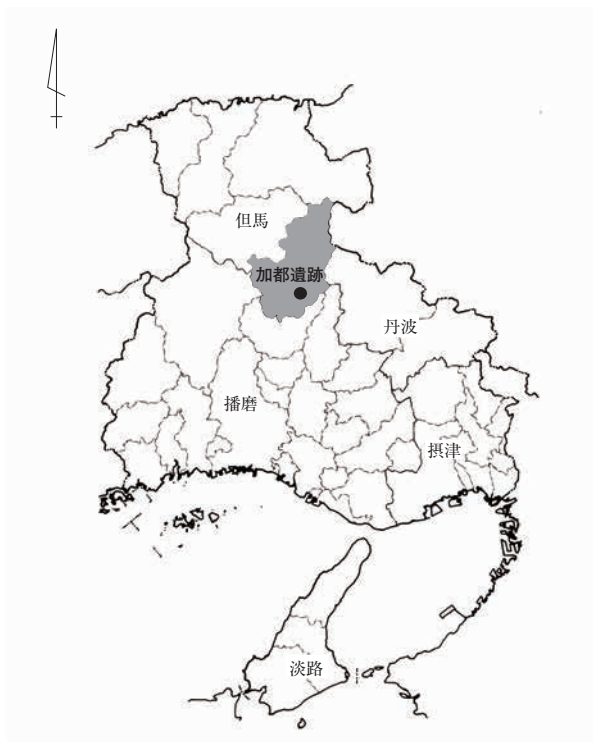


図1 朝来市（加都遺跡）の位置

本文目次

例言

I 調査の経過	渡辺	1
1 本発掘調査の経過と体制		
2 整理作業の経過と体制		
II 位置と環境	渡辺	4
III 調査結果		9
1 A地区	深江	
2 B地区	深江	
3 C地区	渡辺	
IV 出土遺物	渡辺	18
1 土器		
2 石器		
3 金属器		
V 加都遺跡の地形環境	青木哲哉	30
VI 科学分析		36
1 加都遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	（株）加速器分析研究所	
2 加都遺跡Ⅲ出土炭化材の樹種同定	黒沼保子（パレオ・ラボ）	
3 加都遺跡Ⅲ出土土器の胎土分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	
VII おわりに	渡辺	53

挿図目次

図1 朝来市（加都遺跡）の位置	図9 茶すり山古墳
図2 加都遺跡遠景	図10 竹田城跡
図3 調査風景	図11 石器実測図
図4 調査風景	図12 金属器実測図・拓本(1)
図5 整理作業風景	図13 金属器拓本(2)
図6 片引遺跡出土木製壺・土器	図14 調査地区周辺の地形分類図
図7 加都遺跡の位置と周辺の遺跡	図15 調査地区付近における微地形の分布
図8 池田古墳	図16 C地区における遺構検出面以深の地質断面図

図17 調査地遠景

図18 調査風景

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧

表2 金属器計測表

図 版 目 次

図版1	全体図	図版20	B地区	平面図			
図版2	A・B・C地区	平面図	図版21	B地区	調査区（北壁・西壁）断面図		
図版3	A・B地区	遺構平面図	図版22	B地区	SH05	平面図・断面図	
図版4	A地区	平面図	図版23	C地区	平面図		
図版5	A地区	調査区（東壁）断面図	図版24	C地区	SH06・SH07	平面図・断面図	
図版6	A地区	調査区（北壁）断面図	図版25	C地区	SH08・SH10	平面図・断面図	
図版7	A地区	SH01	平面図・断面図	図版26	C地区	SH09	平面図・断面図
図版8	A地区	SH02	平面図・断面図	図版27	C地区	溝SD01～SD03	平面図・断面図
図版9	A地区	SH03	平面図・断面図			断ち割り断面図	
図版10	A地区	SH04・柱穴・土坑	平面図・断面図	図版28	C地区	SB12	平面図・断面図
図版11	A地区	SB01	平面図・断面図	図版29	C地区	SB13	平面図・断面図
図版12	A地区	SB02	平面図・断面図	図版30	C地区	SK3～SK7・SX2	平面図・断面図
図版13	A地区	SB03	平面図・断面図	図版31	A地区	SH01	出土遺物実測図
図版14	A地区	SB04	平面図・断面図	図版32	A地区	SH02・SH04	出土遺物実測図
図版15	A地区	SB05・SB06	平面図・断面図	図版33	A地区	出土遺物実測図	
図版16	A地区	SB07	平面図・断面図	図版34	B地区	SH05	出土遺物実測図
図版17	A地区	SB08	平面図・断面図	図版35	C地区	SH06～SH09	出土遺物実測図
図版18	A地区	SB09	平面図・断面図	図版36	C地区	SH09	出土遺物実測図
図版19	A地区	SB10・SB11	平面図・断面図	図版37	C地区	出土遺物実測図	

写真図版目次

巻頭図版1	遠景写真（北上空から）	巻頭図版3	遠景写真（西上空から）
	遠景写真（東上空から）		加都遺跡全景（西から）
巻頭図版2	加都遺跡全景（東から）	巻頭図版4	加都遺跡周辺空中写真
	加都遺跡全景（南から）		（国土地理院撮影）

巻頭図版5	A・B地区	遺跡全景（北から） 空中写真（東上空から）	巻頭図版16	C地区	SH08出土遺物 SH09出土遺物
巻頭図版6	A・B地区	空中写真（南上空から） A地区空中写真（北上空から）	写真図版1	A地区	全景（西から） 東側柱穴群（南から）
巻頭図版7	B地区	空中写真（東上空から） SH05	写真図版2	A地区	北半部遺構群（東から） 南半部遺構群（北から）
巻頭図版8	C地区	空中写真（北上空から） 全景（東から）	写真図版3	A地区	調査区南部建物群 (SB01・SB09等)(北から) 調査区中央部建物群 (SB03・SB04等)(西から)
巻頭図版9	C地区	SH06・07全景（北から） SH06南北アゼ断面 SH06東西アゼ焼土坑断面 SH06焼土坑検出状況 (南から) SH06焼土坑断面（南から）	写真図版4	A地区	SB05・SB10他建物群 (南から) SB08他建物群（西から）
巻頭図版10	C地区	SH06焼土坑焼土断ち割り SH06土器出土状態 (北から) SH06・07全景（東から） SH07鋤先出土状態 (南から) SH07中央土坑断面	写真図版5	A地区	SH01（南から） SH01中央土坑断面 (南から) SH01屋内土坑断面 (南から) SH01床面土器出土状況
巻頭図版11	C地区	SH08全景（東から） SH08土器出土状態 (東から) 調査風景 SH09南北断面（東から） SH09南北断面（北東から）	写真図版6	A地区	SH02（南から） SH02西側柱穴断面 (南から) SH02中央土坑断面 (南から) SH02土器出土状況 SH02土器出土状況
巻頭図版12	C地区	SH09土器20～22（西から） SH09土器23（東から） SH09全景（西から） 炉跡断面（東から） 調査風景	写真図版7	A地区	SH03（南から） SH03内SK01土器出土状況 (東から) SH04（南から）
巻頭図版13		竪穴住居跡出土遺物	写真図版8	A地区	SB01（南から） SB01(P03)断面（東から） SB01(P10)断面（東から） SB01(P11)断面（東から）
巻頭図版14	A地区	SH01出土遺物 SH02出土遺物	写真図版9	A地区	SB02（南から） SB02(P27)断面（東から） SB02(P33)断面（東から） SB02(P36)断面（東から）
巻頭図版15	A地区	SH03出土遺物 SH04出土遺物			

写真図版10	A地区	SB03 (南から) SB03 (P44) 断面 (南から) SB03 (P46) 断面 (南から) SB03 (P48) 断面 (南から)	写真図版19	B地区	SH05中央土坑断面 (東から) SH05土器出土状況 SH05土器出土状況 SH05土器出土状況
写真図版11	A地区	SB04 (東から) SB04 (P79) 断面 (南から) SB04 (P82) 断面 (東から) SB04 (P84) 断面 (東から)	写真図版20	C地区	全景 (北から) SH06・07全景 (東から)
写真図版12	A地区	SB05 (南から) SB05 (P62) 断面 (南から) SB05 (P64) 断面 (南から) SB06 (P131) 断面 (南から) SB06 (P132) 断面 (南から)	写真図版21	C地区	SH09・10全景 (東から) SH09・10全景 (北西から)
写真図版13	A地区	SB07 (南から) SB07 (P138) 断面 (東から) SB07 (P140) 断面 (東から) SB07 (P141) 断面 (東から)	写真図版22	C地区	SH09東西断面 (南から) SH09東西断面 (南から) SH09全景 (南から) SH09全景 (北から) 調査風景
写真図版14	A地区	SB09 (南から) SB09 (P114) 断面 (南から) SB09 (P117) 断面 (東から) SB09 (P127) 断面 (南から)	写真図版23	C地区	SH09床面土器出土状態
写真図版15	A地区	P136断面 (南から) P167断面 (南から) P169断面 (南から) P171断面 (南から) 調査区東壁付近土坑群 (南から)	写真図版24	C地区	SH10全景 (トリミング) SH10断面 (南から) 焼土断ち割り (東から) SK3断面 (南から) SK5断面 (西から)
写真図版16	A地区	土器埋納坑 (SK2) 検出状況 (南から) 土器埋納坑 (SK2) 断ち割り (南から) 土器埋納坑 (SK2) 完掘状況 (南から)	写真図版25	C地区	SK6断面 (北から) SK7 (南東から) SK7土器出土状態 SD1断面 (南から) SD2断面 (南から) 調査風景 調査風景
写真図版17	B地区	全景 (西から) 全景 (北から)	写真図版26	C地区	SB12 (北から) SB12 (P3) 断面 (北から) SB12 (P4) 断面 (東から) SB12 (P8) 断面 (東から) SB12 (P9) 断面 (東から)
写真図版18	B地区	SH05 (東から) SH05南東隅土器出土状況 (西から)	写真図版27	C地区	SB13 (北西から) SB13 (P1) 断面 (北から) SB13 (P2) 断面 (北から) SB13 (P3) 断面 (北から) SB13 (P4) 断面 (北から)

写真図版28	C地区	SB13 (P5) 断面 (東から)	写真図版35	出土遺物(7)
		SB13 (P9) 断面 (南から)	写真図版36	出土遺物(8)
		SB13 (P15) 断面 (南から)	写真図版37	出土遺物(9)
		SB13 (P16) 断面 (南から)	写真図版38	出土遺物(10)
		SP40銭貨出土状態 (西から)	写真図版39 写真図版40	出土遺物(11) 出土遺物(12)
		断ち割り断面 (南西から)	写真図版41	出土遺物(13)
		断ち割り断面 (東から)	写真図版42	出土遺物(14)
		断ち割り調査風景	写真図版43	出土遺物(15)
写真図版29		出土遺物(1)	写真図版44	炭化材
写真図版30		出土遺物(2)	写真図版45	胎土分析(1)
写真図版31		出土遺物(3)	写真図版46	胎土分析(2)
写真図版32		出土遺物(4)	写真図版47	胎土分析(3)
写真図版33		出土遺物(5)	写真図版48	胎土分析(4)
写真図版34		出土遺物(6)		

I 調査の経過

1. 調査に至る経過

国土交通省（建設省）近畿地方建設局は、近畿地方の高規格道整備の一貫となる北近畿自動車道として計画された。近畿自動車道舞鶴道（現舞鶴若狭道）から分岐し、豊岡市に至る全長65.9kmの道路である。豊岡市で鳥取豊岡宮津道路と接続される予定で、但馬地域の活性化が期待される事業である。そのうち、丹波市春日町から丹波市域（遠阪トンネルまで）を北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅰ事業（全長24.4km）として進め、遅れて遠阪トンネルから国道312号に接続する部分までを同春日和田山道路Ⅱ事業（全長7.3km）として進めて行った。遺跡の集中している地域を通過したことから、多くの調査件数と時間を費やした。特に各インターチェンジに遺跡が広がっていたことから、調査面積も膨大となった。春日ICの春日七日市遺跡、氷上ICの市辺遺跡、青垣ICの沢野遺跡、山東ICの粟鹿遺跡、そして今回報告する和田山ICの加都遺跡である。個々に多くの成果を上げている。平成3年度に分布調査を兵庫県教育委員会によって実施し、確認調査は平成5年度に実施した。全面調査は確認調査と同じ平成5年度に春日七日市遺跡からはじめ、平成15年度に粟鹿遺跡の調査で終了した。調査終了後、平成17年4月に氷上ICまでが先に開通し、引き続き平成18年7月に和田山ICまでが兵庫国体に合わせて暫定2車線で開通している。和田山ICでは姫路市から延びる播但自動車道と接続している。

加都遺跡は北近畿豊岡自動車道と播但自動車道が接続することから、事業予定地が広大で約20万㎡が対象であった。当該地は加都田圃と呼称される南但馬でも有数の水田であった。比較的広域に遺物が採集された。平成8年度に確認調査が実施され、約55,000㎡の本発掘調査が必要となり、平成9・10年度の2カ年で本発掘調査が実施された。確認調査の結果から宮ヶ田地区（さらに3区に細分）・新水北地区・山内南地区・伊豫田地区・桜地区・焼御堂地区・岡ノ森地区に分けて調査が実施された。縄文時代から中世に渡る複合遺跡で、弥生時代は前期・中期の土器も少量認められるが少なく、遺構も土坑・溝だけである。前期の土器は東側に多く、筒江中山近くに展開するものと思われる。後期の竪穴住居跡が1棟だけ検出されている。

その後、国道312号の朝来市和田山町市御堂から国道9号に接続する八鹿ICの養父市八鹿町高柳までの13.9kmが、国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業として計画が具体化した。平成13・14年度に養父IC（養父市稲津）までの分布調査を実施し、18カ所が埋蔵文化財包蔵地の可能性が高いとされた。平成14・15年度に確認調査を実施し、5遺跡の本発掘調査が必要となった。加都遺跡についてはNo.1地点として上げられ、平成14年度に確認調査を平成16・17年度に本発掘調査を実施した。西側に未買収地が残っていたことなどから2年度にまたがり、東側のA・B地区を平成16年度に西側のC地区を平成17年度に行った。その後、引き続き八鹿ICまでの調査が実施され、高柳遺跡・ナベ遺跡などの本調査が実施されている。

さらに北近畿豊岡自動車道は豊岡南IC（豊岡市上佐野）まで延伸が具体化し、八鹿日高



図2 加都遺跡遠景

道路・日高豊岡道路事業として継続して調査の協議がなされている。平成20・21年度に分布調査を実施し、尾根上には多数の古墳が、IC予定地の平地では広く土器が採集されており、平成23年度から確認調査が行われている。

2. 平成16年度の調査経過 調査番号2004181

和田山町大倉部の確認調査（No.10地点）と合わせて加都遺跡A・B地区の本発掘調査を行った。調査は次年度も同様で国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長と兵庫県教育長が委託契約を交わして実施した。調査は2004年12月6日～2005年3月18日までの実働52日間を費やした。調査面積は2,587㎡である。

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 埋蔵文化財調査事務所

所長 平岡憲昭

総務課 織田正博

企画調整班

池田正男・稲田毅・柏原正民

調査担当 調査第2班

山本三郎・吉識雅仁・深江英憲・

池田征弘

調査参加者 山本亮司・奥和美



図3 調査風景

3. 平成17年度の調査経過 調査番号2005150

平成17年度は加都遺跡C地区の本発掘調査と内高山西古墳群の本発掘調査を実施した。加都遺跡C地区の調査は2005年10月6日～11月10日までの実働20日間を費やした。後半は内高山西古墳群と平行して調査を実施した。10月6日（木）に調査区設定し調査着手する。翌火曜日から機械掘削を始めた。まず、コンクリートならびにアスファルトの撤去・搬出を2日間行い、引き続き包含層上面まで機械掘削を4日間行う。機械掘削の途中から断面清掃氏、検測後人力掘削も開始する。包含層掘り下げ、10月25日から西側から面精査し遺構検出する。遺構掘り下げ平行して行い、11月1日に空中写真・全景写真撮影する。掘立柱建物跡・竪穴住居跡などの遺構の断ち割り・個別実測などを行う。11月9日に中間検査を受け、翌10日に断ち割り・補足調査を行い調査終了する。

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 埋蔵文化財調査事務所



図4 調査風景

所 長 平岡憲昭
総務課 若生晃彦・丸野真衣
企画調整班 池田正男・柏原正民

調査担当 調査第1班 吉田 昇・渡辺 昇・山上雅弘・長濱誠司
調査参加者 山本亮司・松井利可子・森本文子・前田陽子・中島由美

4. 整理作業の経過

平成22・23年度の2カ年で実施した。本発掘調査と同様に国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長と兵庫県教育長が委託契約を交わして実施した。平成22年度は水洗いから実測作業までを、平成23年度はレイアウトから報告書刊行までの作業を実施した。金属器の保存処理も平成22年度に行った。

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県立考古博物館

館 長 石野博信

総務課 前川浩子・川原聡介

整理保存課 村上泰樹・篠宮 正（契約事務） 岡田章一・山本 誠・深江英憲（工程管理）

調査担当 渡辺 昇・深江英憲

嘱託員 島田留里・高瀬敬子・森園悦子・栗山美奈・川村由紀・眞子ふさ恵・三好綾子
吉田優子・奥野政子・藤尾裕子・嶺岡美見・吉村あけみ・佐々木愛・島村順子
又江立子・伊藤ミネ子・平宮可奈子

保存処理担当 岡本一秀

嘱託員 岡田美穂・桂 昭子・浜脇多規子



図5 整理作業風景

Ⅱ 位置と環境

加都遺跡は朝来市和田山町加都・市御堂に所在する複合遺跡である。円山川中流域に位置し、和田山中心地の南東に広がるいわゆる加都田圃は比較的広い水田域となっている。円山河河口である豊岡市津居山から49.9km上流になり、標高は85～90mである。現況は平地となっており地目は水田である。完新世段丘上で、現状は平坦であるが、調査でも旧河道が多く認められた。平成17年4月に朝来郡4町は合併して生まれた朝来市は兵庫県北部の但馬の南側に位置する地方都市である。北西を養父市と、北東を豊岡市、東を京都府福知山市、南東を丹波市、南を神崎郡神河町、南西を宍粟市と接している。旧国で言うと、東から南東は丹波国と麻衣並みから南西は播磨国と接していることになる和田山中心地で国道・線路ともに合流しているように原始古代においても交通の要衝で合流部であった。丹波からは国道9号・山陰本線が繋がっており、古代山陰道が遠坂峠を越えて但馬に入ってくる。播磨からは国道312号・播但線が通り、古代但馬道があった地域で、加都遺跡の以前の調査で古代但馬道が調査されている。加都遺跡の調査も道路工事に伴うもので、播磨からは播但自動車道路、丹波からは北近畿豊岡自動車道に伴う調査である。

旧石器の遺跡は但馬では高原地帯で確認されている。杉ヶ沢遺跡や神鍋遺跡がその代表である。縄文時代の遺跡も同様の地形のところに営まれ、後期から低地にも遺跡が広がりはじめる。豊岡市では長谷貝塚・中谷遺跡などで貝塚も確認されている。朝来市では余り良好な資料に恵まれていない。加都遺跡宮ヶ田地区で前期の深鉢がピットから出土しているのは遺構出土例として希少である。加都遺跡では少量ながら後晩期の土器も出土している。石器が採集されているものやムクノ木遺跡・高瀬遺跡などで土器が出土している程度である。片引遺跡では突帯文土器が出土しているが、弥生前期の土器と共伴している。

弥生時代前期になっても遺跡数に変化はない。片引遺跡・ムクノ木遺跡・高瀬遺跡などで土器が採集され、石器も採集されている。片引遺跡の木製壺は彩色文様を施した逸品である。土器もまとめて出土しており、Ⅱ様式に変化する土器群である。ムクノ木遺跡も中期前半まで続く遺跡である。安井遺跡・寺内遺跡では環状石斧が出土している。中期になると山東町に遺跡が多く見られるようになる。分銅形土製品を出土した仲田遺跡や古墳時代にかけての拠点集落となる柿坪遺跡が知られている。また、後期になると高地性集落で二重環濠を有する大盛山遺跡や玉づくりを行っている宮ノ本遺跡が生活をはじめた。加都遺跡では遺物は前期から見られ、中期に土坑・溝があり、後期に竪穴住居跡・土坑・溝が検出

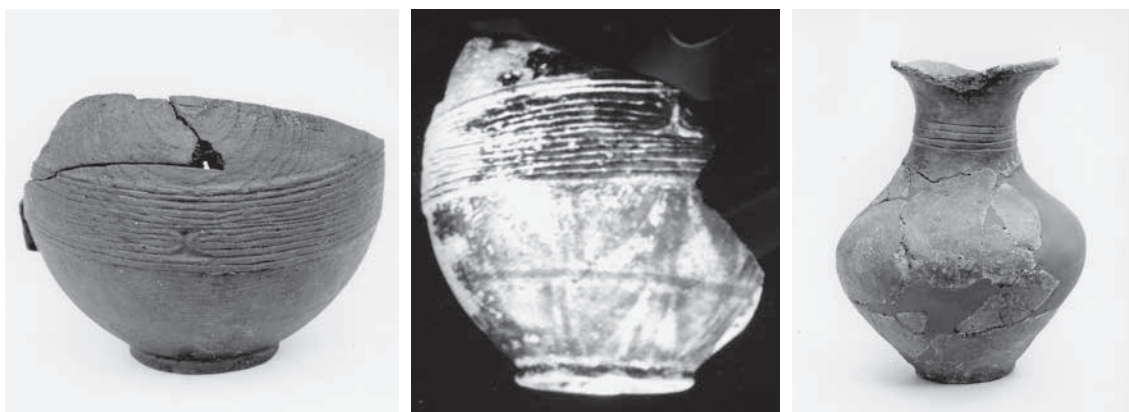


図6 片引遺跡出土木製壺・土器

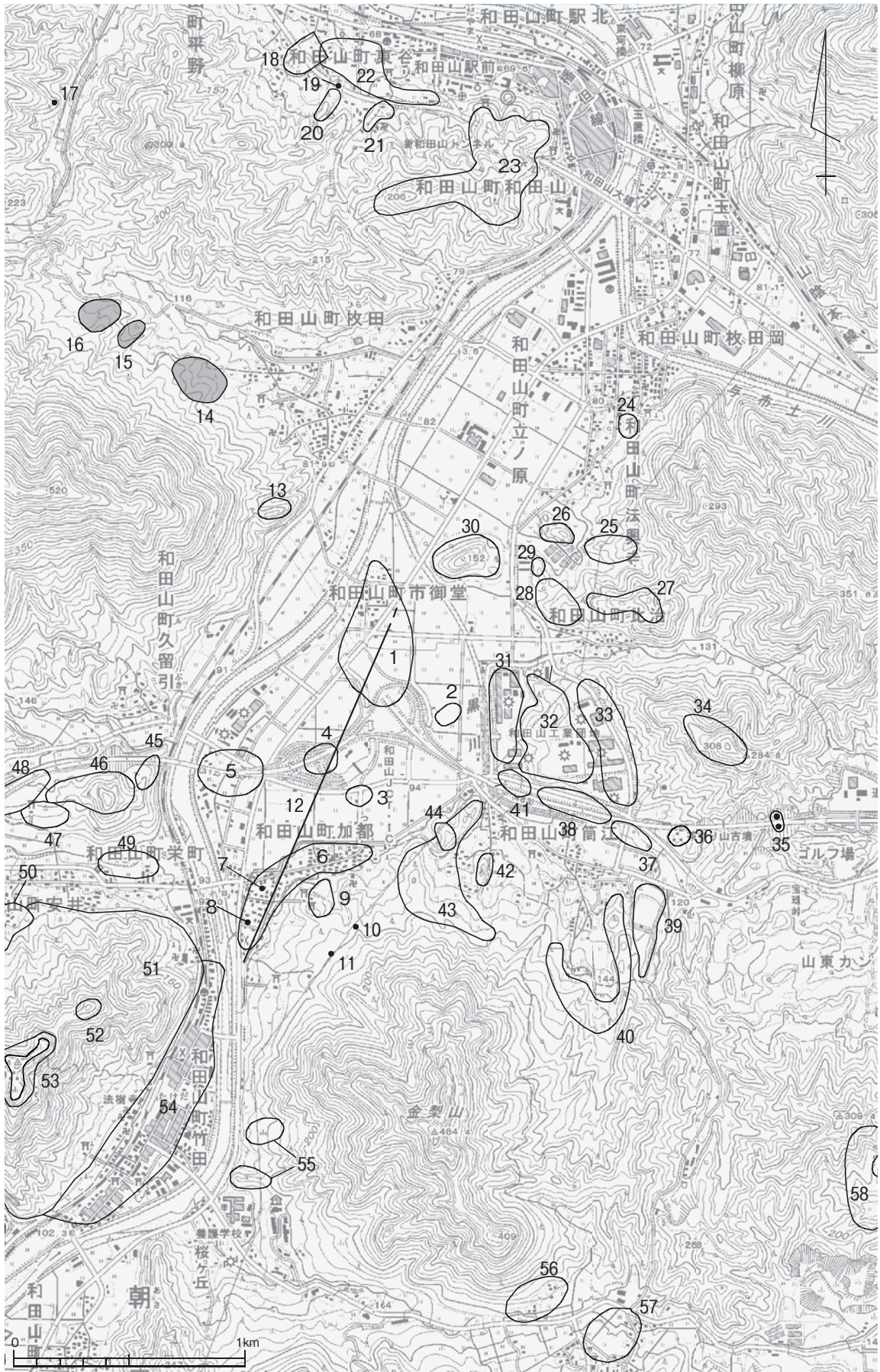


図7 加都遺跡の位置と周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

	遺跡名	遺跡番号	遺跡の所在地	遺跡の時代・種類
1	加都遺跡(宮ヶ田地区)	730751	朝来市和田山町加都字宮ヶ田他	弥生～平安時代
2	加都遺跡(伊豫田地区)	730613	朝来市和田山町加都字伊豫田	弥生時代集落
3	加都遺跡(焼御堂・岡ノ森地区)	730614	朝来市和田山町加都字焼御堂、岡ノ森	弥生～中世集落
4	加都遺跡(桜地区)	730750	朝来市和田山町加都字桜	平安・中世集落・墓
5	加都Ⅰ散布地	730608	朝来市和田山町加都字院ノ馬場他	散布地
6	加都散布地	730484	朝来市和田山町加都	弥生時代散布地
7	加都車塚古墳	730218	朝来市和田山町加都字才ノ木	古墳
8	加都王塚古墳	730219	朝来市和田山町加都字宮越	古墳
9	加都神社裏古墳群	730583 他	朝来市和田山町加都字上山	古墳
10	連願寺古墳	730557	朝来市和田山町加都字連願寺	古墳
11	上山古墳	730558	朝来市和田山町加都字上山	古墳
12	但馬道	730752	朝来市和田山町加都	奈良・平安時代
13	枚田城跡	730413	朝来市和田山町枚田字城山	中世城館跡
14	上エ山古墳群・遺跡	730725 他	朝来市和田山町枚田字上エ山	古墳・古代～中世集落
15	内高山東古墳群	730745 他	朝来市和田山町枚田字内高山	古墳
16	内高山西古墳群	730748 他	朝来市和田山町枚田字内高山	古墳
17	土田塚が谷古墳	730153	朝来市和田山町土田字塚が谷	古墳
18	池田古墳	730001 他	朝来市和田山町平野字イケダ	古墳
19	城の山古墳	730220	朝来市和田山町東谷字城山	古墳
20	城の山裏古墳群	730292	朝来市和田山町東谷字城山	古墳
21	恵谷遺跡	730646	朝来市和田山町東谷字恵谷	古墳時代散布地
22	宮ノ本遺跡(細田地区)	730753	朝来市和田山町東谷	古墳～平安集落
23	西山古墳群	730294 他	朝来市和田山町東谷字西山	古墳
24	法興寺跡	730318	朝来市和田山町法興寺字堂ノ前	奈良寺院跡
25	比治向山古墳群	730539 他	朝来市和田山町比治字向山	古墳
26	イノオク古墳群	730531 他	朝来市和田山町市御堂字イノオク	古墳
27	日向遺跡	730551 他	朝来市和田山町比治字日向	
28	長者谷古墳群	730523 他	朝来市和田山町市御堂字長者谷	古墳
29	長者谷遺跡	730530	朝来市和田山町市御堂字長者谷	
30	市御堂城跡	730414	朝来市和田山町市御堂字城山	中世城館跡
31	片引遺跡	730291	朝来市和田山町筒江字片引	弥生時代散布地
32	筒江中山古墳群	730240 他	朝来市和田山町筒江字中山	古墳
33	筒江梶原古墳群・A遺跡	730268 他	朝来市和田山町筒江字梶原	古墳・中世城館跡
34	比治城跡	730415	朝来市和田山町比治字東山	中世城館跡
35	大月北山1号墳	740094	朝来市山東町大月字北山	古墳
36	茶すり山古墳	国史36	朝来市和田山町筒江	古墳
37	筒江大垣遺跡	730611	朝来市和田山町筒江字大垣	古墳時代散布地
38	筒江中山Ⅱ遺跡	730612	朝来市和田山町筒江字桜ノ木	古墳時代散布地
39	長尾古墳群	730320 他	朝来市和田山町筒江字長尾	古墳
40	筒江古墳群	730202 他	朝来市和田山町筒江字相山他	古墳
41	中山遺跡	730290	朝来市和田山町筒江字中山	古墳時代集落
42	筒江城跡	730319	朝来市和田山町筒江字城ヤブ	中世城跡
43	城ヤブ古墳群	730213	朝来市和田山町筒江字城ヤブ他	古墳
44	加都城跡	730575	朝来市和田山町加都字氷り坂	中世城跡
45	梅田東古墳群	730649 他	朝来市和田山町加都字向山	古墳
46	安井城跡	730343	朝来市和田山町加都字向山	中世城館跡
47	安井天満宮遺跡	730344	朝来市和田山町安井字向畑	中世城館跡
48	梅田古墳群	730345 他	朝来市和田山町加都字向山	古墳
49	安井遺跡	730334	朝来市和田山町安井字庄ノ内	弥生～平安集落
50	前期太田垣氏居館跡	730644	朝来市和田山町安井字前田他	中世城館跡
51	竹田城跡周辺遺跡	730340	朝来市和田山町竹田字古城山他	中世城館跡
52	観音寺山砦跡	730341	朝来市和田山町竹田字古城山	中世城館跡
53	竹田城跡	国史35	朝来市和田山町竹田字古城山	近世城跡
54	竹田城下町遺跡	730421	朝来市和田山町竹田字城山ノ下他	中・近世城館跡
55	竹田城下町関連遺跡	730423	朝来市和田山町竹田字小森山	中世寺院跡
56	迫間古墳群	740530 他	朝来市山東町迫間字金梨山	古墳
57	池ノ端古墳群	740545 他	朝来市山東町迫間字竹ヶ下他	古墳
58	押坂古墳群	740267 他	朝来市山東町喜多垣字宮ノ奥	古墳



図8 池田古墳



図9 茶すり山古墳

されている。竪穴住居跡は1棟だけで遺跡が大きくなるのは古墳時代でも中期以降である。後期後半になると墳墓も確認されている。加都遺跡東側の丘陵上の筒江中山遺跡で木棺墓・土器棺墓が対岸の梅田東墳墓群で木棺墓が、山東町栗鹿遺跡では周溝墓が調査されている。このような墳墓は古墳時代中期まで続く。

古墳時代前期には階段状の古墳以外に若水A11号墳が首長墓として最初に築かれ、続いて城の山古墳・筒江中山23号墳そして但馬最大の古墳である池田古墳が5世紀初頭に但馬の王墓として構築される。それから茶すり山古墳・船宮古墳そして岡田古墳群に引き継がれる。小規模な前方後円墳は加都遺跡周辺に見られる。南側丘陵上に埴輪を有する加都王塚・加都車塚古墳が築かれるが、加都遺跡と同時期であり、遺跡（居住域）と墓（墓域）の関係がある。その後7世紀中ごろにかえて周辺の丘陵上や山麓部に多くの古墳が築かれるが、1地域に集中することなく分散していく。和田山町域では南側の長尾古墳で頭椎太刀が出土し、城やぶ1号墳は大型石室である。大型石室は和田山町域でも分散しており、南西部の久世田1号墳、中央部の寺谷古墳、北側の春日古墳が存在する。後期に古墳が集中するのは大藪古墳群で代表されるように中心は北に移動している。

古墳時代の集落として代表的な遺跡が柿坪遺跡である。豪族居館であり独立棟持柱建物で大型である。出土遺物にも角杯があり特殊な大型集落である。加都遺跡も中期以降に栄えた集落で調査面積も広いこともあるが100棟を越える竪穴住居跡を確認している。栗鹿遺跡も同様な大集落である。筒江浦石遺跡は前期の粘土採掘坑を検出した遺跡である。加都遺跡の東側筒江山麓には片引遺跡が存在する。竪穴住居跡などの明瞭な遺構は検出されていないが、土器は大量に出土しており、また磨滅もしていないので、隣接して集落が広がっているものと思われる。向いの中山丘陵にかけて、加都遺跡より古い時期に中心を有し、中期まで継続しない集落が存在している。同様な遺跡が城の山古墳東側に位置する恵谷遺跡である。1ヶ所の確認調査だけしか実施されていないので、確実ではないが地形なども含めて片引遺跡と似た遺跡である。恵谷遺跡の北側平地には宮ノ本遺跡がある。玉づくりを行っている集落である。加都遺跡・柿坪遺跡の大集落とは異なる性格の集落と思われる。

奈良時代になると国府・国分寺は北但馬に营造される。朝来市では朝来町立脇廃寺が最初に建立された寺院で次いで加都遺跡北東の法興寺遺跡にも建立される。朝来市域では古代官道の調査例が多く山陰道の確定に近づいている。通常なら現在の国道9号沿いのルートが一般的とされていた。山東町柴遺跡・栗鹿遺跡、和田山町加都遺跡・筒江大垣遺跡の調査結果から宝珠峠を越えるルートが有力視されはじめ

ている。その結果、郡衙推定地も加都遺跡南側に求める意見が提出されている。加都遺跡では大規模な道路遺構が検出されている。それが分岐し宝珠峠を向いており、その道筋にある筒江大垣遺跡で墨書土器・木簡・緑釉陶器が出土したことが傍証となっている。ただ、山間の梶原遺跡でも古代銭貨が出土するなど不明瞭な点もまだある。山陰道は北に延び高田駅家に至っている。高田でこの時期の遺構が検出され駅家の可能性が高まっている。

周辺の中世集落は余り知られていなかったが、加都遺跡・粟鹿遺跡などの調査で新しい資料が加わった。市条寺では経塚も調査され、最近の調査で資料は増大した。片引遺跡でも僅かに遺構が検出されている。それまでは竹田城跡で代表される山城が朝来市を代表する中世の遺跡であった。国指定竹田城跡は石垣を有する日本を代表する山城で周辺に加都城跡・比治城跡・城跡・市御堂城跡・牧田城跡・安井城跡などがある。この時期の経済基盤である鉱山は近世近代にかけて朝来市では重要な遺跡である。生野銀山・明延鉱山は特に著名で、鑄鉄橋なども近代化遺産として注目されている。



図10 竹田城跡

Ⅲ 調査結果

1. A地区

①概要

当該調査地区は、3つの調査地区の内、最も東よりの国道312号沿いに当たる。

調査では、縄文時代後期、古墳時代、平安時代末の遺構を検出した。これら各時代の遺構は、同一の遺構面で検出している。遺構面は、西側約1/3は砂礫層であり、残る2/3は黒色、或いは黒褐色のシルト層である。遺構面までの土層堆積状況は、大半が耕土下から遺構面上まで圃場整備時の盛土であり、遺構面も大きく攪乱・削平されていた。

検出した遺構の内、縄文時代後期の遺構は土器埋納土坑1基である。この他、縄文土器、打製石斧、サヌカイト片等が出土している。古墳時代の遺構は、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物2棟、柵状柱列1基である。掘立柱建物は、調査区の東側に集中し、竪穴住居跡は、調査区中央部に集中するが、SB04は調査区北端に存在する。掘立柱建物SB01とSB09とは、切り合っており、SB01が先行する。SB09と柵状柱列SA01は、方位をほぼ同じくしている。竪穴住居跡は、SH04が全容を検出できなかったが、平面形は4棟共に正方形に近い方形で、それぞれ規模に大中小があり、支柱穴は2本柱で中央土坑を持つ。この様な構造の竪穴住居跡は、類例が少ないものの、既刊の宮ヶ田Ⅱ区（兵庫県文化財調査報告第285冊 加都遺跡Ⅰ）の調査でも検出例が認められる。古墳時代の遺構からの出土遺物は、土師器のみであった。

中世の遺構は、掘立柱建物6棟、木棺墓1基である。掘立柱建物は、東西棟が3棟、南北棟が3棟あり、方位をほぼ正方位としている。遺物は、土師器・須恵器の他、大型スラグが出土している。

これら各時代の遺構の他、掘立柱建物SB05とSB10の2棟は、方位は中世の掘立柱建物に近いが、柱穴の埋土が中世のそれと異なっている事、遺物の出土が殆どない事から、時期の特定が困難である。

それでは、各遺構について記述するが、その際、土器埋納坑、竪穴住居跡、掘立柱建物、柵列状遺構、土坑（中世木棺墓）については、個別図面を掲載しているが、不明遺構、個別図面のないピットの一部については、平面図（図版4）において遺構名のみ明記している。また、ピットについては、出土遺物を図化しているものを掲載し、調査時の遺構番号をそのまま使用しているため、遺構番号は連続しない。

②土器埋納坑

SK02（図版10 写真図版16）

調査区中央よりやや東側に位置する。直径約45cm、深さ約25cmの円形土坑に、やや西に傾けた状態で深鉢が据えられており、埋土は黒褐色シルトであった。同時期の遺構は、加都遺跡全体を見ても稀少な検出例であり、近隣に同様の遺構が認められない事から、遺構の性格については明確ではないが、埋甕、或いは土器棺の可能性が考えられる。

出土遺物としては、縄文土器（55）を図化している。

③竪穴住居跡

SH01（図版7 写真図版5）

調査区中央よりやや北西側に位置し、掘立柱建物SB07の柱穴に切られる。一辺約4.5mの正方形に近い平面形を呈し、壁は約10cm遺存していた。床面の周囲には壁溝を巡らし、床面中央やや西よりに炉跡

を設け、東壁際の中央に屋内土坑を設けている。支柱穴は2本で、床面中央に間隔約1mで南北に配置している。柱穴の深さは約65cmを測る。また、床面上では土師器高杯・甕が、壁溝上では小型丸底壺が出土し、屋内土坑でも小型丸底壺が出土している。

出土遺物は、土師器甕（1～12）、土師器小型丸底壺（13～15）、土師器高杯（16～19）を図化している。
SH02（図版8 写真図版6）

調査区ほぼ中央に位置し、SH03の北側に隣接する。東西長約4.7m、南北長約4.3mを測る、平面形がやや東西に長い方形を呈する。壁は約35cm遺存している。床面の周囲には壁溝を巡らし、ほぼ中央には炉跡を設けている。この炉跡を跨ぐ様に、2本の支柱穴を東西に配置し、支柱穴間は約1.7mを測り、柱穴の深さは約60cmを測る。南壁際の中央付近には屋内土坑を設けている。また、壁溝上では土師器高杯が出土した他、埋土内及び柱穴内から土師器壺・甕・高杯・鉢・甌が出土している。

出土遺物は、土師器壺（20・22～24）、土師器甕（21）、土師器鉢（25）、土師器甌（26）、土師器高杯（27～38）を図化している。

SH03（図版9 写真図版7）

調査区ほぼ中央に位置し、SH02の南側に隣接する。一辺約3.3mの小型の方形を呈し、壁は約10cm遺存している。床面の周囲には壁溝を巡らしているが、西壁中央付近で切れている。床面の中央やや北寄りに炉跡を設け、南壁際中央に屋内土坑を設けている。支柱穴は2本で、中央の炉跡を跨ぐ様に、約1.5mの間隔で配置している。屋内土坑上では土師器甕等が出土している。

出土遺物は、図化に至るものがなかった。

SH04（図版10 写真図版7）

調査区東壁付近に位置する。調査区端で南隅を検出し、大半が調査区外となっているため、規模等の詳細は不明である。壁は約35cm遺存し、壁下には壁溝を設ける。床面上には、土師器甕等が遺存していた。

出土遺物は、土師器甕（39～41）、土師器壺（42～44）、土師器高杯（45・46）を図化している。

④古墳時代の掘立柱建物他

SB01（図版11 写真図版8）

調査区南端に位置する。棟方位をN50°Eとする3間×4間であり、床面積は約33㎡を測る。妻側3間の柱間は、ほぼ等間隔であるのに対し、桁側の柱間は狭く、不揃いである。柱穴の規模は、直径、或いは一辺が40～50cm、深さ10～20cmで、平面形が隅丸方形と円形が混在している。柱穴内では、直径約20cmの柱痕を検出できた。

出土遺物は、図化に至ったものが無かった。

SB09（図版18 写真図版14）

調査区南側に位置し、SB01の北側にあって一部重複する。棟方位をN35°Eとする4間×4間の比較的大型の建物である。建物の平面形は、一辺約8.5mのほぼ正方形であり、床面積は約72.5㎡を測る。両妻側中央の柱穴は約75cmと規模が大きく、深さも約70cmと深いことから、棟持柱と判断される。それ以外の柱穴は、約50～60cm、深さ約40～50cmとなっており、隅柱の柱穴がやや深い傾向にある。柱穴内では直径約18～22cmの柱痕を検出でき、棟持柱もその他の柱もほぼ同じ太さとなっている。妻側の柱間は、棟持柱の両サイドが約1.8～1.9m、その外側が約2.2mとなっている。桁側の柱間は、西桁側がほぼ2.2mの等間隔であるのに対し、東桁側は北から1.5m、1.8m、2.5m、2.9mと、南側の2間が極端に広がった

ている。また、柱穴内では、布留式の範疇で捉えられる小型の壺が出土している。

出土遺物は、柱穴内での出土があったものの、図化には至らなかった。

SA01 (図版4)

調査区南端に位置し、SB01の南側に隣接する。SB09に近い方位をとる柱列で、4間分、約7.8mに渡って一直線に並ぶ柵状の柱穴列である。柱穴の規模は、直径、或いは一辺50cm前後であり、平面形は楕円形、或いは隅丸方形形状を呈する。柱穴の深さは、10cm前後であり、極めて遺存状態が悪いが、柱穴内から直径20cm前後の柱痕を検出できた。

出土遺物は、図化に至ったものが無かった。

⑤中世の掘立柱建物

SB02 (図版12 写真図版9)

調査区南側に位置する。棟桁3間(6.6m)、梁行2間(5.0m)の南北棟の建物で、妻側の柱間はほぼ2.5mの等間隔であるのに対し、桁側の柱間は北から2.2m、2.3m、2.9mとなっており、南端の一部が狭くなっている。また、建物北西部の隅柱が検出できなかった事から、2間×2間の建物の北側に、1間×1間の付属施設が付いた建物とも想定される。

出土遺物は、図化に至ったものが無かった。

SB03 (図版13 写真図版10)

調査区中央よりやや東側に位置する。東西方向に棟を置く、棟桁3間(7.7m)×梁行2間(4.8m)の建物である。建物内部の柱穴は検出できなかった。柱穴の柱痕部分には、川原石や土器が詰め込まれており、柱の引き抜きが行われた可能性があり、西側に隣接するSB11とは一部柱穴を同じくしているとも考えられる。柱間は、桁側が約2.6mの等間隔、妻側が約2.4mの等間隔となっている。柱穴内より土師器小皿と共にスラグ等が出土している。

出土遺物は、土師器小皿(47・48)、土師器壺底部(49)を図化し、スラグ(M8)は写真のみ掲載している。

SB04 (図版14 写真図版11)

調査区中央よりやや東側に位置し、SB11の北側、SB10の西側に隣接する。南北に棟を置く、棟桁3間(6.9m)、梁行2間(4.6m)の建物である。一部SB11と重なり合っているが、柱穴同士に切り合いがなく、前後関係は不明である。柱間は、桁側及び妻側共に2.3mである。

出土遺物は、土師器椀(50)、須恵器椀(51)を図化している。

SB06 (図版15 写真図版12)

調査区南側に位置し、SB02の南側に近接する。東西に棟を置く、棟桁3間(8.1m)、梁行1間(2.7m)以上の建物である。柱間は、桁側及び妻側共に約2.7mである。

出土遺物は、図化に至ったものが無かった。

SB07 (図版16 写真図版13)

調査区中央よりやや北西側に位置し、古墳時代の竪穴住居跡SH01を切っている。南北に棟を置く、棟桁3間(8.7m)、梁行2間(5.0m)の建物で、北東隅柱の柱痕部分には、川原石が詰め込まれていた。柱間は、桁側が約2.9mの等間隔、妻側が2.5mである。

出土遺物は、図化に至ったものが無かった。

SB08 (図版17 写真図版4)

調査区西端に位置する。東西に棟を置く、棟桁3間(6.6m)、梁行2間(4.9m)の建物と想定しているが、柱穴の遺存状況が極めて悪く、不明確な状況である。柱間は桁側が約2.2mである。

⑥その他の掘立柱建物とピット

SB05 (図版15 写真図版4・12)

調査区中央よりやや東側に位置し、SB10と一部重なり合うが、柱穴同士の切り合いはない。東西長、南北長共に約3.9mを測る、平面形が正方形の2間×2間の総柱建物である。柱間は、ほぼ1.4mの等間隔である。遺物が認められなかったため、時期は不明だが、古墳時代に属するものとも考えられる。

SB10 (図版19 写真図版4)

調査区中央よりやや東側に位置し、SB05と一部重なり合うが、柱穴同士の切り合いはない。また、SB04の東側で隣接する。南北に棟を置く、棟桁3間(5.5m)、梁行き2間(3.2m)の総柱建物である。建物の南東隅柱には、柱痕部分に川原石を詰め込んでいる。柱間は、桁側が約1.8m、妻側が約1.5mである。隣接するSB04を含めた中世の掘立柱建物と方位関係が近いことから、遺物の出土は認められないが、当該時期にさほど遠くない時期と考えられる。

SB11 (図版19)

調査区のほぼ中央に位置し、古墳時代の竪穴住居跡SH02を切っている。また、SB03の西側において一部重なり合っている。東西に棟を置く、棟桁3間(7.7m)、梁行2間(4.8m)の側柱建物である。南側の柱穴の一部では、柱痕部分に川原石が詰め込まれている。東妻側の柱穴は、ほぼ同一方位で隣接するSB03の西側の柱穴と共有した形で検出しており、また、SB03の柱穴自体も引き抜きを行った痕跡が認められることから、建て替えが行われた事が考えられる。従って、時期的には、SB03と同様に中世の範疇に収まるものと考えられる。

P58 (図版2)

調査区南東側に位置する柱穴である。遺構内から鉄製品(M7)が出土しており、写真のみ掲載している。

P136 (図版10 写真図版15)

調査区ほぼ中央に位置する、SB11の北西隅柱である。直径約35cm、柱痕径約22cm、深さ約25cmを測る。柱痕内には川原石が詰め込まれている。

出土遺物は、図化に至ったものが無かった。

P167 (図版10 写真図版15)

調査区南側に位置し、SB09の北側に隣接する。直径約35cm、柱痕径約25cm、深さ約18cmを測る、やや歪んだ円形を呈する。柱痕内には、石製品やスラグが詰め込まれている。

出土遺物は、砥石(S1)、スラグ(M23)で、写真のみ掲載している。

P169 (図版10 写真図版15)

調査区南側に位置し、SB09の西側に隣接する。直径約32cm、柱痕径約27cm、深さ約35cmを測る、円形を呈する。柱痕内には、大型の川原石が詰め込まれている。

出土遺物は、砥石(S2)で、写真のみ掲載している。

P171 (図版2 写真図版15)

調査区南側に位置し、P58の北西側にある。柱痕内には、川原石が詰め込まれている。

⑦木棺墓

SK01（図版10）

調査区北東側に位置する。南北長約1.5m、東西幅約70cmを測る、長方形の墓壇内に、南北長約1m、東西幅約38cmの木棺を据えている。副葬品等の遺物は無く、詳細な時期は不明だが、埋土の状況から中世に属するものと判断される。また、長軸の方位は、掘立柱建物と同方位である。

SK08（図版2）

調査区北東端に位置する。遺構は、圃場整備前の溝に切られた形で検出されたもので、調査区外に伸びているため、全体の規模は不明ながら、南北長1.5m以上、東西幅70cm以上、東西幅約25cmの木棺を据えたものと考えられる。副葬品等の遺物は無く、詳細な時期は不明だが、埋土の状況から中世に属するものと判断される。

⑧不明遺構

SX01（図版2）

調査区中央よりやや北西側に位置する。長さ約15m、幅約2.5mの不定の長楕円形状を呈する浅い落ち込みで、北側の掘方をSK01に切られる。

出土遺物は、庄内期と考えられる甕の口縁部（53）と、底部（54）である。

⑨小結

以上、A地区の遺構について述べた。

当該地区の調査では、周辺地区の調査結果も含めて、初めて縄文時代の遺構を検出した。これは、（調査当時としては）和田山盆地全体をしても初例である。

古墳時代の遺構では、竪穴住居跡と掘立柱建物等を検出した。掘立柱建物と竪穴住居跡とは、同一範囲に近接するのではなく、掘立柱建物は調査区南端に、竪穴住居跡は調査区中央から北で検出している。これについては、それぞれの建物が建つ空間を分割するような施設は検出できなかったが、掘立柱建物と竪穴住居跡が、それぞれ異なる意味を持つ「場」に建てられた建物である可能性が考えられる。

竪穴住居跡は、検出した4棟の中でも規模も大中小があるが、全体に小振りである。また、支柱穴は2本柱で中央土坑（炉跡等）を持つ構造は、前述の通り、類例が少ないものである。また、掘立柱建物は、床面積が約72㎡と規模的にもやや大型のものであり、妻側の柱通りに棟持柱が並ぶ「壁芯棟持柱」を持つ構造の建物である。同様の構造を持つ建物は、但馬では朝来市山東町の柿坪遺跡に検出例が認められ、大規模な掘立柱建物の正面で検出されている。

中世の建物は、確実なもので6棟検出したが、何れも比較的小規模な建物ばかりである。この時期としては、同じ加都遺跡の桜地区で大規模な建物跡が集中して検出されている。また、国道312号を挟んで東側に隣接する宮ヶ田Ⅰ・Ⅱ地区では、当該地区と同様の小規模な建物ばかりが多く検出されており、当該地区と周辺を含めたこのような建物の状況から、中世に置かれた加都荘の姿を検証していくための有意義な資料である。

2. B地区

①概要

A地区とは最短距離で約20m西側に位置する調査区である。A地区との間は、砂利採集等の攪乱により、遺跡が既に消失している事が判明している。検出した遺構は、古墳時代に属するもので、竪穴住居跡1棟の他、柱穴、土坑、そして焼土があるが、柱穴は掘立柱建物として復元ができなかった。これらの遺構は同一面で検出され、北東から南西に緩く傾斜している。遺構面を形成する土層は、基本的には黒色シルトであり、A地区と同様だが、南西隅のみ砂礫層となっている。

②竪穴住居跡

SH05 (図版22 写真図版18・19)

調査区中央やや北側に位置する。一辺約7mを測る正方形プランを呈する。壁は約35cmまで遺存していた。床面の壁際には壁溝を巡らし、床面中央には炉を設けている。南西側の壁際中央付近には、屋内土坑を設けている。主柱穴は4本で、直径約30cm、深さ約80～90cmである。また、床面上では、土師器高杯の他、壺・甕等も出土している。

出土遺物は、土師器壺(65・66・68)、土師器甕(67)、土師器高杯(69～74・76～83)、土師器鉢(75)、土師器器台(84)の他、縄文土器片(85)を図化している。

③小結

以上、当該地区では主な遺構である竪穴住居跡SH05について述べた。

検出したSB05は、一辺約7mの規模であり、古墳時代の竪穴住居跡としては、極めて大規模なものであり、柱穴の深さから、竪穴住居の上部構造が非常に高いものであった可能性が考えられる。これに対して、前述したA地区の竪穴住居跡は、通常規模か、小規模なものであり、屋内構造も含めて、両者の間に歴然とした違いが認められる。時期的に大きな差異が認められないが、強いて言うならば、SB05内の出土土器が高杯の割合が圧倒的であることだろうか。従って、住居の性格、或いは居住者の集落構成員としての立場の差異という見方もできよう。

3. C地区

概要 加都遺跡の北西部に位置する地域で、宮ヶ田地区の北西部にあたる。今報告のB地区とは里道を隔てて接している。A地区とB地区の間には遺構面が確認されていないことから、別地区と考えた方が妥当かもしれない。

大きく分けて古墳時代と中世の2時期の遺構面を調査しているが、調査時では比高差はなくほぼ同じ面で調査している。コンクリートの基礎が数ヶ所あり、少なからず損壊を受けている。古墳時代の遺構は竪穴住居跡5棟・ピット・土坑を検出している。中世の遺構は掘立柱建物跡2棟とピット・土坑・溝を検出している。

(1) 竪穴住居跡

5棟調査しているが、すべて保存状態が良好であるとは言えない平面的にかろうじて検出されたもので、深度は浅く保存状態は悪い。

SH06 (図版24 巻頭図版9・10 写真図版20)

検出状況 SH07を切っている。SH06とSH07は今回の調査で唯一切り合い関係のある住居跡である。
形状・規模 方形プランで、全体像のわかる住居跡である。北辺5.2m、南辺4.9m、東辺4.9m、西辺4.7mの不定方形をしている。隅円方形ではなく方形である。北側の方が残存状態は悪く5cm余りしか残っていない。西側の中央付近が最も残りが良いが、最大でも10cmしかない。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で11基検出しているが、そのうち2基は中世のものと思われる。残り11基のうち4基が支柱穴となり、4本柱の上屋構造と思われる。南辺から1.1m離れ、北辺からは1.3m離れている。心々間の距離は2.2mである。東西方向の心々間距離は1.7mである。南辺の支柱穴のみかろうじて柱痕跡が確認された。径15cm前後で、柱穴の深さは最大で9cmと浅い。中央部分に焼土が広がっており炉跡と思われる。東西0.9m、南北1.7mの不定形をしている。南側の方に偏って焼土は検出されている。北西部分に土坑を1基検出している。東西1.05m南北1.1mの隅円方形をしており、深さは7cmである。遺物は出土しておらず性格は不明である。底面は平坦でなく緩やかであった。

出土遺物 土師器だけで、炉跡と床面から出土している。完形に近いのはミニチュアだけで他は小片である。小形丸底壺・器台・ミニチュア鉢・高杯を図化している。

SH07 (図版24 巻頭図版9・10 写真図版20)

検出状況 SH06に切られている。SH06に床面の南側半数以上を切られている。SH06より南側に位置しており1回り大きくなっている。主軸方向はほぼ同一である。

形状・規模 方形住居跡で多くを切られているもの規模は確認できる。南辺5.1m東辺5.2m西辺5.3m北辺5.6mを測る。南北の長さが異なることと、南西部の残りが悪いことから、南西部は削平されているかもしれない。南辺も5.6mに近いかもしれない。壁の残りは悪く2～4cmしか残存していない。同じく壁溝は認められない。ピットは6基検出されている。位置から考えて4本柱と考えるのが妥当と思われる。北側はSH05床面になり北東隅の柱は確認できなかった。南辺から1.0m離れた位置にあり、心々間距離は東西方向が2.9m、南北方向が3.0mである。西辺に寄った位置に支柱穴があり、西壁から0.9m離れている。が、南西が削平しているとすれば、西から1.4m余り離れていることになる。中央に土坑があり、東西に2基のピットがくっついた形状をしている。ともに径0.9mで、東西1.6mのダルマ形になる。深さは西側が42cm、東側が46cmである。2基の間は20cm前後高くなっている。東側の壁は焼けており炉跡として使用された可能性が高い。

出土遺物 土師器が床面と中央土坑から少量出土している。図化したのは甕口縁部と壺底部だけである。土器は古相を示しており切り合い関係からもC地区で最も古い住居跡である。床面南西部から鉄製鋤先が出土している。

SH08 (図版25 巻頭図版11)

検出状況 調査区北壁沿いで検出しており、調査区外へ延びている。南東のコーナーを調査しており、全体像は不明である。他の住居跡と比べると保存状況は良好である。

形状・規模 方形プランであるが、他の住居跡と比べると直線ではなく僅かに弧を描いている。南東隅を調査しているだけで、1辺の規模は不明である。南辺は3.0m、東辺は1.5mを調査している。壁溝は認められない。床面までの深度は最大で25cmを測る。床面には2基の土坑が存在する。南側は最大長1.0

mの楕円形を呈しており、底から西側肩部にかけて被熱しており、炉跡と思われる。北側の土坑は北側に延びており、径0.7mを測る。

出土遺物 土師器が出土している。床面出土と思われる、高杯と小形丸底壺と小形丸底壺に穿孔を加え臙にした3点を図化した。

SH09 (図版26 巻頭図版11・12 写真図版21～23)

検出状況 調査区南東部に位置しており、東壁沿いで検出している。住居跡全体の3分の2強を調査しており、東側調査区外に延びている。近接してSH10が存在しており、南東コーナーとSH10北東コーナーの間が1mと接している。平面的には検出されているが、深度は浅くかろうじて検出されたもので、最大でも20cmに満たない。

形状・規模 方形プランで東側調査区外に東半は延びている。西辺の長さは4.3m、北辺の残存長2.4m、南辺の残存長4.0mを測る。隅部は直角に曲がらず開きぎみで東辺が大きくなりそうである。深さは10～15cmと浅く残存度は低い。壁溝は認められない。土器は壁周辺にはほとんど存在せず、中央部分で出土している。おおまかに南側に高杯が、北側に甕が多く出土している。床面には支柱穴と思われる4基のピットと炉跡と思われる土坑が検出されている。全体に中央よりやや北にづれて位置している。

出土遺物 遺構の残存状態が良好と言えない割には比較的まとまって遺物が出土している。須恵器小片が1点だけ埋土から出土しているが、残りはすべて土師器である。残存状態が悪いが、一応すべて床面出土と考えている。残存状態の割には土器の残存度は高く、多くの土器を保有している。須恵器片は古段階の須恵器でなく新しいものである。土師器と年代観が合わないので後世の混入とも考えられる。

SH10 (図版25 写真図版21・24)

検出状況 調査区南側で検出されており、かろうじて床面だけが残されていた。数cmしか残存していない保存状態の悪い竪穴住居跡である。平面的には全体を把握できるものである。同時期の切り合い関係はないが、中世の掘立柱建物跡SB13が北西部に築かれている。

形状・規模 方形プランで全体像が明らかである。南西コーナーだけ丸みを持つが全体的に直線的である。北辺4.0m、南辺4.0m、東辺4.15m、西辺3.9mの正方形に近い形状である。やはり、壁溝は存在しない。床面には14基のピットが存在する。北西部の1基は中世のSB13の柱穴である。上屋構造は4本柱と思われる。肩部の残存度は悪く、住居跡の深さは10cmに満たない。部分的には数cmしか残っていない。

出土遺物 土師器小片だけが出土しているが、図化出来るものはなかった。

(2) 掘立柱建物

調査区北端と南東部で1棟ずつ検出しており、ともに調査区内で全体を調査している。

SB12 (図版28 写真図版26)

調査区北東隅に位置しており、東西2間、南北3間の側柱建物である。主軸方向はN4° Eと南北方向に有している。東西3.6m、南北7.2mを測る。ピットから土師器皿が出土しており、14世紀であろうか。古墳時代の須恵器なども出土している。SB12の空間には後述する地鎮遺構と思われるSP15があり、同一遺構としても良いくらい強い結びつきのある遺構である。

SB13 (図版29 写真図版27・28)

調査区南東で検出している。東西3間、南北3間で主軸方向がN4° Eの側柱建物である。東西5.2m、南北7.9mを測る。柱穴からの出土土器は土師器細片だけで時期は確定しがたい。主軸方向がSB12と同じことから同時期かと思われる。

(3) 土坑 (図版30 写真図版24・25)

土坑は5基検出しているが、性格のわかる土坑はない。埋土は黒色より淡い黒褐～暗褐を示しており、中世の所産かと思われる。SK04は黄褐でさらに新しい遺構と考えられる。

SK03は北側で検出しており、SB12の南側に位置している。東西0.6m、南北0.9mの隅円方形を呈しており、深さは0.1mと浅い。

SK04も北側に位置しSB12の東側である東壁沿いで検出している。南北0.8m、東西1.15mの北側がやや狭い台形状を呈し、中央がやや窪んでいる。深さは0.1～0.15mと浅く、肩も緩やかである。中世末以降の近世にかけての遺構である。

SK05は調査区北側でSK03の南側に位置している。南北2.0m、東西2.15mの不定円形で底面は平坦である。深さ0.3mとやや深めの土坑である。

SK06は竪穴住居跡SH06の上面に築かれた土坑で、東西1.0m、南北1.1mの隅円方形を呈している。深さは0.15mと浅く、肩部も緩やかである。

SK07は調査区南側に位置している方形の土坑である。東西1.1m、南北1.3mを測り、南辺は弧を描いている。深さは0.1mに満たない浅い土坑である。

(4) 落ち込み (図版30)

SX02を1基検出している。調査区中央西側位置しており、主軸方向はN4° Eを採る。掘立柱建物跡と同じことから同時期と思われる。幅1.7～1.8mと広めで、長さ7.5mを測る。深さは0.1mと浅い。それ以外にも不定形の落ち込みを検出しているが、近代以降のものとは判断している。

(5) その他の遺構 (写真図版25)

溝7条とピット多数を調査している。溝は北側で検出した幅広の3条だけは中世の埋土を保有していたが、他は近代以降の新しいものと考えており、遺構番号を与えていない。SD01～03は掘立柱建物跡SB12と同一空間にある遺構であるが、SD03の上にSB12の柱穴が築かれていることから、僅かながらも14世紀より古い遺構と考えられる。SD01とSD02は平行に、SD02とSD03は直交している。

SP40は地鎮遺構と考えられる遺構である。銭貨14枚がピットから出土している。繒とした痕跡は明瞭ではない。SB12の北辺から次の柱通りで桁(南北)方向柱通りから僅かに東に振った位置に掘られたピットである。北宋銭で輪・郭ともに范ずれしている。

IV 出土遺物

(1). 土器

1. A地区出土遺物

SH01出土遺物（図版31 写真図版29～31）

土師器に限られている。図化した点数は甕12点（1～12）、小形丸底壺3点（13～15）、高杯4点（16～19）の19点である。(1)は内傾する体部から内湾する口縁部になる。頸部内面の稜線は甘く、端部は肥厚せず角張っている。口径14.0cmで、色調は橙～褐灰をしており外面の方が明るい。体部内面は縦方向のユビ成形から板ナデで、外面はハケ整形だが磨滅顕著、口縁部はヨコナデである。(2)は口縁部を欠く球形の体部で丸底部分には煤が付着している。橙で砂粒多く含んでいる。粘土紐の継ぎ目残り、外面はハケ整形である。頸部径11.0cm、最大腹径18.3cm、残存高17.45cmを測る。器壁の厚さは底部は薄い肩部は厚くなっている。(3)は内湾する体部から外傾する口縁部で、端部は面になり外側につまみ出す。頸部内面の稜線は鋭く、口縁部外面は中央の器壁が厚い。にぶい赤褐で内面はヘラケズリからナデ、外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。口径15.0cm。(4)は口径17.0cmとやや大きめの外反する口縁部で、稜線を持たずに体部に続く。ハケ整形ののちヨコナデで黄灰を示し砂粒多く含む。(5)は内傾する体部から短く外反する口縁部で端部丸い。内面は灰白～にぶい黄橙で、外面は浅黄橙でハケ整形、口縁部はヨコナデである。口径14.4cm、残存高5.6cmを測り、端部に有機質付着している。(6)は内湾する体部から甘い頸部になり、外傾する口縁部で端部内側に曲げるように肥厚している。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。橙で砂粒多く含む、口径17.4cmである。(7)も内湾する体部から外傾する口縁部で端部は丸く外に反っている。頸部周辺は断面が厚くなっている。内外面ともハケ整形からナデで端部周辺のみヨコナデで仕上げている。ハケには精粗2種が使われている。口径16.6cmで灰褐～黒褐をしている。(8)は内湾する体部で内面は明赤褐～赤で強いヘラケズリによって頸部に段が生じている。外面はにぶい橙で黒斑があり、赤色となる化粧土塗布している。ハケ整形で砂粒多く含んでいる。口径14.6cmで口縁部はヨコナデで内面にはハケが残っている。端部周辺強く焼けており、色調濃くなっている。(9)は口径17.3cmの外傾する口縁部で、端部は面になり外につまみ出す。にぶい橙でヨコナデ仕上げ、炉跡出土である。(10)は口径16.6cmで頸部内面の稜線が明瞭である。内湾する体部から外傾し端部丸い。器壁は厚く、ヘラケズリからハケ整形である。口縁部は内湾ぎみの部分もあり、端面を作ろうとする意図はあったようである。にぶい橙～にぶい褐で、断面は黒っぽい。(11)は内湾ぎみの口縁部で端部は丸い。口径14.1cmでにぶい橙でクサリ礫含む。(12)は口径15.7cmで外反ぎみで端部角張る。ハケ整形からヨコナデで、内面はヘラケズリ。

(13)は最大腹径8.05cmの丸底でやや扁平な球形に外傾する口縁部が付き端部尖る。口径9.0cm、器高8.2cmを測り、内面橙、外面には黒斑がありにぶい橙～浅黄橙で、器壁は黒に近い。ユビ成形からナデ・板ナデで口縁部はヨコナデ仕上げ。(14)はにぶい橙～褐灰を示す球形の体部から外反する口縁部で端部丸い。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデで、砂粒多く含む。口径8.6cm、器高8.65cmを測る。(15)は肩の張る扁平な体部で底部を欠いている。口縁部は内面ハケ、外面板ナデののち端部周辺のみヨコナデで外傾し端部丸い。内面はヘラケズリからハケ、外面はハケからナデ・ミガキを施す。口径9.8cm、器高8.0cmを測り、にぶい橙～灰褐をする。外面には黒斑がある。

(16)～(18)は杯部で、(16)は外反する口縁部で端部角張り、口径15.4cmを測る。内面にぶい橙～褐灰、

外面橙で砂粒多く含む。円板充填でヨコナデ仕上げ。(17)は水平に開き稜線を持って外反する口縁部で端部丸い。口径14.6cmで浅い杯部で、内面にぶい橙～灰白、外面にぶい黄橙である。表面磨滅著しいがヨコナデ仕上げと思われる。(18)は内湾する下半から屈曲して外反し端部角張る。器表は橙～褐灰で、器内は黒褐。ハケ整形からヨコナデで、口径17.0cm。(19)は脚部で裾広がり外反し端部丸い。内面ヘラケズリ、外面ハケ整形でぶい橙である。円板充填で接合し内湾する杯部である。3方透孔と思われる。

SH02出土遺物 (図版32 写真図版30・31・32)

(20)は壺口縁部で外傾し屈曲して直立ぎみに延びて二重口縁となる。端部は肥厚して面となっている。橙でヨコナデ仕上げ、口径14.1cmを測る。

(21)～(23)は甕口縁部である。(21)は外傾している外面には凹凸がある。口径13.75cmで橙を呈し砂粒多く含む。ヨコナデで煤付着している。(22)も外傾するくの字口縁で端部尖りぎみである。口径12.7cm、残存高4.0cmを測る。ぶい黄橙～橙をしている。(23)は内湾する体部から外傾し端部丸く口径14.8cmとなる。内面はヘラケズリでぶい黄橙～黄灰である。外面はハケ整形で橙である。頸部の稜線は甘く口縁部はヨコナデ。

(24)は口縁部を欠く小形丸底壺である。残存高6.25cm、最大腹径9.0cmの扁平な球形の体部である。ユビ成形から強いナデ整形をしている。器壁は厚めで橙を呈する。(25)は鉢で口径12.55cm、底径3.65cm、器高7.1cmを測る。平底から内湾し端部は丸い。ユビ成形からナデ整形でハケ整形も一部行われている。端部周辺はヨコナデ。明赤褐～灰黄褐しており、砂粒含んでいる。(26)は甌底部で、端部肥厚し広がっている。底径12.0cmで器壁は厚い。灰黄褐で砂粒多く含み、ナデ整形である。

(27)～(38)は高杯である。(27)は口径23.5cmと大きめの杯部で緩やかに外反し端部角張る。橙からぶい橙で、ユビ成形からハケ整形する。(28)は平坦な杯底から外傾して角張った端部となる。外面に黒斑があり、色調は橙である。(29)は外傾して稜線を持って外反する。端部は丸く反っている。円板充填法で口径16.7cmで橙をしている。(30)は緩やかに外反し屈曲して外傾し端部丸い。口径16.7cmで浅めで、ナデ整形をしている。化粧土塗布し、円板充填である。(31)は橙で砂粒を多く含んでおり、平たい下半から稜線を持って外傾している。内外面ともハケ整形でナデ・ヨコナデ調整を加えている。粗いミガキも施されているようである。(32)(33)は外反する脚裾部である。ハケ整形ののちナデている。ともに橙をしている。(34)は外傾し端部が角ばる裾部である。底径15.6cmと大きめで、ハケ整形からナデ、端部周辺のみヨコナデである。内面橙、外面赤褐～ぶい黄橙となる。(35)は外傾する裾部小片で、底径10.2cmを測りヨコナデである。ぶい褐～ぶい橙で砂粒含む。(36)は水平に近くなる裾部で底径11.6cmを測る。ナデ・ヨコナデで仕上げている。橙で炉跡からの出土である。(37)は外傾する筒部から水平に近く外反して丸い端部となる。内面はヘラケズリで裾部は横方向のハケ整形を行う。外面は灰黄褐～ぶい橙で縦方向のヘラミガキを施している。底径12.2cm、残存高5.55cmを測る。(38)は器壁の厚い外反する脚部で端部は丸い。内面はケズリ、外面はミガキである。裾部径12.7cmを測り、ぶい橙をしている。

SH04出土遺物 (図版32 写真図版32)

すべて土師器である。(39)～(41)は甕である。(39)は内湾する体部から内湾ぎみに外傾する口縁部で端部は明瞭な面にはならないが肥厚ぎみである。内面はヘラケズリで、外面はハケ整形である。口

縁部はヨコナデで頸部は強いヨコナデで凹んでいる。器壁は肩部だけ厚くなっている。口径12.85cmを測り、にぶい黄橙～にぶい橙をしている。外面下部には煤附着している。(40)は内湾する体部から鋭い稜線を持つ頸部となり、外反する口縁部となる。口縁部は薄く端部は尖りぎみである。内面ヘラケズリ、外面ハケ整形で口縁部はハケ整形からヨコナデである。にぶい橙で口径12.8cmを測る。(41)は口径15.7cm、残存高16.4cmを測る球形の体部から外傾し端部丸い。内面は灰で板ナデ整形し、外面は浅黄橙でハケ整形からナデ調整。口縁部には粘土紐の継ぎ目残り、ユビ成形からナデ、ヨコナデである。

(42)～(44)は小形丸底壺である。(42)は体部の破片で肩が張っている。内湾し、肩部やや器壁厚い。内面はヘラケズリで外面はハケ整形からナデ仕上げ。肩部から上はヨコナデ。色調はにぶい橙で黒斑がある。チャートなどの砂粒僅かに含む。(44)は口径9.0cmで最大腹径7.85cm、残存高5.7cmを測る。内湾する体部から外傾する口縁部で端部は丸い。にぶい黄橙～黄灰をし、体部内面はヘラケズリで頸部付近はナデを加える。外面と口縁部はハケ整形で口縁部外面と端部はヨコナデで仕上げる。黒斑認められ、端部はやや歪になっている。(44)は口径10.85cm、最大腹径10.7cm、残存高9.15cmとやや大きめである。成形は他と同じく内面ケズリで他はハケ整形で口縁部はヨコナデ仕上げ。砂粒多く含み、外面はにぶい黄橙、内面は褐灰である。

(45)(46)は高杯である。(45)は外反するように裾広がりとなり、端部角張る。内面はケズリからハケ整形ののちヨコナデで仕上げる。(46)はほぼ完形で口径16.1cm、裾部径11.85cm、器高12.2cmを測る。脚部をソケット状に杯部に差し込んで接合している。磨滅顕著で成形技法は内面のケズリ以外は不明である。

SBO3出土遺物 (図版33 写真図版33)

P44から2点の土師器小皿が出土している。他の破片も含めて2次焼成を受けている。(47)はヘラ切りの平底で底径6.8cm、器高1.8cmを測る。短く外反して端部肥厚ぎみに丸くなり、口径は8.9cmである。にぶい橙～にぶい赤橙で、ロクロナデで仕上げる粘土紐の痕跡認められる。(48)は糸切りの平底から内湾する短い口縁部で端部は丸い。口径9.8cm、底径6.7cm、器高2.0cmを測る。内面は淡黄橙～褐灰で、外面はにぶい橙～にぶい赤橙となる。ロクロナデで、底面がより強く焼けている。(49)はP46からの出土で中央が上がったベタ高台で底径5.0cmである。底面はヘラ切りと思われ、ヨコナデで仕上げている。器表は褐灰を器肉は灰白を呈している。砂粒を含むものの胎土は緻密で、奈良時代から平安時代にかけての古代の所産と思われる。

柱穴出土遺物 (図版33 写真図版33)

掘立柱建物跡に復原出来なかった柱穴から出土した遺物の中から3点図化している。(50)はP81出土で糸切りのベタ高台である土師器碗底部である。底径5.0cmで灰白をしている。ロクロナデで仕上げる。(51)もP81出土の内湾する体部で端部丸い須恵器碗である。ロクロナデで口径15.4cm、残存高4.4cmを測る。灰で砂粒含む。(52)はP92出土で、土師器甕口縁部の破片である。にぶい黄橙で外傾し端部内側に肥厚ぎみにして面になる。口径11.7cmでヨコナデ調整である。

SX01出土遺物 (図版33 写真図版33)

(53)は土師器甕口縁部で、口径18.4cm、残存高2.7cmを測る。頸部は短く外反し直立する口縁部で端部は丸い。端面には3条の凹線がありヨコナデ仕上げ。内面はにぶい黄橙、外面はにぶい褐である。煤

付着している。(54)は土師器甕底部で、内面はヘラケズリで褐灰、外面はハケ整形でにぶい赤褐～にぶい黄橙をしている。2次焼成を受けており、底径4.7cmを測る。

SK02出土遺物 (図版33 写真図版33)

(55)は口縁部を欠く縄文土器深鉢である。縦方向の粗い条痕文で整形している。不安定な平底で底径9.5cmを測る。器高の高い鉢で最大径は頸部径に近い28.1cmと細い。内湾する体部で頸部近くは直立ぎみで、口縁部は外反するものと思われる。内面はナデでにぶい黄橙を呈している。外面は灰黄褐で砂粒含み、残存高30.2cmを測る。後期の北白川上層式3期に近い頃かと思われる。

包含層出土遺物 (図版33 写真図版33)

(56)は弥生土器甕底部である。底径6.1cmを測る平底で、器表はにぶい橙、器肉は暗灰を呈する。残存高2.05cmで外面はミガキと思われる。(57)は土師器壺口縁部である。器壁は厚く外傾し端部丸く口径13.6cmを測る。内面橙で外面にぶい褐でヨコナデ仕上げである。(58)は土師器壺口縁部で口径11.7cm、残存高3.75cmを測る。内湾する体部から短く外反し二重口縁となって直立する。端部は強いヨコナデで擬凹線状になる。橙で内面は板ナデである。(59)～(62)は須恵器である。(59)は内湾ぎみに延びる椀口縁部で端部は肥厚し丸い。灰～灰白で口径13.6cmを測る。ロクロナデで端部に重ね焼きの痕跡残る。(60)は底径10.35cm、器高3.75cm、口径15.9cmの杯である。底は回転ヘラ切りで断面台形の高台が付く。口縁部は内湾し端部は丸く、灰を呈しロクロナデである。高台周辺は貼り付けナデののち強いロクロナデを施す。(61)はベタ高台の椀底部で糸切りである。底径5.1cmで灰白で砂粒少量含む。(62)は挿鉢口縁部で口径23.7cmを測る。灰で端部周辺は黒を示し自然釉が付着している。ロクロナデである。外傾する体部で口縁部は上方につまみ上げている。(63)は無釉陶器で備前焼であろう。外反ぎみの体部から大きく肥厚し直立する端面になる。内面は赤～にぶい赤褐、外面は灰赤～にぶい赤褐で、細砂含む。ロクロナデである。(64)は無釉陶器でミニチュアであろうか。バナナ状の房をしており、灰白である。

2. B地区出土遺物

SH05出土遺物 (図版34 写真図版34・35)

21点の土器を図化している。1点の縄文土器以外は土師器である。高杯が多いのが特徴である。(65)(66)は壺口縁部である。(65)は二重口縁で外反し端部角張る。口径14.7cmを測りヨコナデである。にぶい黄橙で砂粒多く含む。(66)は大形の口縁部で器台の可能性もある。外傾し端部角張り内面が突帯状になる。明赤褐でヨコナデ仕上げ。(67)は甕底部でやや上げ底になっている。底径5.35cmを測る。底面はユビ成形からナデている。内面は暗灰黄～黄灰、外面は黒褐～にぶい赤褐である。底部だけであるが讃岐からの搬入品と思われる。(68)は小形の壺体部で球形である。頸部で割れているが体部は完存しており、最大腹径13.0cm、残存高10.3cmを測る。底部の器壁が非常に厚く、頸部付近も厚い。内面はユビ成形からナデており、粘土紐も明瞭に残る。外面は磨滅しているが平滑に仕上げている。

(69)～(74)(76)～(83)は高杯である。(69)～(74)は椀形杯で、内湾し端部丸い。(69)はハケ整形から板ナデで外面はミガキを施し、黒斑がある。筒部は中実で外面は縦方向のハケ整形。口径14.0cmを測り、外面はにぶい黄橙、内面は橙を呈している。砂粒多く含む、内面の器表には剥離がみられる。2次焼成を受けている。(70)は口径13.4cmを測り、ハケ整形ののちヘラミガキで仕上げている。端部

周辺のみヨコナデ仕上げで、橙～にぶい橙を呈している。(71)は中実の筒部が直立し、内湾する体部で端部は内側に尖る。端部周辺のみヨコナデで、他はハケ整形からナデで内面はミガキを施す。橙～灰黄褐で極細砂を少量含む。口径13.05cm、残存高8.6cmを測る。(72)も中実で、磨滅顕著である。内湾し端部丸い。黒斑認められ、口径14.1cmを測る。にぶい黄橙～にぶい褐を呈している。(73)は中空で内湾する体部から丸い端部になる。外面は橙で縦方向のハケ整形ののちヨコナデで仕上げている。中央部分はヨコナデが及んでいない。内面は赤色顔料塗布しており、放射状の暗文が施されている。口径14.3cmを測り、塗布して暗文がある精製土器の作りであるが胎土には粗砂を含む。(74)はヨコナデによって屈曲点を有する高杯で口縁部は直立ぎみになる。ユビ成形ののちナデている。内面は不定方向に施した放射状暗文がある。黒斑があり橙を呈し、口径13.7cmを測る。

(75)は小形精製鉢口縁部である。口径13.25cmで橙を呈し、内外面ともに細かい丁寧なハケ整形で端部周辺のみヨコナデで仕上げている。湾曲ぎみに外傾する体部から、ほとんど頸部を持たずに短く外反する口縁部で端部丸い。

(76)～(83)は有段の高杯である。(76)は内湾する杯下半から外反する口縁部で端部丸い。筒部は中空で円板充填で接合している。緩やかに広がり、裾端部近くで変化点を持って水平に近く広がり端部丸い。粘土紐痕残りユビ成形で、ハケ整形からナデ・ミガキを行っている。端部周辺のみヨコナデで仕上げる。脚部内面はヘラケズリである。口径13.9cm、裾径8.1cm、器高11.0cmを測り、赤橙～にぶい黄橙をしている。(77)は口径23.5cmと大形品である。水平に開く下半から大きく外反し端部近くで変化し端部は角張る。ユビ成形によって全体的に凹凸が生じている。赤橙～浅黄橙で砂粒含み、全体にハケ整形を行い、内面は暗文を施している。見込み部はジグザグで体部は放射状である。筒部は細く中空である。(78)は水平に開き甘い稜線を持って外傾する杯部で口径14.4cmを測る。中実の筒部から緩やかに裾部に広がるが裾部は欠いている。内面はハケ整形で工具痕が残る。筒部外面は斜め方向にユビナデを行っており、内面はヘラケズリである。橙～浅黄橙で砂粒含む。(79)は裾部の破片で外傾し端部近くで肥厚ぎみに水平になる。内面はヘラケズリで、端部と外面はヨコナデである。裾径9.5cmで橙～褐灰を呈し砂粒を含む。(80)は外傾し稜線を持って外傾し端部外側に尖りぎみとなる。口径12.75cmでヨコナデ仕上げで、橙～にぶい橙を呈する。(81)は橙～にぶい橙を示し、粗砂を少量含む胎土など(80)と似ており、同一個体かと思われる。外反する裾部で端部手前から水平になる。接地面で色調変わっている。ユビ成形からナデで、内面はヘラケズリ、端部はヨコナデである。(82)は串状のものを突き刺さして接合した中実の筒部である。杯部は外傾しハケ整形している。裾部は外反し外面はヘラミガキで仕上げている。橙で砂粒多く含む。(83)は外反する裾部で端部は丸い。裾径11.45cmで残存高7.55cmを測る。橙で内面には絞目が見られる。円板充填で杯部は水平である。

(84)は小形丸底壺口縁部と思われるが、天地逆で器台下台部の可能性もある。屈曲しながら外傾し端部丸い。口径9.4cmを測り橙を示しヨコナデである。(85)は前代の遺物で、磨滅著しい縄文土器である。磨消縄文で後期の土器であろう。

包含層出土遺物 (図版34 写真図版34)

図化した3点は土師器である。(86)は甕口縁部で外傾し端部肥厚ぎみに角張る。口径16.0cmで強いヨコナデ仕上げ。内面灰黄褐、外面褐灰を呈し、細砂少量含む。(87)は外反する杯部で端部尖る高杯である。口径14.5cmを測り、表面磨滅している。橙をしており、細砂少量含む。(88)は橙～にぶい橙

をした外傾する裾部で竈と思われる。端部は角張りぎみである。内外面ともに粗いハケ整形で端部周辺のみヨコナデを施す。外面には黒斑がある。

3. C地区出土遺物

SH06出土遺物（図版35 写真図版36・37）

4点図化しており、すべて土師器である。(89)は小形丸底壺体部である。最大腹径10.7cm、残存高5.7cmを測る。外面はユビ成形から縦方向のハケメを施し、にぶい橙を呈する。内面は橙でユビ成形からヘラケズリを行っている。頸部近くはヨコナデで仕上げている。チャートなどの砂粒を含んでいる。(90)は器台上台口縁部の破片である。時期的に古いものと思われる。外傾してから端部は内外面に肥厚している。端部は直立ぎみである。ヨコナデ調整し、内外面ともにヘラミガキを施している。にぶい橙でチャート・長石の砂粒僅かに含むが胎土は緻密である。小片のため明確な径は出せないが、口径36cm前後になるろうかと思われる。(91)はミニチュア土器で、器高4.5cm、口径3.1cm、底径2.1cmを測る。ユビ成形からナデで調整している。橙～にぶい橙を呈し、砂粒やや多めに含んでいる。不安定な平底から湾曲し端部は外側に尖りぎみに納めている。(92)は高杯脚部で、杯部との接合部で割れている。直立する短めの筒部から外反する裾部につながり端部は丸い。筒部は中実で、内面には絞り目が残る。橙～明赤褐で砂粒僅かに含んでいる。ヨコナデで仕上げ、外面はヘラミガキが施されている。

SH07出土遺物（図版35 写真図版36）

土師器を2点図化している。それ以外にSH07からは鉄製鋤先が出土している。(93)は甕口縁部で、復原径13.65cm、残存高3.8cmを測る。直線的に内傾する体部から短く外傾する口縁部で、端部内外に肥厚する。端面に1条の凹線が認められる。外面は縦方向のハケ整形で、口縁部はヨコナデが施される。内面はにぶい橙、外面は灰黄褐～黒である。(94)は壺底部で底径6.8cm、残存高3.0cmを測る。底部再成形で、内面はハケ整形、外面はヘラミガキである。スス付着しており、にぶい橙を呈す。

SH08出土遺物（図版35 写真図版37）

土師器3点を図化している。(95)は甕である。小形丸底壺の肩部に径1cmの円孔を施したものである。やや扁平な球形の体部に直線的に広がる口縁部が付く。端部は尖りぎみで、ヨコナデで仕上げている。体部内面はヘラケズリからナデ、外面はハケ整形である。口縁部は内外面ともにハケ整形であるが、外面は縦方向で内面は横方向である。色調はにぶい橙～橙でチャート・長石などを少量含む。器高10.3cm、口径8.65cmを測る。化粧土を塗布している。(96)は小形丸底壺でにぶい橙～橙を呈している。2次焼成を受けており、外面は黒化している。(95)の甕と形態・技法など類似しているが、やや厚めである。器高9.9cm、口径8.0cmを測る。(97)は高杯で裾部を欠いている。口径16.8cmで残存高10.7cmを測る。器壁は厚めで表面磨滅している。筒部は中実で直線的に開いている。内面には絞り目が残る。杯部底は平坦で口縁部は外傾し端部尖る。外面はハケ整形で、色調は橙～明赤褐である。

SH09出土遺物（図版35・36 写真図版37～39）

多くの土器が出土しているが、1点を除いて土師器である。(98)(99)は壺口縁部である。(98)は内湾する厚めの体部から鋭く外反する頸部に続く。二重口縁となって外傾し端部角張る。口縁部はヨ

コナデ、体部内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。砂粒多く含み、橙で口径20.8cmを測る。(99)は内湾する体部から屈曲ぎみに外傾する口縁部である。頸部内面の稜線は鈍い。口縁部は強いヨコナデで表面に凹凸が見られる。口径14.1cmで橙～浅黄橙を呈している。

(100)～(110)は甕である。(100)は口径15.4cmを測る短く外反する口縁部である。端部丸く納め、ヨコナデで仕上げている。器壁は厚めで頸部内面に稜線を持たない。(101)は内湾する肩部から外傾する口縁部になり端部は丸い。口縁部はヨコナデで、頸部に段が生じている。体部内面はヘラケズリ、外面は縦方向のハケ整形である。口径14.15cmを測り、橙でチャート・長石の砂粒多く含む。(102)はほぼ球形の最大腹径22.5cmを測る体部に僅かに外反する口縁部が付く。端部は丸いが僅かに端面の意識が見られる。口縁部はヨコナデで仕上げる。頸部に粘土の継ぎ目があり、内部の稜線は不明瞭である。内部は淡黄橙～明褐灰でユビ成形からヘラケズリを施し、ナデ調整行う。底部付近は指圧痕がよく残っている。外面下半には黒斑があり、橙を呈しハケ整形している。口径14.75cm、器高24.7cmを測る。(103)も球形の体部を有するが底部は欠いているが丸底であろう。橙をしており、内面はヘラケズリ、外面は板ナデである。口縁部はヨコナデで仕上げ、外反し端部は丸い。煤付着しており、黒斑が認められる。(104)は長胴ぎみで重心が下位にあるもので、底は残存していないが丸底であろう。頸部外面は強いヨコナデで凹んでいる。内湾ぎみに外傾し、端部は面となり内外に肥厚する布留甕となっている。外面には黒斑があり煤付着している。体部外面は橙で縦方向から横方向のハケ整形を行っている。内面はユビ成形からヘラケズリでにぶい黄橙～褐灰をしている。砂粒多く含んでおり、口径15.05cm、残存高25.6cmを測る。(105)も球形の体部で、屈曲しながら外傾する口縁部で端部は面になっている。口径15.0cmでほとんど肥厚はしていない。体部内面はにぶい黄橙でヘラケズリ、外面は橙で3方向のハケ整形である。口縁部はヨコナデで砂粒多く含んでいる。(106)は(105)と似たタイプで端部は肥厚しない。内湾する体部は内面ケズリで、外面ナデ仕上げである。にぶい黄橙～橙を呈し、砂粒多く含んでいる。口径17.1cm、残存高13.85cmである。(107)は磨滅著しいくの字甕で端部角張っている。にぶい黄橙で、チャートなどの砂粒多く含む。口径14.1cmで焼成は甘い。(108)は肩が張りぎみに内湾する体部で、内面にぶい黄橙でヘラケズリ、外面橙で縦方向から横方向のハケ整形である。口径14.8cm、残存高11.8cmを測る。口縁部はヨコナデで内湾ぎみに延び端部面になり内側に明瞭には肥厚しない。(109)はくの字口縁で端部は角張っている。内面はにぶい黄橙でヘラケズリを施すが粘土紐の継ぎ目明瞭に残っている。外面はにぶい橙～橙でナデ仕上げしている。口縁部はヨコナデ仕上げ、口径13.4cmを測る。(110)は内湾ぎみの体部から外傾する口縁部で端部丸い。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形、口縁部はヨコナデである。色調は橙で砂粒多く含む。口径15.6cm、残存高5.25cmを測る。

(111)～(117)は高杯で、形態の変化は少ない。同タイプのものが多いと思われる。(111)は杯部で、外面は甘い稜線を持つ。浅く底は平たく内湾し端部は反って丸く納める。内外面ともにハケ整形からナデ仕上げである。口径13.1cmで器壁は厚めである。内面は褐灰で、外面は明黄褐を呈し、砂粒多く含む。(112)は内湾する完存する杯部で端部に向かって外傾から外反ぎみになり端部丸くなる。内外面ともにハケ整形で橙を呈する。端部周辺のみヨコナデで、内面はミガキで仕上げているようであるが、磨滅している。口径15.0cmで、色調・胎土は他と同じく橙で砂粒含んでいる。(113)は杯部下方に稜線を有している。平坦から鈍い稜線を持って外反し端部は丸い。内外面ともハケ整形で口径16.35cmを測る。筒部は外傾し、裾部で屈曲すると思われる。透孔は認められない。筒部内面には絞り目が残り、ナデ調整である。残存高12.6cmでにぶい橙をしている。(114)は口径17.4cm、裾径10.2cm、器高13.5cmを測る。焼

成悪く、橙で砂粒多く含む。杯部は甘い稜線で外傾し端部付近で尖りぎみに反っており、内外面ともにハケ整形である。端部周辺のみヨコナデである。筒部は外傾し内面に明瞭な稜線を持って短く外傾している。内面はヘラケズリで裾部のみナデ調整を加えている。杯部と筒部は粘土の継ぎ目が見られ、円板充填で作っている。(115)は外反する裾部で器壁は厚く、端部は丸い。内面はヘラケズリで端部付近はナデを加えヨコナデで仕上げている。裾部径10.1cmで灰黄褐をしている。(116)は古相を示している。緩やかに開く筒部で、残存部端に透孔があり3方向であろう。(117)は外反する裾部で内面には絞り目が見られる。2次焼成を受けている。残存高6.1cmで、やはり焼成悪く砂粒を含み橙を呈する。

(118)は唯一須恵器の小片である。杯蓋で天井部は強いロクロケズリで、稜線が明瞭である。内湾し端部は丸く、端部周辺と内面はロクロナデである。灰色でも色調濃く須恵器では古相を示すか。

遺構出土遺物 (図版37 写真図版40)

(119)～(123)は掘立柱建物跡SB11出土である。(119)は土師器皿で、口径8.6cm、器高1.45cmを測る。ユビ成形ののちナデ仕上げを行う非ロクロ系の皿である。明黄褐～橙を呈し、浅く内湾する体部で端部丸い。(120)(121)はSP03出土で掘立柱建物跡には復原できなかった。(120)の底は比較的平坦で、短く内湾して直立し端部丸い。ユビ成形からナデ仕上げで、端部周辺のみヨコナデである。にぶい褐～にぶい橙で、チャートなど砂粒含む。口径7.0cm、器高1.4cmを測る。(121)は内湾する体部で器高1.8cmとやや深めで底部が小さい。端部は丸く、口径7.7cmを測る。ユビ成形からナデ調整である。(122)はSP12出土で須恵器杯身である。丸底から内湾し、口縁部は短く外反するが端部を欠いている。受部は短く水平に延び端部は丸い。器高3.4cmで復原口径は12.3cmである。ロクロナデで底部はロクロケズリで、灰色をしている。(123)はSP15出土の土師器椀底部である。平底で底面ヘラ切りで、体部外傾しロクロナデである。にぶい黄橙で、石英・長石の砂粒含んでいる。

(124)はSK05出土で須恵器椀である。内湾する体部から平底である。ロクロナデで底部ヘラ切りである。灰白で底径4.15cmを測る。(125)はSK07出土で縄文土器底部である。平底から外反している。表面磨滅しているがハケ整形である。

包含層出土遺物 (図版37 写真図版40・41)

(126)～(134)は古墳時代の土師器である。(126)は口径18.0cmを測る複合口縁の破片で、端部は大きな面となって水平である。ヨコナデで仕上げ、端部下に糊痕が残っている。(127)は甕口縁部で口径14.1cm、残存高3.75cmを測る。内面は縦方向のヘラケズリで、にぶい黄橙～褐灰を呈する。外面はハケ整形で灰黄褐である。内面の稜線は甘く、短く外傾し端部内外に肥厚する。(128)は内湾ぎみに屈曲して外傾する口縁部で端部は面になり外側につまみ出している。にぶい橙でヨコナデ仕上げ、口径18.8cm。(129)は椀形高杯の杯部中央に串状の刺突が見られる。ただ凹みは中央ではなく、ずれており平面形も楕円になっている。口径14.8cmでナデ整形である。内面は暗文が施され、端部周辺はヨコナデ仕上げ。外面には黒斑がある。(130)(131)は高杯裾部で、外反しており端部は丸い。ユビ成形からナデ整形で砂粒含んでいる。(132)も高杯筒部で中実で裾部は水平に近くなっている。筒部外面は強い板ナデ内面は未調整で、裾部内面はハケ整形、杯部内面はヘラミガキである。(133)は器台口縁部で外傾し端部内外に肥厚する。内面は灰白でハケ整形、外面は縦方向のヘラミガキで橙である。(134)は端部を欠いた器台で、体部は外反している。4方透孔で内面はケズリ、外面はミガキである。クサリ礫含み、内面は

灰黄褐、外面は橙～浅黄橙を呈する。

(135) (136) は須恵器である。(135) は杯身で内湾する体部から受部は短く外傾し端部は丸い。立ち上がりは高く外反し端部は上方につまみ出す。器壁は薄くシャープである。杯で僅かに砂粒を含む。口径10.3cm、残存高2.9cmでロクロナデである。(136) は外反し端部肥厚する甕口縁部である。ロクロナデで灰白をしており、口径17.6cmを測る。

(137)～(141) は土師器皿である。(137)～(139) は手捏ねである。(137) はユビ成形から内面ハケ整形である。口径7.5cmの口縁部は歪で、端部丸く色調濃くなっている。(138) もハケ整形ののちナデしており口縁部歪である。器高2.1cmとやや深く、口径7.6cmである。内湾し端部丸く、にぶい橙で砂粒多く含む。(139) は浅く平底ぎみで、口径8.3cm。器高1.5cmで褐灰をしている。ナデ仕上げでハケは見られない。(140) (141) はヨコナデ仕上げの皿である。(140) は口径10.5cm、器高2.0cmを測り、にぶい橙で砂粒多く含む。平底で口縁部は短く外傾する。(141) は口径11.8cm、器高2.2cmでナデ整形である。口縁部は短く外傾し端部丸い。外面に沈線状の凹みがある。にぶい橙～にぶい黄橙で砂粒含む。

(142) は土師器甕口縁部小片である。外傾し端部外側に肥厚する。内面はにぶい橙、外面は灰黄褐。(143) は須恵器捏鉢である。外傾する体部で端部は内外に肥厚している。端部には2条の凹線があり、ロクロナデである。ユビ成形の痕跡残り、内面は板ナデである。灰白で砂粒含んでいる。口径29.4cm、残存高7.1



図11 石器実測図

cmを測る。東播産。

(2). 石器 (図11 写真図版42)

磨製石器が2点出土している。ともに砥石である。(S1)は長さ17.8cm、最大幅6.0cm、最大厚5.8cmを測る。擦り面は1面で中央部4.8cmを使用している。細かい擦り目が斜め方向に見られる。色調は青灰を呈し地元で採取される流紋岩と思われる。(S2)は長さ31.6cm、最大幅14.6cm、最大厚6.4cmを測る。やはり擦り面は1面だけで扁平である。斜め方向に擦り目が見られ複数方向に施されている。石材は(S1)と同じである。

(3). 金属器 (図12・13 写真図版41～43)

22点図化している。M1は鋤(鍬)先で堅穴住居跡SH07床面から出土している。幅12.45cm、長さ9.85cmと短めである。左右対称でなく、やや歪である。刃幅は通有のものより長い感じがする。M2は断面方形の茎部分で下部が細く丸みを持ちかかっていることから鉄鍬かと思われる。堅穴住居跡SH09床面出土。M3～M6は鉄釘である。M3はSB12出土で、それ以外はA地区包含層から出土している。M6だけ頭部も残存している。残存長8cmであるが、9cm前後のものと思われる。中央部分上位が厚くなっている。M7は板状鉄製品で刃部は有さない。用途不明な大形品の破片である。M8は碗型鉄滓で比較的重量がある。SD03から出土している。図化していないが鉄滓はもう1点A地区包含層から出土している。

M9～M22は銭貨である。すべてC地区SB12の地鎮遺構と考えているSP40から出土している。14点とも北宋銭である。咸平元寶(初鑄年北宋998年)から政和通寶(初鑄年北宋1111年)までの貨幣で、輪・郭に筈ずれが見られる。

表2 金属器計測表

報告No	実測No	器種	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
M1	2005170-20	鋤(鍬)先	SH07	9.85	12.45	0.95	86.80
M2	2005170-15	鉄鍬	SH09	2.70	0.55	0.55	2.20
M3	2005170-21	鉄釘	SB12	2.40	0.50	0.40	1.00
M4	2005170-22	鉄釘	包含層	2.20	0.45	0.45	1.00
M5	2004181-4	鉄釘	包含層	2.10	0.35	0.45	0.60
M6	2004181-2	鉄釘	包含層	8.00	0.80	0.75	20.70
M7	2004181-1	不明	P58	4.10	2.95	0.30	6.80
M8	2004181-7	鉄滓	SD03	7.90	9.00	4.60	306.70
M9	2005170-11	咸平元寶	SP40	2.46	2.47	0.14	2.80
M10	2005170-7	祥符元寶	SP40	2.53	(2.24)	0.16	(3.30)
M11	2005170-5	天禧通寶	SP40	2.54	2.54	0.13	2.80
M12	2005170-3	天聖元寶	SP40	2.33	2.41	0.14	1.90
M13	2005170-2	皇宋通寶	SP40	2.39	2.40	0.09	2.00
M14	2005170-6	熙寧元寶	SP40	2.31	2.30	0.16	2.30
M15	2005170-8	熙寧元寶	SP40	2.46	2.45	0.15	3.10
M16	2005170-14	熙寧元寶	SP40	(2.32)	(0.93)	0.14	(0.80)
M17	2005170-13	□□元寶	SP40	2.27	2.02	0.14	1.00
M18	2005170-9	元豊通寶	SP40	2.55	2.53	0.16	3.30
M19	2005170-4	元祐通寶	SP40	2.41	2.41	0.14	3.30
M20	2005170-12	聖宋元寶	SP40	2.38	2.41	0.14	2.00
M21	2005170-10	大観通寶	SP40	2.41	2.45	0.18	2.80
M22	2005170-1	政和通寶	SP40	2.41	2.43	0.13	2.50
M23	2004181-8	鉄滓	P167	15.10	11.00	5.60	754.40

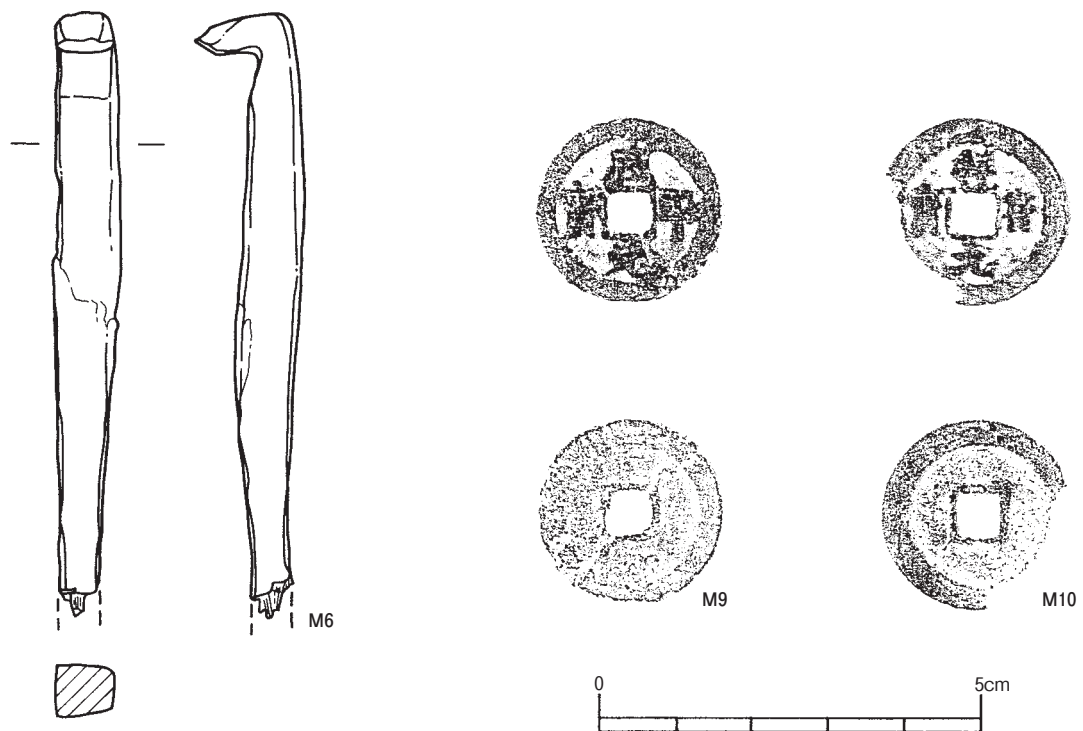
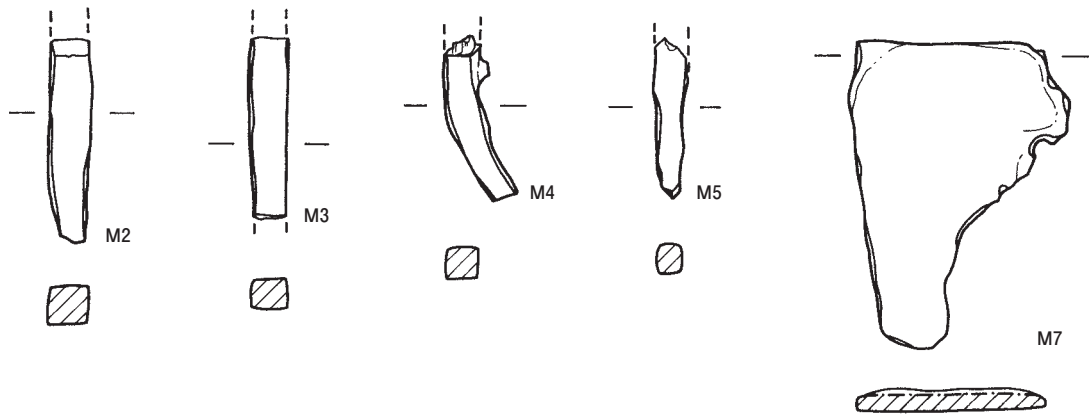
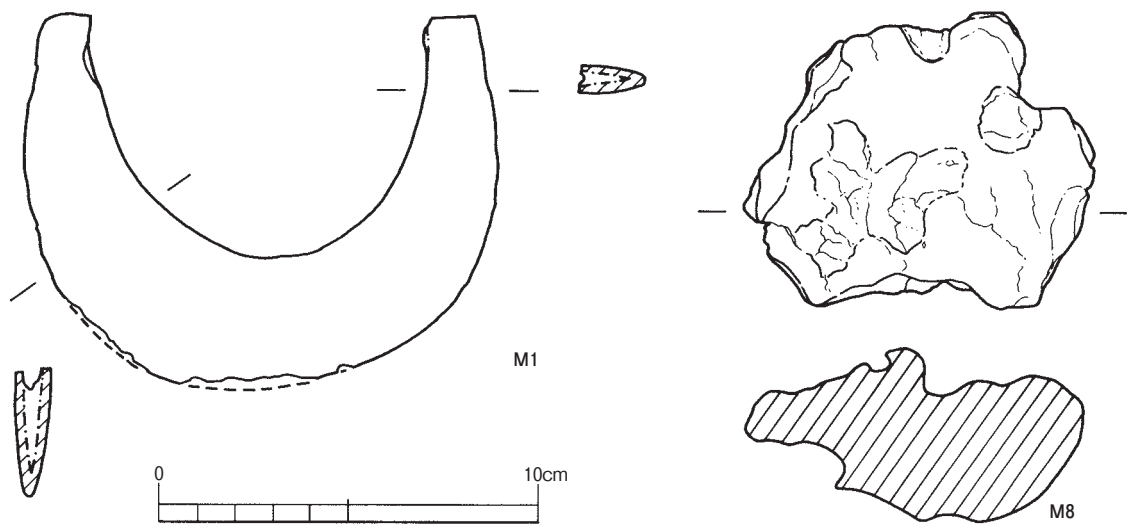


图12 金属器実測図・拓本(1)

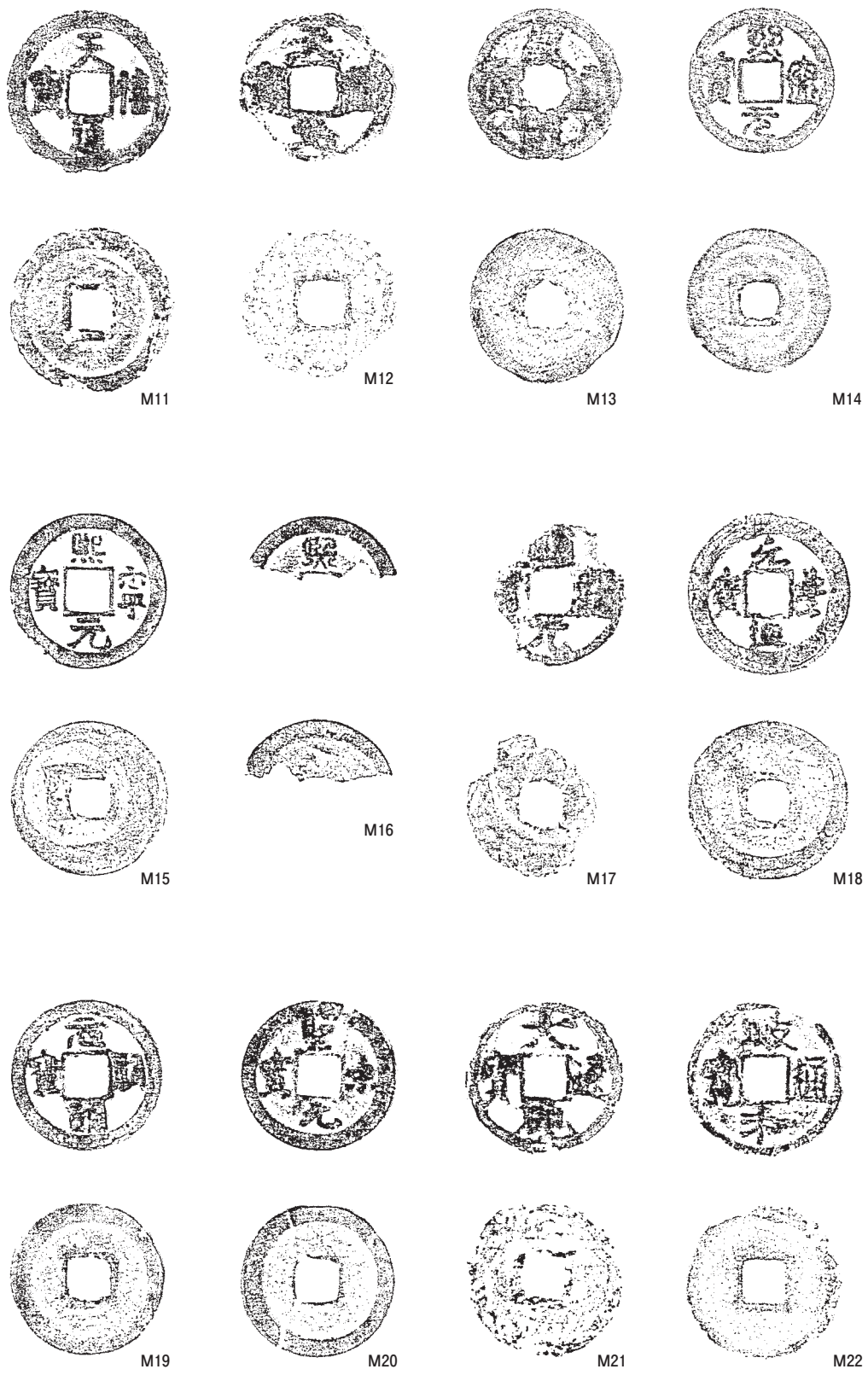


图13 金属器拓本(2)

V 加都遺跡の地形環境

青木 哲哉 (立命館大学非常勤講師)

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活の間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査地区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査地区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査地区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、加都遺跡ⅢとくにC地区における地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、C地区で堆積物の観察を実施した。地形分類に際しては、5,000分の1空中写真を用いた。また、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、C地区付近における地形環境の考察を行った。

2. 調査地区付近の地形分布

本遺跡の調査地区は円山川中流部の平野に位置する。周辺には標高300~500mの山地が分布し、その間には円山川とその支流によってつくられた狭長な平野が認められる。中でも調査地区付近の平野は、円山川によって形成されたものであり、1 km前後の幅で南南西から北北東へ延びる。こうした平野は更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、および支流性扇状地に分けられる (図14)。

更新世段丘は、円山川の支流沿いに分布する。これらは2面に区分され、本稿では高位の段丘を更新世段丘Ⅰ、低位のものを更新世段丘Ⅱと呼ぶ。更新世段丘Ⅰは比高10m前後の崖をもち、更新世段丘Ⅱは完新世段丘面より約5 m高い。いずれも支流によって形成されたものである。完新世段丘は調査地区の周辺において最も広範に発達している。段丘面はほぼ平坦で、比高1 m前後の段丘崖で現氾濫原と接する。ただし、段丘崖は1965年以降の圃場整備によって現在不明瞭となっている。この完新世段丘は13世紀から16世紀までのある時期に段丘化したと考えられる¹⁾。

現氾濫原は、主に円山川に沿って細長く延び、幅が最大で500mである。これは最も低い地形面で、洪水の際に冠水する危険性が高い。支流性扇状地は山地を刻む谷の中から山麓にかけて発達する。調査地区の周辺では、これが3つに細分され、本稿では形成の古いものから順に支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ぶ。支流性扇状地Ⅰは、地表傾斜が約20.7%で、最も急傾斜である。支流性扇状地Ⅱは支流性扇状地Ⅰを下刻してできた谷中から発達しており、地表は約9.8%の傾斜で高度を下げる。支流性扇状地Ⅲは、あまり多く分布しておらず、約2.0%の地表傾斜で最も緩やかである。

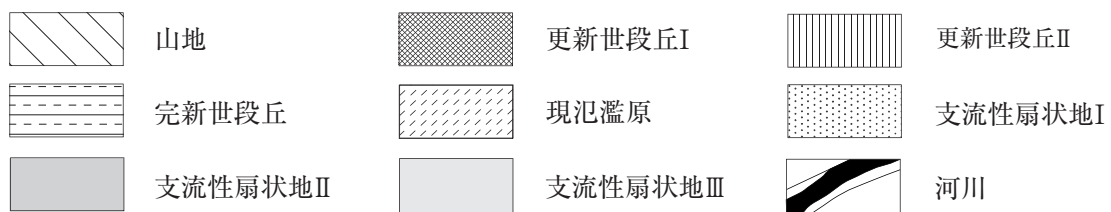
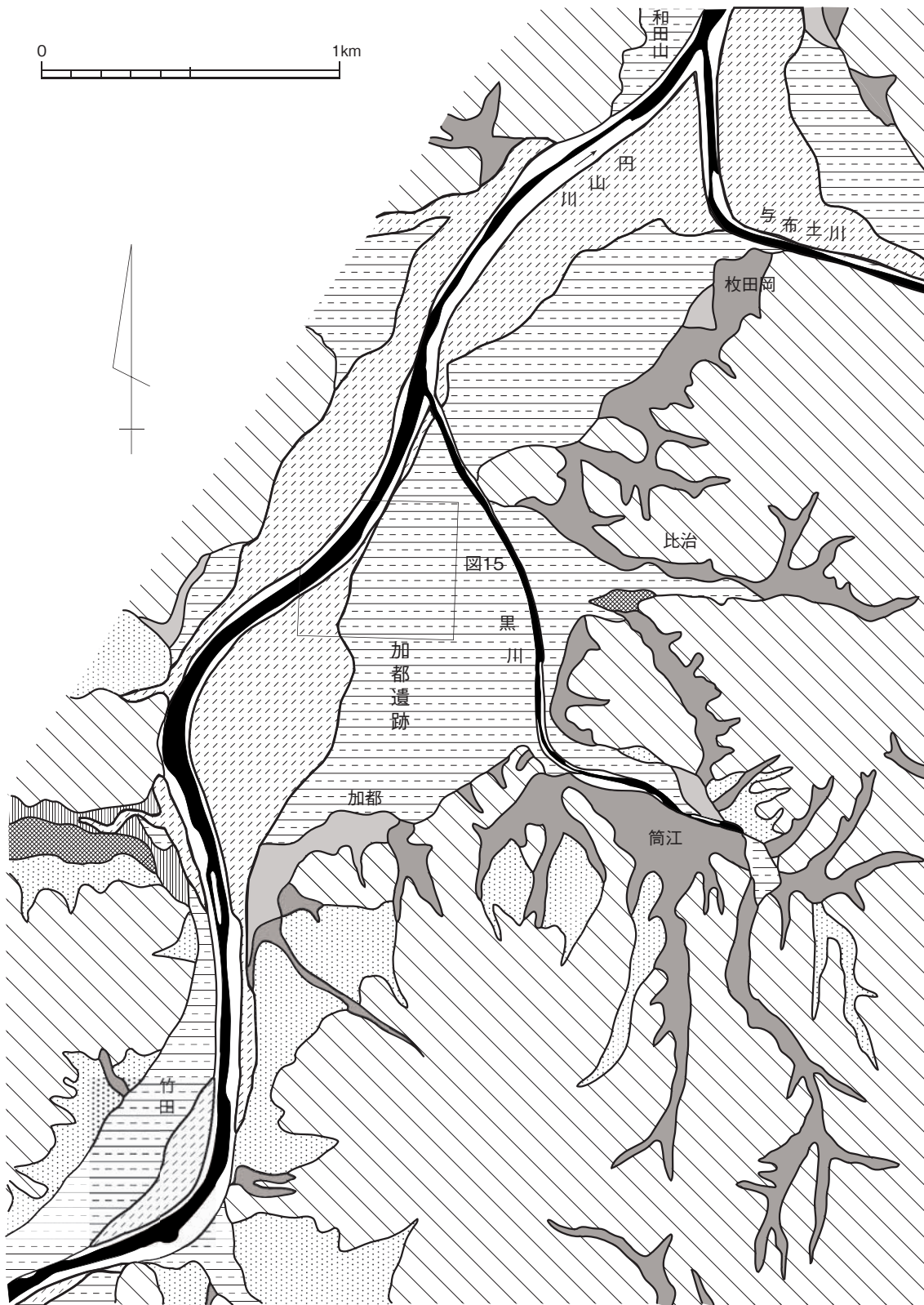


図14 調査地区周辺の地形分類図

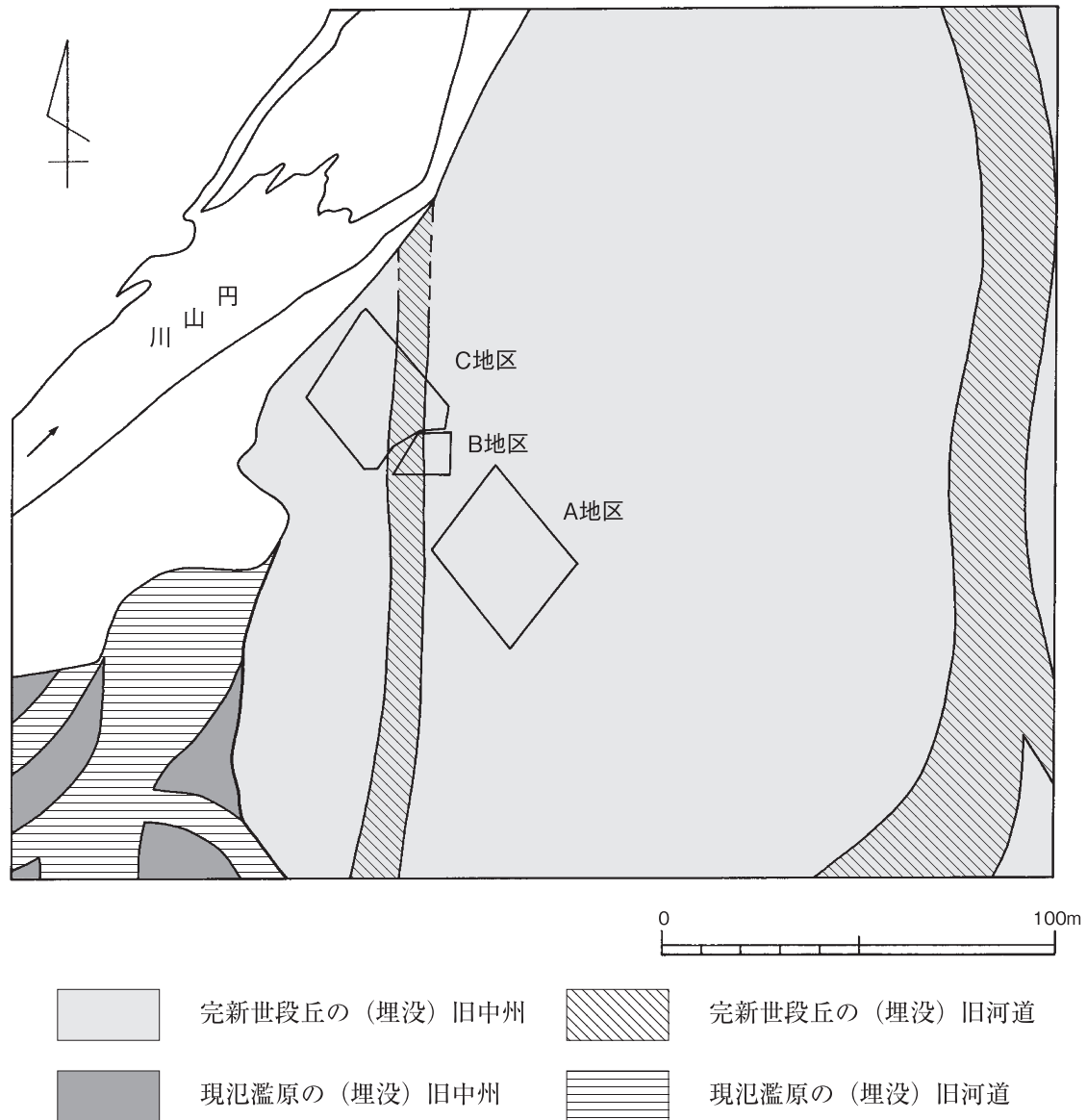


図15 調査地区付近における微地形の分布

これらのうち、調査地区は完新世段丘に位置する。完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。そこには、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる（図15）。調査地区付近には、埋没旧中州が2つ分布し、その間を埋没旧河道が南北方向に延びる。東の埋没旧中州上には主にA地区全域とB地区の東半部、また西のそれにはC地区の中央部から西部が位置する。一方、埋没旧河道上にはB地区の西半部とC地区の東部がみられる。

中でもC地区では、中央部から西部にかけて広がる埋没旧中州上で、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡が3棟と13世紀の掘立柱建物跡が1棟検出されている。他方、C地区東部の埋没旧河道上でも、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡2棟と13世紀の掘立柱建物跡1棟が確認される。

3. C地区における堆積物の特徴

C地区では、下位から順に砂礫、旧河道堆積物、および細粒堆積物が認められる（図16）。最下位に

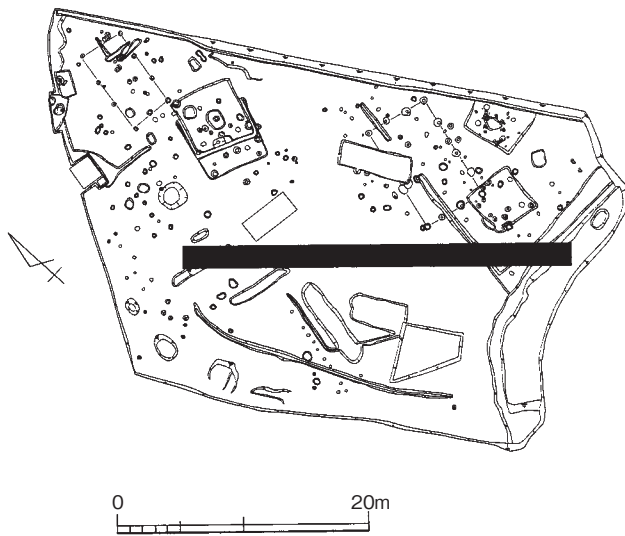
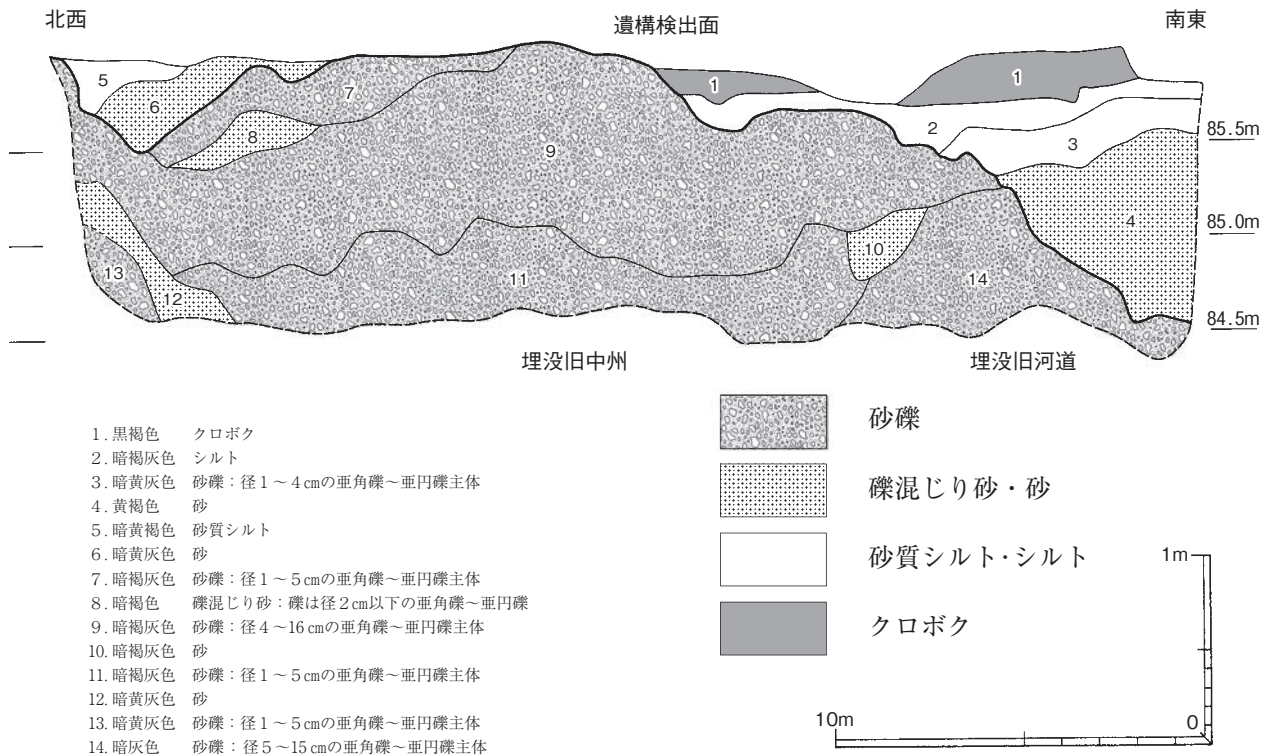


図16 C地区における遺構検出面以深の地質断面図

位置する砂礫（同図の堆積物7・9・11・13・14）は扇状地の旧中州堆積物に相当する。この砂礫は、暗褐色や暗褐色などを呈し、礫径をはじめとする特色の違いから4～5つに細分される。これらには、径4～16cm程度の亜角礫～亜円礫を主体とする砂礫（同図の堆積物9・14）と、それより細かい径1～5cmの礫を主体とするもの（同図の堆積物7・11・13）の2種類がみられ、境界には砂（同図の堆積物8・10・12）がレンズ状にはさまれる。C地区の中央部から西部では、こうした砂礫の上面が高くなっており、東隣にみられる埋没旧河道の底と約1.4mの比高をもつ。

C地区東部に分布する埋没旧河道の堆積物は、黄褐色の砂（同図の堆積物4）とその上にのる暗黄灰色の砂礫（同図の堆積物3）である。黄褐色の砂は、約2.0mの厚さで堆積しており、旧河道の多くを埋積する。また、暗黄灰色の砂礫はこの堆積物を厚さ40cm程度で覆う。礫は、径1～4cmの亜角礫～亜円礫を主体とし、埋没旧中州を構成する砂礫に比べて細かい。

こうしたC地区東部にみられる埋没旧河道の状況は、加都遺跡Ⅱの宮ヶ田Ⅰ地区・Ⅱ地区と新水北地区を通過するそれと大きく異なる。宮ヶ田地区と新水北地区の旧河道は、埋没旧中州を覆う細粒堆積物を切って認められ、弥生時代前期の直前にできた流路が13世紀から16世紀までのある時期にかけて細粒堆積物によって徐々に埋積されたものである²⁾。この旧河道はC地区より130～140m東方にみられる旧河道に連続する。他方、C地区東部の旧河道は、旧中州堆積物の上面から切り込むもので、扇状地の形成期にあたる弥生時代前期以前のある時期に形成・埋積されたと考えられる。

その上位にみられる細粒堆積物は、暗黄灰色の砂（同図の堆積物6）、暗黄褐色の砂質シルト（同図の堆積物5）、暗褐色のシルト（同図の堆積物2）、ならびにこれらを被覆する黒褐色のクロボク（同図の堆積物1）である。クロボクを除く細粒堆積物は洪水によって運搬されたものにあたる。これらは、埋没旧中州の上面が低い地点や埋没旧河道上にみられ、その堆積によって地表の起伏は小さくなっている。また、クロボクはC地区の広い範囲に分布し、13世紀をはじめとする遺物を含む。これは、埋没旧中州上において薄く、わずかに低い埋没旧河道上で厚く堆積しており、クロボク上面の起伏はほとんど認められない。クロボクはA地区とB地区でも現耕土の下位に分布しており、その存在は調査地区付近が荒地と化したことを示す。

このような細粒堆積物によって旧中州は埋没している。旧中州堆積物とそれを覆う細粒堆積物の状況は、加都遺跡Ⅱの桜地区や宮ヶ田Ⅰ地区～Ⅲ地区などにおけるもの³⁾とほぼ同じである。調査地区付近と周辺に分布する埋没旧中州は、同様の形成・埋没過程を辿ったと考えられる。

4. C地区付近における地形環境の変遷

これまでに述べた事柄から考察されるC地区付近の地形環境は次のとおりである。

〔ステージ1〕 C地区付近では、弥生時代前期以前に円山川によってもたらされた砂礫が数度堆積した。

これに伴って扇状地が発達し、旧中州が2つ形成された。それらの間には、C地区東部を南から北へ延びる流路（円山川の分流）がみられた。

〔ステージ2〕 ついで流路には洪水に伴う砂が堆積した。これによって流路の多くが埋積され、流路変更が起こったと考えられる。さらに流路では粒径の小さい砂礫が堆積し、流路の埋積はほぼ完了した。

〔ステージ3〕 こうして形成された旧中州と旧河道の上には、洪水による砂質シルトやシルトなどの堆積がみられた。この堆積は、旧中州上面の凹地とわずかに低い旧河道上でなされ、その結果地表の起伏が小さくなるとともに旧河道は埋没した。

〔ステージ4〕 C地区およびその周辺に荒地が広がり、そこではクロボクが生成された。クロボクの堆積によってC地区付近の旧中州は地下浅所に完全に埋没した。こうした扇状地の形成からクロボクの生成までは弥生時代前期以前にみられた現象であった。クロボクの生成後、C地区付近には洪水のおよばない安定した環境が訪れた。

〔ステージ5〕 C地区では、安定した環境下にあった古墳時代前期から中期に竪穴住居が建てられた。その後もこの環境が続き、13世紀には掘立柱建物の建造が行われた。これらの竪穴住居と掘立柱建物

の立地はともに埋没旧中州上と埋没旧河道上でみられた。

〔ステージ6〕 掘立柱建物からなる13世紀の集落が廃絶した後16世紀までのある時期に、C地区が位置する地形面は段丘化した。その結果、完新世段丘が形成された。

5. おわりに

本遺跡のC地区は円山川中流部の完新世段丘に位置する。この段丘は埋没した扇状地が13世紀から16世紀までのある時期に段丘化したものである。C地区付近には、2つの埋没旧中州とその間を南北に延びる埋没旧河道が認められる。これらは弥生時代前期以前に形成・埋没したものである。とくに、埋没旧河道は宮ヶ田地区と新水北地区を通るものと異なる。宮ヶ田地区と新水北地区の旧河道は弥生時代前期の直前以降13世紀から16世紀に至るある時期までに埋積されたもので、C地区のそれは扇状地が形成された古い時期につくられた流路跡と考えられる。

C地区では、こうした埋没旧中州上と埋没旧河道上に竪穴住居や掘立柱建物からなる集落が古墳時代前期から中期と13世紀に立地した。高燥な埋没旧中州上だけでなく埋没旧河道上にも居住がみられたのは、旧河道の形成が古いため、それを被覆する堆積が十分になされ、地表の起伏がほとんどなくなったことに起因すると考えられる。その結果、C地区の埋没旧河道上は比較的高燥で排水しやすい環境となったのであろう。本遺跡のC地区では、以上のような地形環境と人間生活の関係が認められる。

注

- 1) 拙稿「加都遺跡の地形環境」、『加都遺跡Ⅱ』（兵庫県教育委員会）所収、2007年
- 2) 前掲1)
- 3) 前掲1)

VI 科学分析

1 加都遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

加都遺跡は、兵庫県朝来市加都・市御堂（北緯34° 49' 34"、東経134° 32' 58"）に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡（SH02）床面出土炭化材（1：IAAA-110540）、竪穴住居跡（SH08）床面出土炭化材（2：IAAA-110541、3：IAAA-110542）の合計3点である（表1）。

2 測定の意義

遺構の時期を確定する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。

補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

試料の ^{14}C 年代は、堅穴住居跡 (SH02) 床面出土炭化材 1 が $1900 \pm 20\text{yrBP}$ 、堅穴住居跡 (SH08) 床面出土炭化材 2 が $1760 \pm 20\text{yrBP}$ 、3 が $1830 \pm 20\text{yrBP}$ である。同じ住居跡の床面から出土した2と3の値には、わずかに年代差が認められる。暦年較正年代 (1σ) は、1 が78~126cal ADの範囲、2 が239~325cal ADの間に2つの範囲、3 が138~225cal ADの間に2つの範囲で示される。

一般に炭化材を試料とする場合、最外年輪部が伐採年、枯死年を示し、内側では年代値が遡ることを考慮する必要がある。また、ここで測定された3点の試料が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCal09に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

炭化材2と3は年輪が観察され、炭素含有率が60%を超える十分な値であった。1は年輪が観察されず、炭素含有率が約30%と、炭化材や炭化物としてはやや低い値を示した。化学処理、測定上の問題は特に認められない。

表 1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-110540	1	竪穴住居跡(SH02)床面	炭化材	AaA	-26.50 ± 0.60	$1,900 \pm 20$	78.93 ± 0.24
IAAA-110541	2	竪穴住居跡(SH08)床面	炭化材	AAA	-27.20 ± 0.44	$1,760 \pm 20$	80.32 ± 0.24
IAAA-110542	3	竪穴住居跡(SH08)床面	炭化材	AAA	-26.17 ± 0.38	$1,830 \pm 20$	79.66 ± 0.23

[# 4471]

表 2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-110540	$1,930 \pm 20$	78.69 ± 0.22	$1,901 \pm 24$	78calAD-126calAD (68.2%)	29calAD- 38calAD (1.2%) 51calAD-140calAD (90.2%) 150calAD-171calAD (2.2%) 195calAD-209calAD (1.7%)
IAAA-110541	$1,800 \pm 20$	79.95 ± 0.23	$1,761 \pm 24$	239calAD-261calAD (23.8%) 281calAD-325calAD (44.4%)	180calAD-185calAD (0.4%) 214calAD-355calAD (93.7%) 367calAD-380calAD (1.3%)
IAAA-110542	$1,850 \pm 20$	79.47 ± 0.22	$1,826 \pm 23$	138calAD-198calAD (51.7%) 206calAD-225calAD (16.5%)	128calAD-242calAD (95.4%)

[参考値]

文献

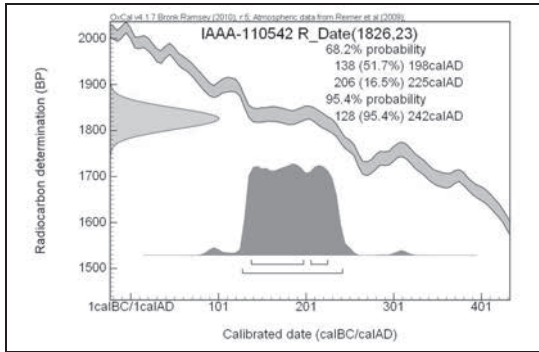
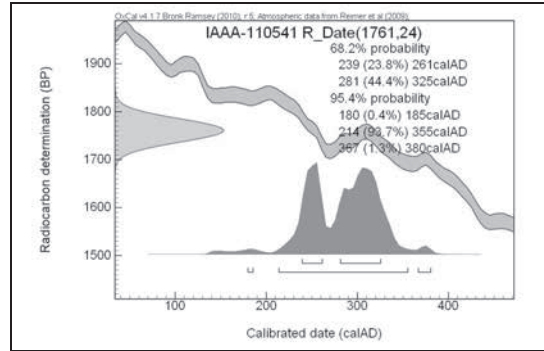
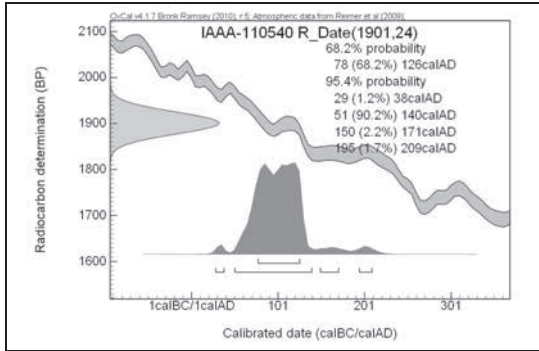
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90



[参考] 暦年較正年代グラフ

2 加都遺跡Ⅲ出土炭化材の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

加都遺跡は朝来郡和田山町に所在しており、円山川が形成した段丘上に位置している。ここでは、古墳時代の竪穴住居跡から出土した炭化材3点の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、C地区の竪穴住居跡SH08から出土した炭化材3点である。3点とも住居を構成する建築材で、時期は古墳時代前期である。

最初に、肉眼もしくは実体顕微鏡で観察し、木取りの確認および年輪数の計測を行った。その後、手あるいはカッターナイフを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料を作製した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査型電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-5900LV型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のクリ、シイノキ属、クワ属の3分類群が確認された。木取りは、No.1とNo.3は破片であったため不明であるが、No.2は完形ではなかったが丸木の枝材と思われる。結果の一覧を表1に示す。

表1 樹種同定結果一覧

No.	地区	遺構	用途	樹種	木取り	年輪数(径)
1	C地区	SH08	建築材	クリ	破片	2
2	C地区	SH08	建築材	シイノキ属	丸木?(枝)	4?(半径:1.5cm)
3	C地区	SH08	建築材	クワ属	破片	4

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 写真図版44 1a-1c (No.1)

大型の道管が年輪のはじめ数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で耐朽性・耐湿性に優れ、加工困難である。

(2) シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 写真図版44 2a-2c (No.2)

環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きいが接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

シイノキ属は暖帯に分布する常緑高木で、スタジイとツブラジイがある。幹材では、ツブラジイに集

合放射組織があり、スダジイにはみられないが、若い枝材では両者とも集合放射組織が現れることがあるため、シイノキ属までの同定とした。いずれも材はやや重硬で加工はやや困難だが、耐朽性は低い。

(3) クワ属 *Morus* クワ科 写真図版44 3a-3c (No.3)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯～亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワ・マグワ・ヤマグワがある。材は堅硬で靱性に富む。

4. まとめ

クリ、シイノキ属、クワ属はいずれも大径木になる樹種であり、材質も重硬である。いずれも建築材として有用な材であるが、シイノキ属は小径であったため、構造材などに利用された可能性がある。

以前行なわれた調査では、古墳時代中期以降中世以前の幅広い時代ではあるが、木製品の樹種同定が行なわれている。これによると、木製品全体ではスギの使用が84%近くを占めており、建築材でもクリが1点ある他はすべてスギであった（パリノ・サーヴェイ,2007）。今回の調査ではスギは1点もなく、すべて広葉樹である。分析点数が少ないため検出されなかったとも考えられるが、時代により使用される樹種が異なる、あるいは建物の用途や部位によって異なる可能性も考えられる。

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社（2007）木製品の樹種同定，吉識雅仁・岸本一宏・西口圭介他編「加都遺跡Ⅱ」：126-144p，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所。

3 加都遺跡Ⅲ出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、和田山町に所在する加都遺跡Ⅲから出土した古墳時代の土師器および縄文土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。加都遺跡Ⅲは、中国山地北東端部と丹後山地の境界をなす円山川上流域に形成された沖積低地に位置する。

今回の試料では、1点のみに讃岐地域からの搬入という発掘調査所見が示されているが、他の試料については、特に産地等の所見はない。本分析では、胎土分析の結果と既存の地質資料との比較から推定される地域性を検討する。また、今回の試料は、甕、壺、高杯などの器種と出土遺構が示されていることから、これらの属性と胎土との対応関係も検討する。

1. 試料

試料は、加都遺跡Ⅲから出土した古墳時代の土師器の土器片14点と縄文時代の深鉢とされる土器片1点の合計15点である。試料には資料No.1～15が付されている。土師器の器種の内訳は多い順に、甕が7点、高杯が4点、壺が2点、小形丸底壺が1点である。各試料の資料No.と器種、出土遺構および報告No.などを一覧にして表1に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方

表1 試料一覧および胎土分類結果

資料No.	種別	器形	出土地区	出土遺構など	報告No.	実測No.	備考	鉱物・岩石組成						粒径組成							碎屑物							
								A4	C2	C7	D3	F4	F6	1	2	3	4	5	6	7	I	II	III					
1	土師器	甕	A地区	SH01	7	355		■							■											■		
2	土師器	甕	A地区	SH01	9	344			■												■							
3	土師器	小型丸底壺	A地区	SH01	15	356			■																			
4	土師器	壺	A地区	SH02	20	360			■																			
5	土師器	高杯	A地区	SH02	27	348				■																		
6	土師器	高杯	A地区	SH02	29	362			■																			
7	土師器	高杯	A地区	SH02	37	370																						
8	土師器	甕	A地区	SH04	40	307			■																			
9	土師器	甕	A地区	SH04	41	302				■																		
10	縄文土器	深鉢	A地区	SK02(埋甕)	55	303			■																			
11	土師器	甕	B地区	SH05	67	381	搬入(讃岐)			■																		
12	土師器	高杯	B地区	SH05	79	380																						
13	土師器	壺	C地区	SH07	94	30		■																				
14	土師器	甕	C地区	SH09	107	14			■																			
15	土師器	甕	C地区	包含層	127	50		■																				

法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を表2、図1～3に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からN類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようなになる。

資料No.1は、鉱物片では石英と斜長石が多く、これらよりやや少量のカリ長石と角閃石を含み、微量の黒雲母も含む。岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類、凝灰岩および流紋岩・デイサイトと安山岩の火砕岩・火山岩類、花崗岩類とはんれい岩・閃緑岩の深成岩類、さらには粘板岩と緑色岩の変成岩類と脈石英、変質岩、珪化岩まで多種類の岩石片が含まれる。ただし、それらの中で突出して多い岩石片は認められない。これまでの分類では、堆積岩類と火砕岩・火山岩類および花崗岩類の3者が同程度に含まれる組成をA類としており、さらに変成岩類や変質岩、珪化岩まで含む種類はA4類に分類している。今回の資料No.1の鉱物・岩石組成は、このA4類に相当する。今回の試料では、資料No.13と15も、堆積岩類と凝灰岩および花崗岩類が同程度に含まれ、脈石英、変質岩、珪化岩も伴うことから、同様にA4類に分類される。

資料No.2は、石英の鉱物片が多く、次いでカリ長石の鉱物片が多く、それよりも少量の斜長石と黒雲母の鉱物片を伴うことが特徴である。さらに岩石片では、花崗岩類とそれよりも少量の多結晶石英が含まれない。これまで、岩石片において花崗岩類を主体とする組成はC類に分類され、石英と長石類以外の鉱物片で黒雲母の多い組成はC2類に分類した。資料No.2はC2類に分類される。なお、今回のC2類は、カリ長石が斜長石よりも多いという鉱物片の組成も特徴とすれば、資料No.2以外にも、資料No.3、4、6、8、10、14の各試料がC2類に分類される。

資料No.5については、鉱物片の組成において、石英が最も多いものの、長石類ではカリ長石より斜長石の方が多い。また、岩石片では花崗岩類と多結晶石英が認められることから、C類に分類されるが、黒雲母が含まれないことと、凝灰岩の岩石片を含むことから、上述したC2類には分類されない。これまでの分類では、同様の組成についてはC7類が相当する。今回の試料では、資料No.5の他にも、資料

表2 薄片観察結果(1)

資料No	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計										
		鉱物片							岩石片							その他													
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩 テイスサイト	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類		はんれい岩 閃緑岩	ホルンフェルス	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物珪酸体
1 甕	細礫																												0
	極粗粒砂	1								2							2												6
	粗粒砂	6	3	5					1	5		5	3	3			6	1		1	4	2	6	3				54	
	中粒砂	5	1	5		2			1	1	3	5		3		2	2				3	2	1	1				37	
	細粒砂	1		1		4		1				2					1						1					11	
	極細粒砂	3		1		1										1												6	
	粗粒シルト	2		1																								3	
	中粒シルト	1																											1
	基質	718																											
	孔隙	14																											
備考	基質は雲母粘土鉱物質で褐色を示す。流紋岩、凝灰岩は結晶質。凝灰岩の一部には、やや粘土鉱物化したもの(第三紀?)が認められる。変質岩は、緑簾石、粘土鉱物などを伴う。花崗岩の一部には、微文象組織を示すものが認められる。																												
2 甕	細礫			1																									1
	極粗粒砂	2	2	1												1													6
	粗粒砂	8	7														4												19
	中粒砂	12	3														5												21
	細粒砂	10	7	2			1	5																					25
	極細粒砂	3	3	2				2																					10
	粗粒シルト	4		1																									5
	中粒シルト	1																											1
	基質	542																											
	孔隙	19																											
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。																												
3 小形丸底壺	細礫																												0
	極粗粒砂	1																											1
	粗粒砂	10	7																							1			18
	中粒砂	22	12	4				4								1	3												46
	細粒砂	16	6	5				1								1	1												30
	極細粒砂	5	6	1																									12
	粗粒シルト	2		1																									4
	中粒シルト								1																				0
	基質	551																											
	孔隙	13																											
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。微文象組織を示すカリ長石が1粒認められる。																												
4 壺	細礫																												0
	極粗粒砂	1	1																										2
	粗粒砂	7	3																										10
	中粒砂	10	13	2				2									1												28
	細粒砂	15	9	3				5																					32
	極細粒砂	11	10				1	1																					23
	粗粒シルト	2	1	2																									5
	中粒シルト																												0
	基質	558																											
	孔隙	16																											
備考	基質は黒雲母質で淡褐色を示す。カリ長石には、微文象組織を示すものが認められる。																												
5 高坏	細礫	1																											1
	極粗粒砂	2	1														1												4
	粗粒砂	7	4	1								1				1													14
	中粒砂	19	3	5								1					1												29
	細粒砂	10	3	3																									16
	極細粒砂	4	1	1																									6
	粗粒シルト	1		2																									3
	中粒シルト																												1
	基質	404																											
	孔隙	3																											
備考	基質は雲母粘土鉱物で埋められ、淡褐色を示す。テフラ由来と思われる非常に新鮮な粗粒斜長石がごく微量含まれる。																												
6 高坏	細礫																												0
	極粗粒砂	2	1														1												4
	粗粒砂	5	10														3												18
	中粒砂	17	19	6							1						1	3											47
	細粒砂	16	13	6																									35
	極細粒砂	3	3	3				1	1																				11
	粗粒シルト	2	1	2			1																						6
	中粒シルト	1																											1
	基質	607																											
	孔隙	15																											
備考	基質は黒雲母質で、褐色を示す。																												

表2 薄片観察結果(2)

資料No	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計										
		鉱物片							岩石片							その他													
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩(テイスイト)	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類		はんれい岩閃緑岩	ホルンフェルス	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物珪酸体
7 高坏	細礫																												0
	極粗粒砂	1								1	1					1	3							1					8
	粗粒砂	3										7					4						3						17
	中粒砂	6	3	4							1	4				1							2						21
	細粒砂	13	3	7		2				1		5				1													32
	極細粒砂	6	2	18		1	1																						28
	粗粒シルト	9		15			1																						25
粒シルト			1																									1	
基質	質																										651		
孔隙	隙																										3		
備考	考	基質は黒雲母質で、褐色を示す。変質岩は、セリサイト化した熱水変質岩が多い。花崗岩には、微文象組織を示すものがごく微量認められる。凝灰岩は結晶質。																											
8 甕	細礫																							1	1			2	
	極粗粒砂	3	2									1			1		1												8
	粗粒砂	5	4													1	4		1										15
	中粒砂	11	4	1			1									1	2												20
	細粒砂	10	2	7								1																	20
	極細粒砂	3	4	4			1																						12
	粗粒シルト	2																											2
中粒シルト																												0	
基質	質																										387		
孔隙	隙																										7		
備考	考	基質は雲母質で褐色を示すが、試料片面には有機質な部分が認められ、0.3~1mm幅で黒褐色帯が形成されている。玄武岩は褐色化し、風化が進んでいる。ジルコン、緑簾石あり。																											
9 甕	細礫															1												2	
	極粗粒砂										1				1								1						8
	粗粒砂	2								2	1				7							1	4		1				17
	中粒砂	6		1		1				1	2				16								4		1				29
	細粒砂	15		3											7								1						26
	極細粒砂	24		11											5								1						41
	粗粒シルト	13	1	3																									17
中粒シルト																												0	
基質	質																										662		
孔隙	隙																										9		
備考	考	基質は雲母質で褐色を示すが、試料片面には有機質な部分が認められ、0.5mm程度の幅で黒褐色帯が形成されている。頁岩は、珪化頁岩質である。																											
10 深鉢	細礫																											0	
	極粗粒砂	4	1														3						1	1					10
	粗粒砂	13	4								1				3	4													25
	中粒砂	11	9									1			2	1													24
	細粒砂	6	5	1																									12
	極細粒砂	2	3	3																									8
	粗粒シルト	1		3																									4
中粒シルト																												0	
基質	質																										490		
孔隙	隙																										7		
備考	考	基質は黒雲母質。植物珪酸体、緑簾石あり。																											
11 甕	細礫																											0	
	極粗粒砂																2												2
	粗粒砂	6	1													4													11
	中粒砂	13	2	2								1			1	2													21
	細粒砂	7	2	4																						1			14
	極細粒砂	5	2	9							1																		17
	粗粒シルト	5	2	1																									8
中粒シルト																												0	
基質	質																										401		
孔隙	隙																										15		
備考	考	基質は雲母粘土鉱物質でセリサイトが散在する。カリ長石の一部には微文象組織が発達する。																											
12 高坏	細礫																											0	
	極粗粒砂											1																	1
	粗粒砂			2																									2
	中粒砂			4												1							1				2		8
	細粒砂	4	1	5	1	1						1			1												2		16
	極細粒砂	3	2	2			2																				1		10
	粗粒シルト	4		5							1																		10
中粒シルト	1																											1	
基質	質																										529		
孔隙	隙																										4		
備考	考	基質は黒雲母質。凝灰岩は結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。																											

表2 薄片観察結果(3)

資料No	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計										
		鉱物片							岩石片							その他													
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩(テイスイト)	安山岩	玄武岩	多結晶石英	花崗岩類		はんれい岩閃緑岩	ホルンフェルス	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	植物珪酸体
13 壺	細礫																												0
	極粗粒砂	1							1		1					1								1	1				6
	粗粒砂	3	1	3					1		3					8							1	1				23	
	中粒砂	12	4	8		2					3					3	3		1			2		1				40	
	細粒砂	10	2	17					1		3					2										1		36	
	極細粒砂	16	3	10		5			2							2												38	
	粗粒シルト	12		10																							1	23	
	中粒シルト	3																										3	
	基質																											964	
	孔隙																											23	
備考	基質は雲母質で淡褐色を示す。花崗岩の一部には、微文象組織を示すものが認められる。凝灰岩は結晶質ものと、やや非晶質なもの認められる。火山ガラスはバブルウォール型。																												
14 甕	細礫																												0
	極粗粒砂	3	3													2	4												12
	粗粒砂	19	11	2													6												38
	中粒砂	20	19	6													5												50
	細粒砂	28	7	18																									53
	極細粒砂	13	8				2																					23	
	粗粒シルト	6	2																								1	9	
	中粒シルト	2		1																									3
	基質																											542	
	孔隙																											31	
備考	基質は褐色粘土鉱物、雲母粘土鉱物などで埋められる。カリ長石の一部には、微文象組織を示すものがある。緑簾石、未酸化な角閃石、バブルウォール型火山ガラスがごく微量含まれる。																												
15 甕	細礫																												0
	極粗粒砂	3									1																		4
	粗粒砂	2	3								1														2	1			11
	中粒砂	5	4	4	1				1	1	1				1	3						1	1						22
	細粒砂	13	3	9	1				1						1							1							29
	極細粒砂	4	2	8		3									1														18
	粗粒シルト	9		9																									18
	中粒シルト	3		1																									4
	基質																											425	
	孔隙																											13	
備考	基質は黒雲母質で褐色を示す。変質岩は、緑簾石+粘土鉱物からなるものや、風化岩など。凝灰岩は結晶質。																												

No.11が同様にC7類に分類される。

資料No.7は、石英よりも斜長石の方がやや多く、カリ長石が少量である鉱物片の組成が第一の特徴であり、岩石片では、頁岩や砂岩の堆積岩類と凝灰岩および花崗岩類の3者と変質岩が含まれるが、その中では凝灰岩の多い傾向が認められることが第二の特徴となる。これらの特徴のうち、まず岩石片において凝灰岩の多い組成は、これまでの分類におけるF類に相当する。さらに、堆積岩類と花崗岩類および変質岩も伴うことから、F4類に分類することができる。

資料No.9は、石英が多く、次いで斜長石が多く、カリ長石は極めて微量であるという鉱物片の特徴と、多結晶石英が突出して多く、それ以外では少量の脈石英と微量のチャート、頁岩、砂岩の堆積岩類および粘板岩、珪化岩が含まれるという岩石片の特徴を示す。多結晶石英や脈石英は堆積岩類に由来すると考えられるから、分類としては堆積岩類が主体を占めるD類に分類される。さらに本試料の組成は、D類の中では、チャートも頁岩もどちらも卓越することのないD3類に相当する。

資料No.12は、石英よりも斜長石の方が多量な組成や凝灰岩以外に堆積岩類や花崗岩類が含まれないことなどから、分類としては凝灰岩の多いF類に分類される。さらに、特徴として、バブル型の火山ガラスを少量含むことから、これまでの分類では、F6類に分類することができる。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モー

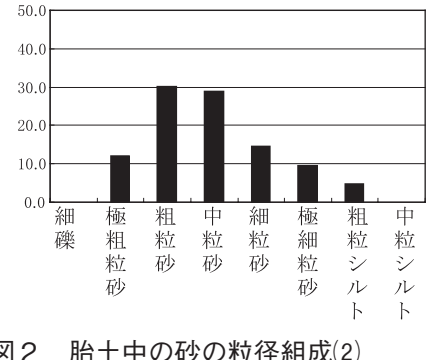
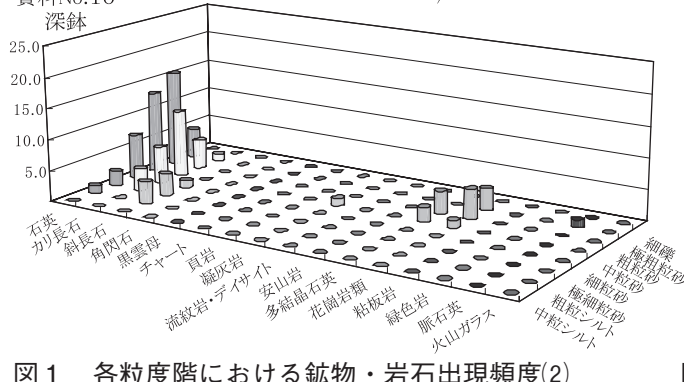
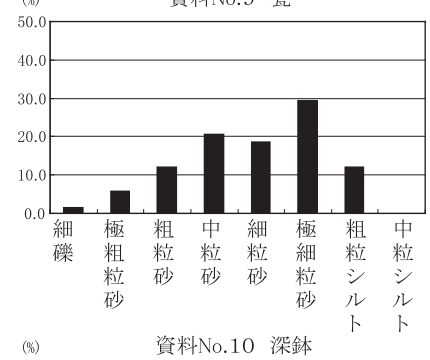
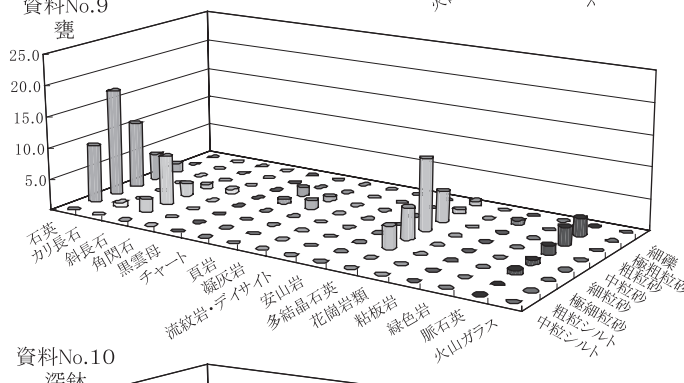
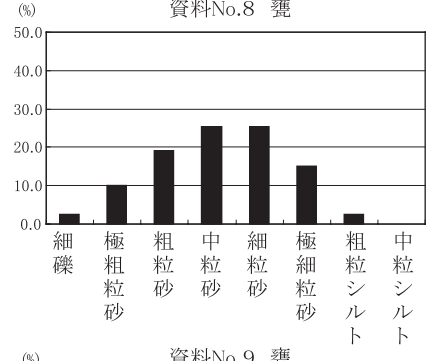
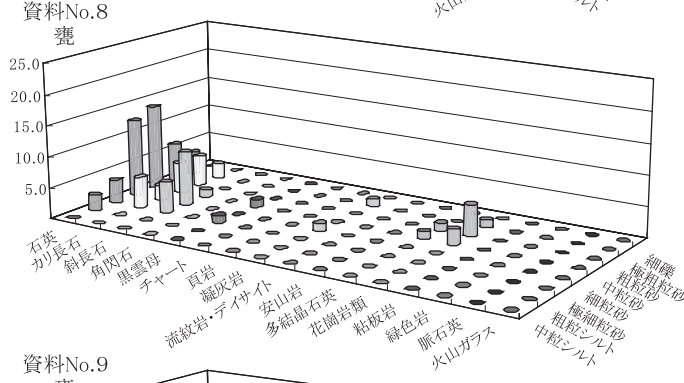
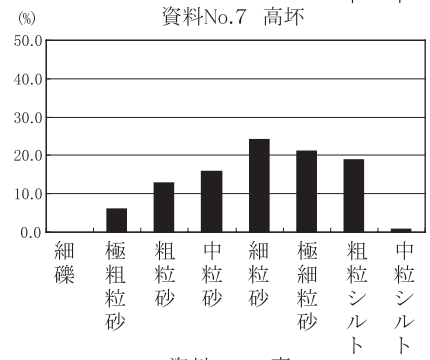
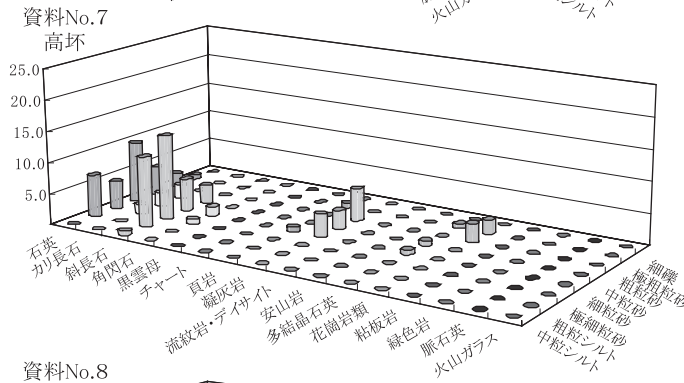
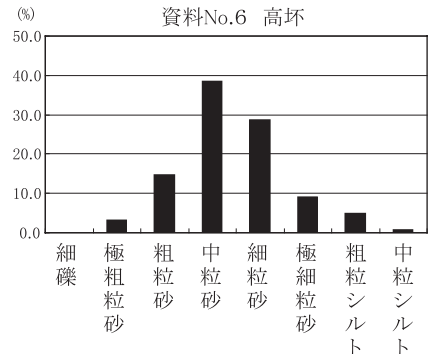
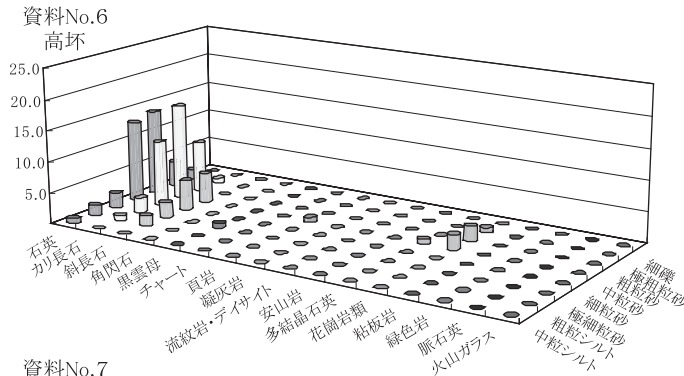


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

図2 胎土中の砂の粒径組成(2)

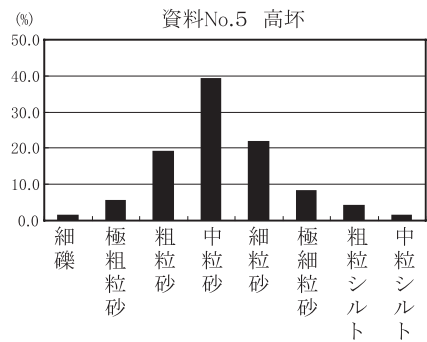
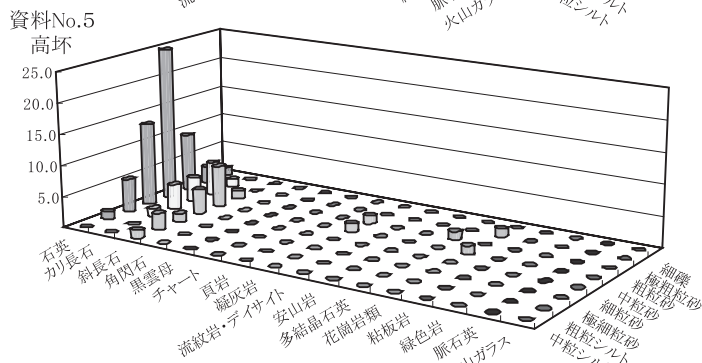
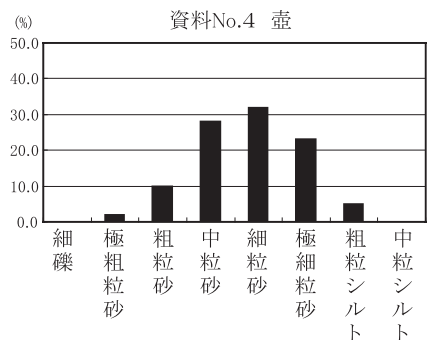
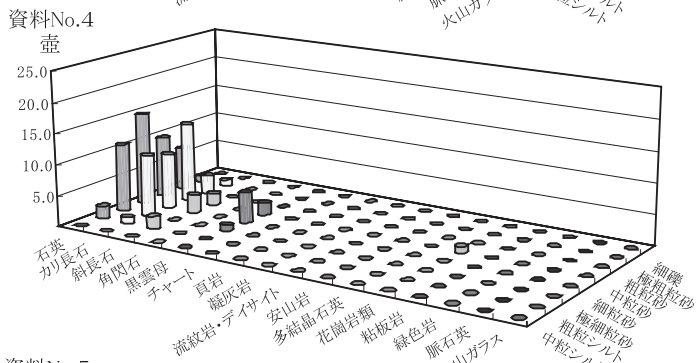
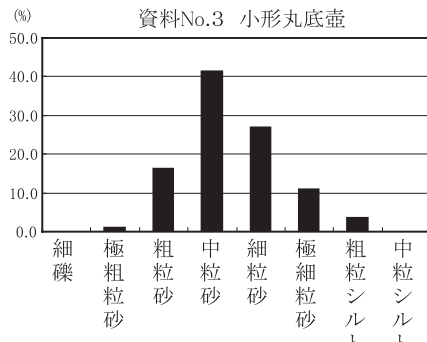
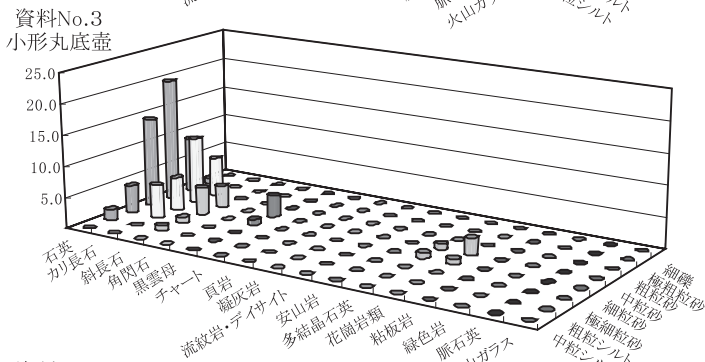
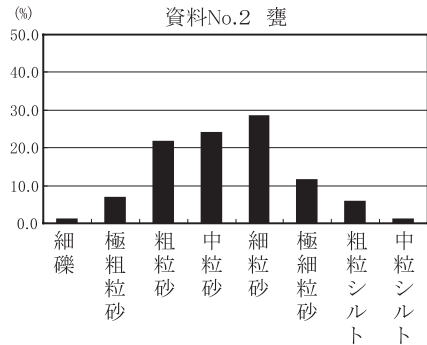
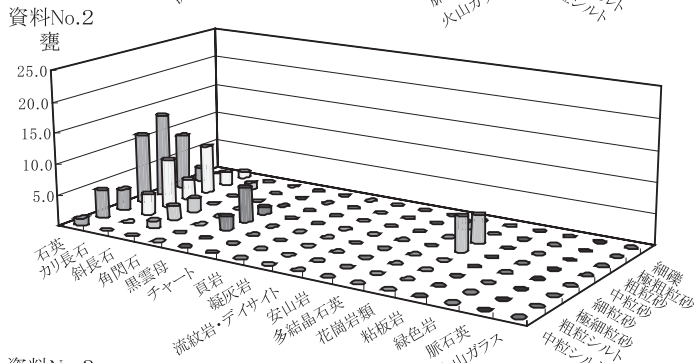
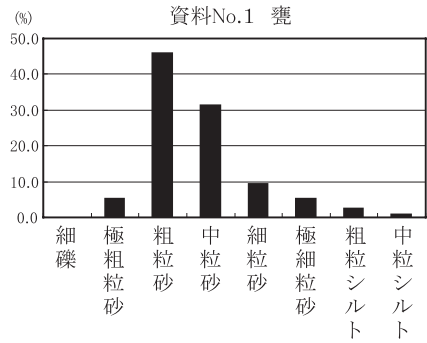
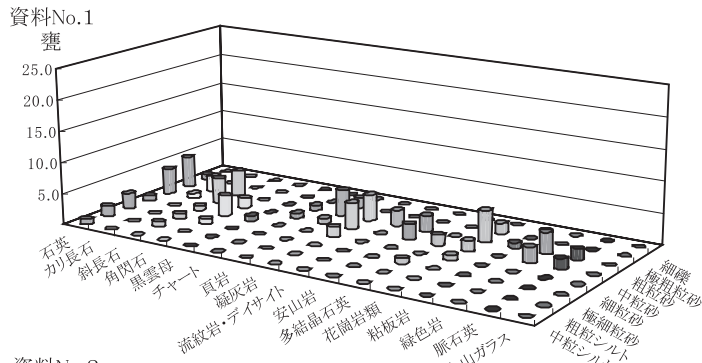


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

図2 胎土中の砂の粒径組成(1)

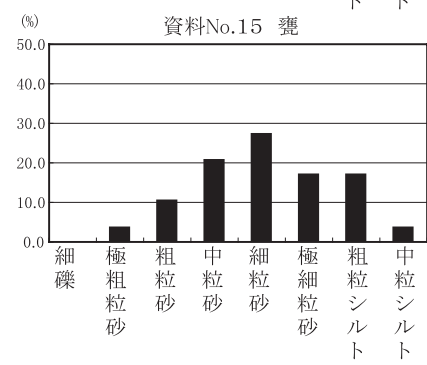
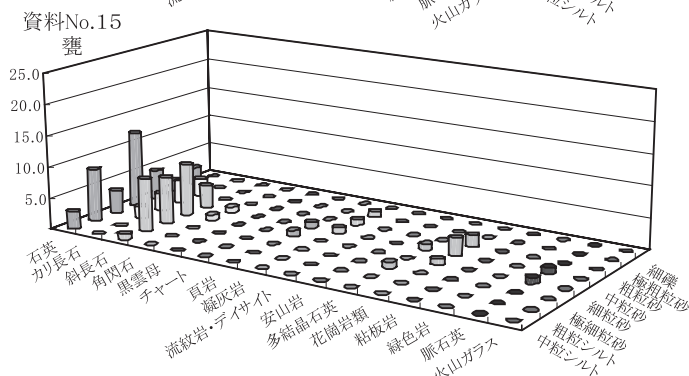
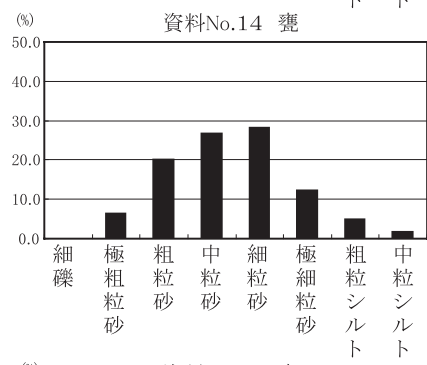
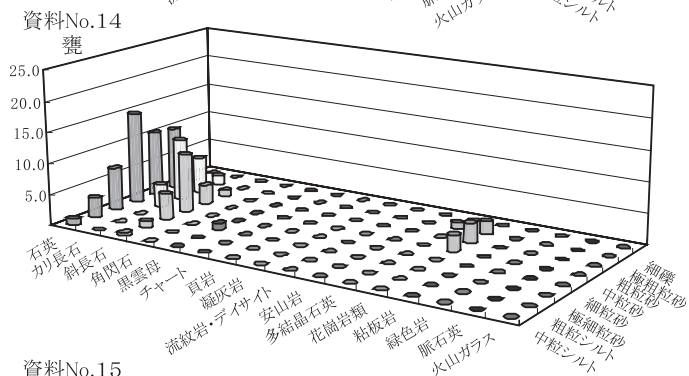
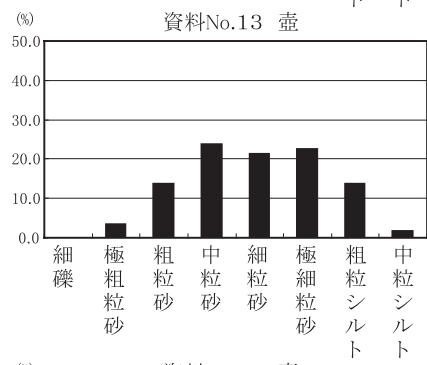
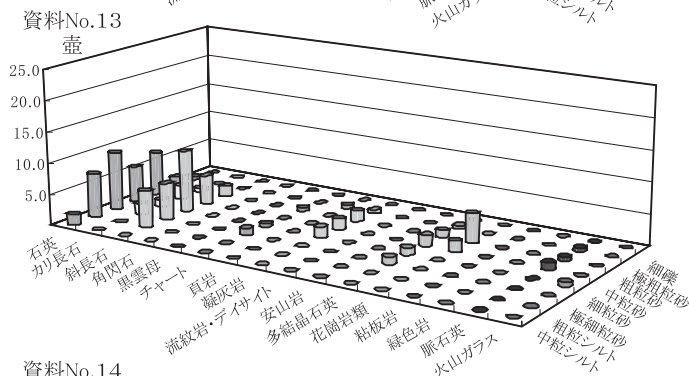
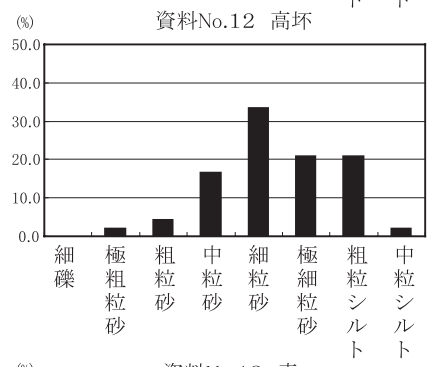
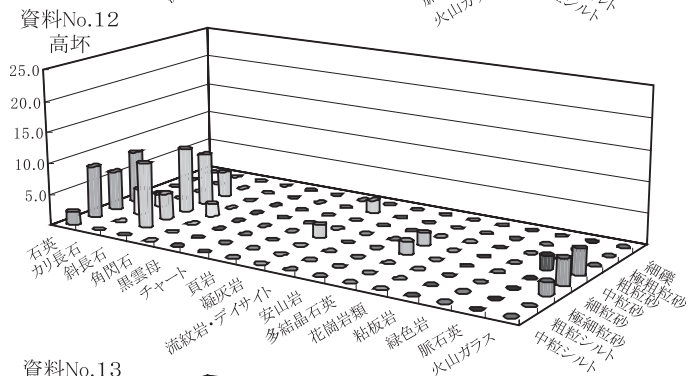
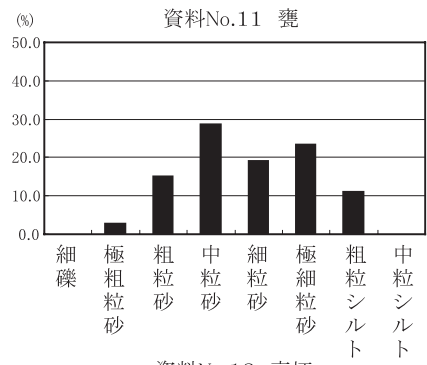
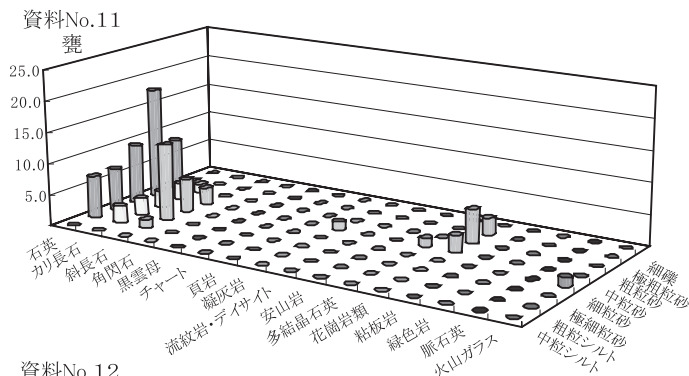


図1 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)

図2 胎土中の砂の粒径組成(3)

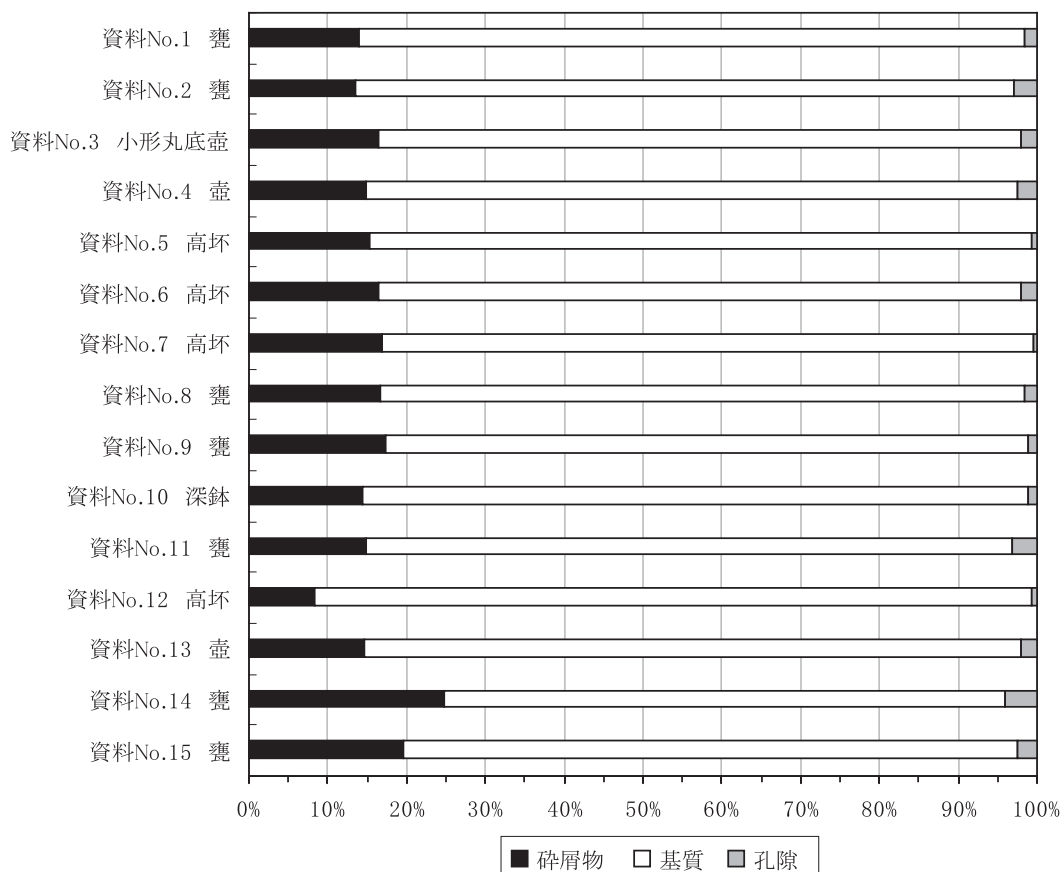


図3 碎屑物・基質・孔隙の割合

ドを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に1類から7類までの分類を設定した。各分類の内容とそれに分類される試料を以下に示す。

- 1類：粗粒砂をモードとする。資料No.1、10。
- 2類：中粒砂をモードとし、次いで細粒砂が多い。資料No.3、5、6。
- 3類：中粒砂と細粒砂の両者をモードとする。資料No.8。
- 4類：中粒砂をモードとし、次いで極細粒砂が多い。資料No.11、13。
- 5類：細粒砂をモードとし、極細粒砂よりも粗粒砂の方が多い。資料No.2、14。
- 6類：細粒砂をモードとし、粗粒砂よりも極細粒砂の方が多い。資料No.4、7、12、15。
- 7類：極細粒砂をモードとする。資料No.9。

碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合が10%未満、15%前後と20%前後で3分することができる。順にⅠ類～Ⅲ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

- Ⅰ類：資料No.12
- Ⅱ類：資料No.1～11、13
- Ⅲ類：資料No.14、15

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および碎屑物の量比における各分類結果は、一覧にして表1に併記する。

4. 考察

(1) 胎土の鉱物・岩石組成と加都遺跡の地質学的背景

今回の分析では、全体の半数に近い7点の試料がC2類に分類された。このC2類の中には縄文土器も含まれている。また、古墳時代の出土遺構別にみても、今回対象とされた6基の遺構のうち、SH04とSH06以外の各遺構にC2類の土器が認められている。ここで加都遺跡周辺の地質を、猪木(1981)および日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などにより概観してみる。加都遺跡よりやや上流の竹田付近の円山川の両岸に迫る大路山や金梨山などの山地は、和田山花崗岩と呼ばれる白亜紀～古第三紀に貫入した山陰帯の花崗岩類により主に構成されている。この和田山花崗岩は、加都遺跡背後の山地すなわち円山川支流の与布土川や三保川さらに柴川や粟鹿川の両岸に分布する山地も構成している。また、加都遺跡対岸の大倉都山から伸びる山地は、夜久野層群と呼ばれる三疊紀の堆積岩類からなるが、その周囲は和田山花崗岩に取り囲まれている。なお、和田山花崗岩の岩質は、田結庄ほか(1985)などの記載から黒雲母花崗岩(有色鉱物は黒雲母を主体とし、斜長石よりもカリ長石の方が多い)とされる。以上述べた地質学的背景も考慮すれば、C2類に分類された土器は、加都遺跡周辺の沖積低地堆積物あるいは和田山花崗岩からなる山地縁辺の堆積物を材料としている可能性が高いと考えられる。

C2類に次いで多く認められた胎土は、3点のA4類である。A4類の組成からは、堆積岩類や火砕岩・火山岩、花崗岩類さらにははんれい岩・閃緑岩や粘板岩、緑色岩までの様々な地質を背景とする地域が推定される。上述した地質記載を参照すれば、円山川流域には、和田山花崗岩や夜久野層群のほかにも上流側には白亜紀～古第三紀の流紋岩・安山岩の溶岩および火砕岩からなる生野層群や、夜久野岩類とよばれる変斑れい岩や変玄武岩などからなる地質、さらには丹波帯と呼ばれる古生代～中生代の堆積岩類からなる地質も分布している。このような背景からは、円山川の河川堆積物中にはこれらの地質に由来する碎屑物が混在しているように思える。しかし、両岸に山地が迫っているような河川の上流域では、両岸の山地から供給される碎屑物の割合が圧倒的に多いと考えられるから、A4類が円山川流域の堆積物に由来するとすれば、その両岸にA4類に認められた多種類の地質が接しているような地域が想定される。少なくとも加都遺跡周辺では、上述したように和田山花崗岩の分布が主体となっていることから、A4類のような組成の堆積物は分布しない可能性が高い。すなわち、A4類に分類された土器は、加都遺跡周辺の堆積物を材料としておらず、したがって加都遺跡周辺で作製されたものではない可能性がある。A4類を構成する多種類の地質が接するような地域を円山川上流域でみるとすれば、例えば、加都遺跡よりも下流の円山川と東河川の合流点から円山川と糸井川の合流点付近までの地域があげられる。この地域の右岸側の山地には、古生代二疊紀の堆積岩類からなる舞鶴層群と白亜紀～古第三紀の酸性火砕岩類からなる矢田川層群が接しており、左岸側の山地は和田山花崗岩と夜久野岩類が接しているのである。もちろん現時点で、A4類の由来する地域をここに限定するものではないが、最も近接する候補地域としてあげておきたい。

C7類は、A4類に次いで2点認められた。C7類の地質学的背景は、花崗岩類と凝灰岩の接する地域となるが、ここでC7類の花崗岩類については、斜長石がカリ長石よりも多いことや黒雲母が認められないことから、和田山花崗岩に由来するものではない可能性がある。円山川流域に分布する花崗岩類は、上流域は和田山花崗岩であり、下流域は豊岡盆地東側の丹後山地を構成する宮津花崗岩である。宮津花崗岩も和田山花崗岩同様に黒雲母花崗岩からなる岩質とされている(田結庄ほか,1985)ことから、C7類は、上流から下流までの円山川流域以外の地域に由来する可能性がある。C7類の花崗岩類について

は、角閃石花崗閃緑岩や角閃石石英閃緑岩などが想定されるが、C7類に分類された土器は、これらの地質の分布域からの搬入品である可能性がある。発掘調査所見では、C7類に分類された試料のうち、資料No.11は讃岐からの搬入とされている。讃岐すなわち香川県には花崗閃緑岩を主たる岩質とする領家帯の花崗岩類が分布しており、C7類から推定される花崗岩類の岩質とは整合する。現時点では、資料No.11の所見を否定する材料はないが、C7類の地域性を特定するまでには、讃岐産の土師器の分析事例も得た上で比較検討する必要があると考えられる。

D3類、F4類、F6類はいずれも1点ずつ認められており、上述した加都遺跡周辺の地質学的背景とも整合しない。したがって、加都遺跡周辺で作られた土器ではないことを示唆している可能性が高い。そのうち、D3類については、背後に堆積岩類からなる地質が分布していることを示すが、円山川流域では、例えば加都遺跡よりも上流域の円山川の支流である伊山谷川の谷内が想定される。兩岸の山地は丹波帯の堆積岩類により構成されているのである。また、F4類については、堆積岩類も花崗岩類も伴うことから、前述のA4類の由来する地域と同様の地域の可能性がある。一方、F6類については、凝灰岩以外の岩石片が認められないことから、円山川流域で考えるならば、兩岸の山地が生野層群により構成されている生野町付近の流域が考えられる。いずれにしても以上述べた胎土の局所的な地域性について、より確かな見解を得るためには、自然堆積物の分析も含めた周辺における分析事例の蓄積をしながら検討を重ねる必要がある。

(2) 土器の器種と胎土との対応関係

器種ごとに、胎土の鉱物・岩石組成の分類結果をみると、甕は、C2類のほかにA4類、C7類、D3類があり、壺はC2類とA4類に分かれた。さらに高坏は、C2類もあるが、他はC7類、F4類、F6類に分かれた。この結果からは、いずれの器種にも在地性の高いC2類が存在することと、高坏にしかF類が認められないことが、加都遺跡における土師器の特徴として指摘できる。すなわち、加都遺跡では、どの器種も在地と搬入が混在して使用されていた可能性があり、高坏については甕や壺とは製作や供給に関わる何らかの事情の違いがあったことが窺える。なお、胎土の粒径組成と器種との対応についてみると、鉱物・岩石組成以上にばらつきがあり、特に相関性は認められない。

今後も円山川流域の分析事例が蓄積されることにより、今回のような胎土分析結果を再評価、再検討していきたいと考える。

引用文献

- 猪木幸男, 1981, 20万分の1地質図幅「姫路」.地質調査所.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質6 近畿地方. 共立出版, 297p.
田結庄良昭・弘原海 清・政岡邦夫・周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 1985, 近畿地方における白亜紀～古第三紀火成活動の変遷.地球科学, 39, 358-371.

Ⅶ おわりに

2ヵ年の本発掘調査の結果、竪穴住居跡10棟、落ち込み2基、土坑7基、掘立柱建物13棟、溝、ピットなどを検出している。調査面は1面で調査したが、時期は縄文時代後期から近代までと幅がある。性格が明確な遺構は縄文時代後期土坑1基、古墳時代は竪穴住居跡10棟・掘立柱建物2棟・柵跡1基、中世は掘立柱建物11棟・木棺墓1基である。

古墳時代の竪穴住居跡は、同じ遺跡であるが変化がある。調査区外に延びて全容がわからない竪穴住居跡もあるが、幾つか指摘できる。まず、大きさに差があることである。大中小とあり、B地区SH05は1辺7mと大きく、加都遺跡の中でも最大規模である。小規模なものがA地区SH03である。1辺3.3mで加都遺跡の中では2m代の竪穴住居跡が3棟あるが、最小グループである。残りは中間で4～5mを測る。すべての竪穴住居跡が方形プランで、これは加都遺跡全体と同じである。次に残存度であるがSH01とSH08を除くC地区の4基は0.05～0.1mと残りが悪いが、SH02～SH05・SH08は0.25～0.35mと保存状態が良い方に分かれる。C地区が0.5m前後低くなっているのに関係すると思われるが、一概には言えない。深浅の差は他の要素を見出すことは出来ない。3番目に壁溝の有無であるが、これはきれいに分かれる。A・B地区の5棟にあって、C地区の5棟に認められない。加都遺跡でも両者が混在しており、地区によって見事に分かれたのは集団の違いなどと言えるかもしれない。炉跡はすべての住居跡にあるが、SH08だけ南辺に近い位置に築かれているが、他はほぼ中央に配されている。次に屋内土坑であるが、全体像がわかるものではSH10だけが認められず他はすべて存在する。屋内土坑の位置であるが他遺跡で見られる壁に沿った土坑は存在しない。加都遺跡全体では数例あるが主体ではない。その位置であるが、東辺中央がSH01・SH08、南辺中央がSH02、西辺中央がSH03、中央から北西隅寄りがSH06である。SH01は炉跡が中央より西にずれていることから土坑の位置が東辺と対称の位置にある。また、SH08は炉跡が南辺近くになっており、90°の位置になる。平面図を検討してみるとSH01とSH02は主軸方向が同じであるが土坑の位置が異なっている。SH01～SH03の3棟を見てみると、3棟の反対側に土坑を設けていることがわかる。土坑の性格も判然としないが、何か示唆しているような気がする。支柱穴であるが、SH01とSH02が2本柱で、SH04・SH08が不明で、他は4本柱である。SH01とSH02はA地区で並んでおり、加都遺跡全体でも4本柱が主流であるが言いわけではない。「加都遺跡Ⅱ」で分類されているA2類が2本柱であるが長方形プランであり、今回の調査例は平面プランが正方形であることで異なっている。ただ、時期は同時期であろうと思われる。今回調査した中では竈を設置した竪穴住居跡はなく、すべて炉跡である。このように見ると、加都遺跡の中で古い時期に限られることが理解される。造り付け竈以前ということになる。「加都遺跡Ⅱ」の分類によると、造り付け竈は古墳3期からで、古墳4期には主体となるがないものも並存する。5期も同様で6期



図17 調査地遠景

には造り付け竈にすべて変換する。加都遺跡では古墳4期から須恵器が出現するとされているので、今回の竪穴住居跡からは須恵器を含まない（SH09で1点あるが混入と思われる）ので、3期以前とされる。さらに出土土器からSH05は椀形高杯が多いことから新しい要素であるが弥生系の有稜杯部もあり判断に困るが前代のものがあるが相対として4期で新しく、次にSH02が甗を有することから新しくしておく。切り合い関係からもSH07は古墳1期で最も古く、SH08・SH09が2期、他を3期としておく。A地区とC地区で大きく分かれることが明らかとなった。その点からは同じ地区（宮ヶ田地区）としたが、B・C地区は間に遺構のない部分を挟むことから別地区とした方が妥当だったと思う。小字名からすると村上地区となる。

A地区だけであるが、古墳時代の掘立柱建物を2棟と柵1条を検出している。遺物がないことから断定しかねているが、主軸方位からは掘立柱建物3棟の可能性も高い。竪穴住居跡と並存していた可能性も高く、同時期に掘立柱建物と竪穴住居跡を築いていたことになる。切り合いはなく、空間を分けていたことが同時期の可能性を高めている。また、この時期の竪穴住居跡は2本柱構造で他と異なっているのも何か意味するものがあるようである。

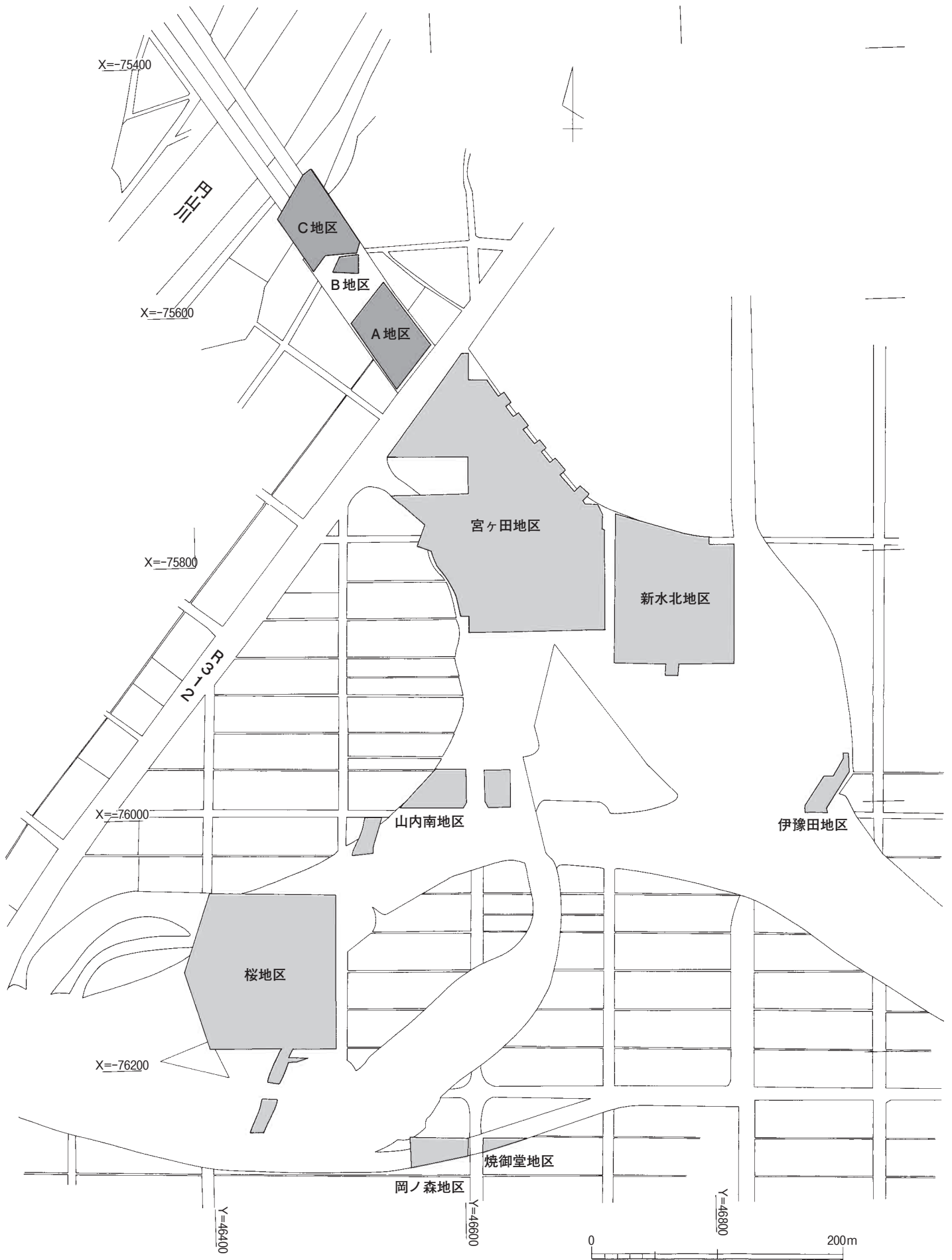
中世は掘立柱建物10棟（時期不明2棟含む）と木棺墓1基などを検出している。掘立柱建物はA地区8棟とC地区2棟とA地区に集中している。主軸方向はほぼ南北に有している。すべて3間を基本とし、SB06が1間、SB13が3間になっている。それ以外は3×2間で側柱建物が主体である。SB02・SB04・SB07は総柱建物である。SB10・SB11は時期不明としたもので切り合い関係があるが、大きく時期が異なるとは思われない。柱間は統一されておらず、変化がある。加都遺跡全体をしてみると主軸は南北のものが多数を占める。他地区と比べて遺構の密度もあまり変化がないように思われる。宮ヶ田地区では12世紀後半に集落を廃絶するが、本調査区ではそれ以降も継続しているようである。SB12の柱通りにあるSP40から14枚の北宋銭が出土している。土器を伴わず、銭貨を入れている。緡銭にした痕跡もない。地鎮遺構かと考えられる遺構である。

2回の調査で、加都遺跡が北西に広がっていることが判明した。古墳時代・中世ともに遺構密度なども大きな変化はなく、巨視的にみれば同一遺跡である。細かくみると、竪穴住居跡では主柱穴の数・形態が南東にある宮ヶ田地区とは異なり、中性では掘立柱建物の時期が異なっている。その点では微妙な差異が看取され、別地区とした方が妥当かと思われる。

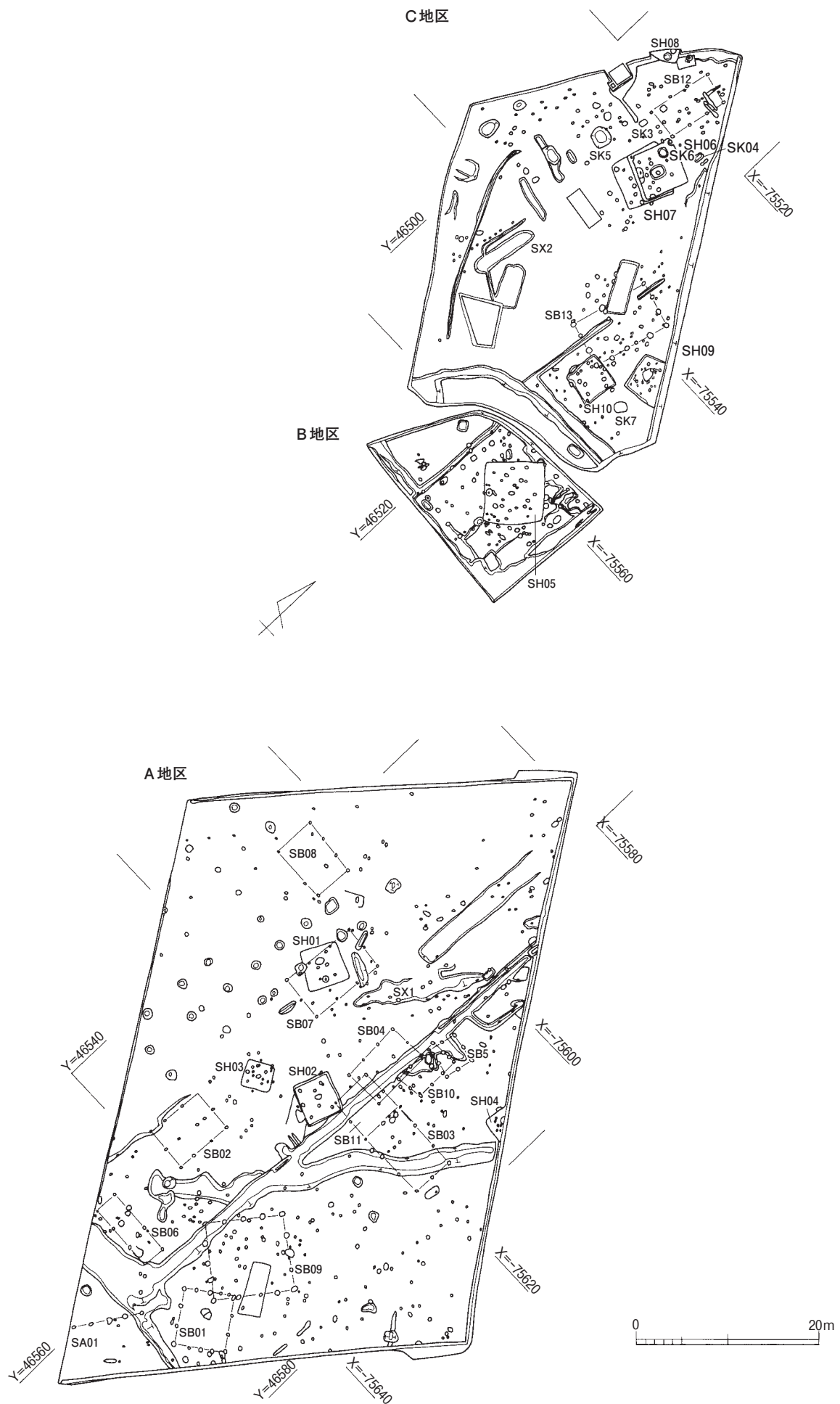


図18 調査風景

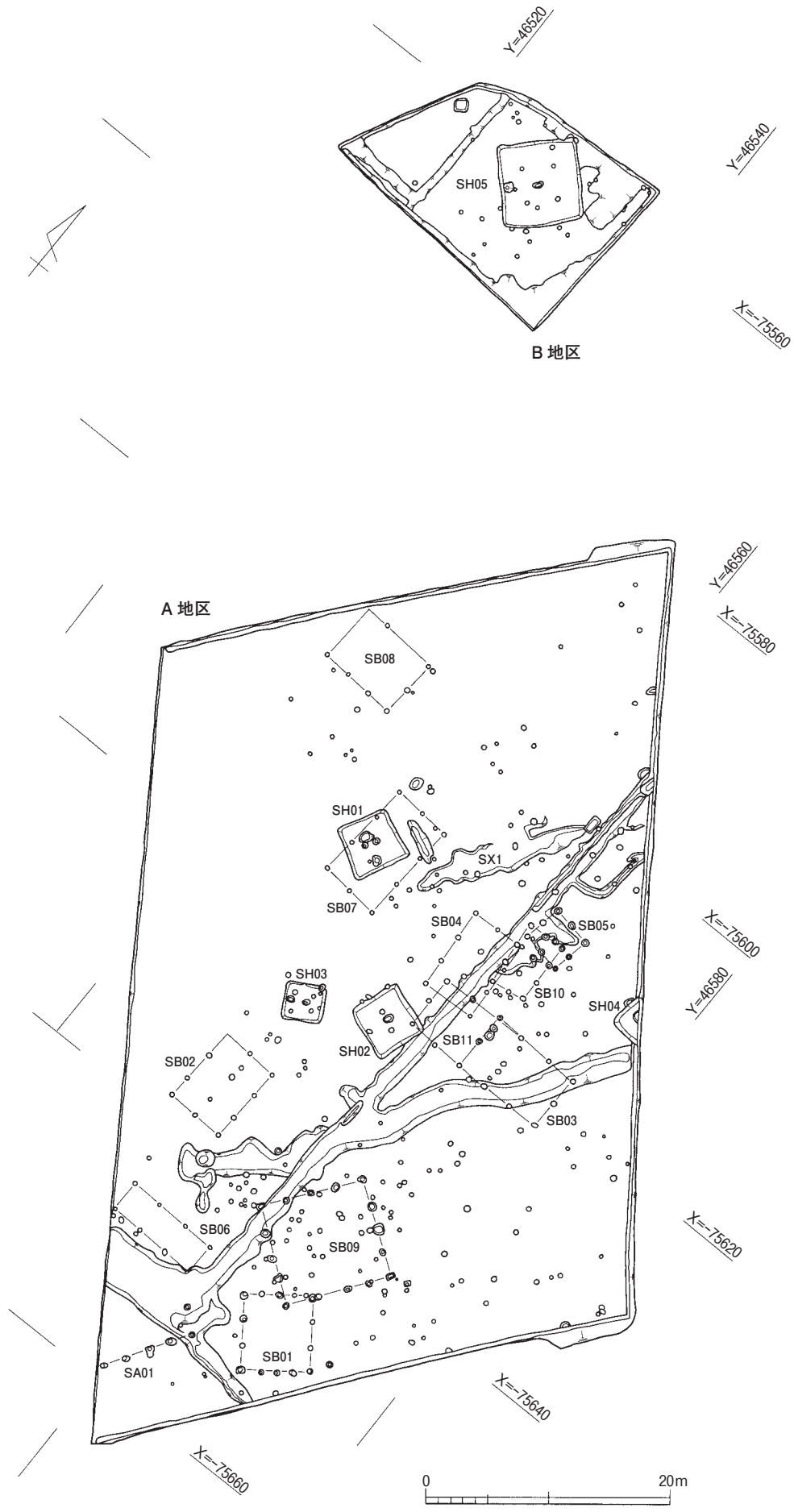
圖 版



全体図

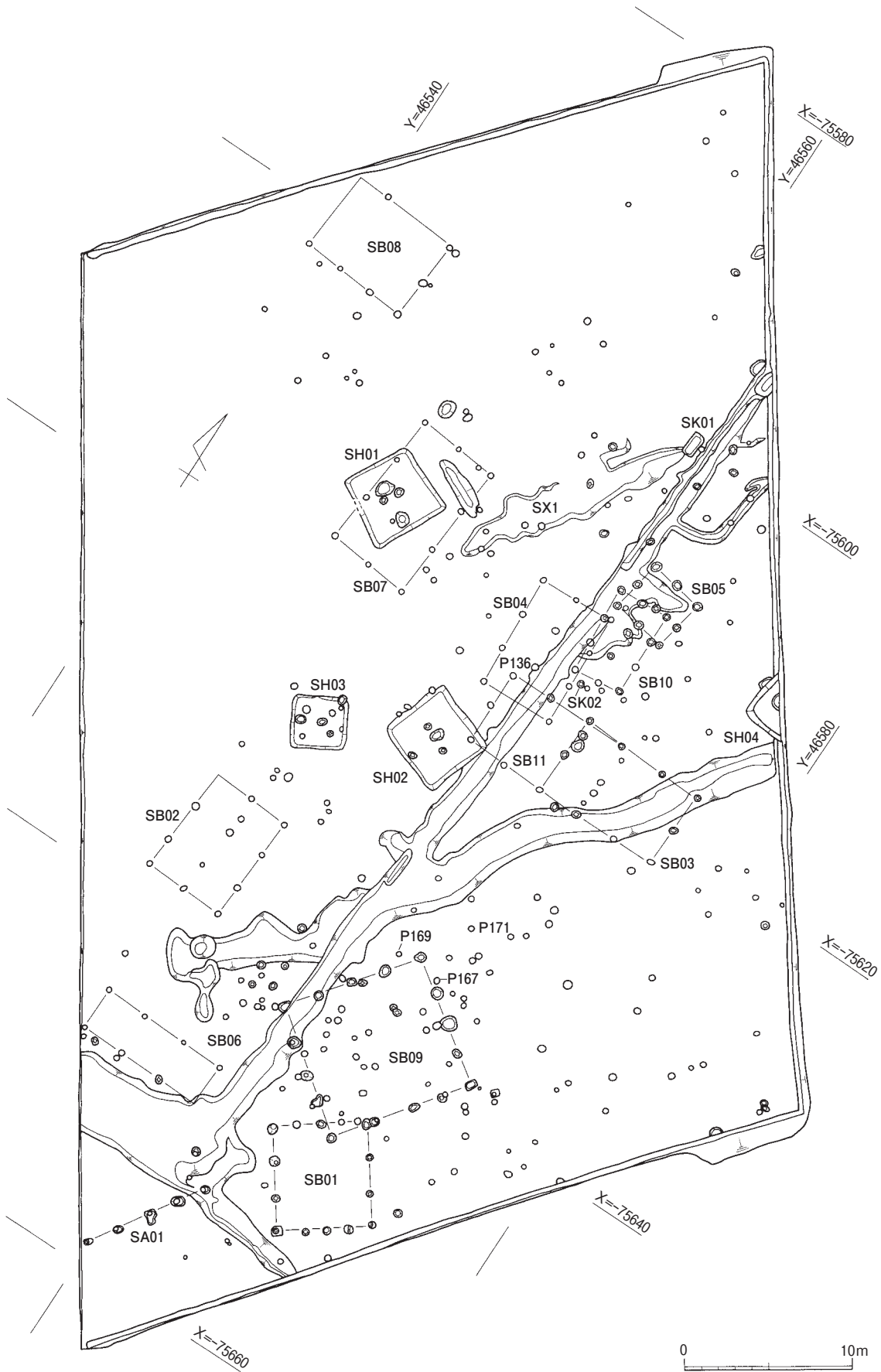


A·B·C地区 平面图

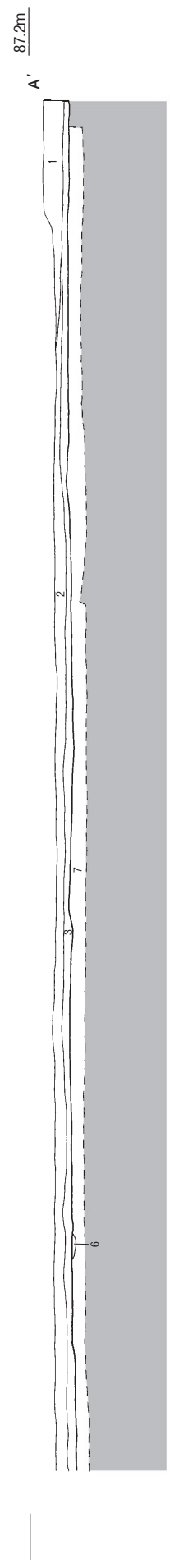
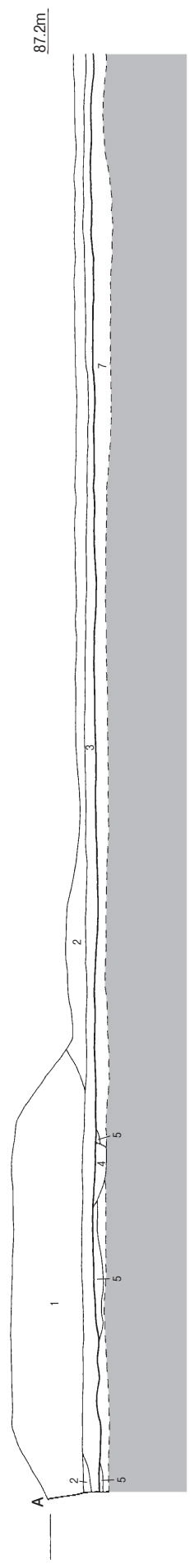


A・B地区 遺構平面図

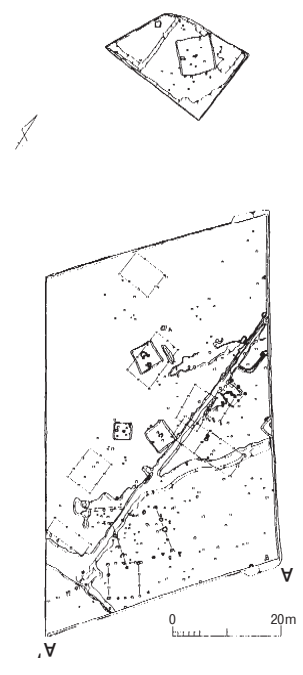
図版4
A地区



平面図

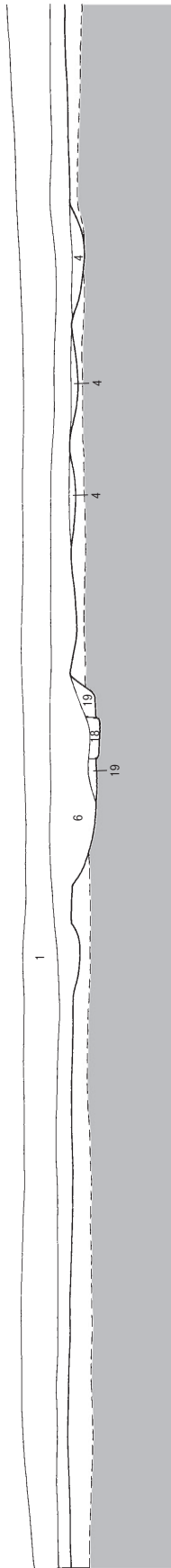


- ① 黄土
- ② 粘土
- ③ 10YR 6/1 褐灰色 シルト (極細砂～細砂含む)
- ④ 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト (極細砂～細砂含む)
- ⑤ 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト (極細砂含む)
- ⑥ 2.5Y 7/2 灰黄色 シルト質極細砂 (極粗砂～粗砂含む)
- ⑦ 10YR 1.7/1 黒色 砂質シルト (極少量の直径20cm大の礫含む)

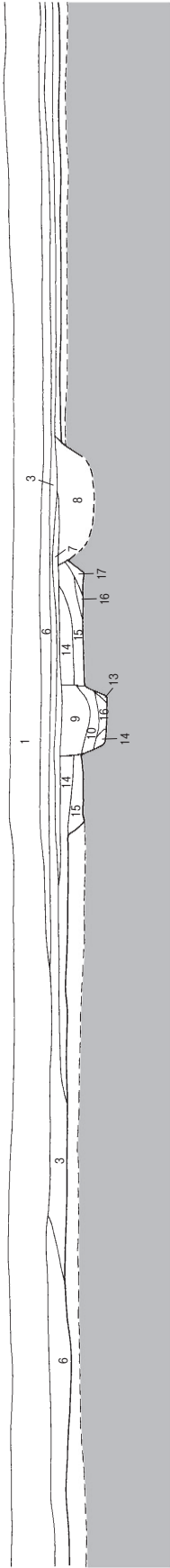


調査区 (東壁) 断面図

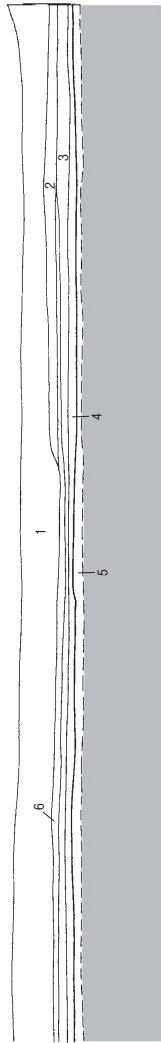
87.2m



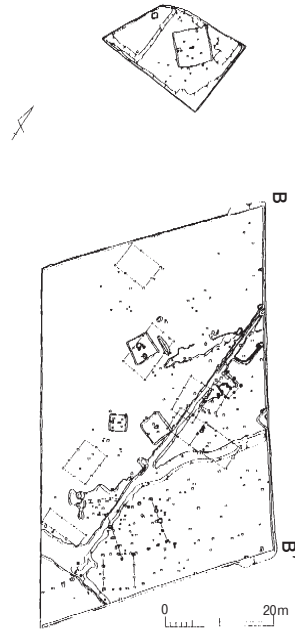
87.2m



87.2m

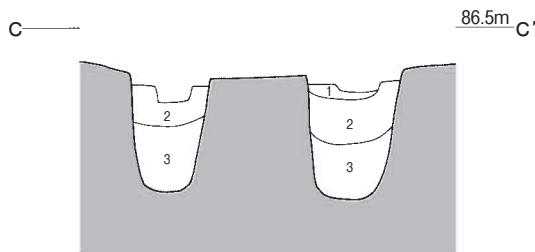
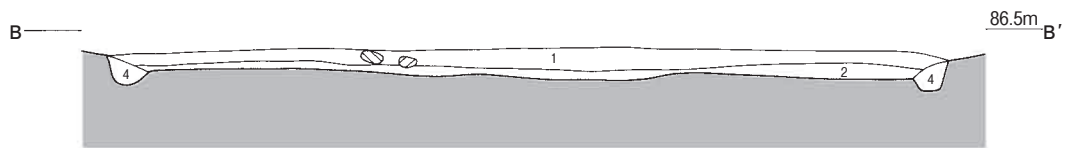
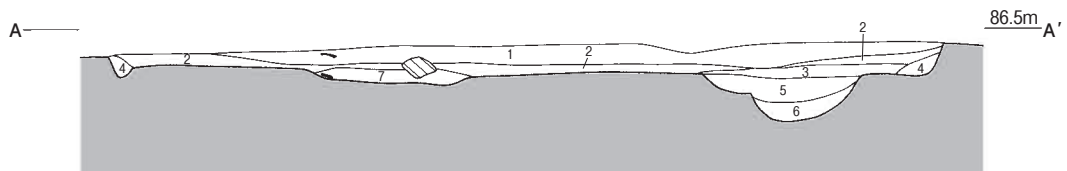
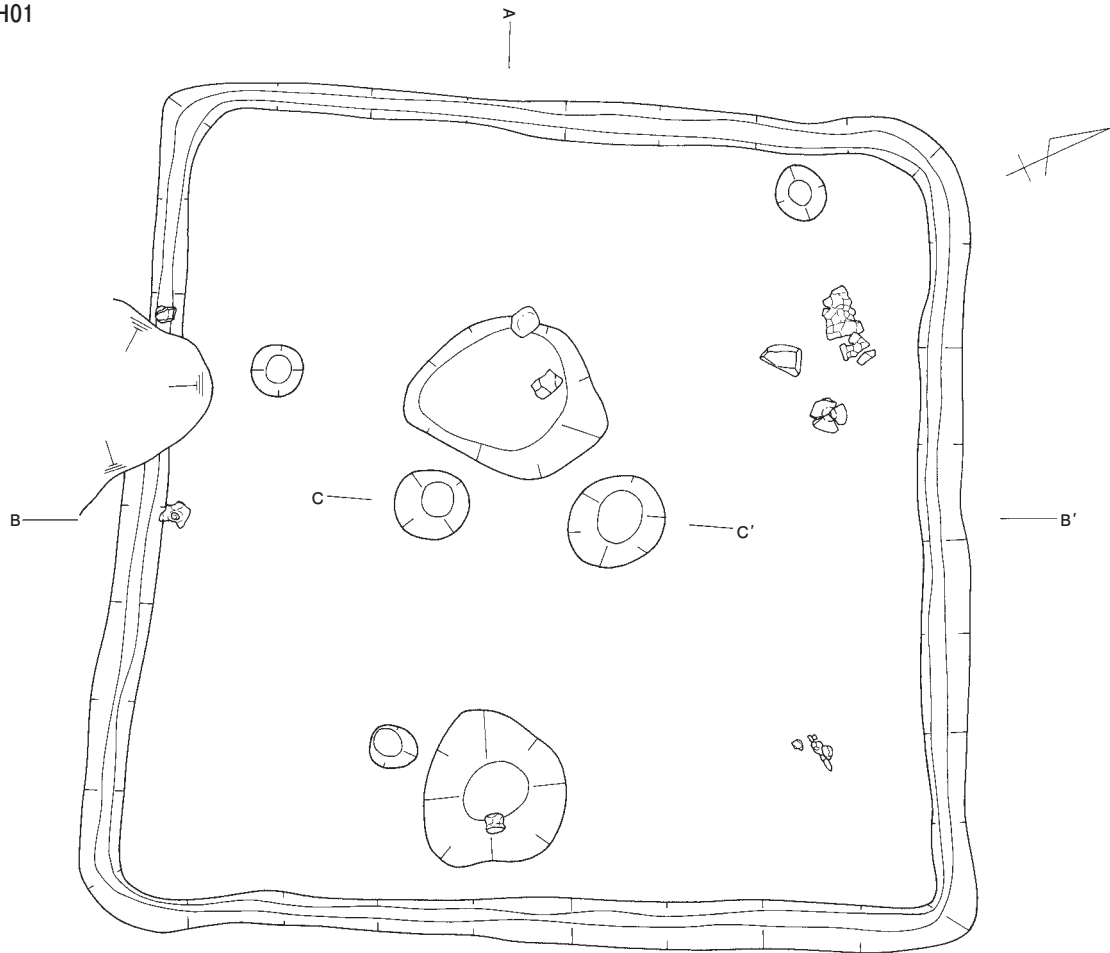


- | | | | | | | | |
|-------|-------|--------|---------------------|-------|-----|-------------|-------------------|
| ①盛土 | ⑪10YR | 4/1 | 褐灰色 | 4/1 | 褐灰色 | 細砂 (シルト含む) | |
| ②耕土 | ⑫10YR | 4/1 | 褐灰色 | 4/1 | 褐灰色 | シルト (極細砂含む) | |
| ③10YR | 6/1 | 褐灰色 | シルト (極細砂～細砂含む) | ⑬10YR | 4/1 | 褐灰色 | シルト (細砂多く含む) |
| ④10YR | 5/2 | 灰黄褐色 | シルト (極細砂含む) | ⑭10YR | 2/2 | 黒褐色 | シルト (極細砂～粗砂含む) |
| ⑤10YR | 5/2 | 灰黄褐色 | シルト (極細砂含む) | ⑮10YR | 3/2 | 黒褐色 | シルト (極細砂～粗砂含む) |
| ⑥盛土 | ⑯10YR | 4/1 | 褐灰色 | ⑰10YR | 3/1 | 黒褐色 | シルト (極細砂～粗砂含む) |
| ⑦10YR | 4/1 | 褐灰色 | シルト (極細砂～粗砂含む) | ⑱10YR | 3/1 | 黒褐色 | シルト (極細砂～粗砂含む) |
| ⑧10YR | 7/3 | にぶい黄褐色 | シルト (極細砂含む) | ⑲10YR | 5/3 | にぶい黄褐色 | シルト (極細砂含む) |
| ⑨10YR | 4/1 | 褐灰色 | シルト (極細砂～粗砂、小礫多く含む) | ⑳10YR | 5/3 | にぶい黄褐色 | シルト (黒色シルト、極細砂含む) |
| ⑩10YR | 4/1 | 褐灰色 | シルト (極細砂含む) | | | | |



調査区 (北壁) 断面図

SH01



- ①10YR 3/3 暗褐色 シルト質極細砂 (粗砂~大礫含む) 炭含む
- ②10YR 4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂、小・中礫等含む)
- ③10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂、小・中礫等含む)
- ④10YR 3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫含む)
- ⑤10YR 4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂~小礫含む)
- ⑥10YR 3/2 黒褐色 シルト質極細砂 (粗砂~中礫含む)
- ⑦10YR 3/2 黒褐色 極細砂 (粗砂~大礫含む) 炭含む

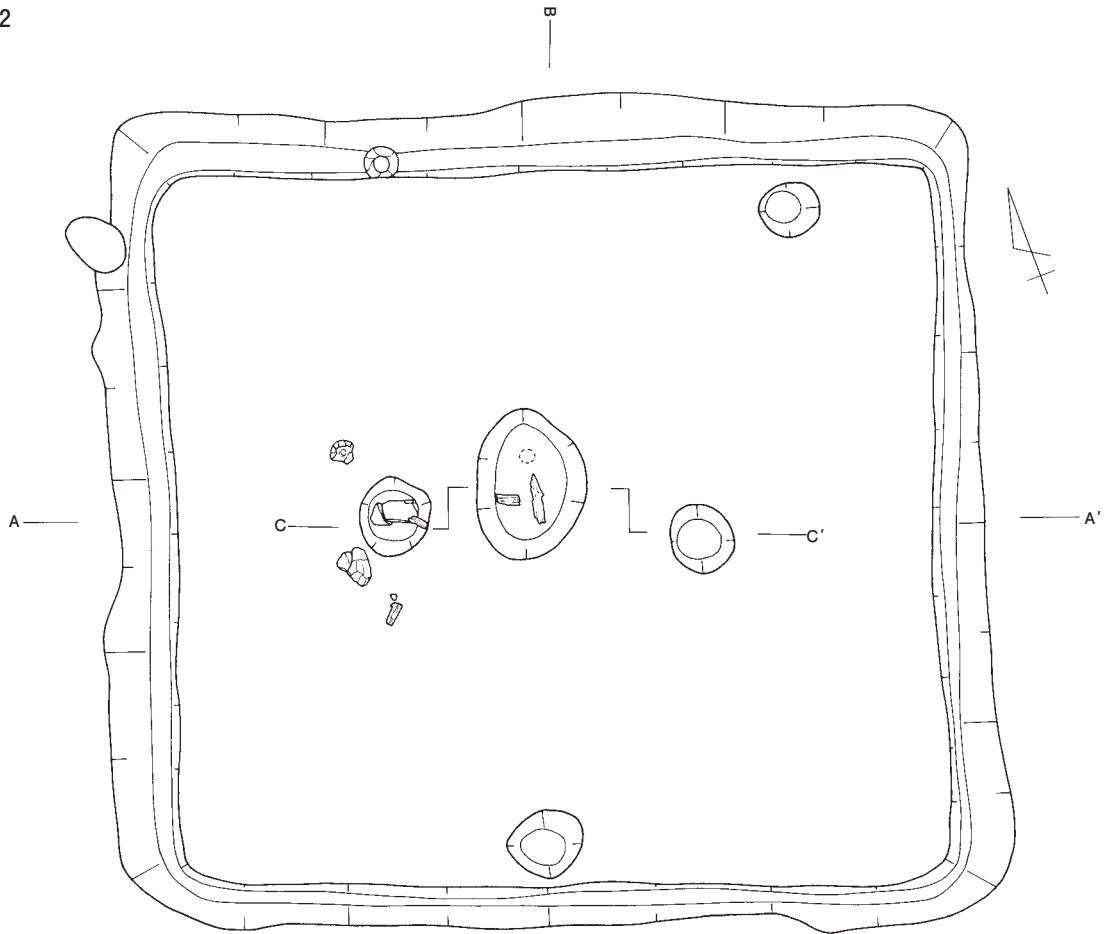
- ①7.5YR 3/1 黒褐色 シルト質極細砂
- ②7.5YR 4/2 灰褐色 シルト質細砂 (拳大弱の円礫多量に含む)
- ③7.5YR 5/3 にぶい褐色 シルト質粗砂 (親指大の円礫含む)



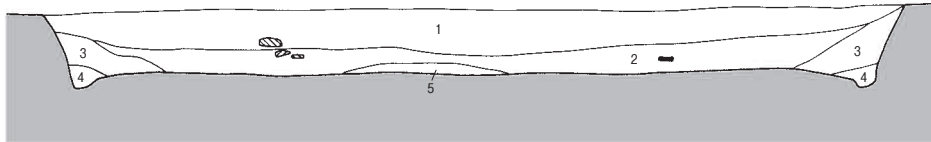
SH01 平面図・断面図

図版8
A地区

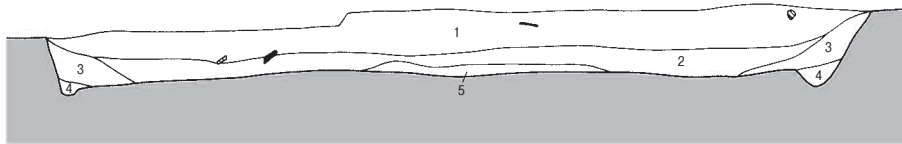
SH02



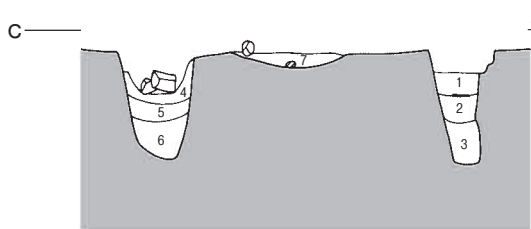
A ————— 86.7m A'



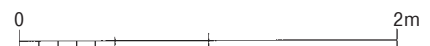
B ————— 86.7m B'



- ①7.5YR 2/3 極暗褐色 極細砂～細砂（中粗砂含む）細礫～中礫、土器、炭粒含む
- ②10YR 2/3 黒褐色 極細砂（ややシルト混中砂含む）細礫～中礫、土器、炭粒、焼土粒含む
- ③7.5YR 2/2 黒褐色 シルト混極細砂（中砂含む）極粗砂～細礫、土器、焼土粒含む
- ④10YR 3/3 暗褐色 シルト質極細砂（中砂含む）
- ⑥7.5YR 3/1 黒褐色 シルト質細砂（中砂含む）炭粒含む

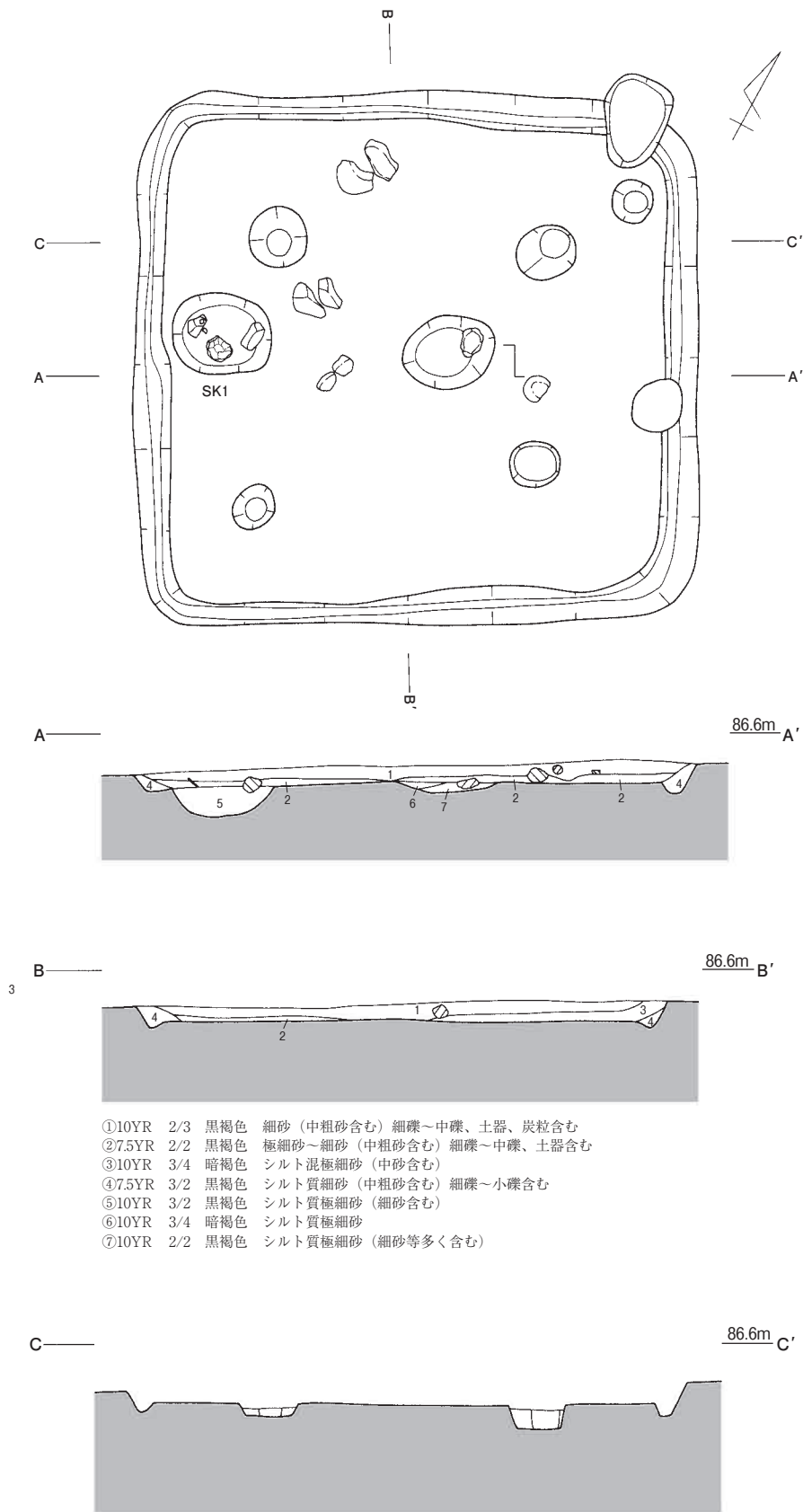


- 86.2m C'
- ①2.5Y 5/1 黄灰色 シルト質極細砂（灰黄シルト質極細砂、細礫含む）
 - ②2.5Y 4/1 黄灰色 シルト質極細砂（灰黄シルト質極細砂含む）
 - ③2.5Y 7/3 浅黄色 シルト質極細砂（小礫含む）
 - ④2.5Y 5/1 黄灰色 シルト質極細砂（親指大の円礫混入）
 - ⑤2.5Y 4/1 黄灰色 シルト質極細砂
 - ⑥2.5Y 7/3 浅黄色 シルト質極細砂（拳大の円礫混入）
 - ⑦10YR 3/2 黒褐色 シルト質極細砂（細砂含む）炭含む



SH02 平面図・断面図

SH03

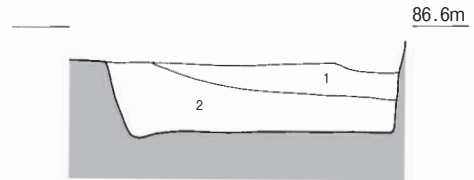
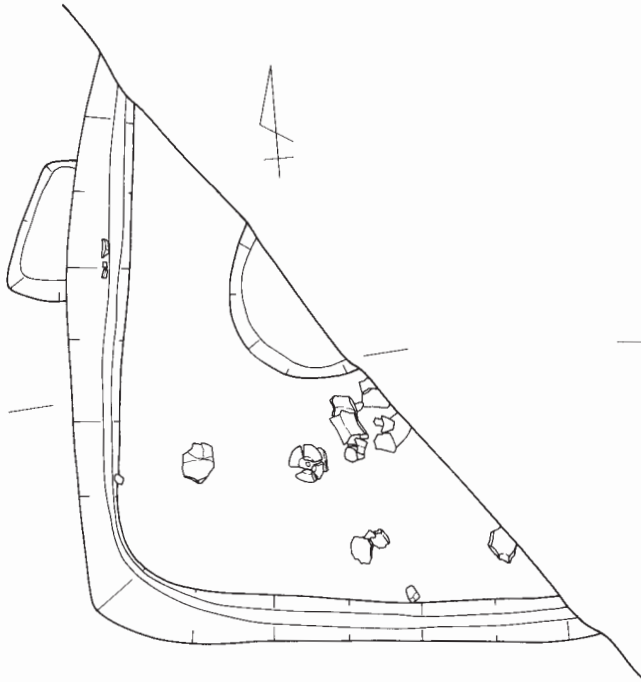


0 2m

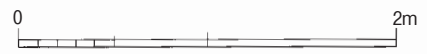
SH03 平面図・断面図

図版10
A地区

SH04



①10YR 3/3 暗褐色 シルト質極細砂(粗砂~中礫多く含む)
②10YR 3/1 黒褐色 シルト質極細砂(粗砂~小礫、土器含む)



P167

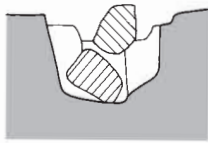


P169



P136

86.5m



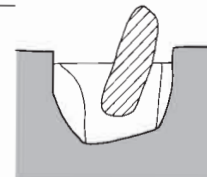
①2.5Y 7/4 浅黄色 シルト質極細砂
②2.5Y 7/4 浅黄色 シルト質極細砂(①層よりやや暗い)

86.5m



①10YR 7/2 にぶい黄橙色 極細砂(シルト含む) 褐灰色シルト混入
②10YR 6/1 褐灰色 極細砂(シルト含む) 黒色シルト混入

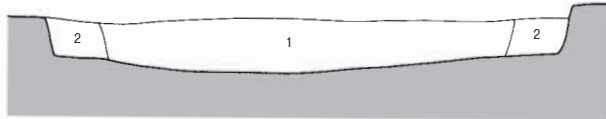
86.5m



①10YR 7/2 にぶい黄橙色 シルト質極細砂
②10YR 7/2 にぶい黄橙色 シルト質極細砂(黒色シルト粒含む)

SK1

86.4m



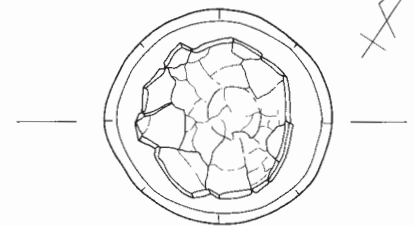
86.4m



①10YR 3/2 黒褐色 シルト質極細砂(粗砂~中礫含む)
②10YR 3/4 暗褐色 シルト質極細砂(粗砂~小礫含む)



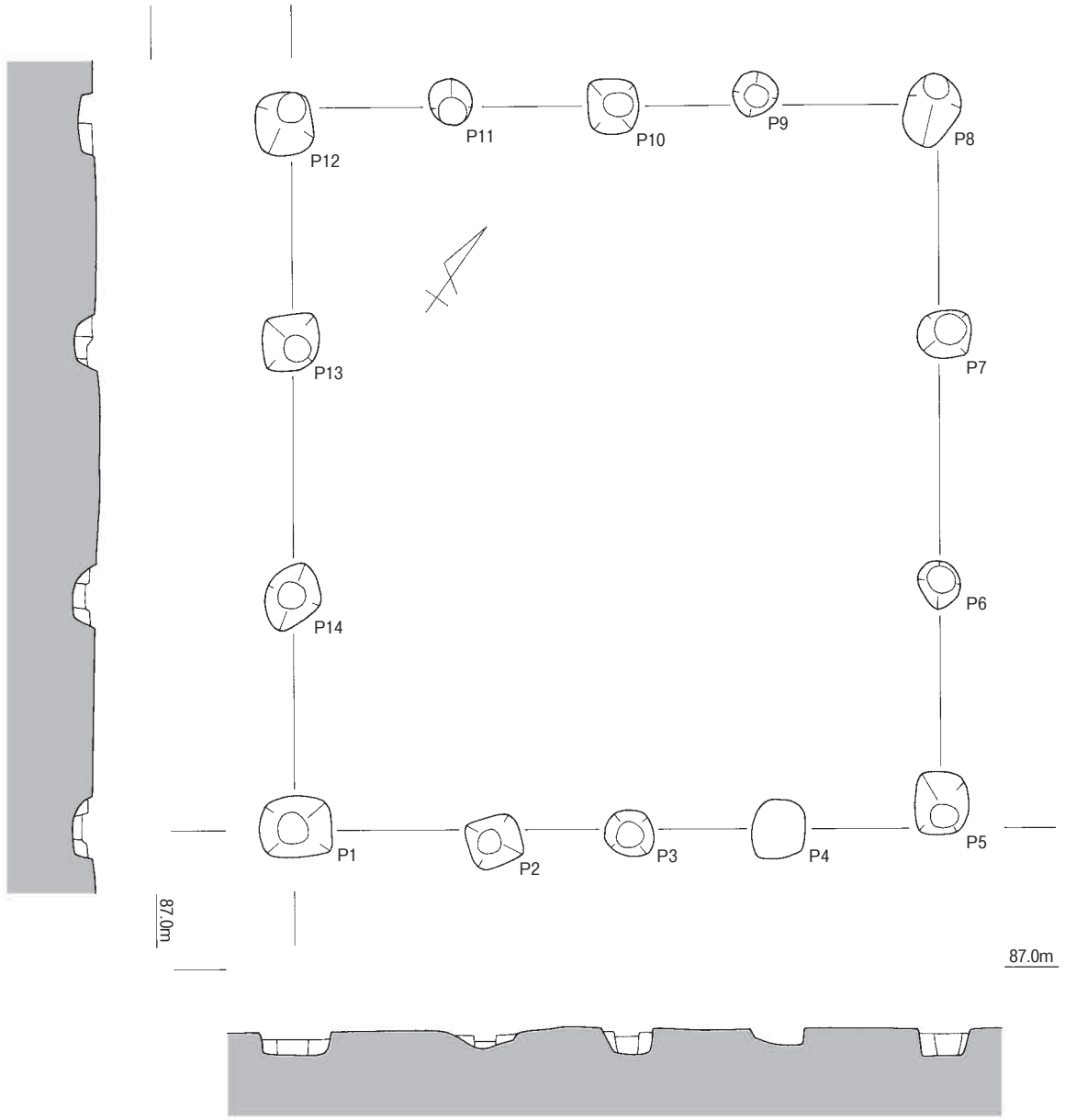
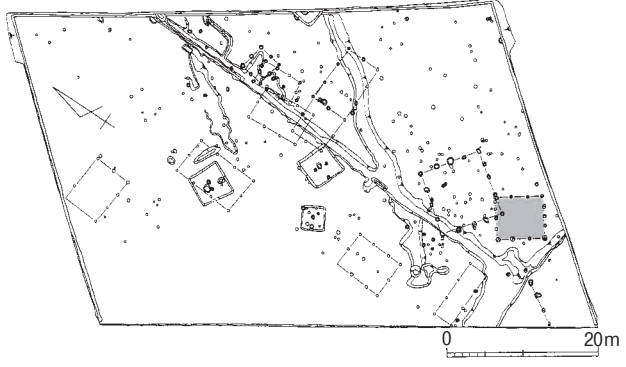
SK2



86.5m



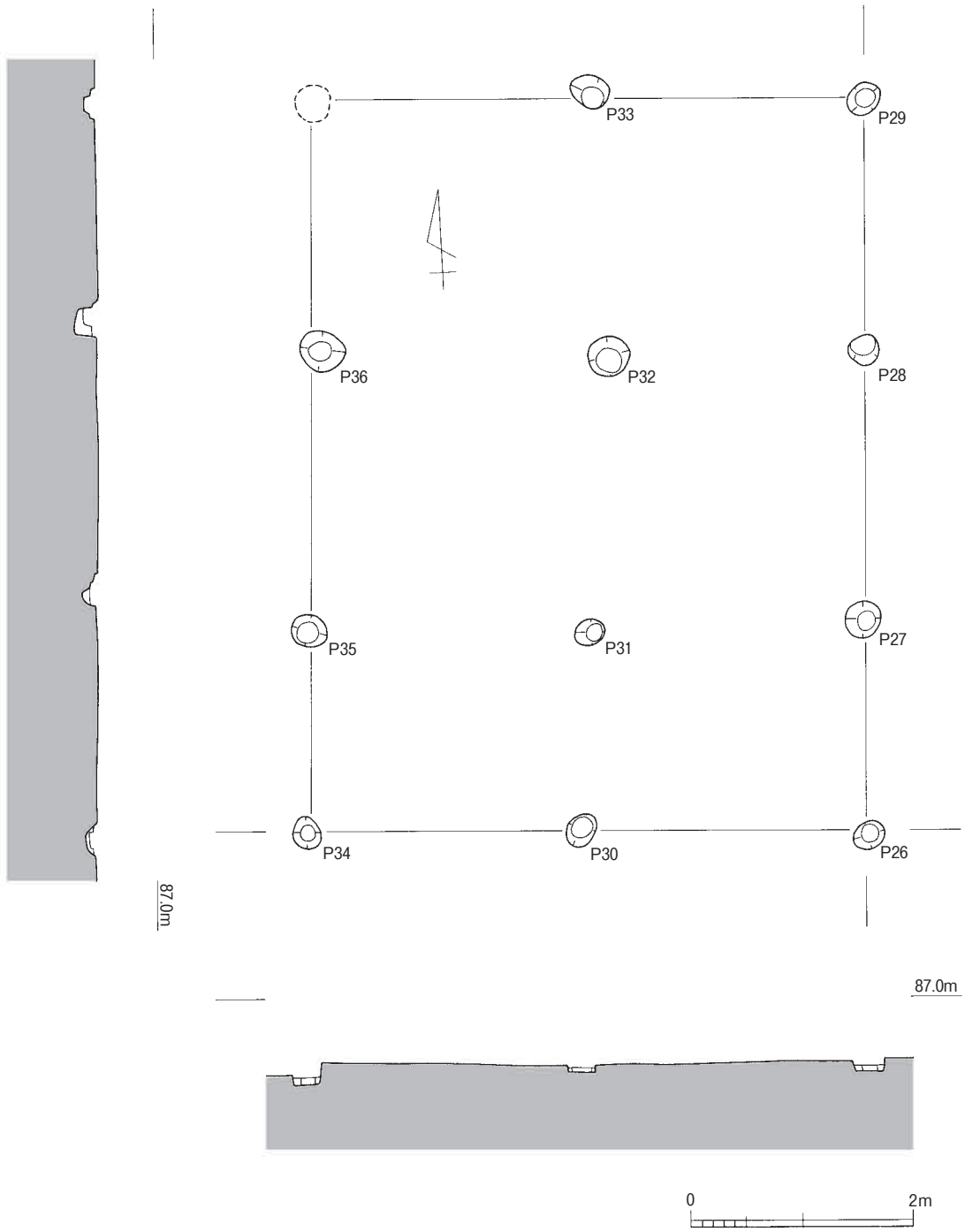
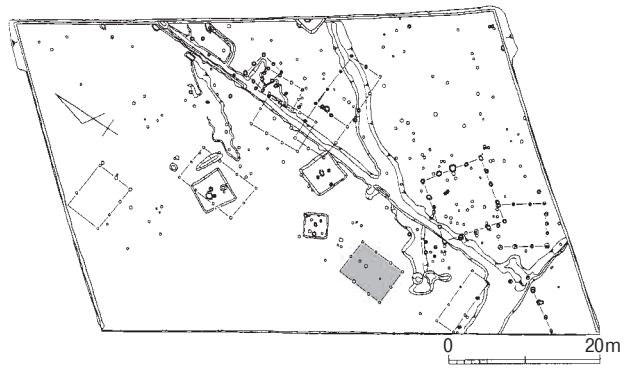
SB01



SB01 平面图·断面图

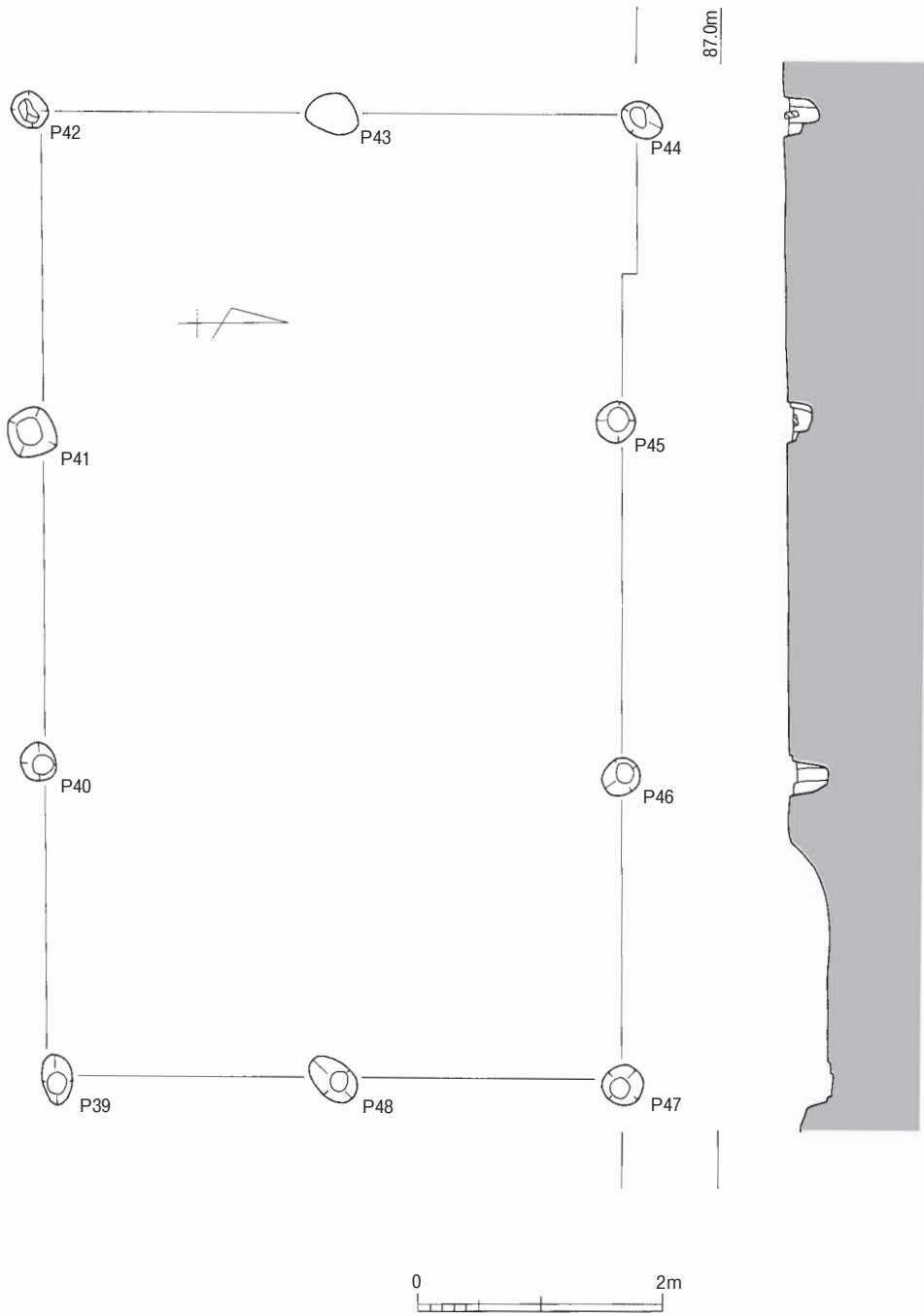
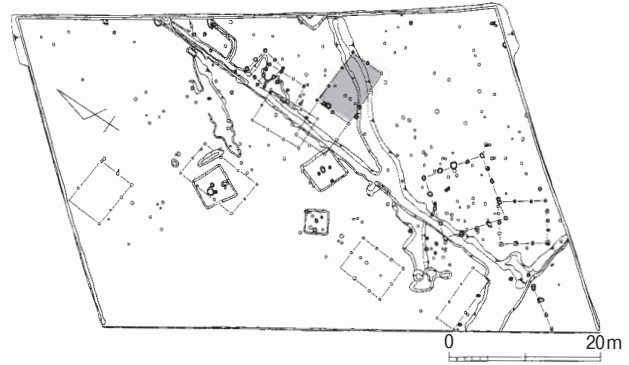
图版12
A地区

SB02



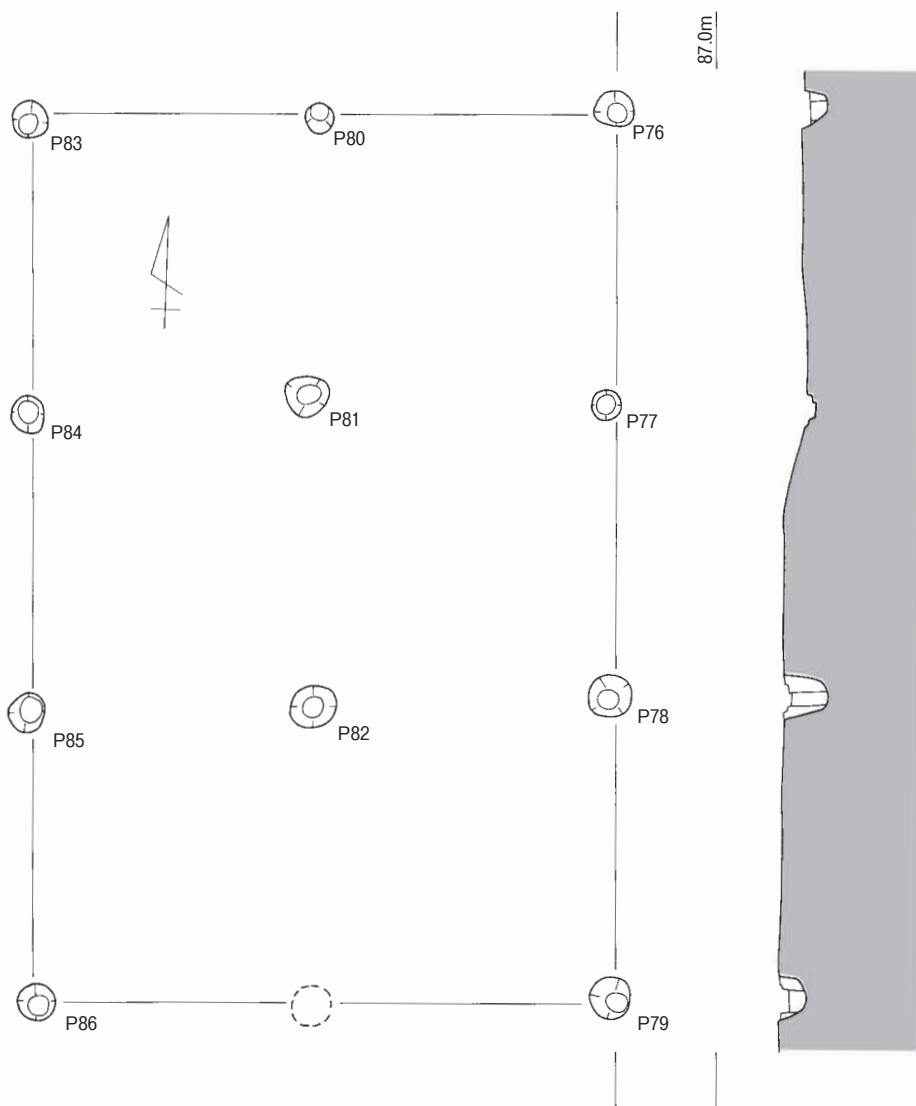
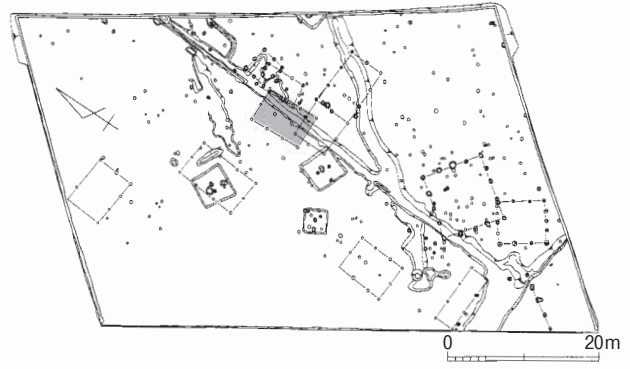
SB02 平面图·断面图

SB03



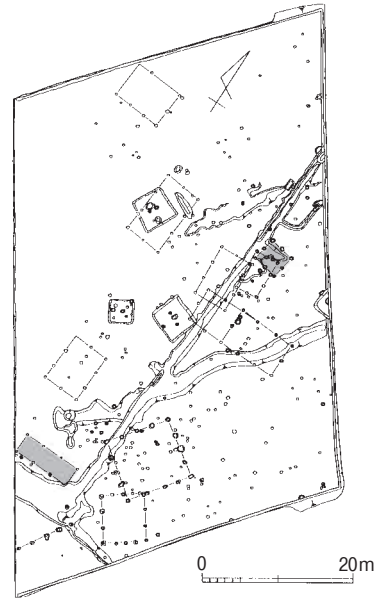
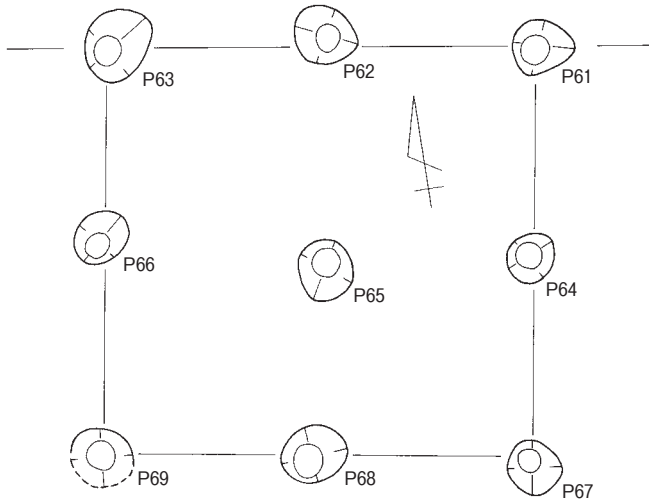
SB03 平面图·断面图

SB04

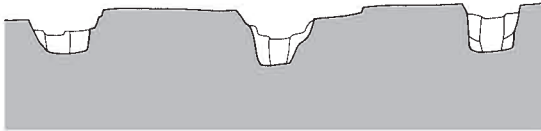


SB04 平面图·断面图

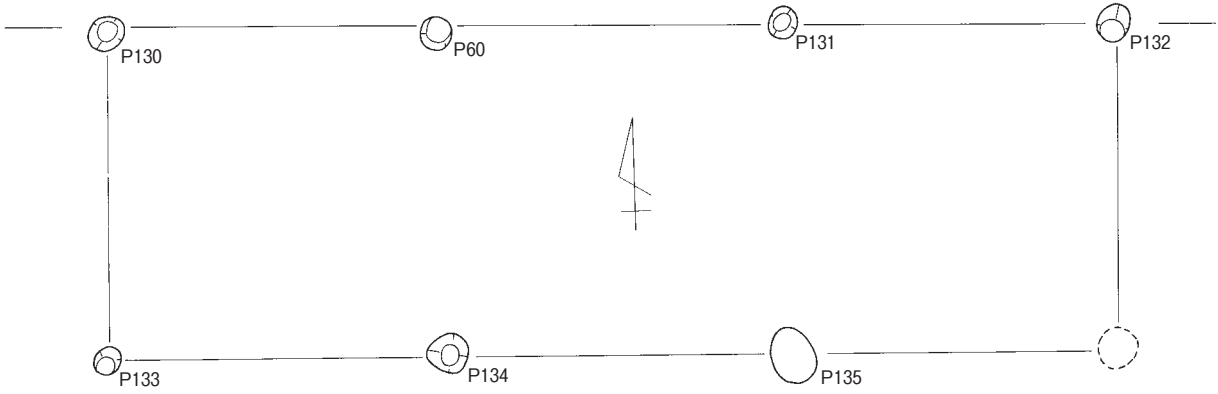
SB05



87.0m



SB06

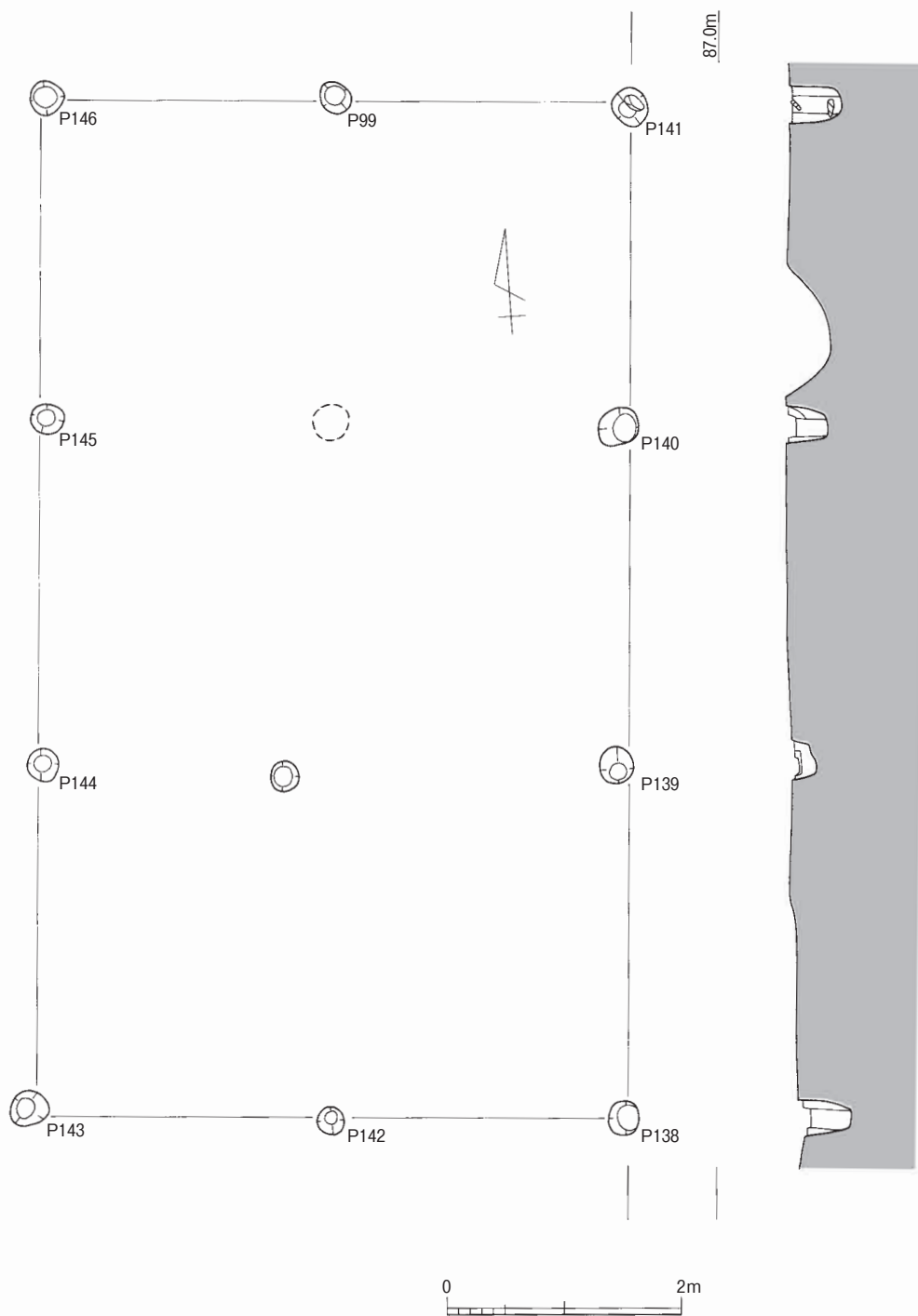
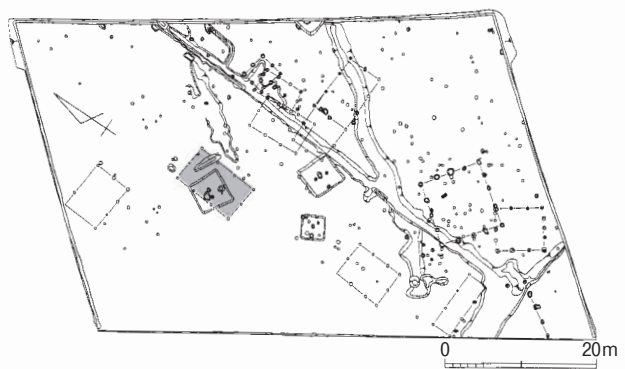


87.0m



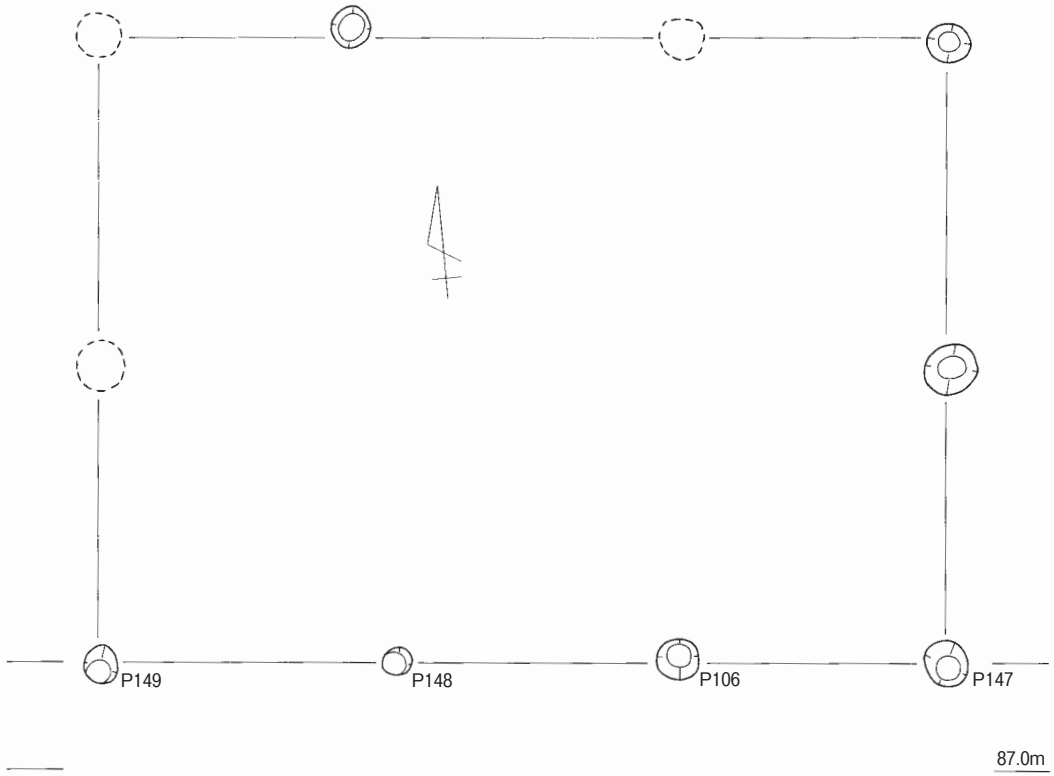
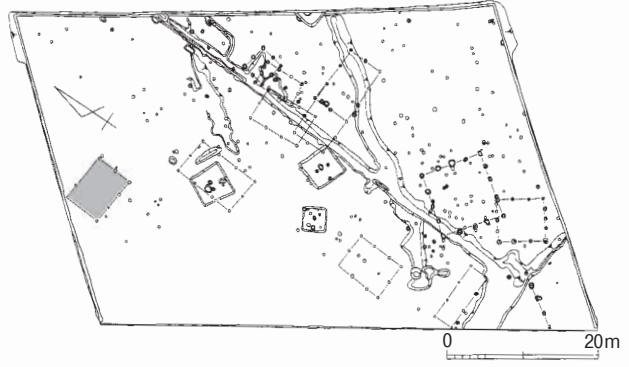
0 2m

SB07



SB07 平面图·断面图

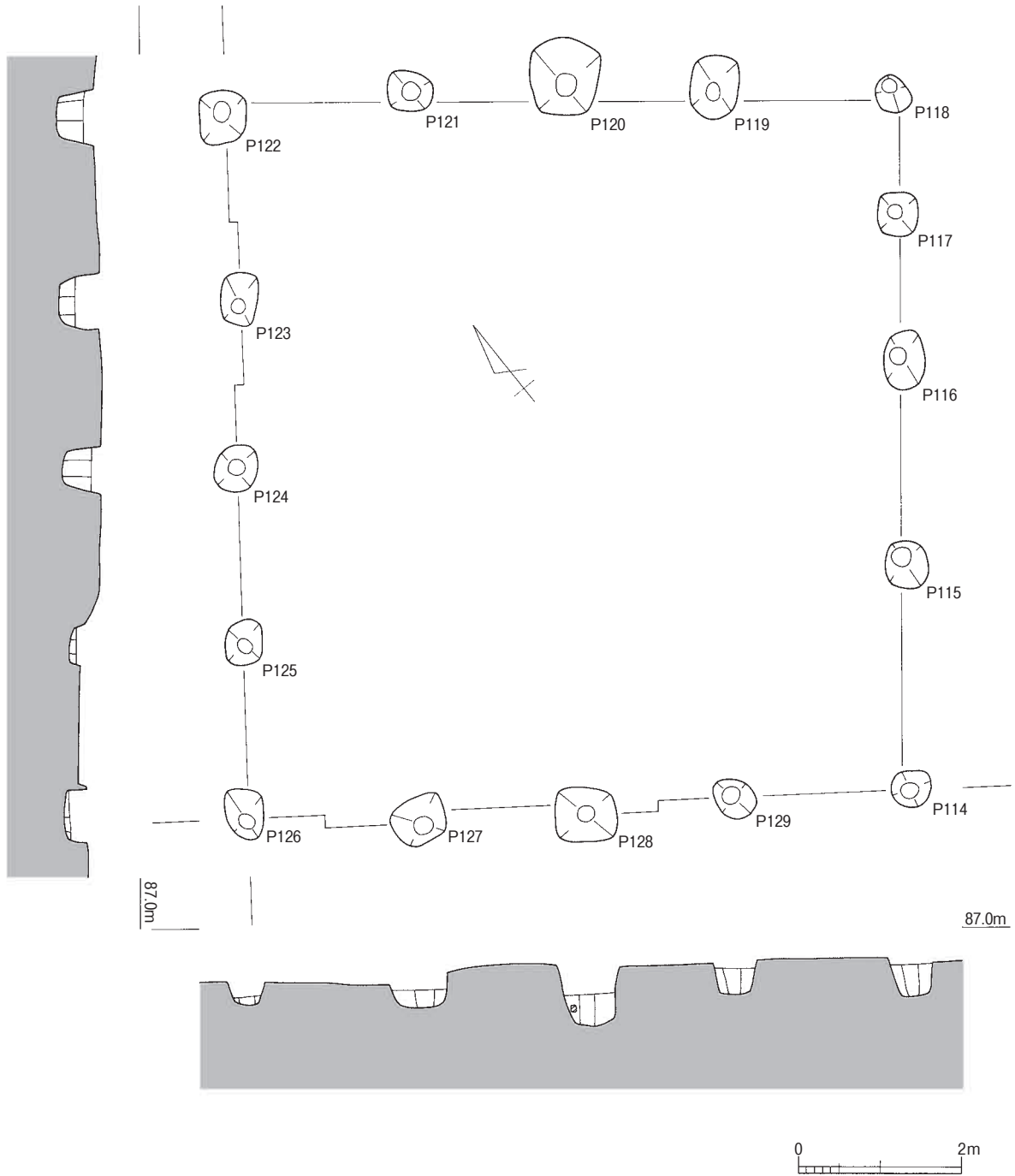
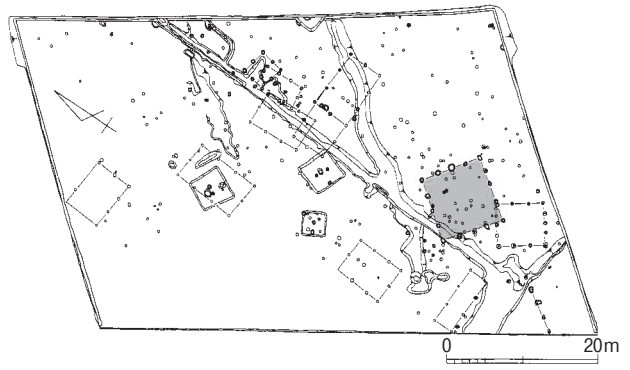
SB08



SB08 平面图·断面图

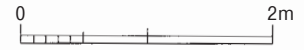
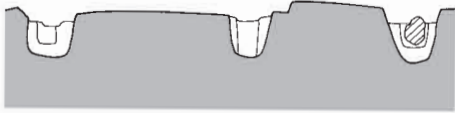
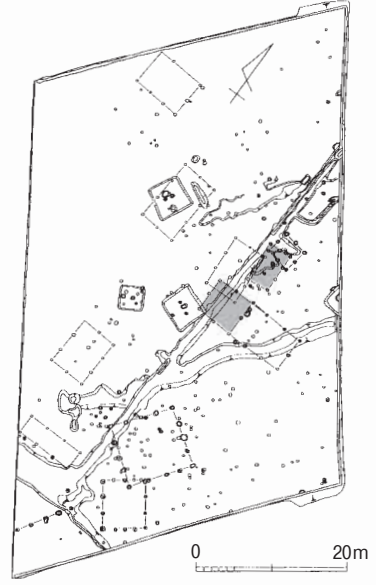
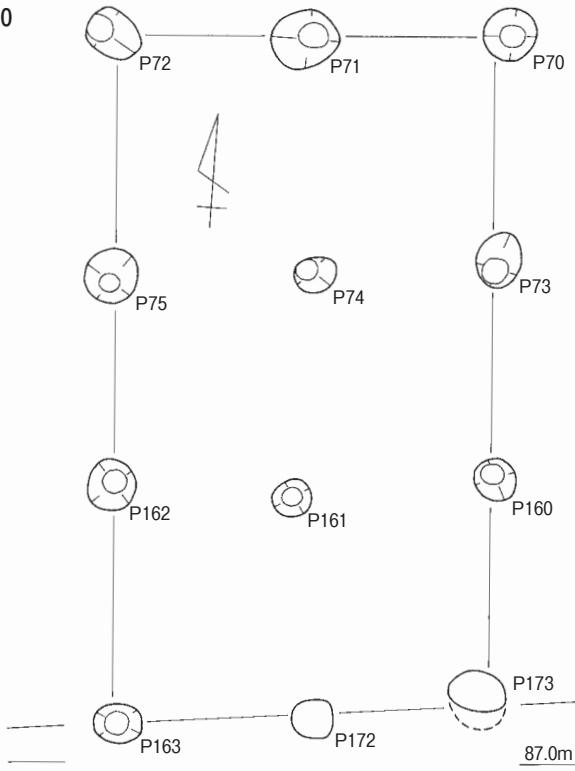
图版18
A地区

SB09

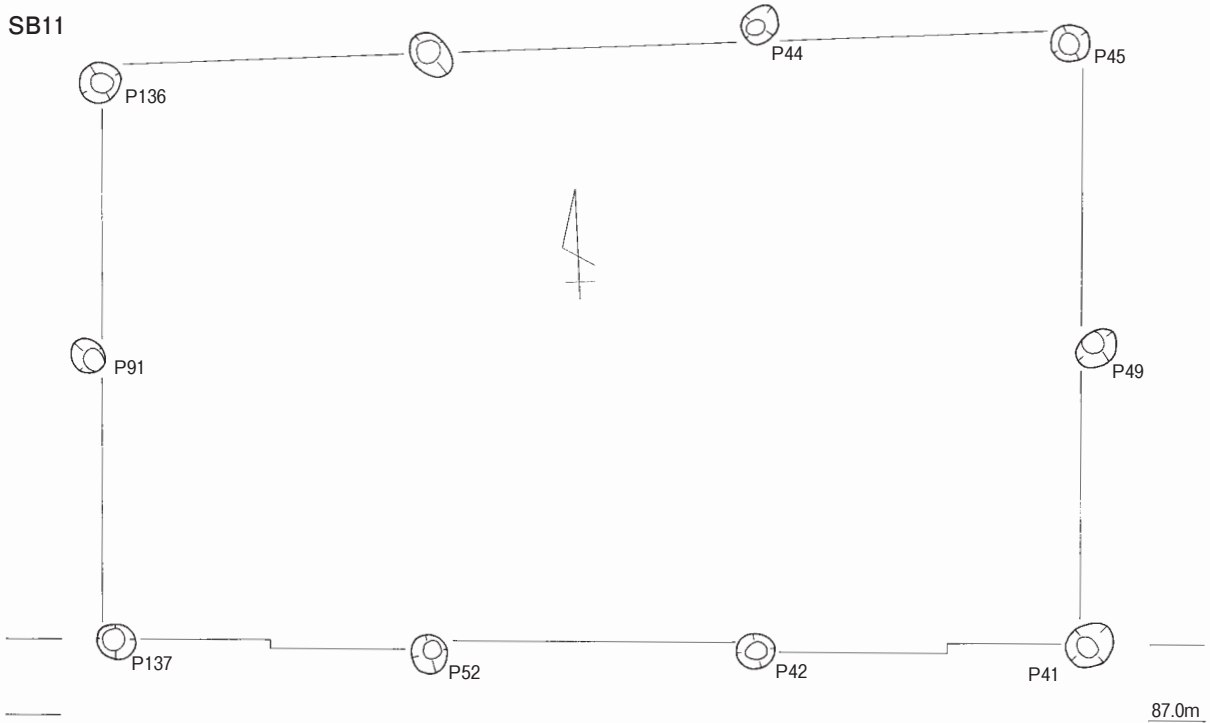


SB09 平面图·断面图

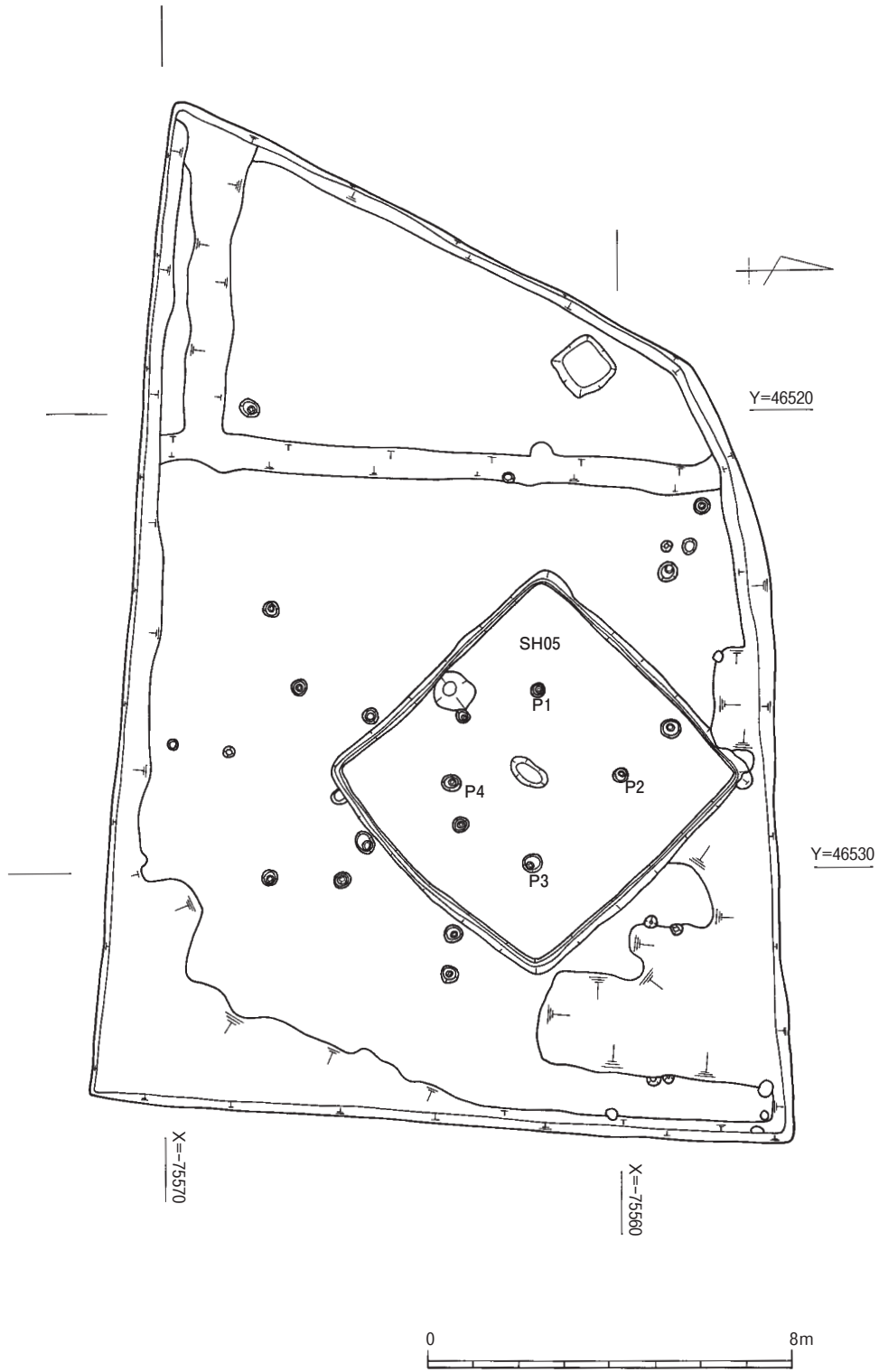
SB10



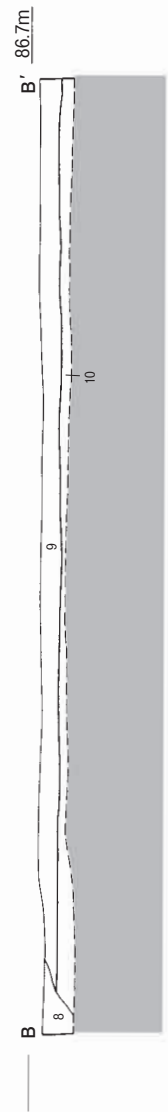
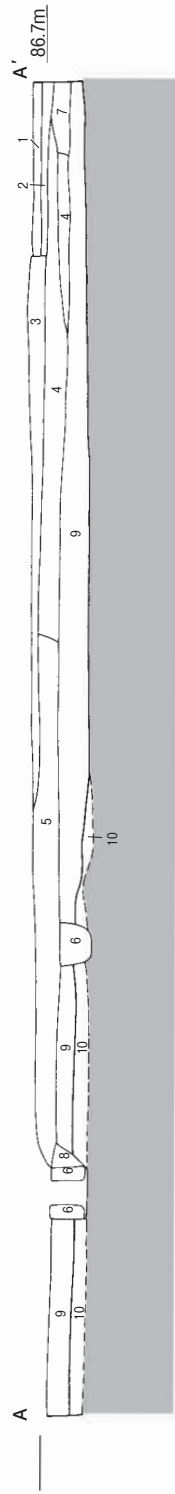
SB11



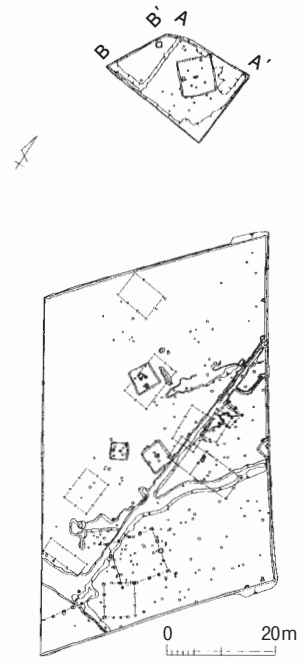
SB10 · SB11 平面图 · 断面图



平面图

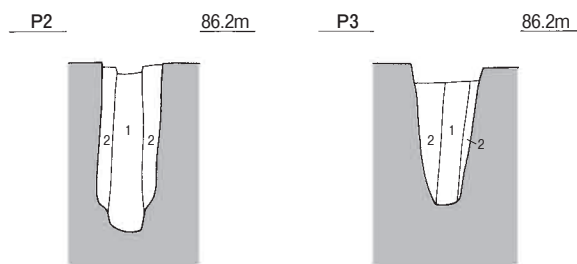
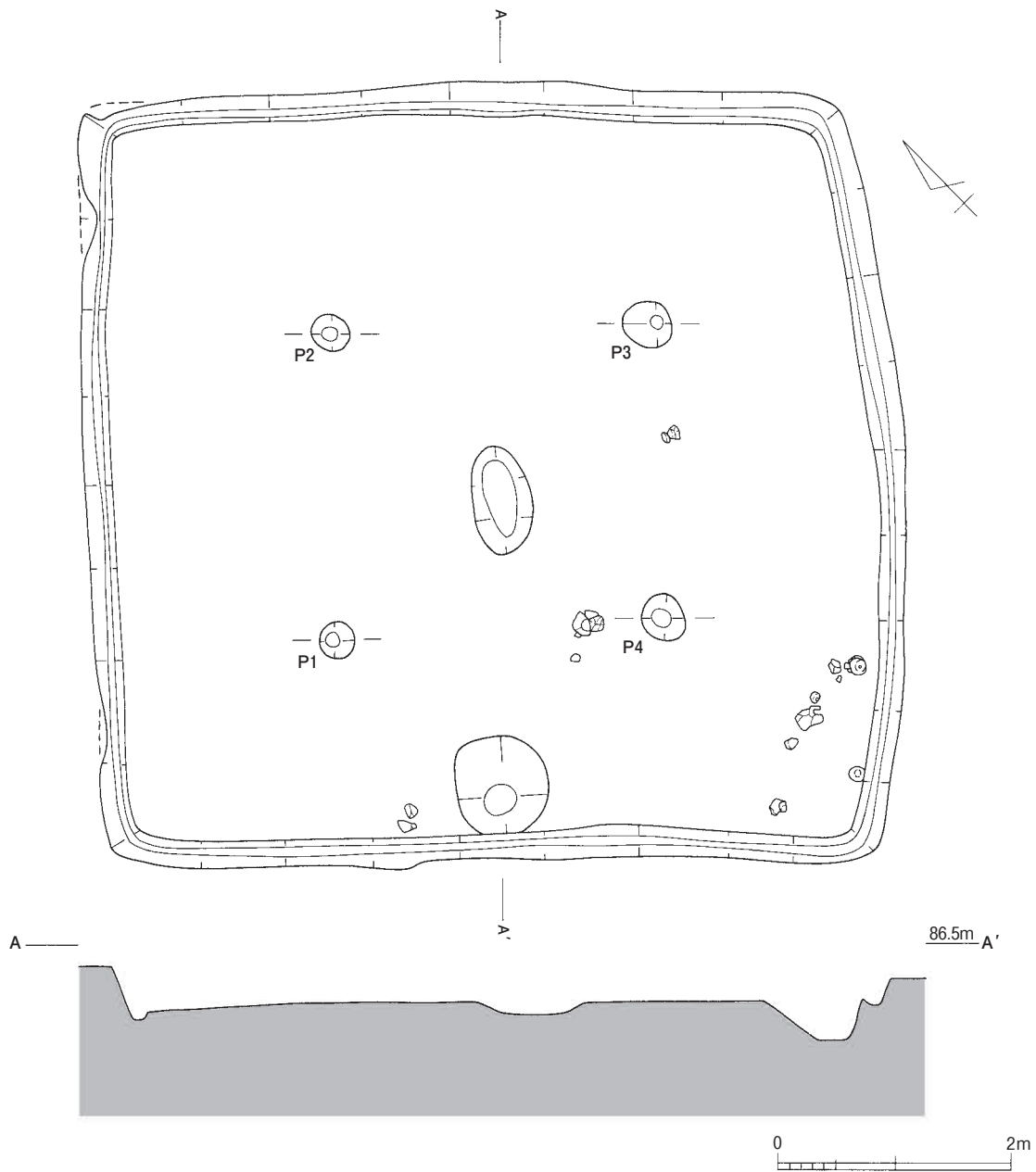


- ①コンクリート
- ②碎石
- ③盛土
- ④盛土
- ⑤碎石
- ⑥コンクリート
- ⑦盛土
- ⑧攪乱
- ⑨耕土
- ⑩10YR 1.7/1 黒色 極細砂 (シルト含む)



調査区（北壁・西壁）断面図

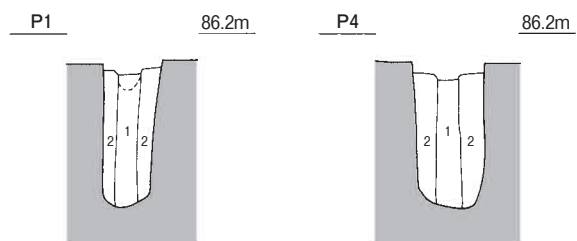
SH05



- P1**
①10YR 4/1 褐灰色 シルト (極細砂～細砂、上方に粗砂～小礫多く含む)
②10YR 4/1 褐灰色 シルト (粗砂含む)

- P2**
①10YR 4/1 褐灰色 シルト (極細砂～細砂含む)
②10YR 5/1 褐灰色 シルト (極細砂～細砂、直径3cm大の礫含む)

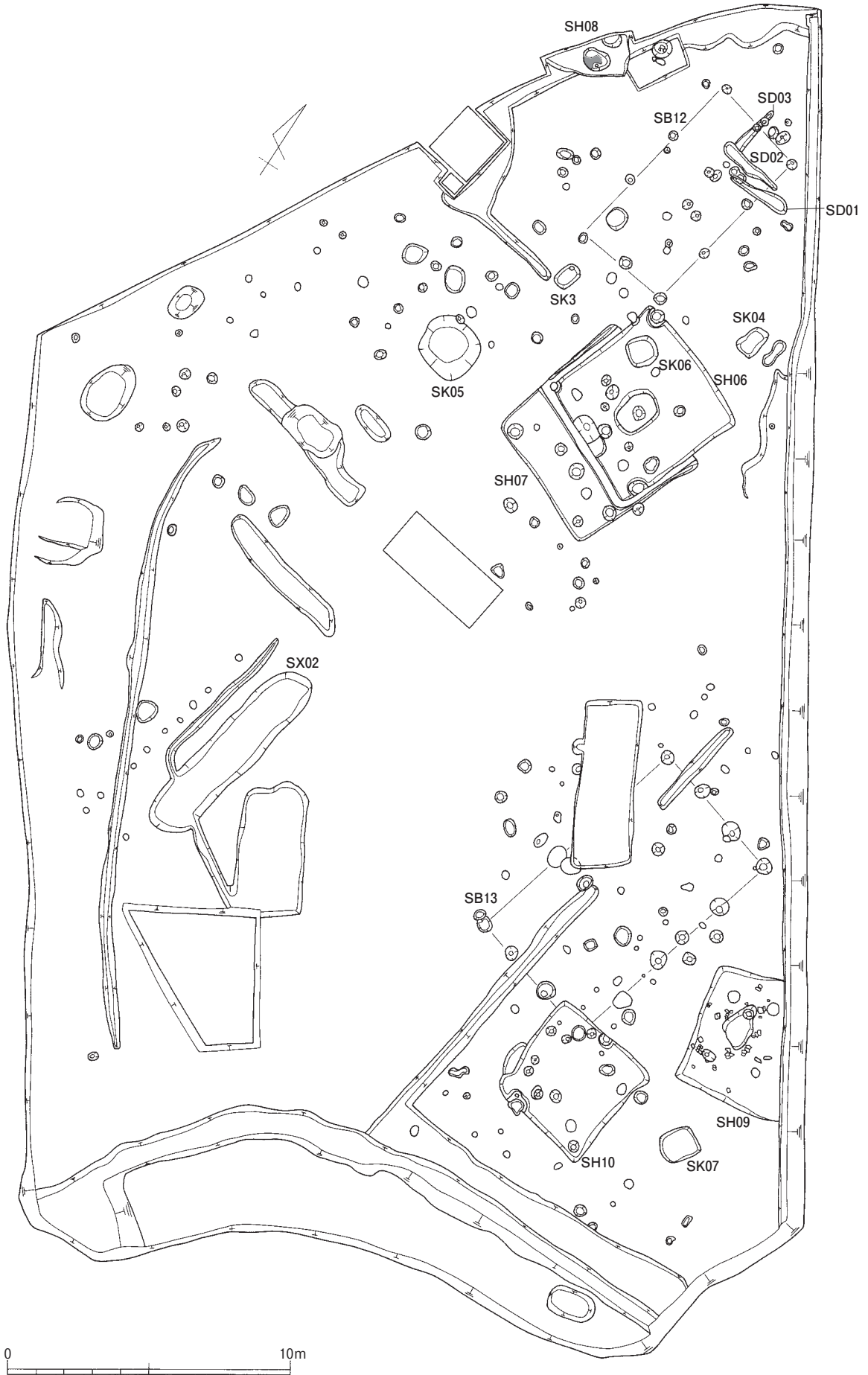
- P3**
①10YR 4/1 褐灰色 シルト (極細砂～細砂含む)
②10YR 5/1 褐灰色 シルト (細砂～粗砂含む)



- P4**
①10YR 2/1 黒色 シルト (褐灰色細砂～粗砂、直径3cm大の礫含む)
②10YR 5/1 褐灰色 粗砂 (黒灰色シルト、直径10cm大の礫含む)



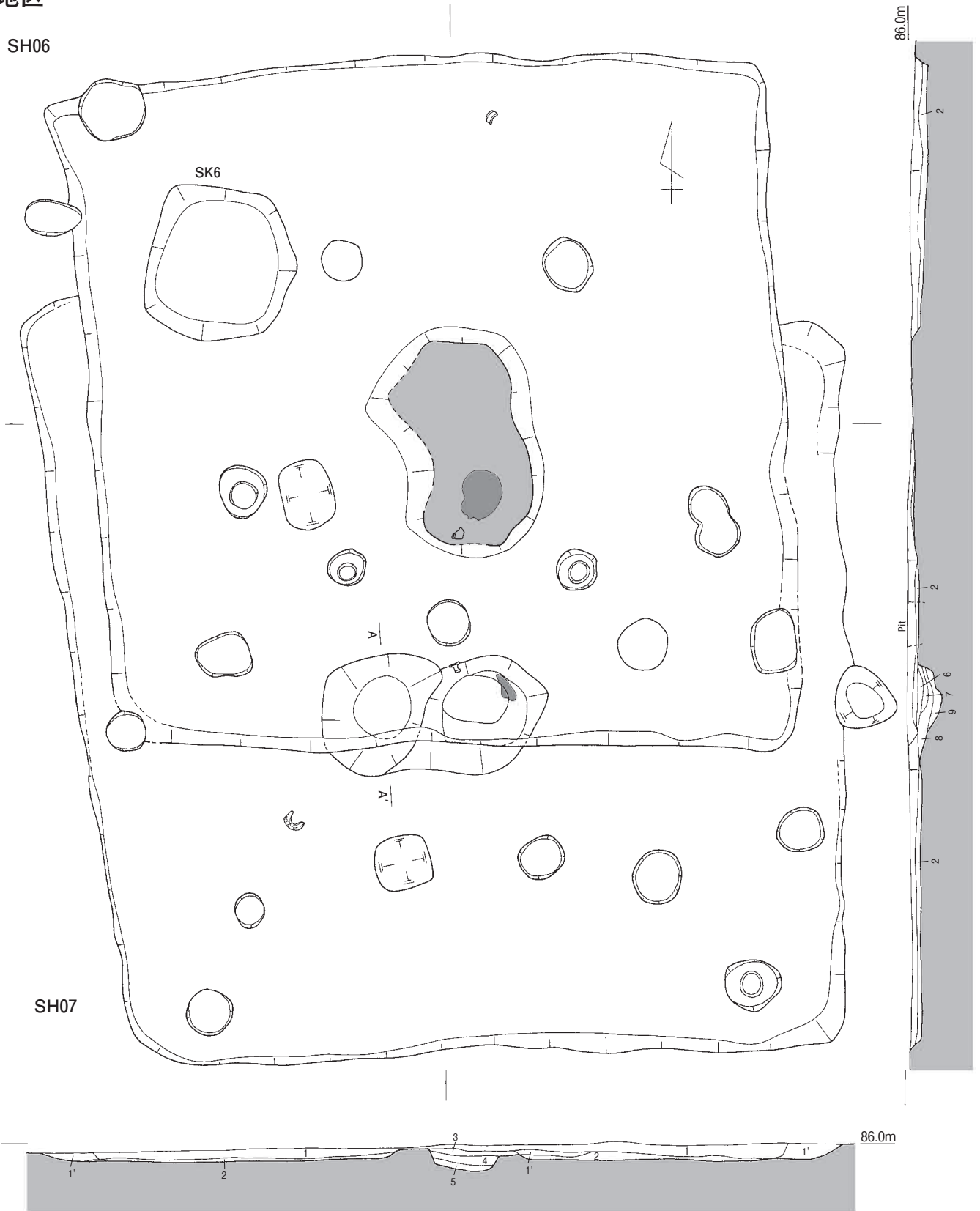
SH05 平面図・断面図



平面图

SH06

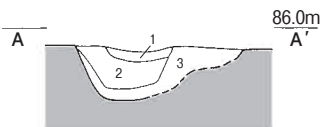
86.0m



SH07

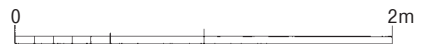
86.0m

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐 細砂～中砂(シルト質) | 6. 7.5YR2/2 黄褐 極細砂(焼土含む) |
| 1'. 炭・焼土含む | 7. 5YR2/4 極暗赤褐 極細砂(焼土多く含む) |
| 2. 10YR3/2 黒褐 細砂～中砂(シルト質) | 8. 7.5YR2/1 黒 シルト質極細砂 |
| 3. 7.5YR2/2 黄褐 細砂(焼土・炭含む) | 9. 10YR2/1 黒 シルト質極細砂 |
| 4. 10YR2/1 黒 シルト質極細砂(土器含む) | |
| 5. 10YR1.7/1 黒 シルト質極細砂 | |



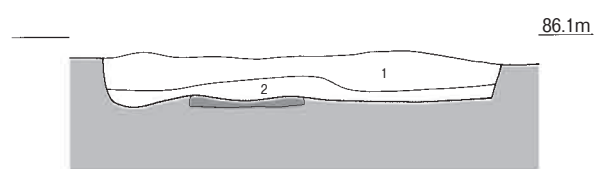
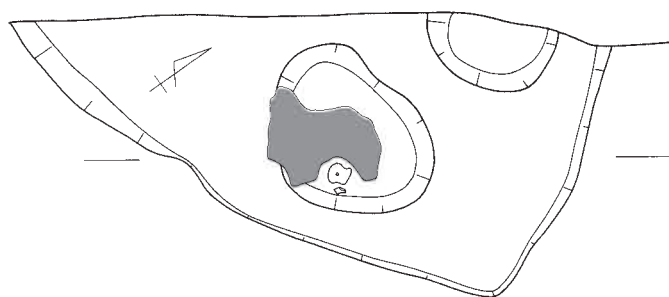
- | | |
|--|--|
| 1. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(焼土含む) | |
| 2. 7.5YR4/1 褐灰 シルト質細砂～極細砂(砂質強い・焼土少量含む) | |
| 3. 7.5YR4/1 褐灰 シルト～シルト質極細砂 | |
| (10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂をブロック状に含む) | |

粘土 焼土



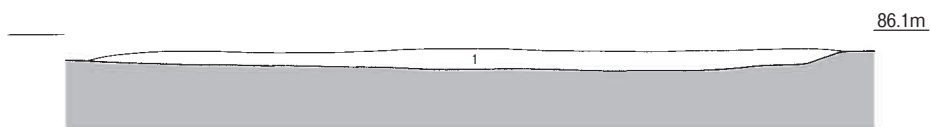
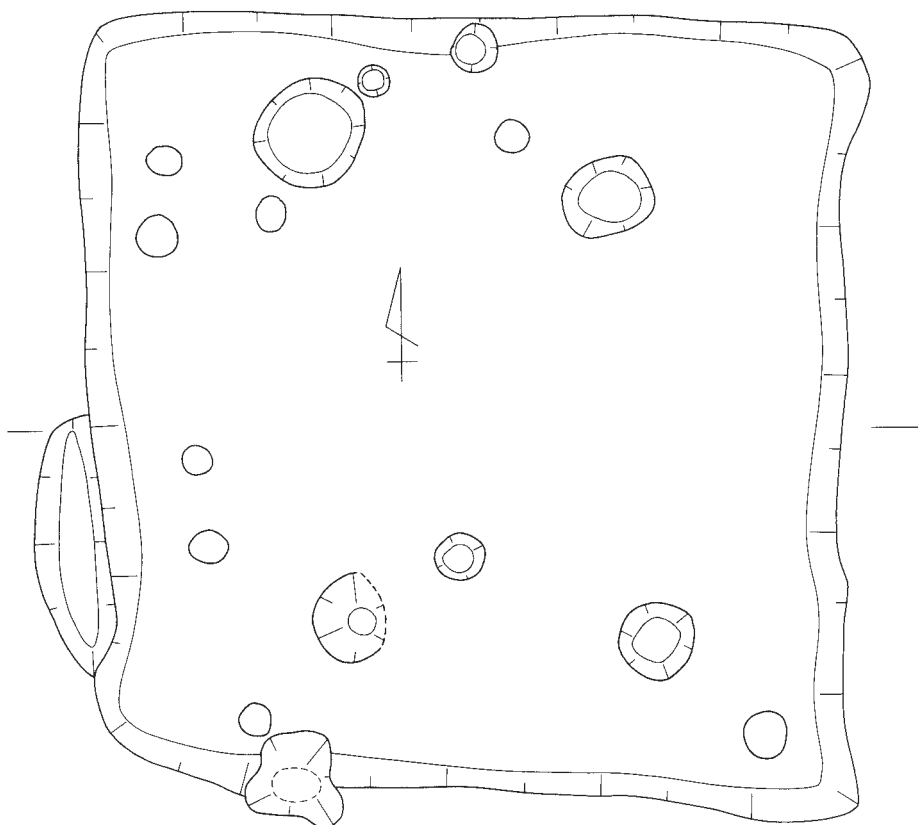
SH06・SH07 平面図・断面図

SH08



- 1. 75YR2/2 黒褐 極細砂
- 2. 10YR2/1 黒 シルト質極細砂 (焼土・炭含む)

SH10

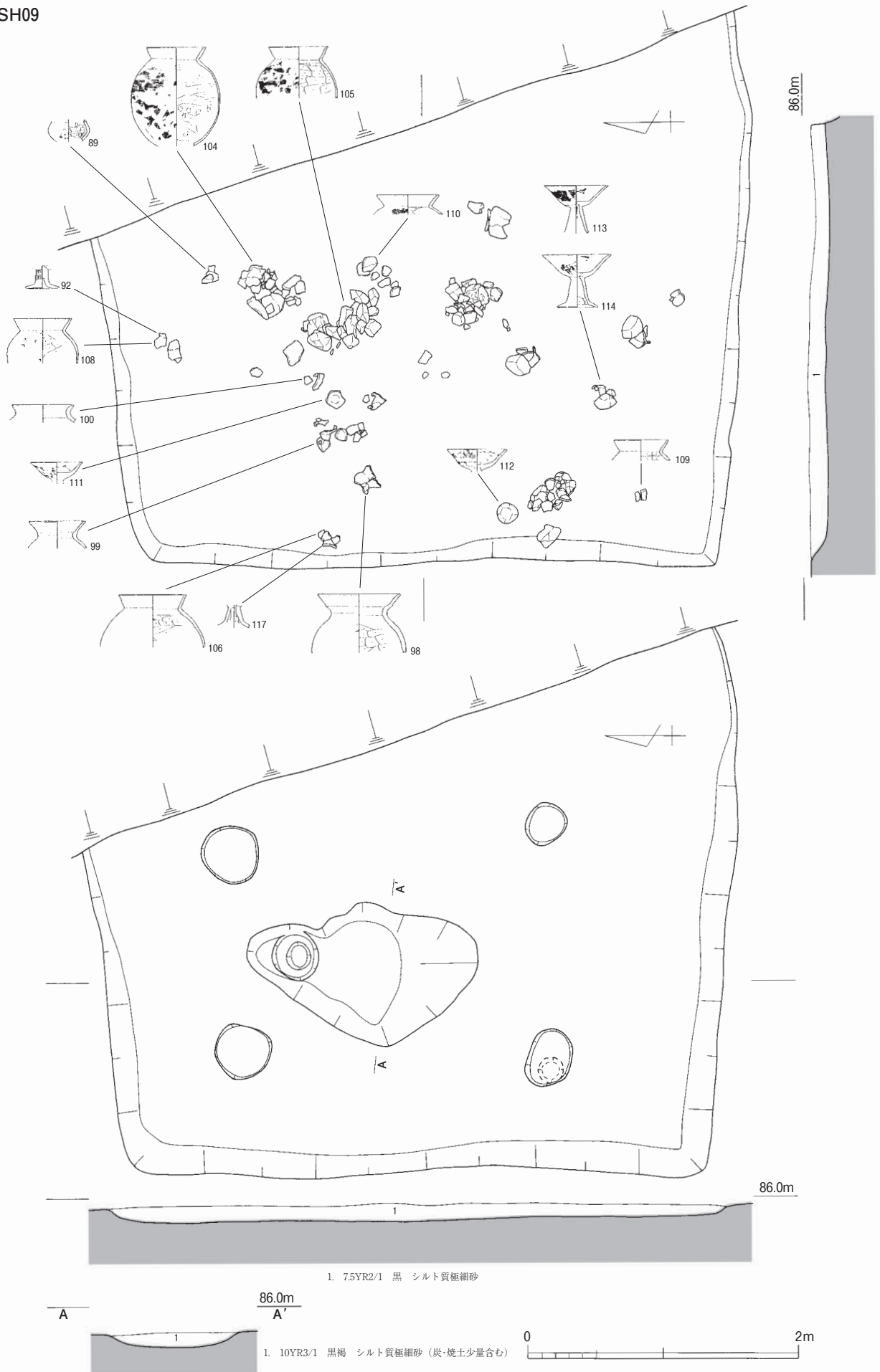


- 1. 75YR2/1 黒 極細砂 (炭・土器少量含む)

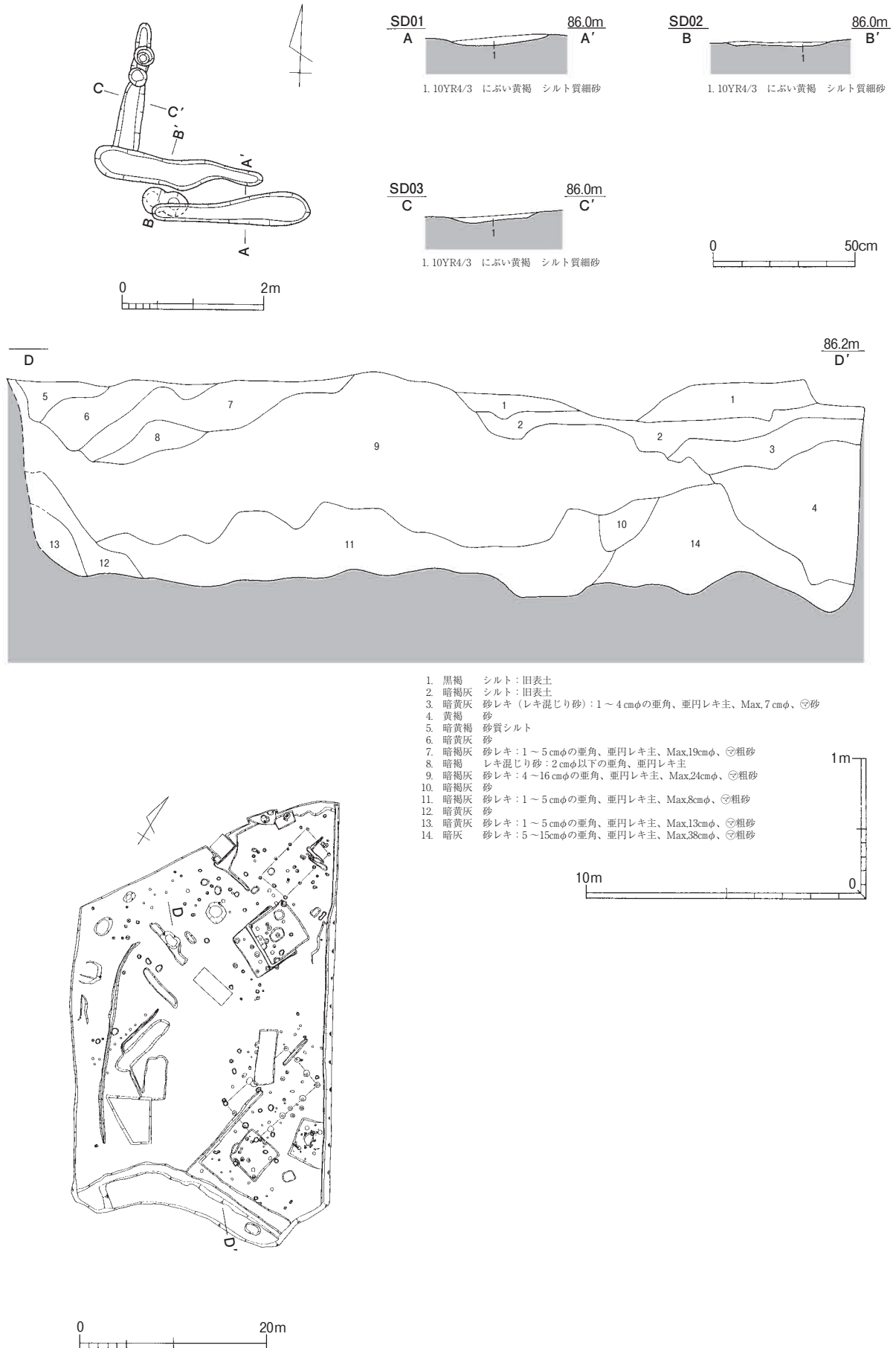


SH08・SH10 平面図・断面図

SH09

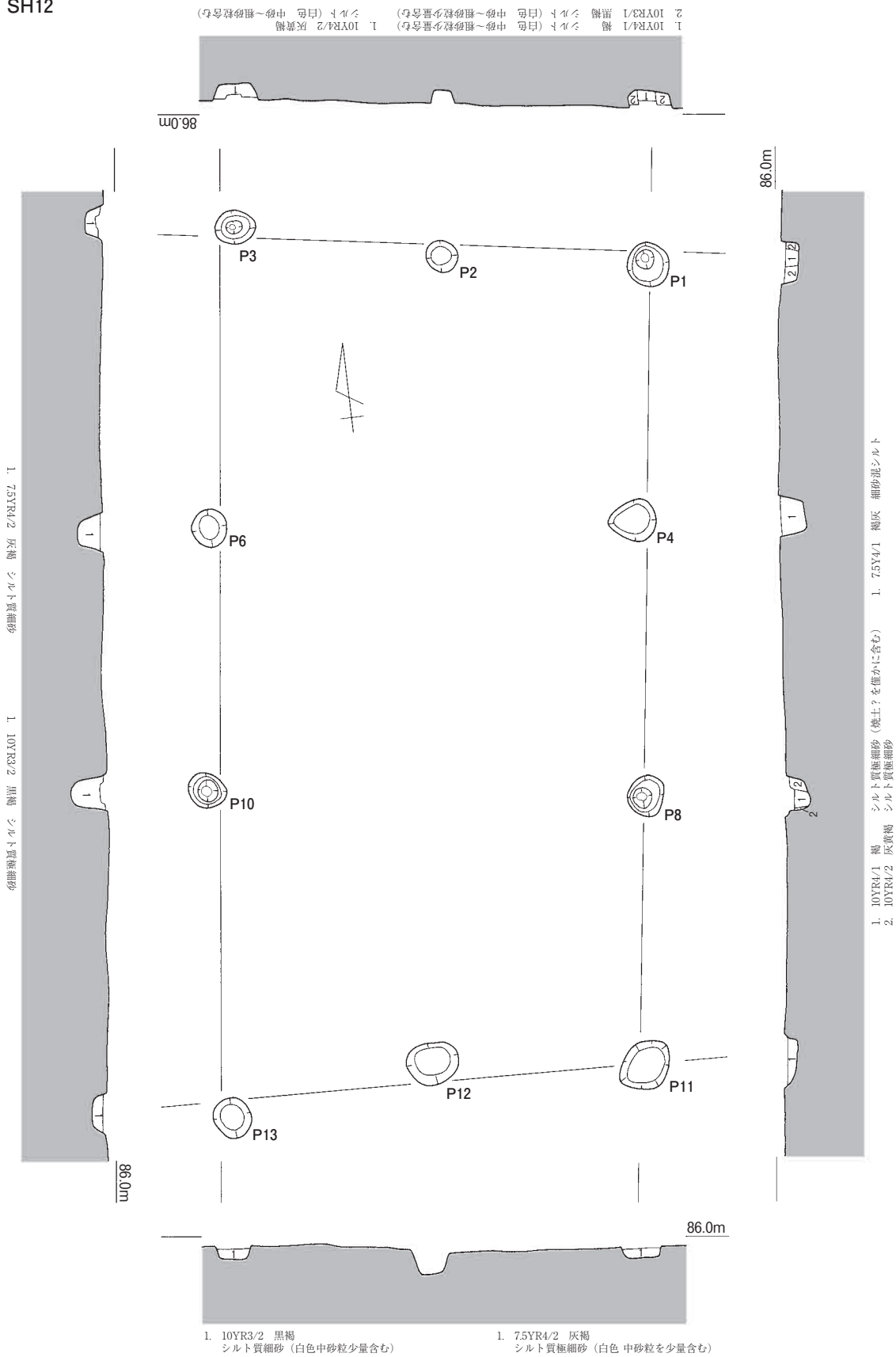


SH09 平面図・断面図



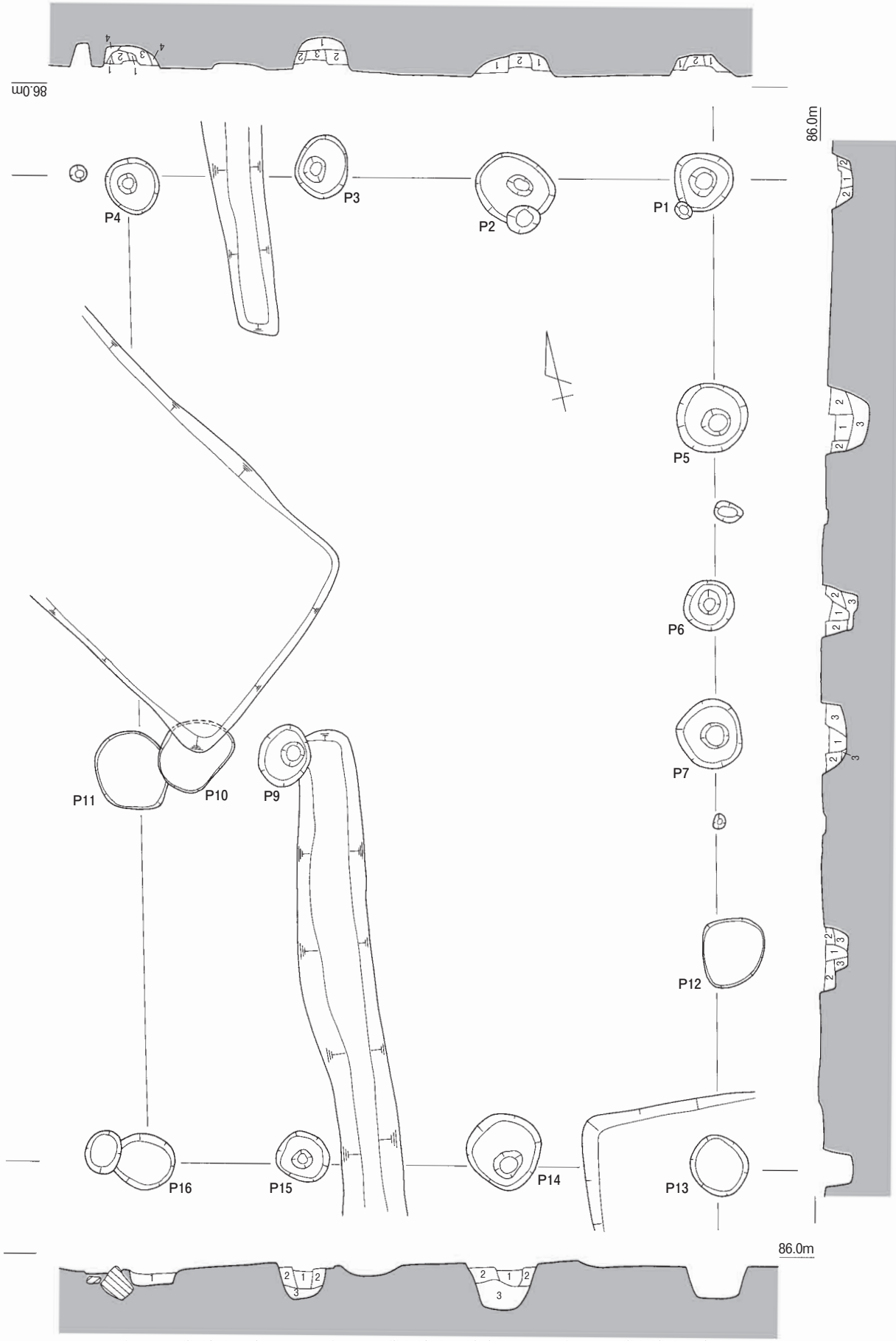
溝SD01～SD03 平面図・断面図 断ち割り断面図

SH12



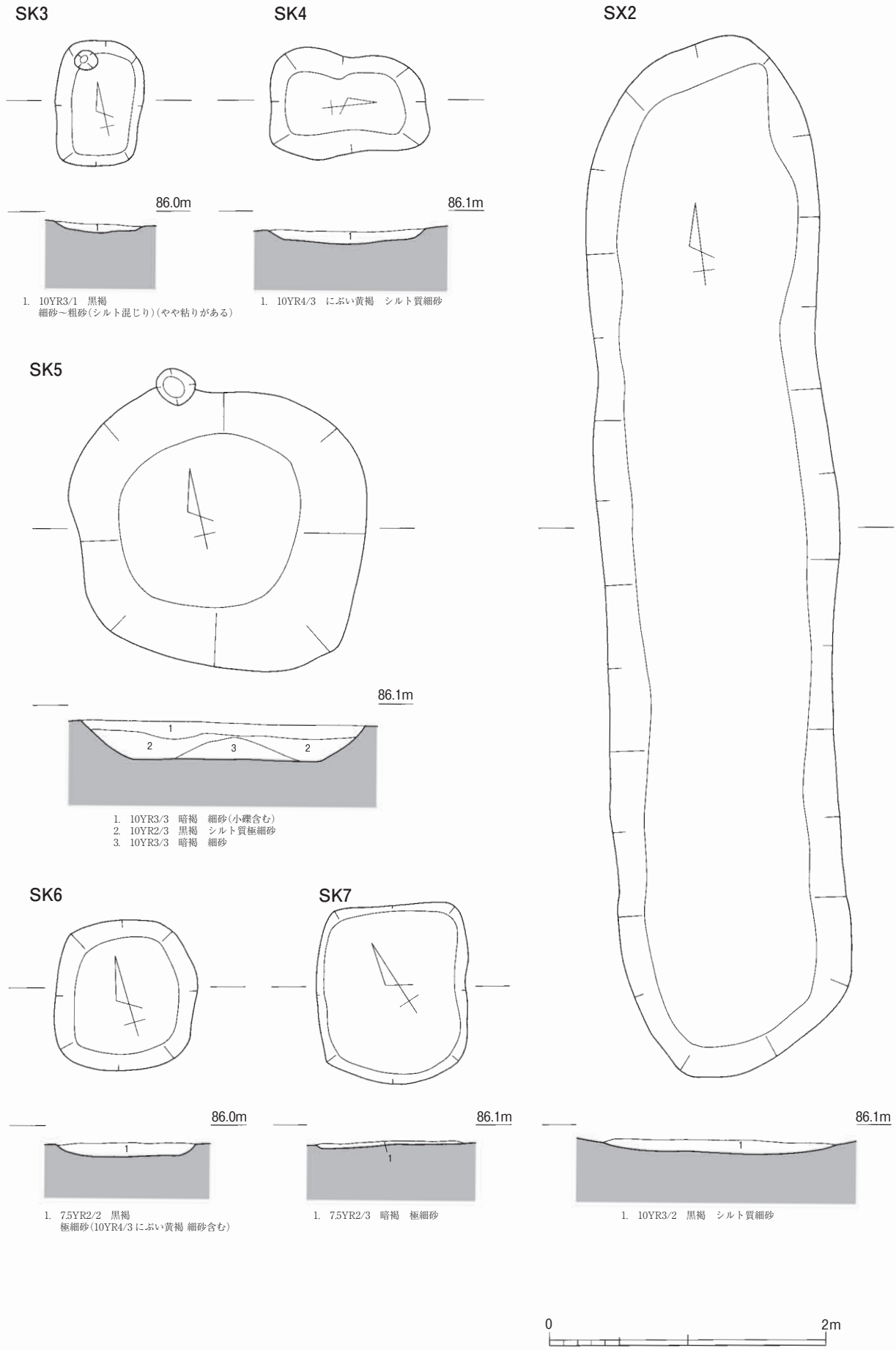
SB12 平面図・断面図

1. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(粗砂・細砂少量含む) 1. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(粗砂・細砂少量含む)
 2. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(中砂少量含む) 2. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(中砂少量含む)
 3. 10YR3/2 黒褐 シルト質細砂
 4. 10YR4/1 褐灰 シルト質細砂～極細砂



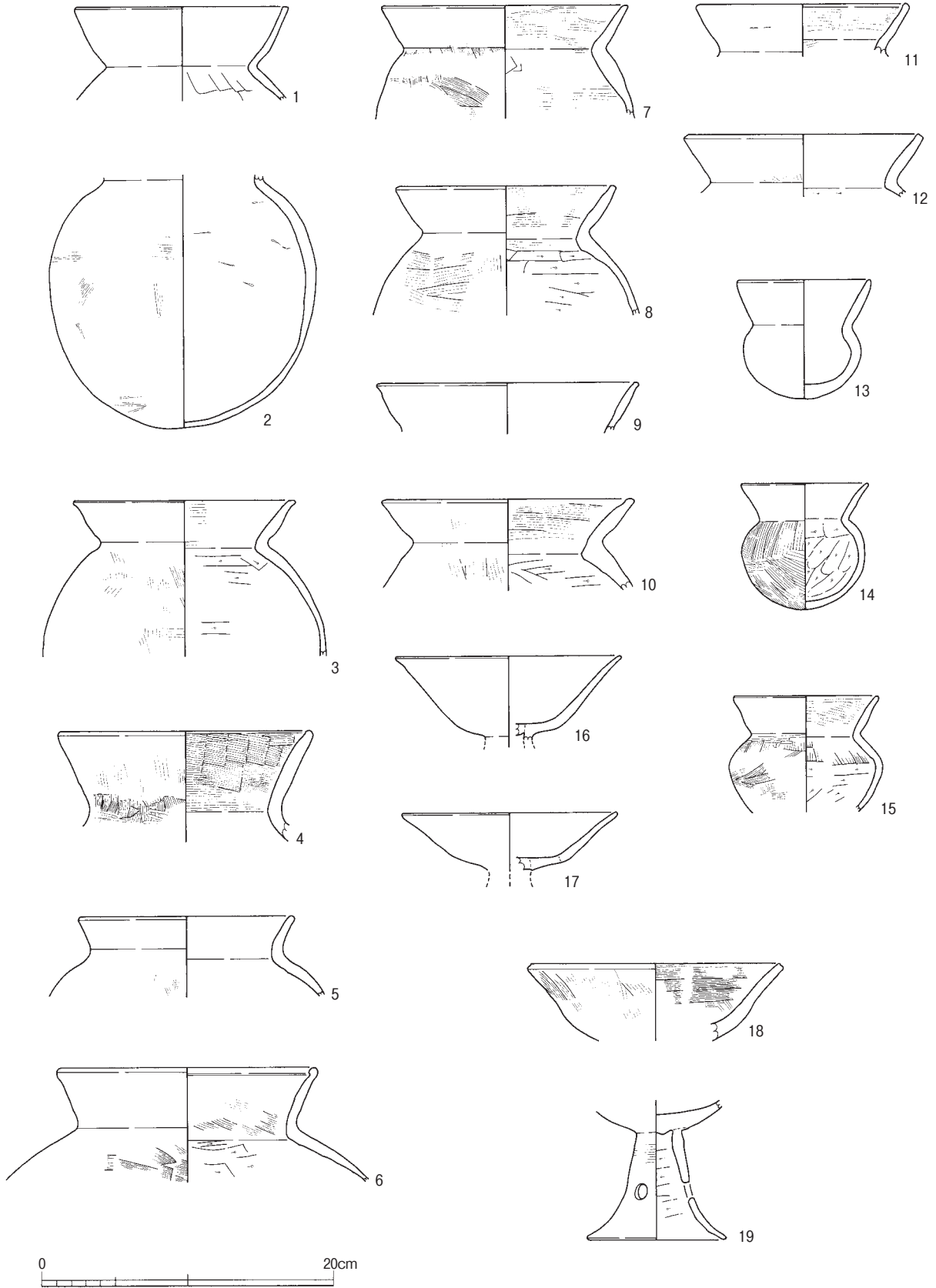
1. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(粗砂・細砂少量含む) 1. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂含む)
 2. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(中砂少量含む) 2. 75YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂含む)
 3. 75YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(中砂含む)
 1. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂含む) 1. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂
 2. 75YR5/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂含む) 2. 75YR4/1 褐灰 シルト質極細砂
 3. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂
 1. 25Y4/1 黄灰 シルト～シルト質極細砂
 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト～シルト質極細砂(中砂・細砂少量含む)
 シルト～シルト質極細砂(細砂含む)
 3. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂～細砂含む)
 1. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(細砂混じり) 1. 25Y4/1 黄灰 シルト～シルト質極細砂
 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂(上より砂質強い細砂混じり) 2. 10YR5/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂少量含む)
 シルト～シルト質極細砂(中砂～細砂含む)
 3. 10YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂～細砂含む)
 1. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(細砂混じり) 1. 75YR4/1 褐灰 シルト質極細砂(細砂混じり)
 2. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(細砂混じり) 2. 10YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(細砂混じり)
 3. 75YR3/1 黒褐 シルト質極細砂(2より砂質が弱い)

SB13 平面図・断面図



SK3～SK7・SX1 平面図・断面図

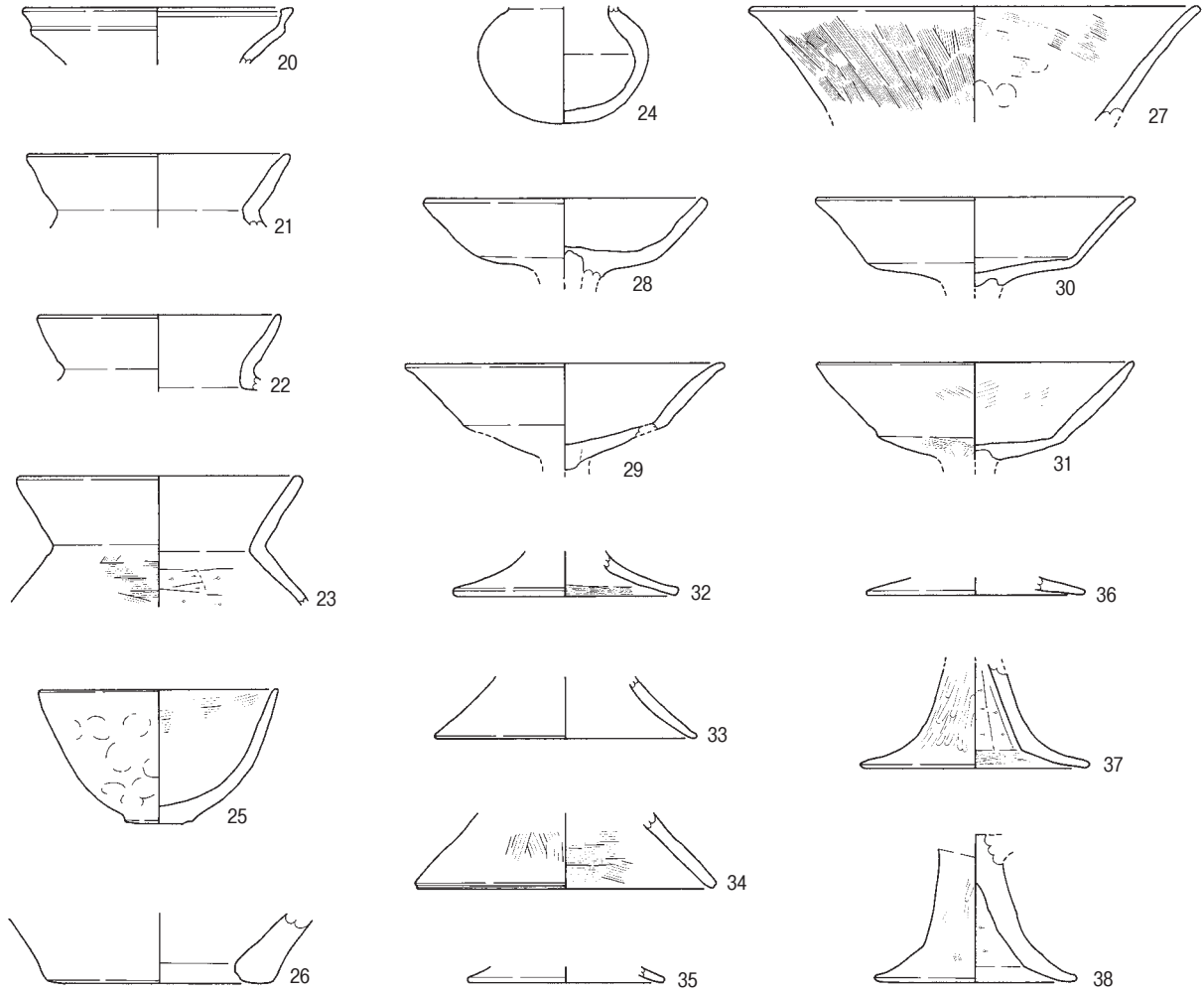
SH01



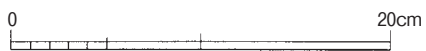
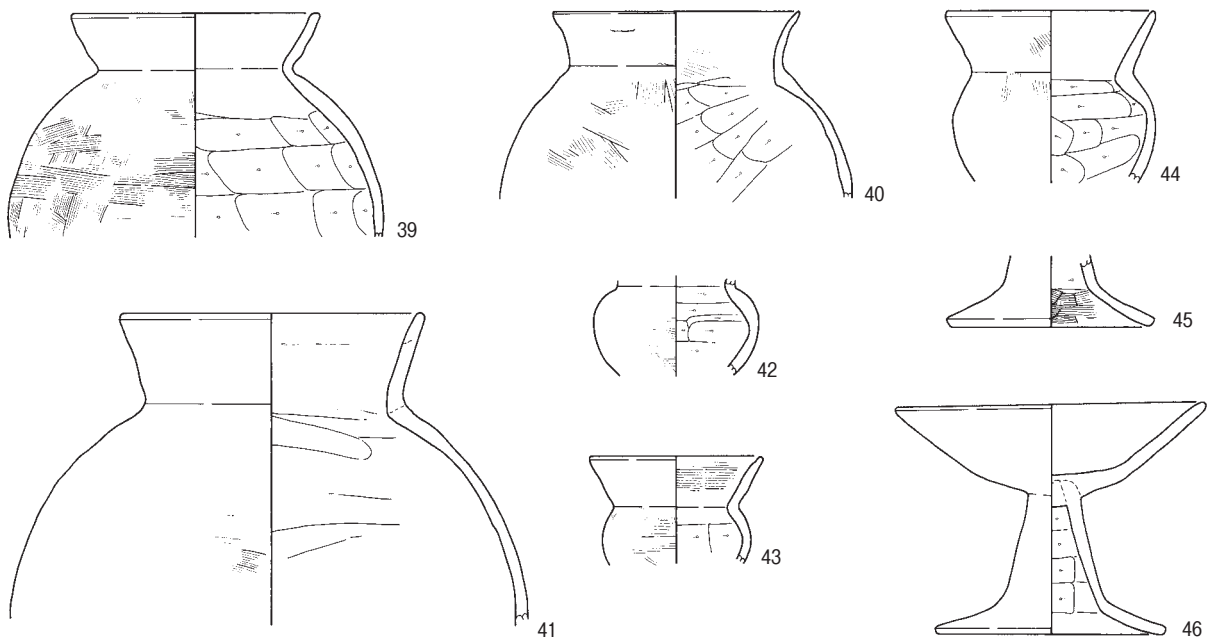
SH01 出土遺物実測図

图版32
A地区

SH02

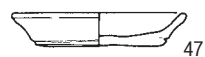


SH04

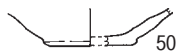


SH02 · SH04 出土遺物実測図

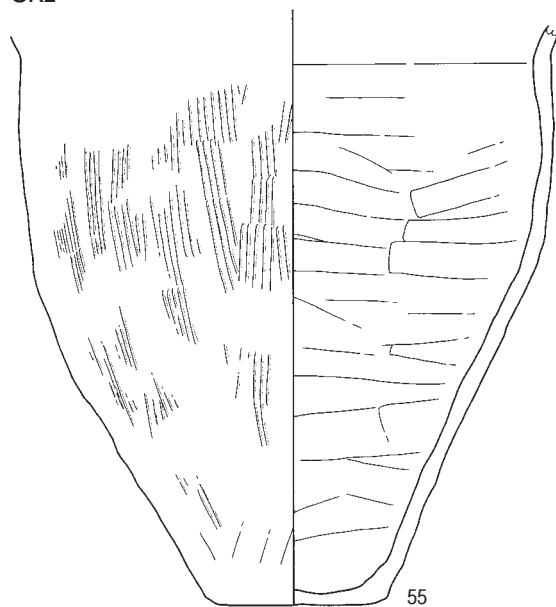
SB03



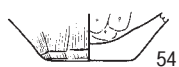
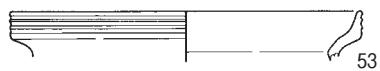
Pit



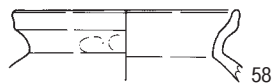
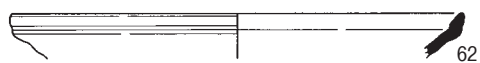
SK2



SX1

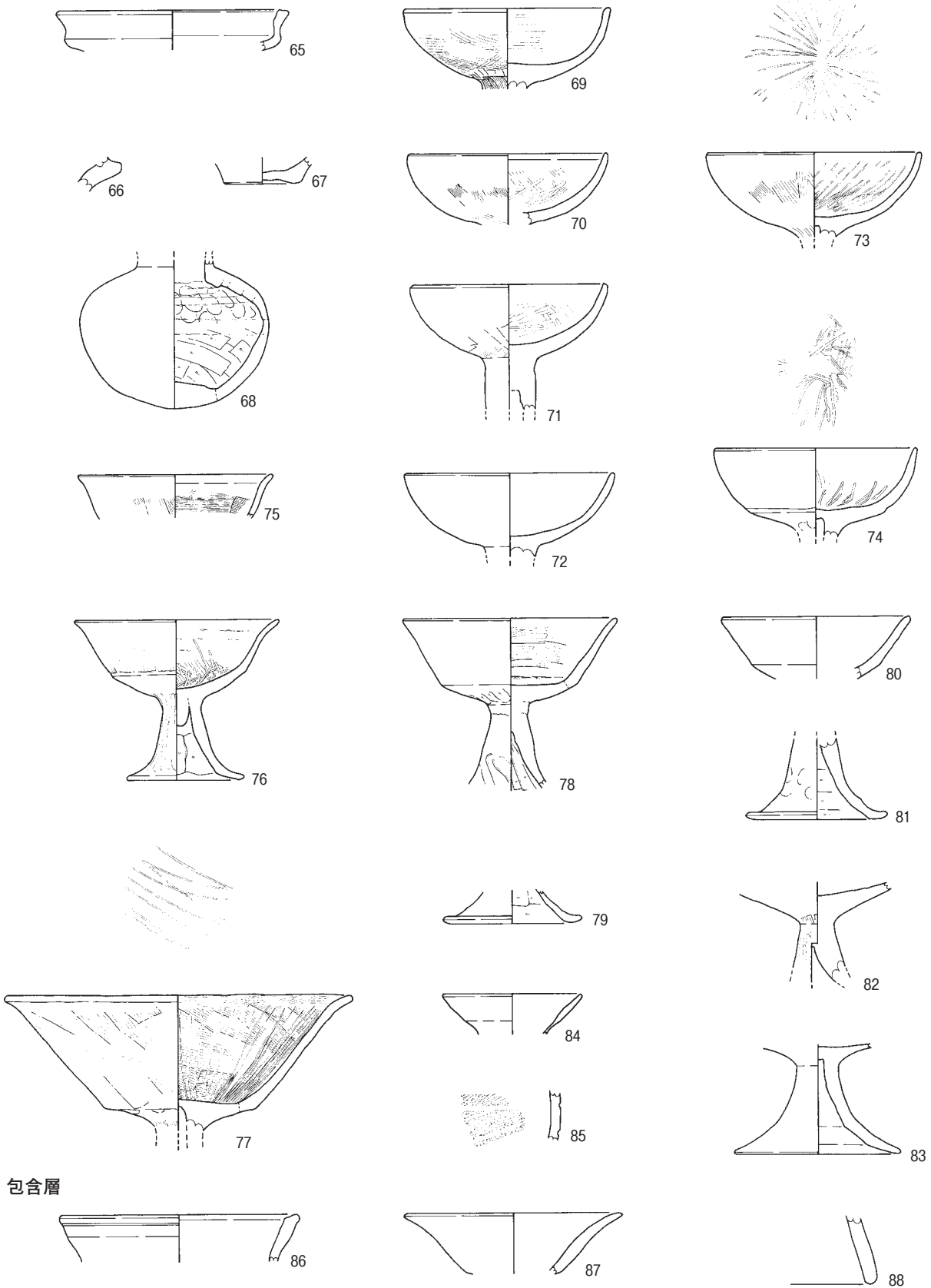


包含層



图版34
B地区

SH05



SH05 出土遺物実測図

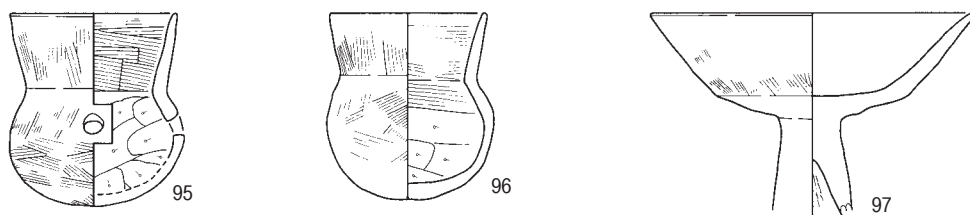
SH06



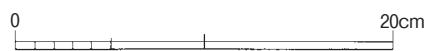
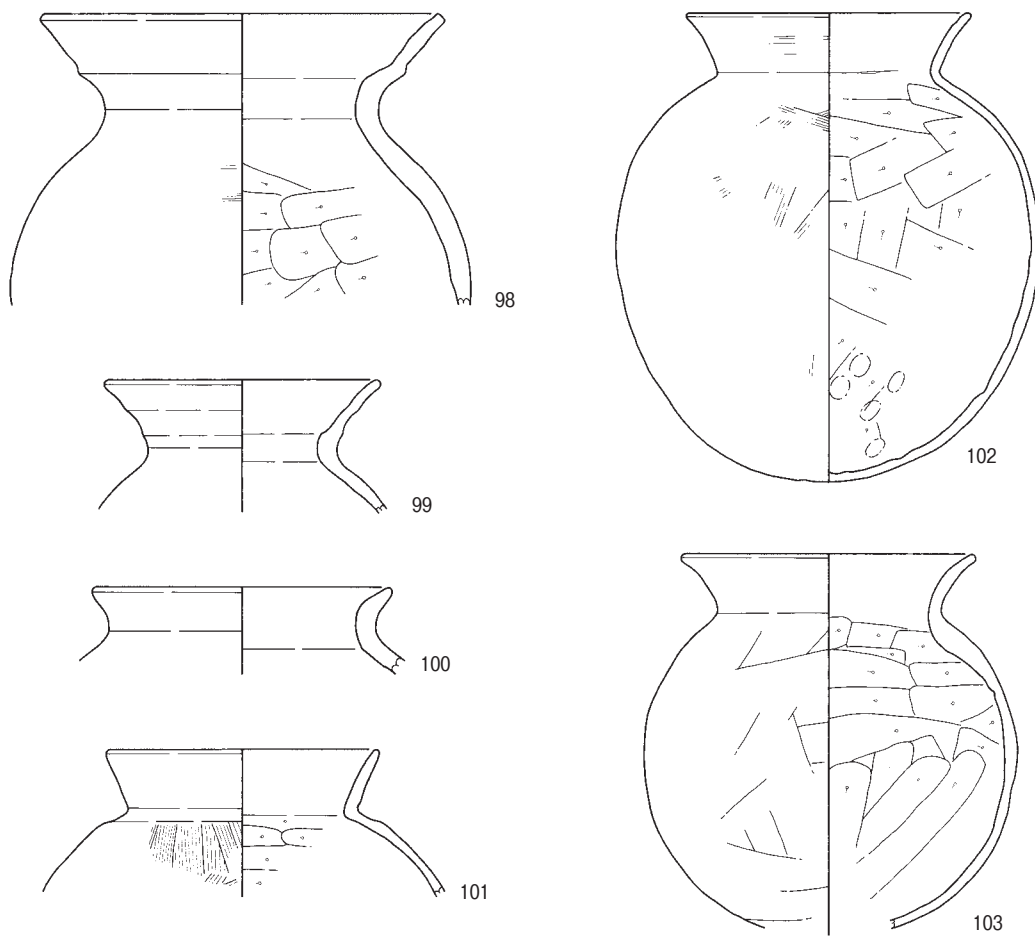
SH07



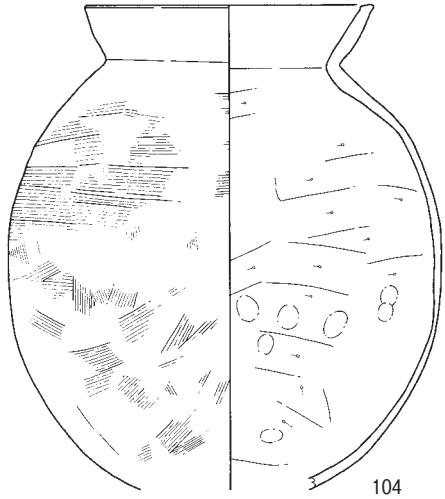
SH08



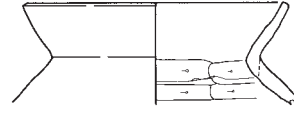
SH09



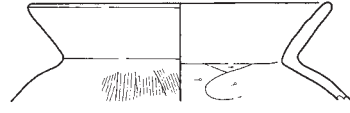
SH09



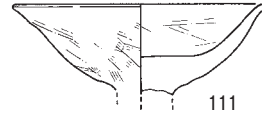
104



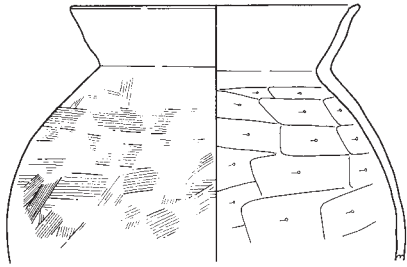
109



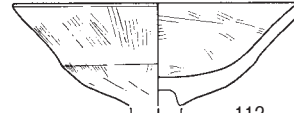
110



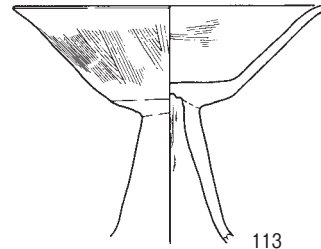
111



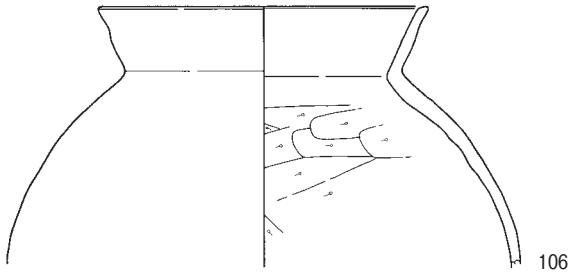
105



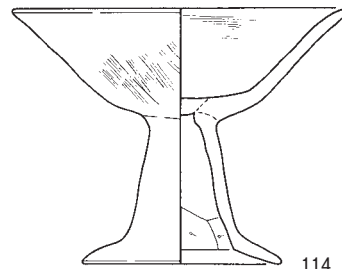
112



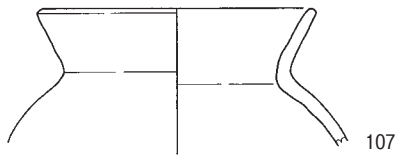
113



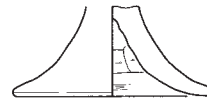
106



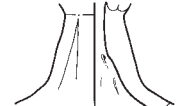
114



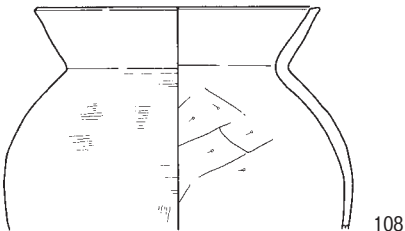
107



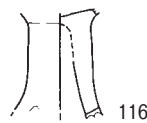
115



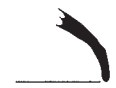
117



108



116

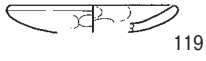


118



SH09 出土遺物実測図

SB11



119



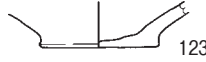
120



121



122



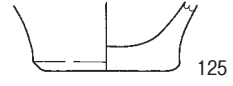
123

SK5



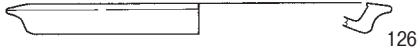
124

SK7

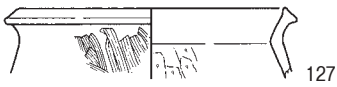


125

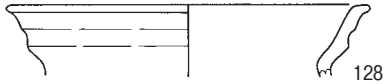
包含層



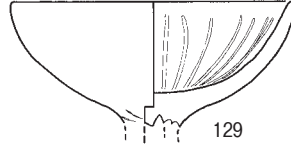
126



127



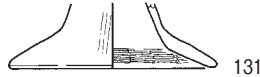
128



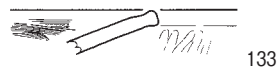
129



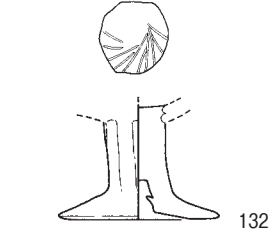
130



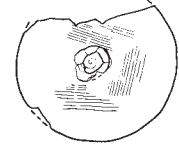
131



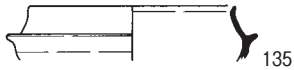
133



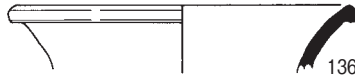
132



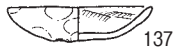
134



135



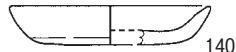
136



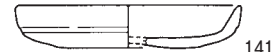
137



139



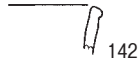
140



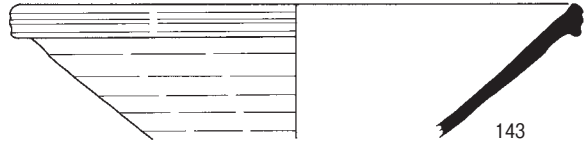
141



138



142



143



写真図版



全景（西から）



東側柱穴群（南から）

写真図版2
A地区



北半部遺構群（東から）



南半部遺構群（北から）



調査区南部建物群 (SB01・SB09等) (北から)



調査区中央部建物群 (SB03・SB04等) (西から)

写真図版4
A地区



SB05・SB10他建物群（南から）



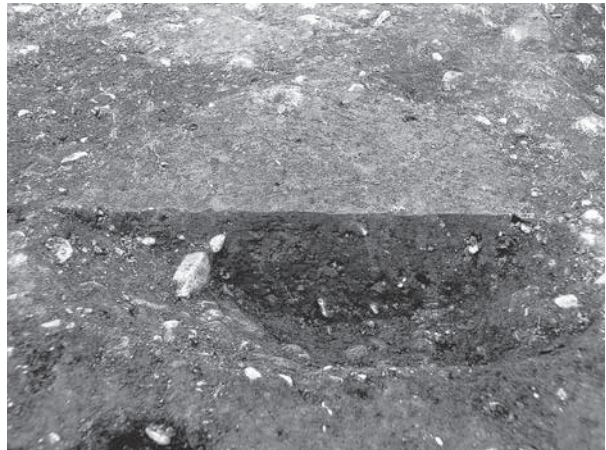
SB08他建物群（西から）



SH01 (南から)



SH01中央土坑断面 (南から)



SH01屋内土坑断面 (南から)



SH01床面土器出土状況

写真図版6
A地区



SH02 (南から)



SH02 西側柱穴断面 (南から)



SH02 中央土坑断面 (南から)



SH02 土器出土状況



SH02 土器出土状況



SH03 (南から)



SH03内SK01土器出土状況 (東から)



SH04 (南から)

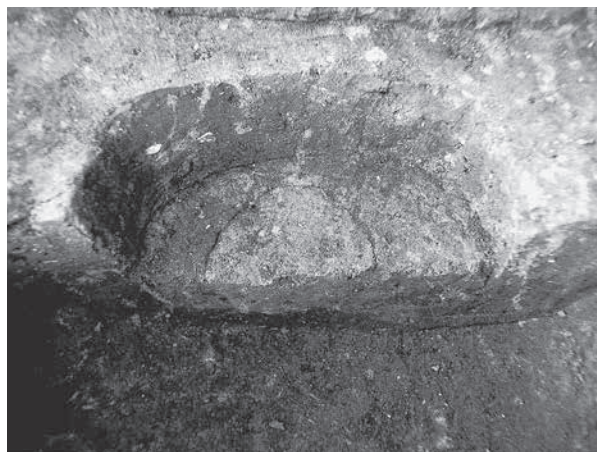
写真図版8
A地区



SB01 (南から)



SB01 (P03) 断面 (東から)



SB01 (P10) 断面 (東から)



SB01 (P11) 断面 (東から)



SB02 (南から)



SB02 (P27) 断面 (東から)



SB02 (P33) 断面 (東から)



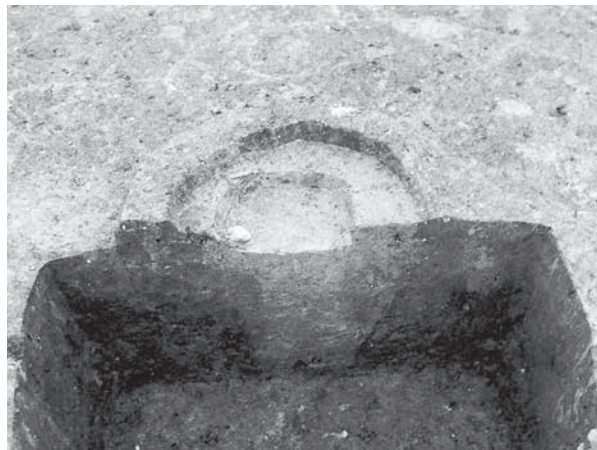
SB02 (P36) 断面 (東から)



SB03 (南から)



SB03 (P44) 断面 (南から)



SB03 (P46) 断面 (南から)



SB03 (P48) 断面 (南から)



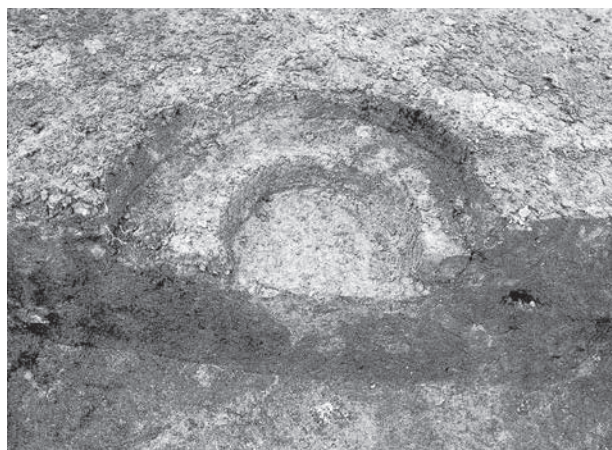
SB04 (東から)



SB04 (P79) 断面 (南から)



SB04 (P82) 断面 (東から)



SB04 (P84) 断面 (東から)



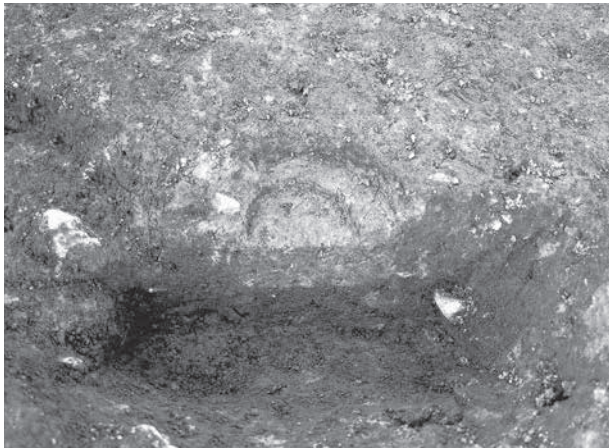
SB05 (南から)



SB05 (P62) 断面 (南から)



SB05 (P64) 断面 (南から)



SB06 (P131) 断面 (南から)



SB06 (P132) 断面 (南から)



SB07 (南から)



SB07 (P138) 断面 (東から)



SB07 (P140) 断面 (東から)



SB07 (P141) 断面 (東から)

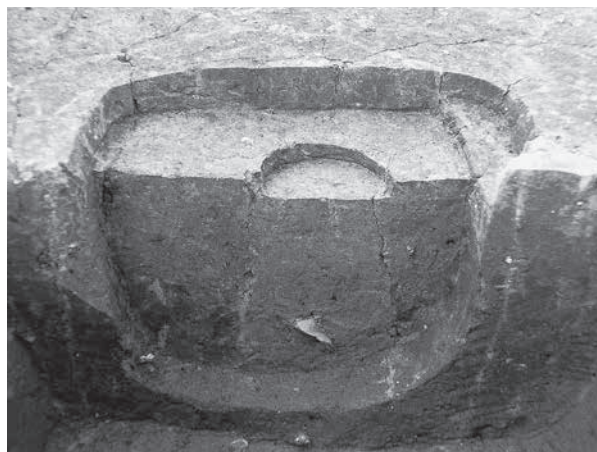
写真図版14
A地区



SB09 (南から)



SB09 (P114) 断面 (南から)



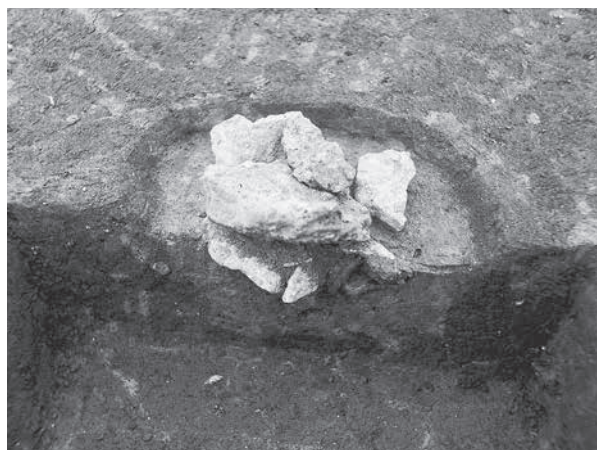
SB09 (P117) 断面 (東から)



SB09 (P127) 断面 (南から)



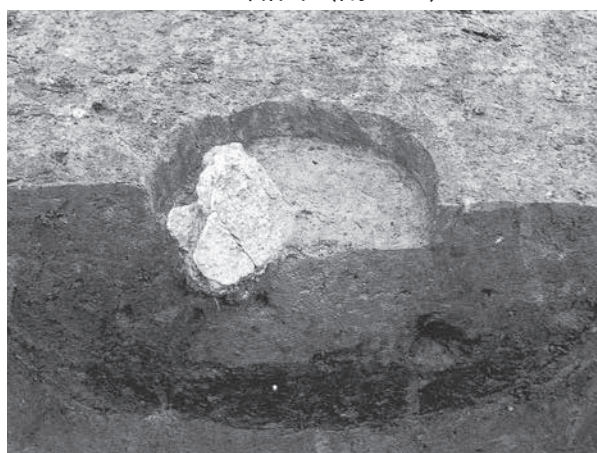
P136断面 (南から)



P167断面 (南から)



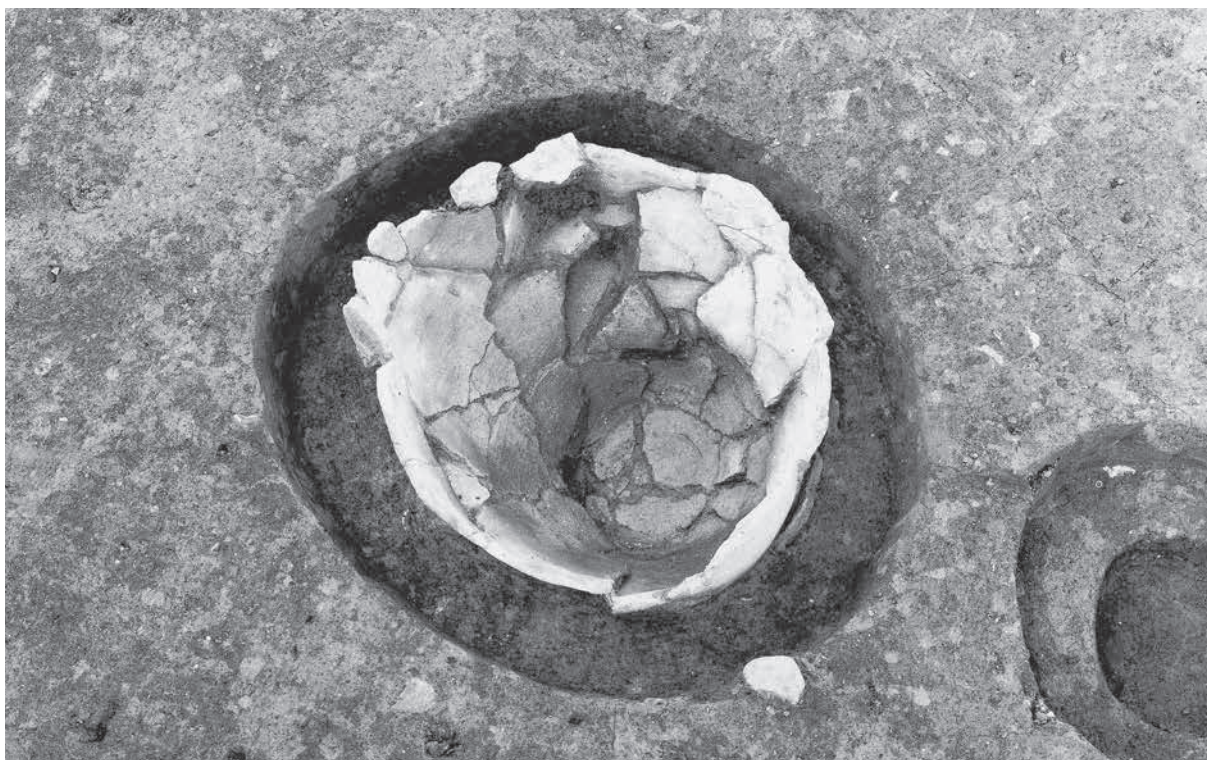
P169断面 (南から)



P171断面 (南から)



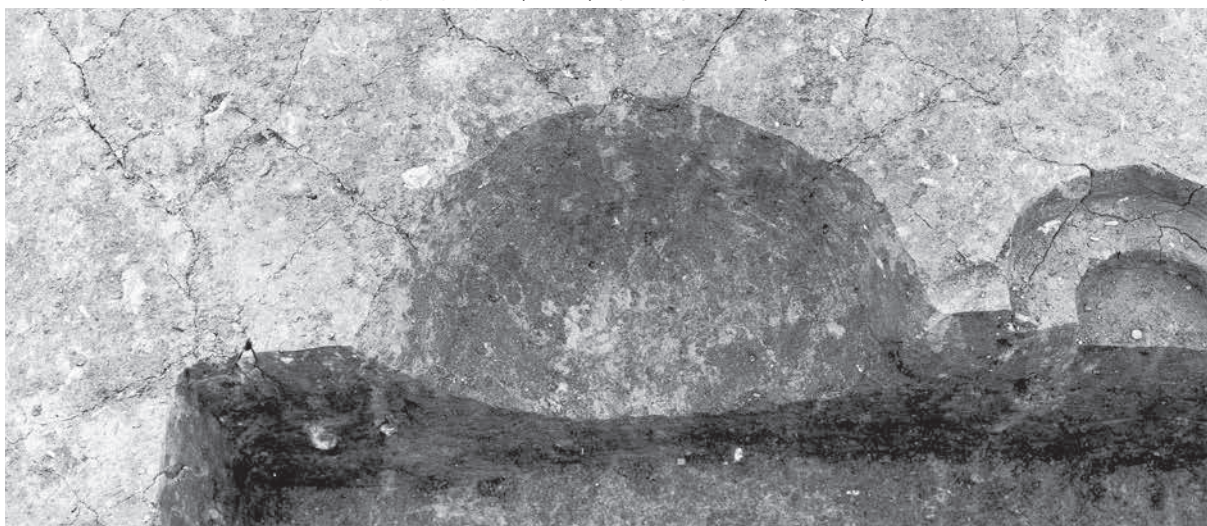
調査区東壁付近土坑群 (南から)



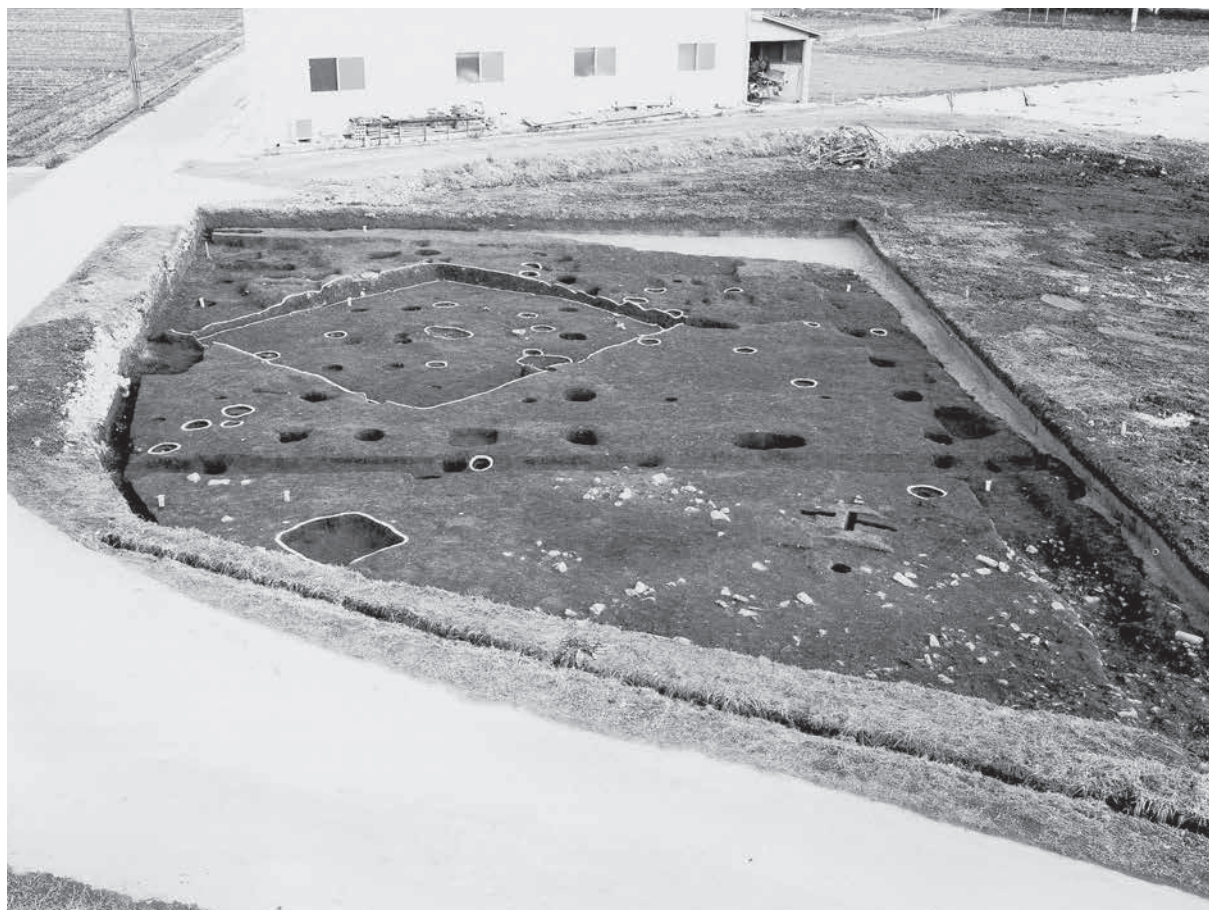
土器埋納坑 (SK2) 検出状況 (南から)



土器埋納坑 (SK2) 断ち割り (南から)



土器埋納坑 (SK2) 完掘状況 (南から)



全景（西から）



全景（北から）



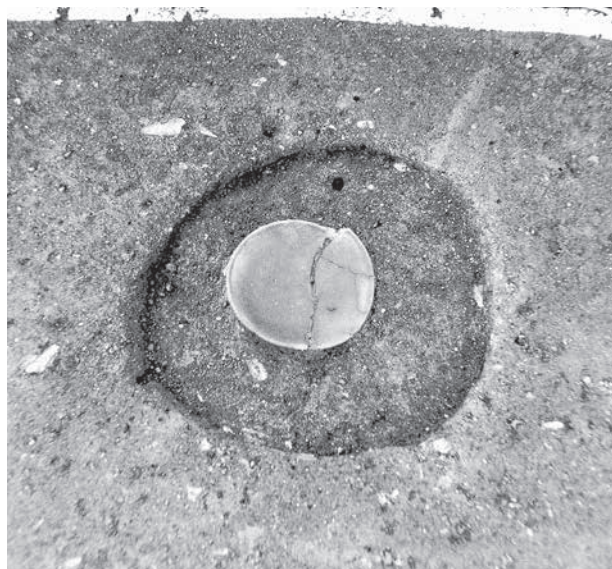
SH05 (東から)



SH05南東隅土器出土状況 (西から)



SH05中央土坑断面（東から）



SH05土器出土状況



SH05土器出土状況



SH05土器出土状況



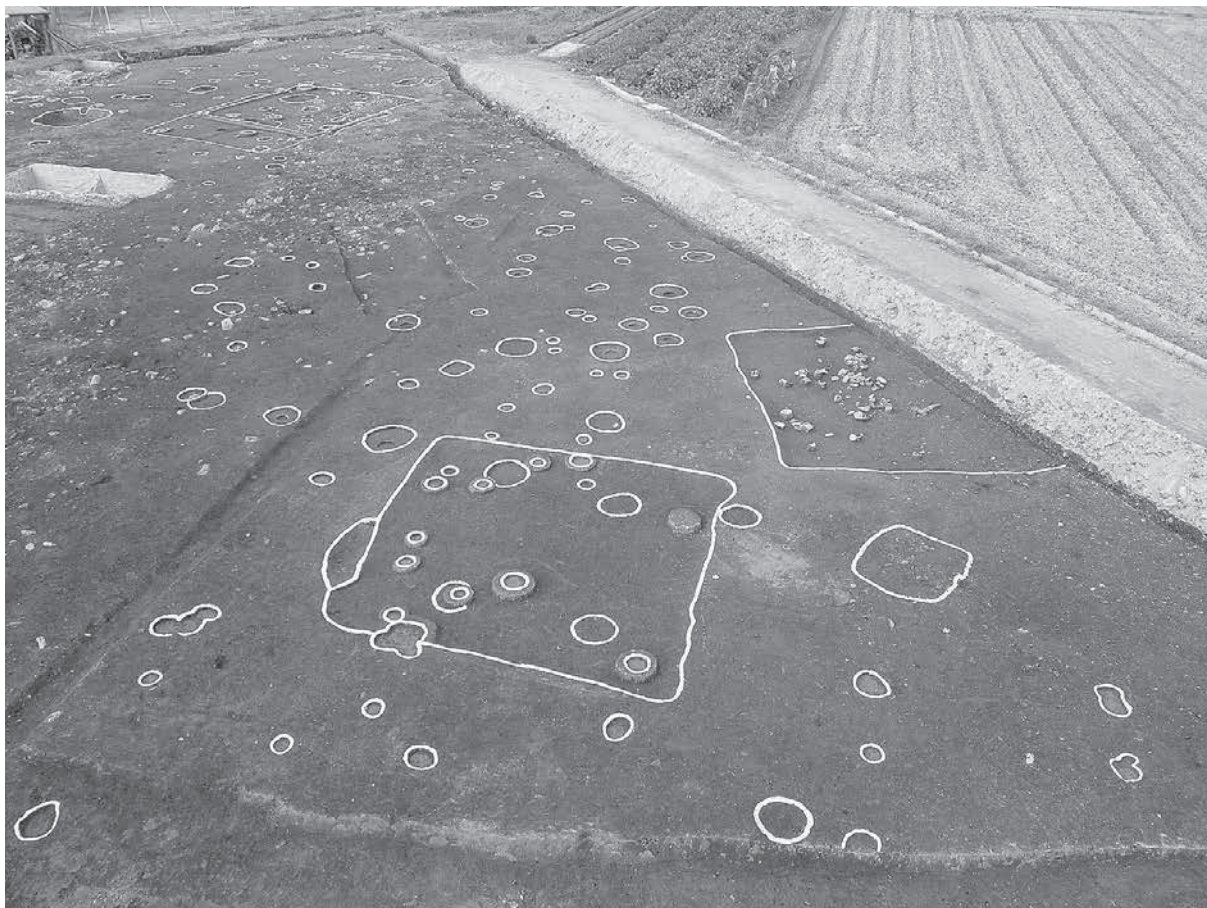
SH05土器出土状況



全景（北から）



SH06・07全景（東から）



SH09・10全景（東から）



SH09・10全景（北西から）



SH09東西断面（南から）



SH09東西断面（南から）



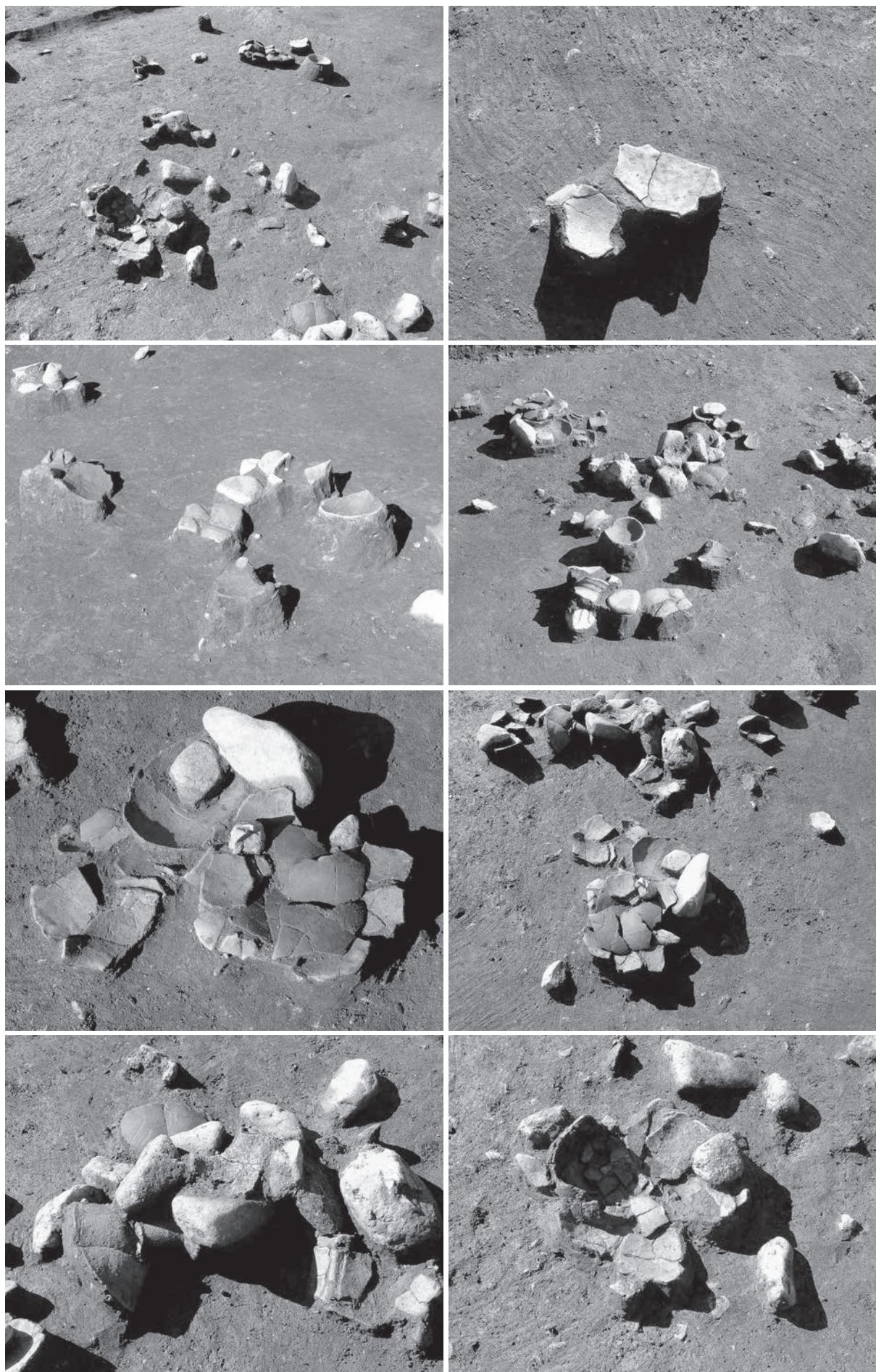
SH09全景（南から）



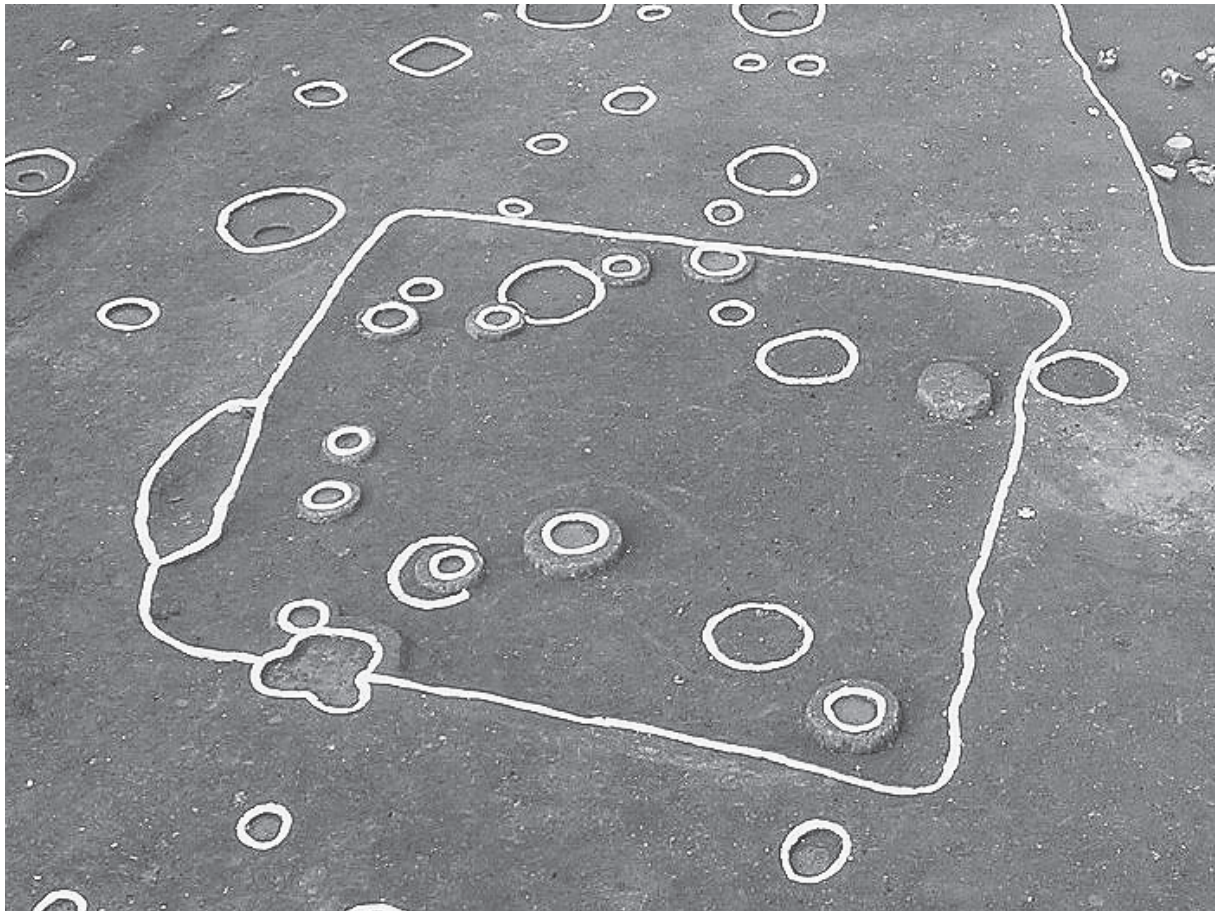
SH09全景（北から）



調査風景



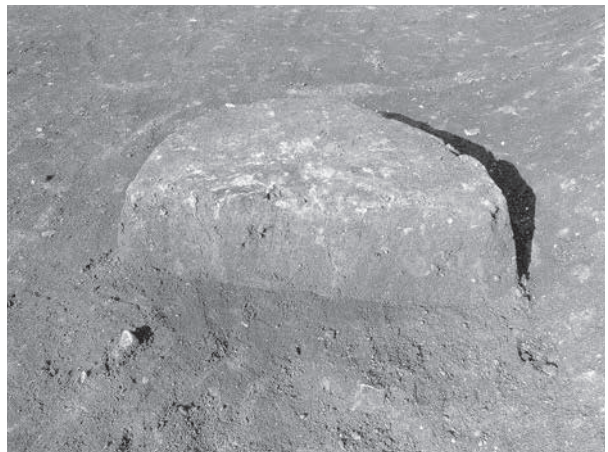
SH09床面土器出土状態



SH10全景



SH10断面 (南から)



焼土断ち割り (東から)



SK3断面 (南から)



SK5断面 (西から)



SK6断面（北から）



SK7（南東から）



SK7土器出土状態



SD1断面（南から）



SD2断面（南から）



調査風景



調査風景



SB12 (北から)



SB12 (P3) 断面 (北から)



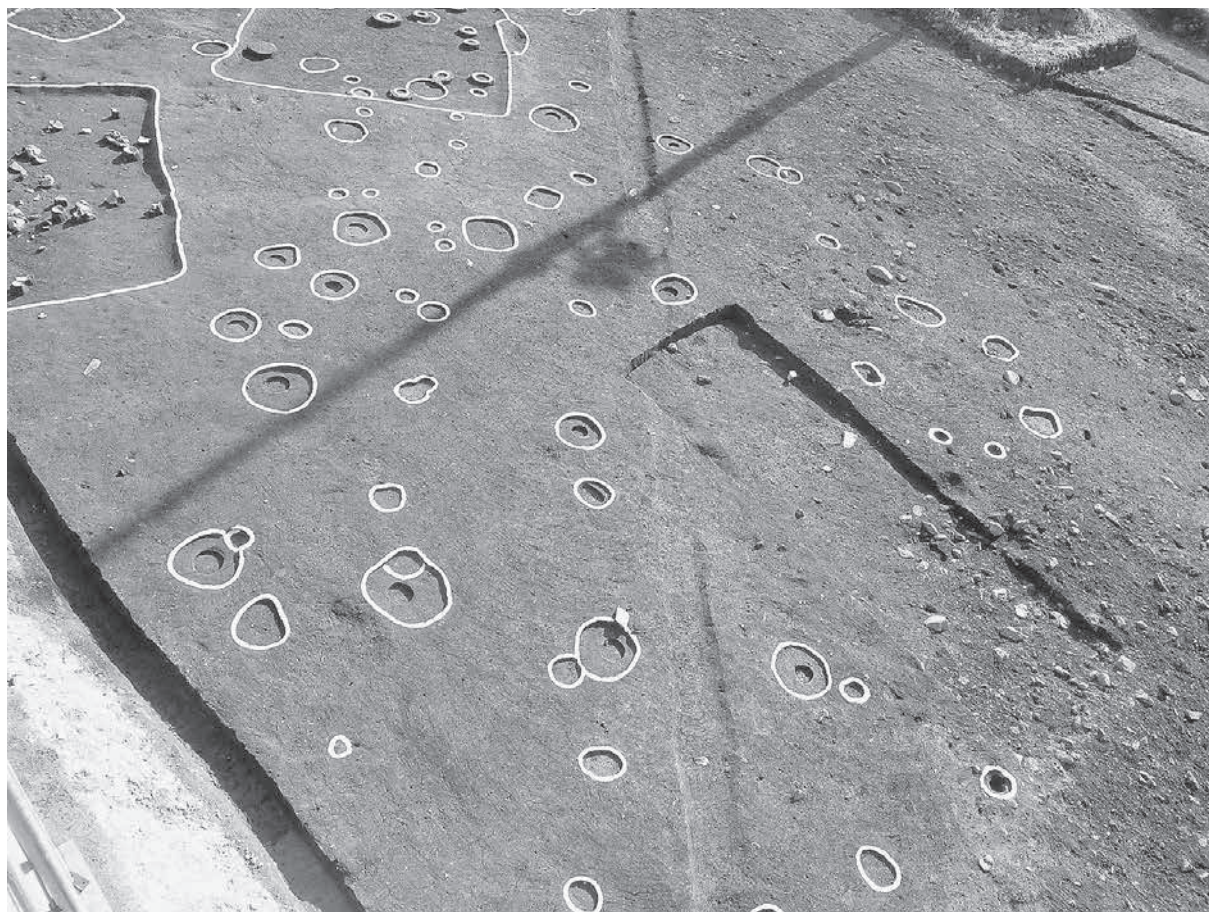
SB12 (P4) 断面 (東から)



SB12 (P8) 断面 (東から)



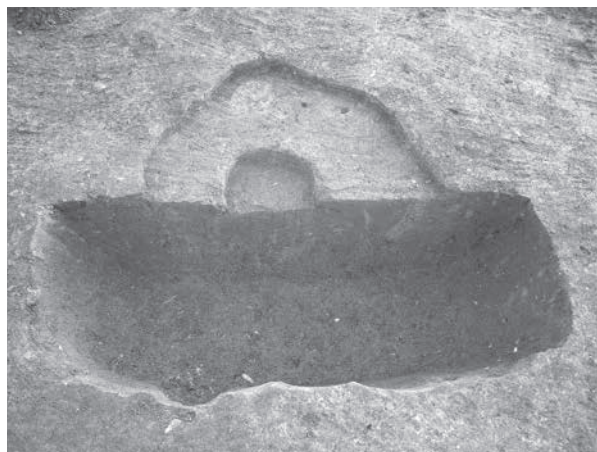
SB12 (P9) 断面 (東から)



SB13 (北西から)



SB13 (P1) 断面 (北から)



SB13 (P2) 断面 (北から)



SB13 (P3) 断面 (北から)



SB13 (P4) 断面 (北から)



SB13 (P5) 断面 (東から)



SB13 (P9) 断面 (南から)



SB13 (P15) 断面 (南から)



SB13 (P16) 断面 (南から)



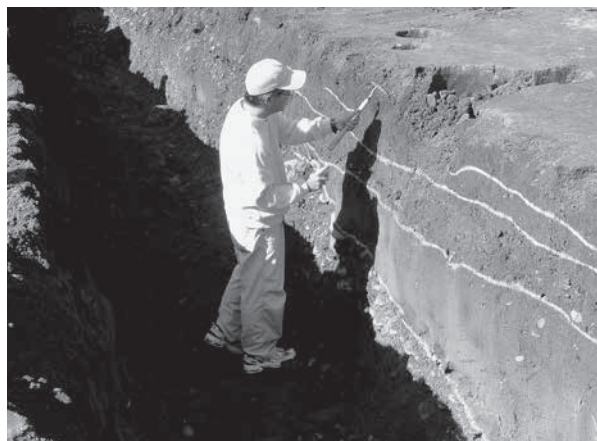
SP40 銭貨出土状態 (西から)



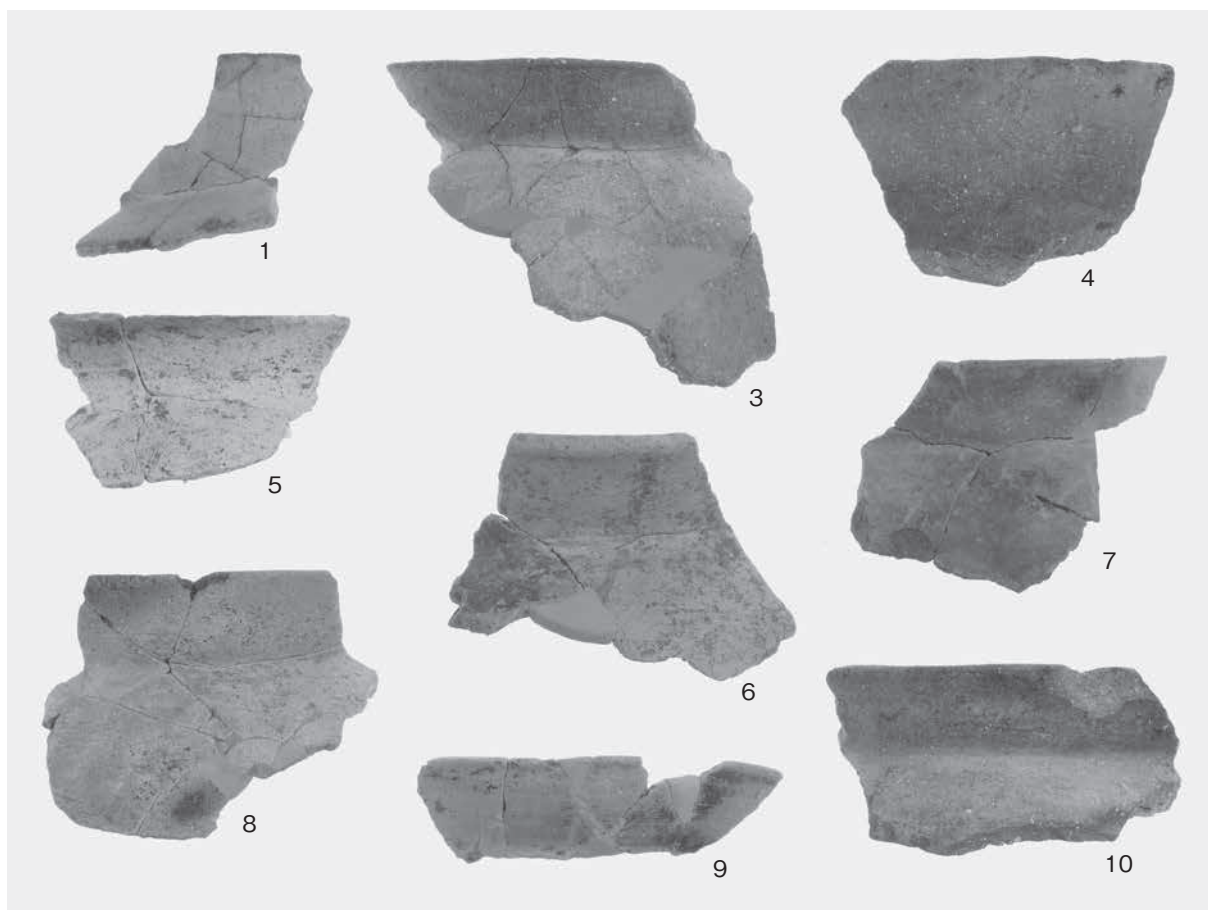
断ち割り断面 (南西から)



断ち割り断面 (東から)

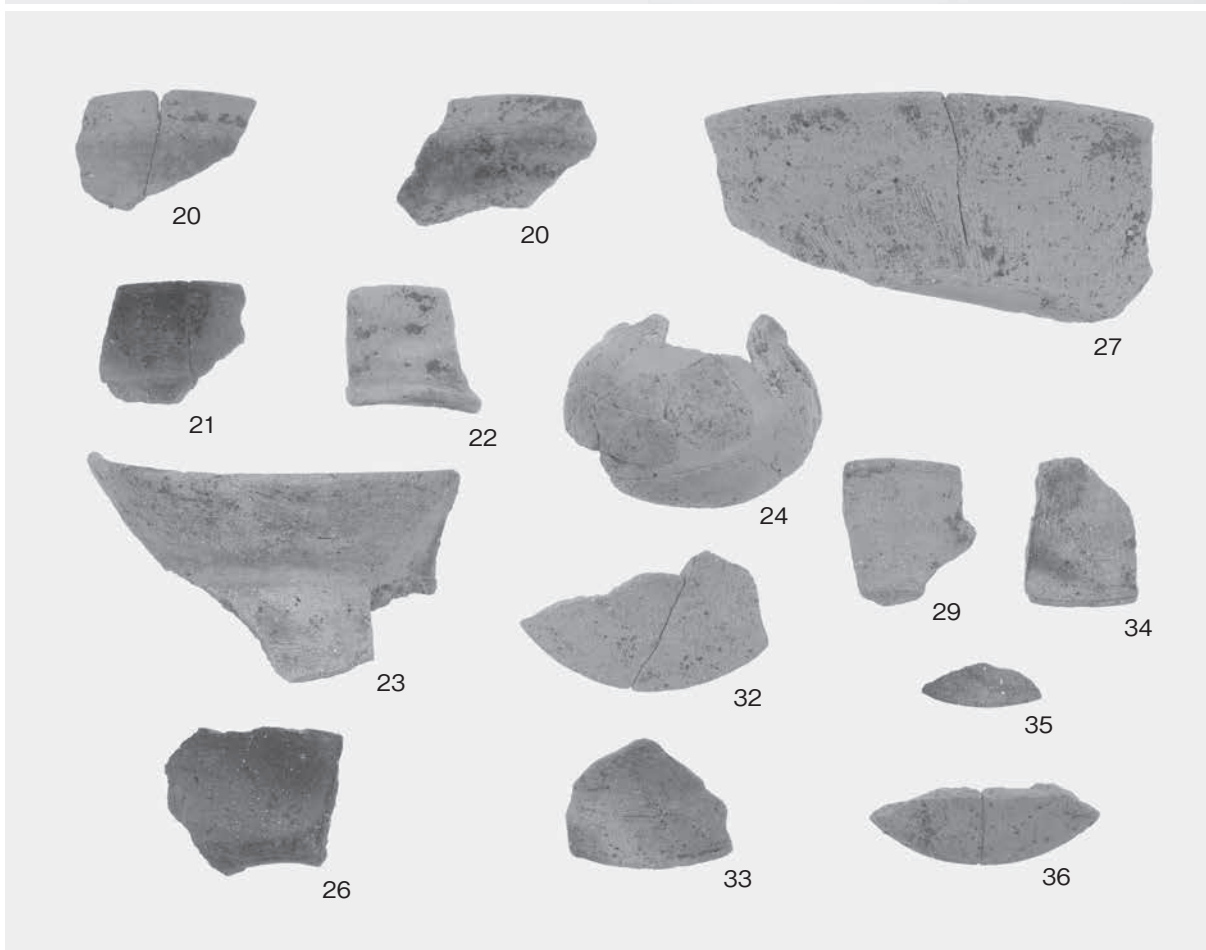


断ち割り調査風景



出土遺物(1) (SH01)





出土遺物(3)



37



38



41



44



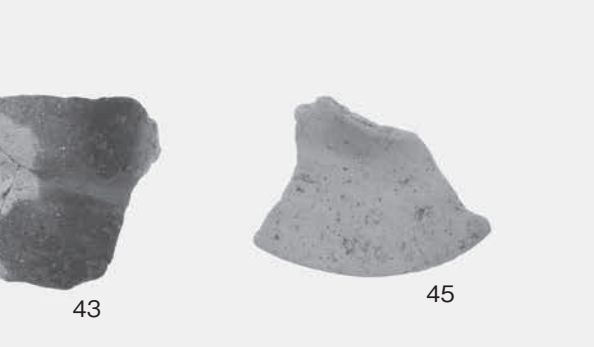
39



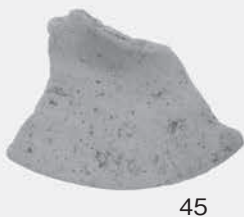
40



42



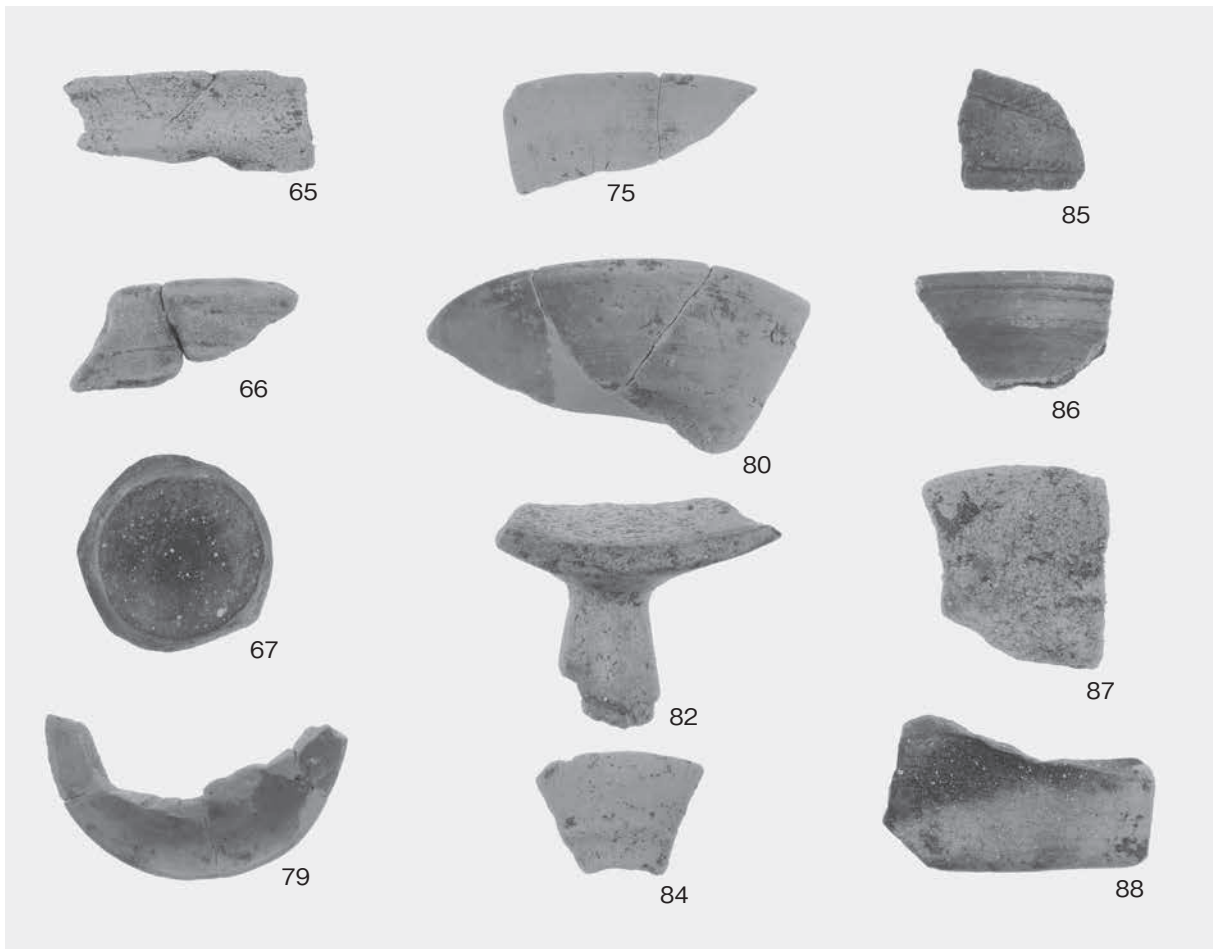
43



45



出土遺物(5)





71



72



73



74



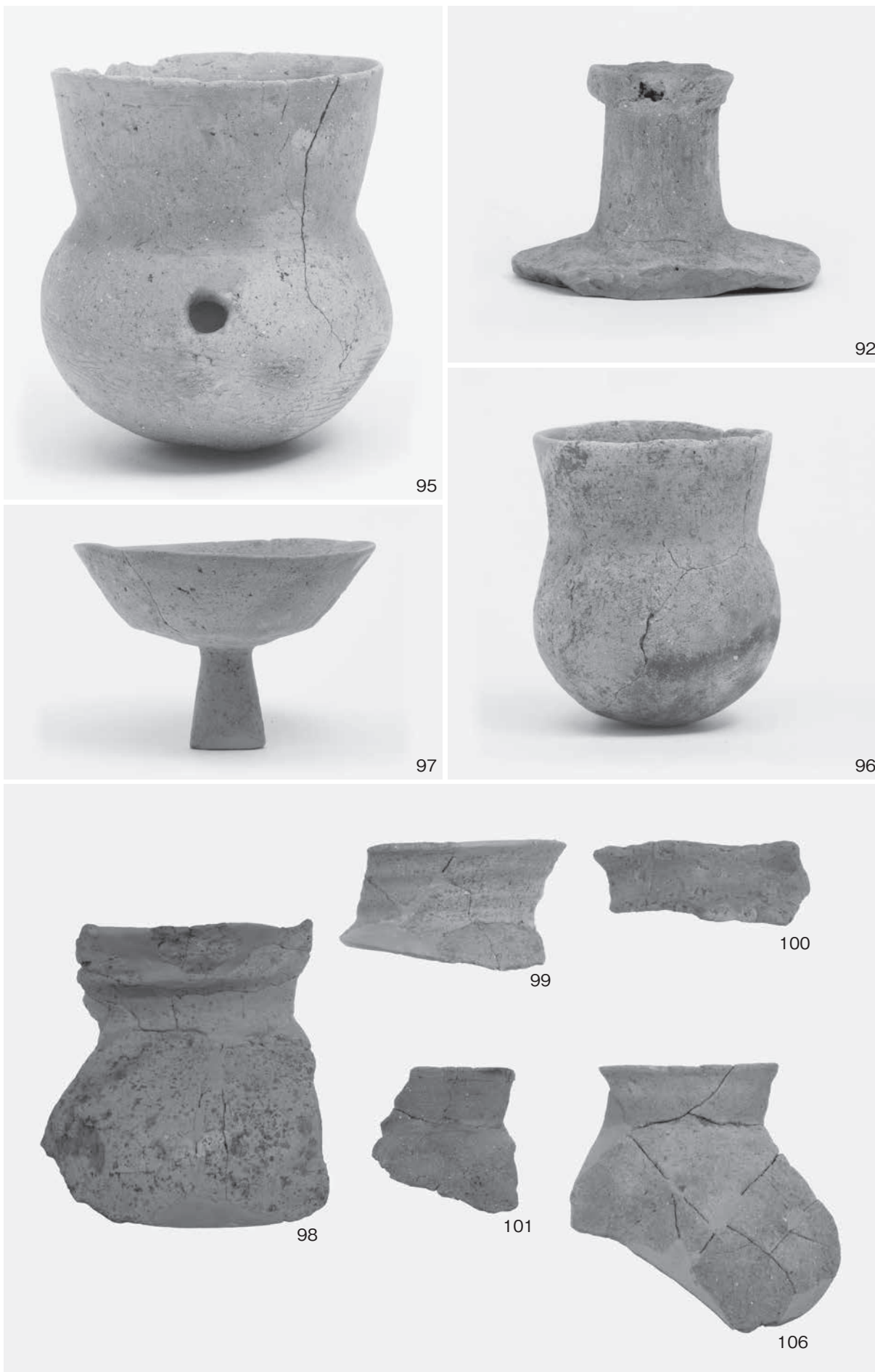
76



78

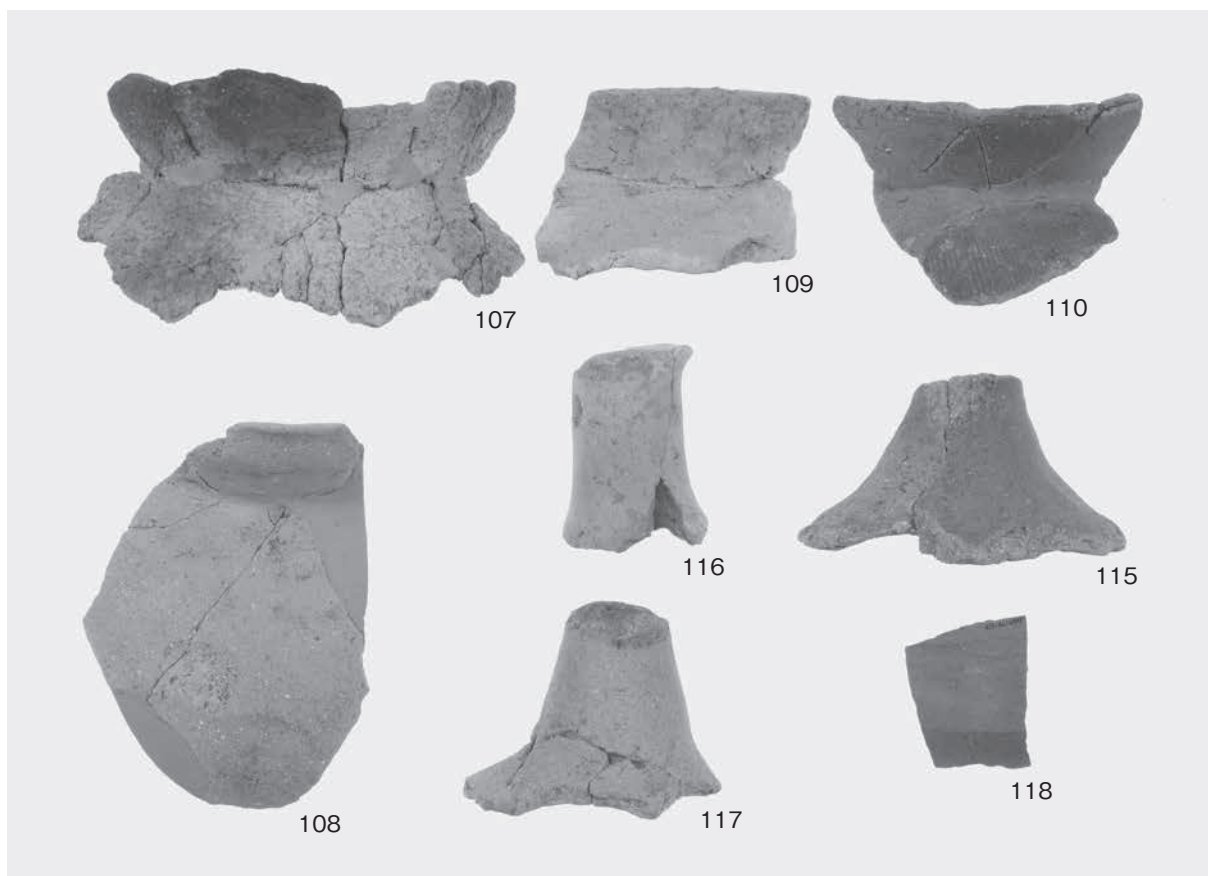


出土遺物(8)



出土遺物(9)

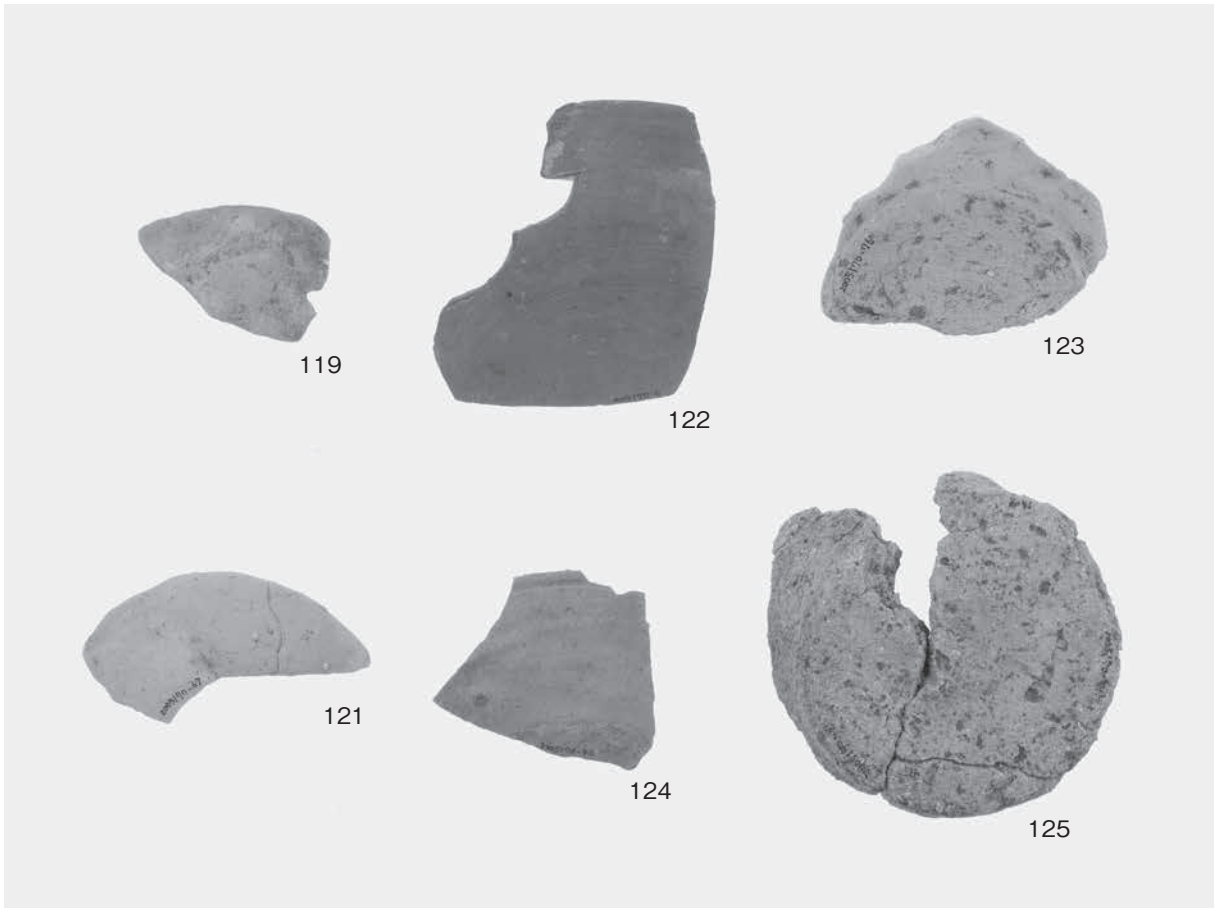




出土遺物(1)



120



119

122

123

121

124

125



129



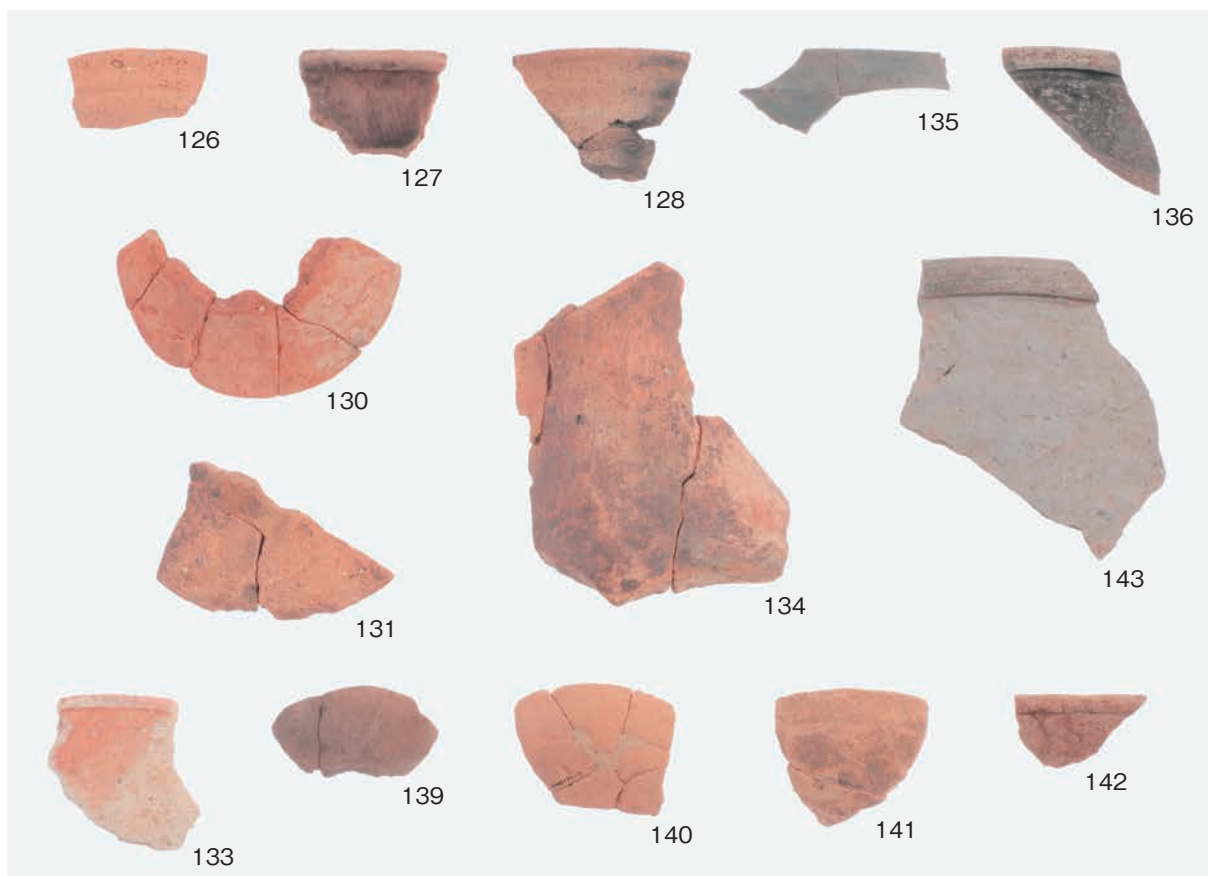
132



138



137



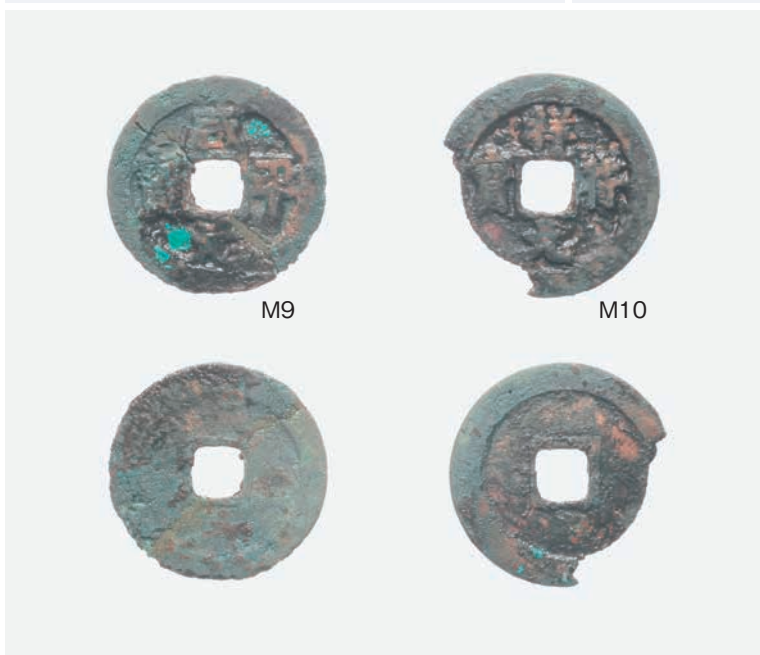
出土遺物(13)



M8



M23



M9

M10



S1



S2

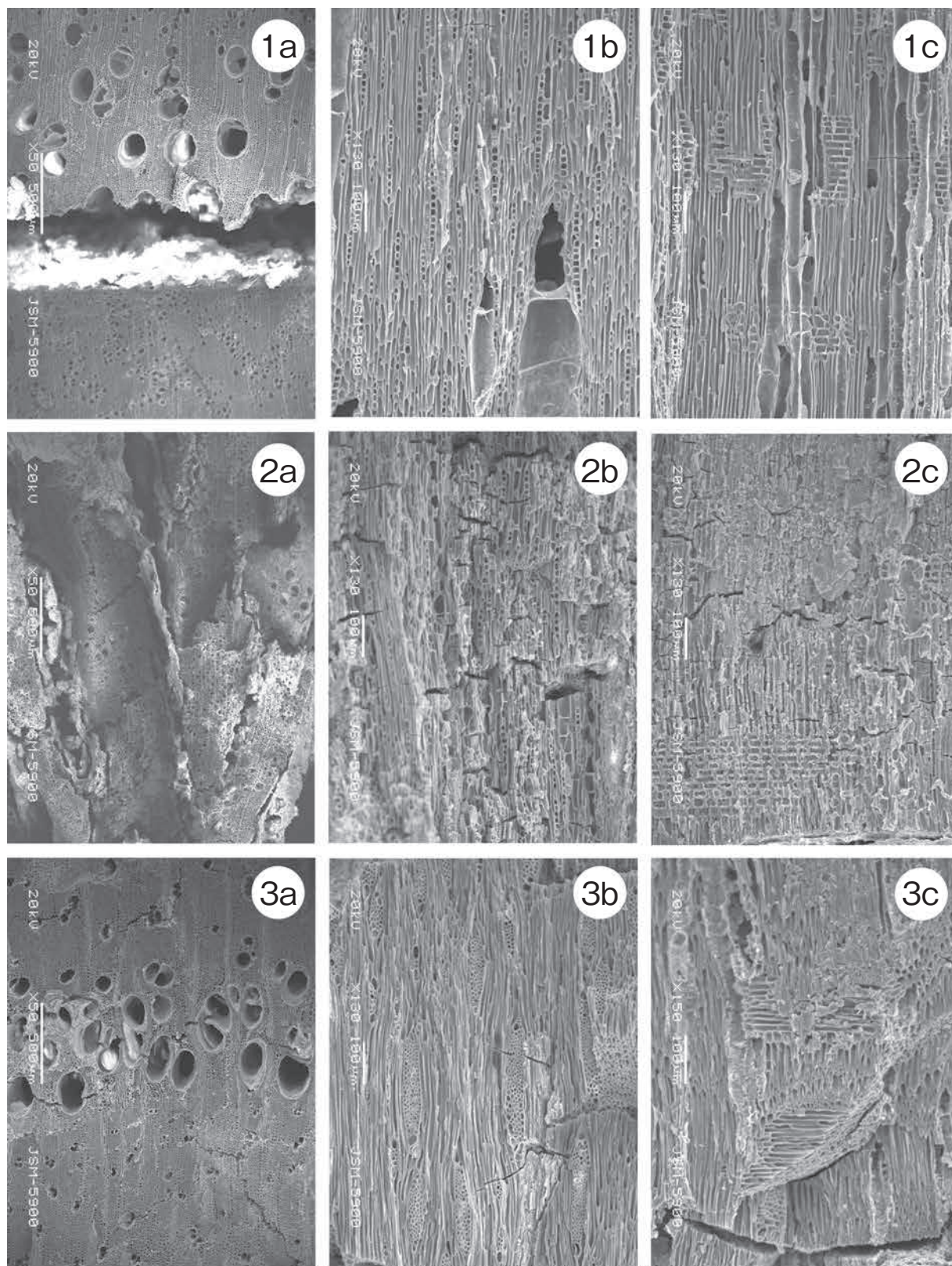


S3



出土遺物(15)

写真図版44
炭化材

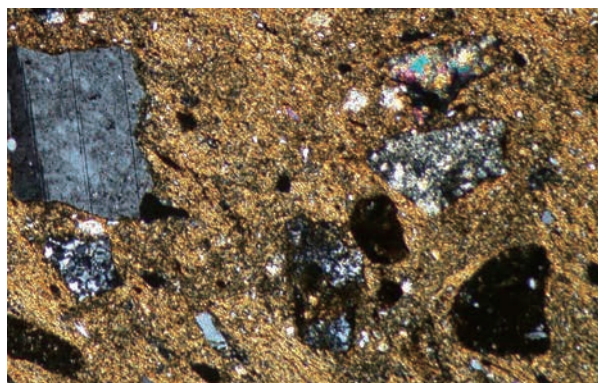
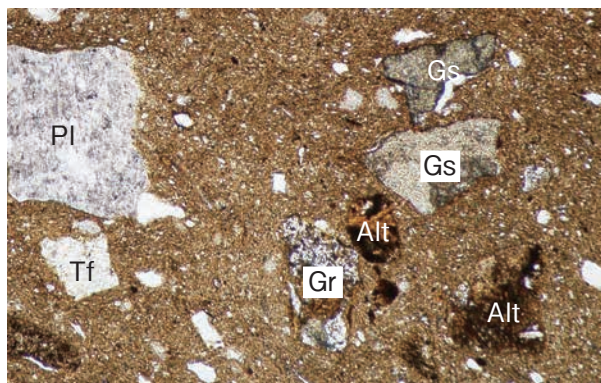


加都遺跡Ⅲ出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

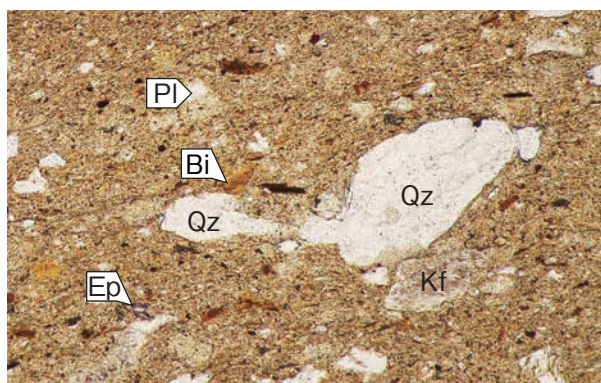
1a-1c. クリ(No.1)、2a-2c. シイノキ属(No.2)、3a-3c. クワ属(No.3)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

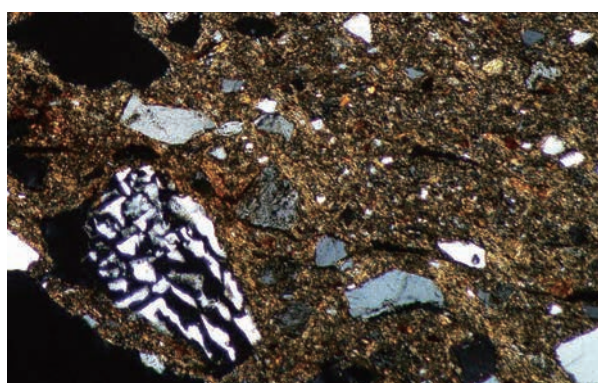
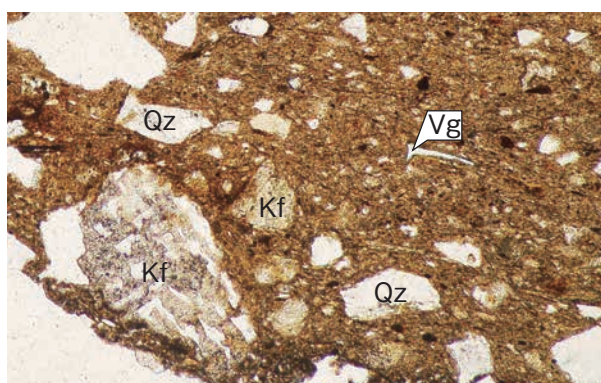
胎土薄片(1)



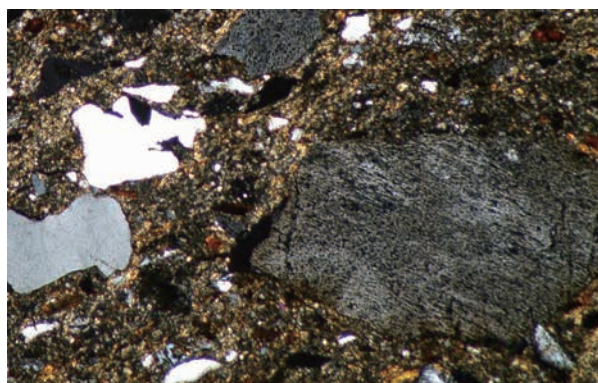
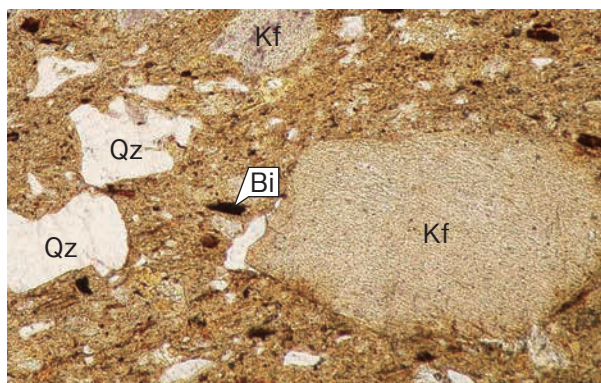
1.資料No.1(土師器 甕 A地区 SH01 報告No.7 実測No.355)



2.資料No.2(土師器 甕 A地区 SH01 報告No.9 実測No.344)



3.資料No.3(土師器 小型丸底壺 A地区 SH02 報告No.15 実測No.356)



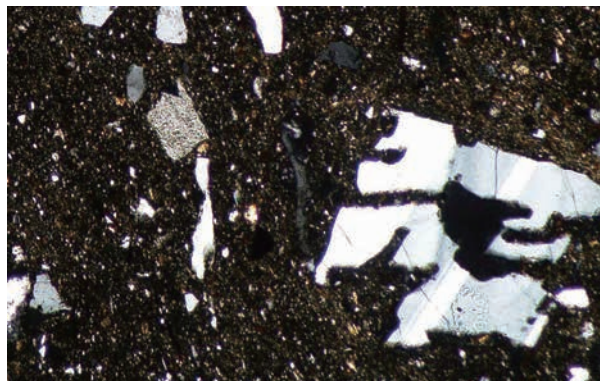
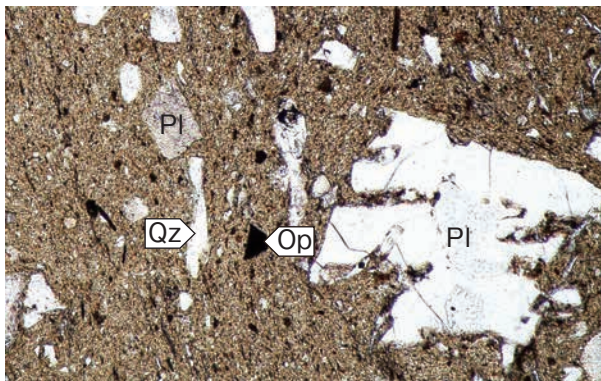
4.資料No.4(土師器 壺 A地区 SH02 報告No.20 実測No.360)

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Ep:緑レン石.Bi:黒雲母.Tf:凝灰岩.Gr:花崗岩.
Gs:綠色岩. Alt:変質岩(風化岩).Vg:火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

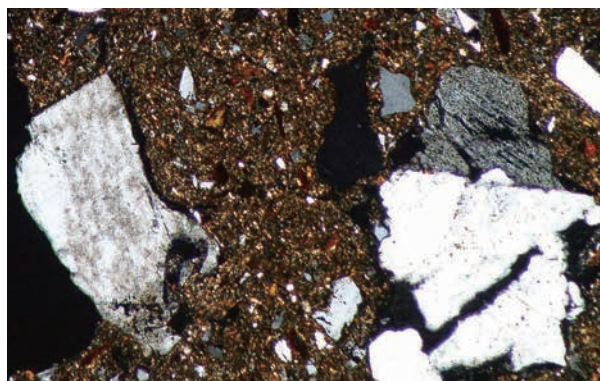
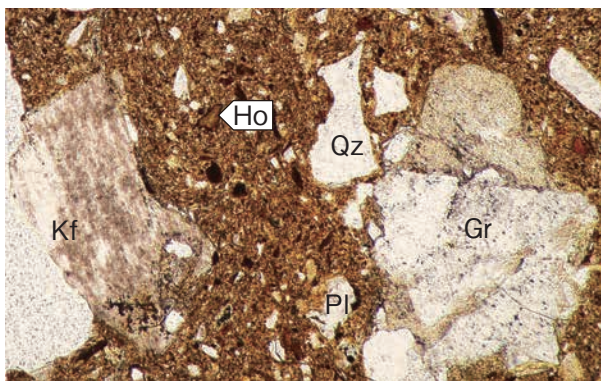
0.5mm

写真図版46
胎土分析

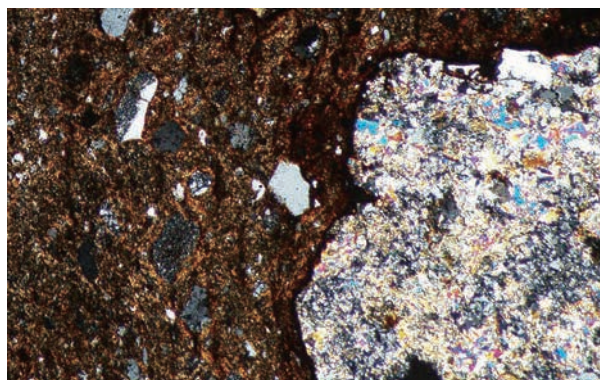
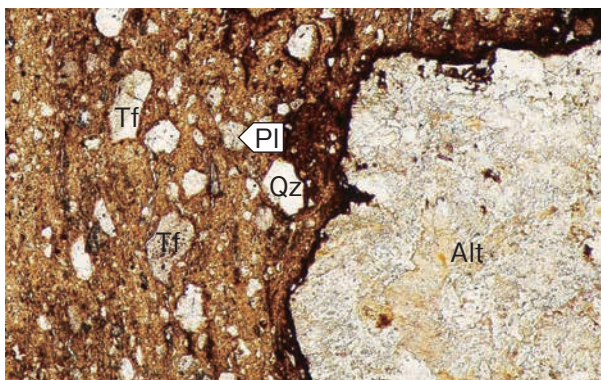
胎土薄片(2)



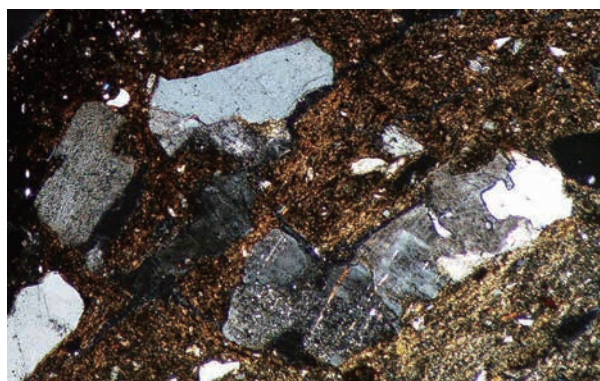
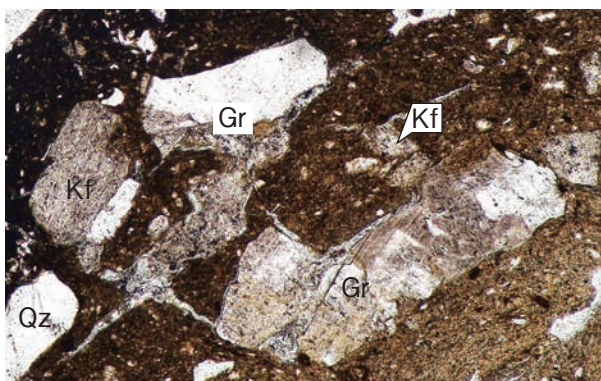
5.資料No.5(土師器 高杯 A地区 SH02 報告No.27 実測No.348)



6.資料No.6(土師器 高杯 A地区 SH02 報告No.29 実測No.362)



7.資料No.7(土師器 高杯 A地区 SH02 報告No.37 実測No.370)



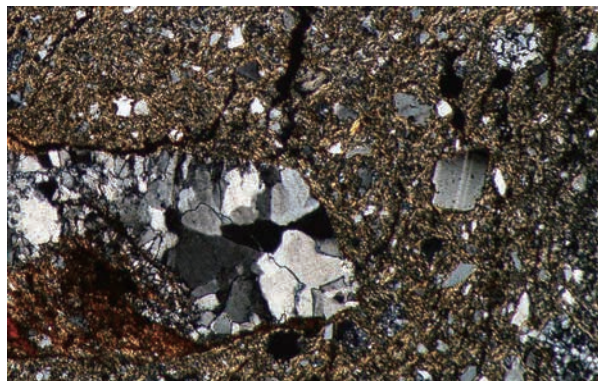
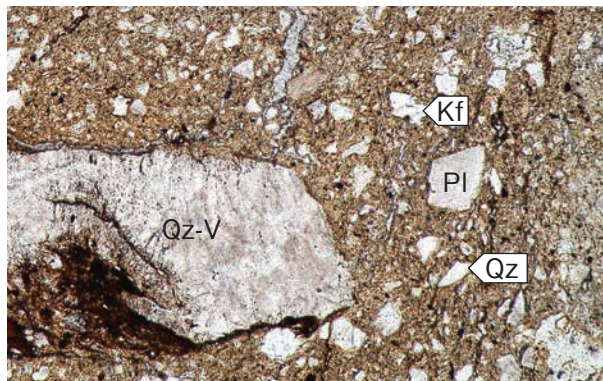
8.資料No.8(土師器 甕 A地区 SH04 報告No.40 実測No.307)

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Ho:角閃石.Op:不透明鉱物.Tf:凝灰岩.
Gr:花崗岩.Alt:変質岩.

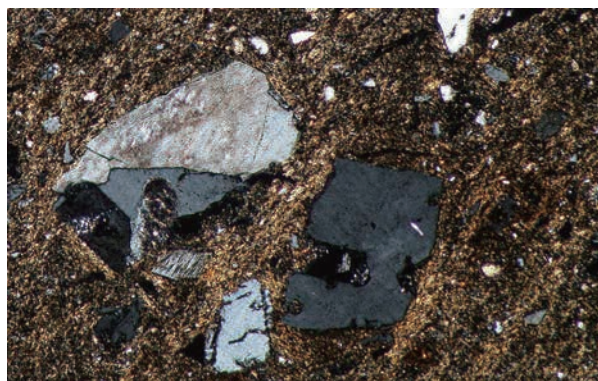
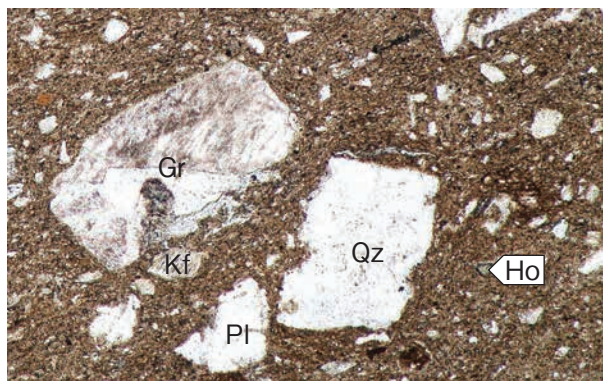
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

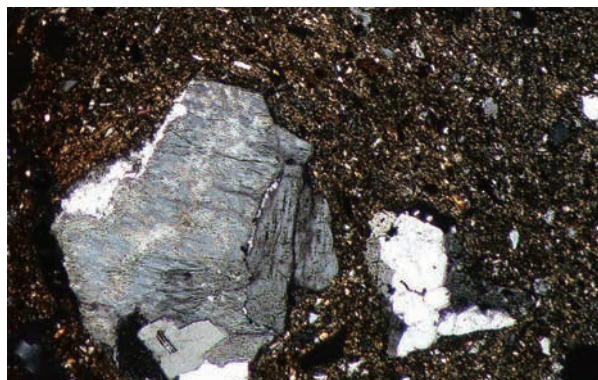
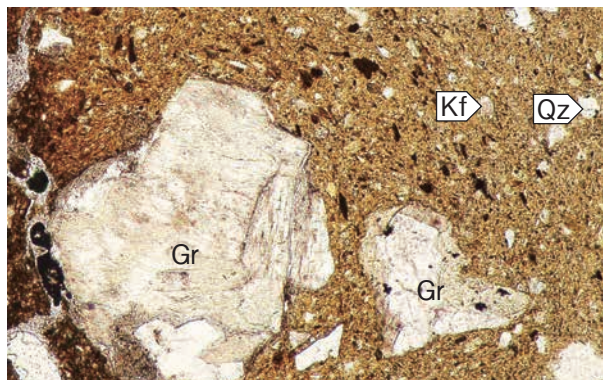
胎土薄片(3)



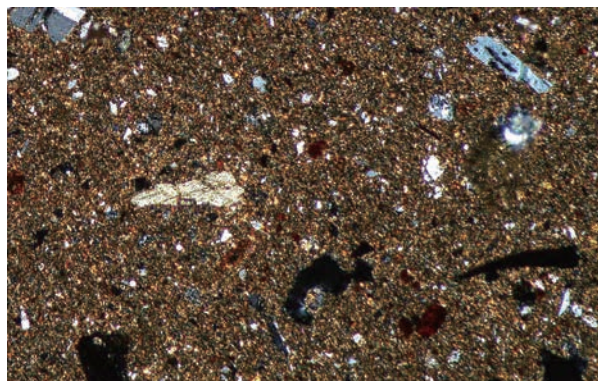
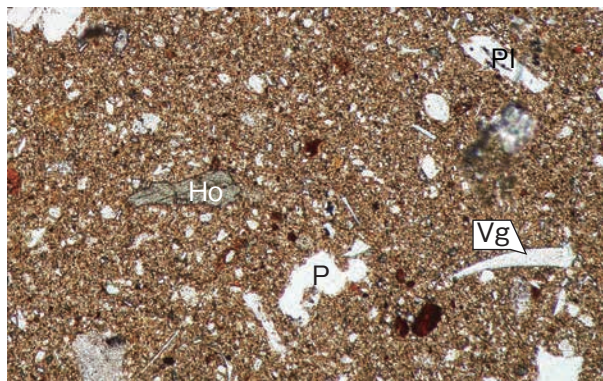
9.資料No.9(土師器 甕 A地区 SH04 報告No.41 実測No.302)



10.資料No.10(縄文土器 深鉢 A地区 SK02(埋甕) 報告No.55 実測No.303)



11.資料No.11(土師器 甕 B地区 SH05 報告No.67 実測No.381)



12.資料No.12(土師器 高杯 B地区 SH05 報告No.79 実測No.380)

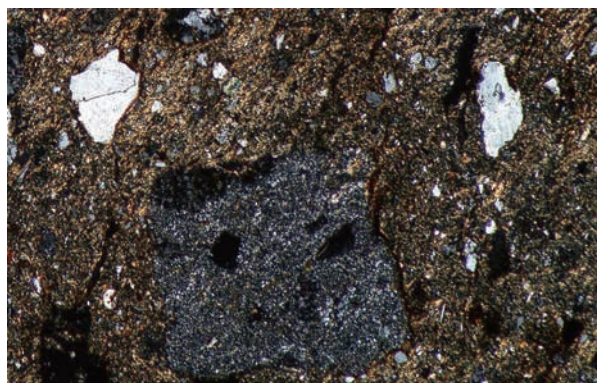
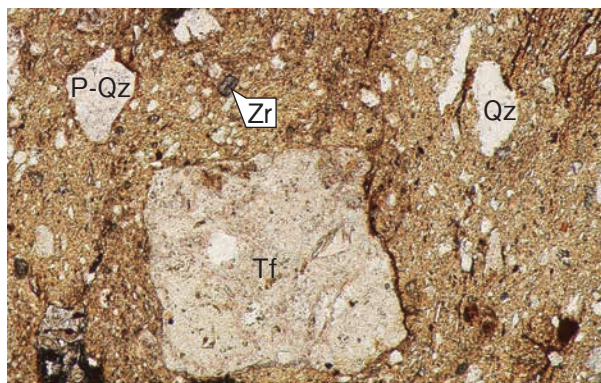
0.5mm

Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Ho:角閃石.Gr:花崗岩.Qz-V:脈石英.
Vg:火山ガラス.P:孔隙.

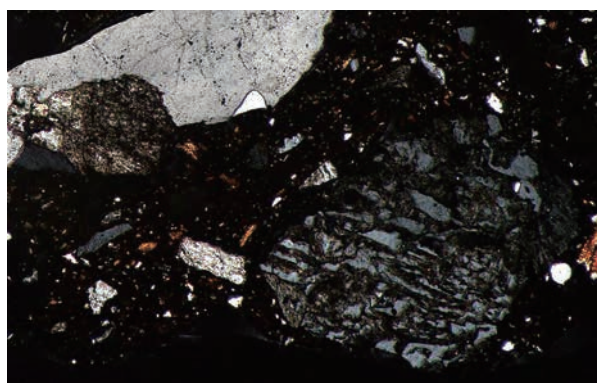
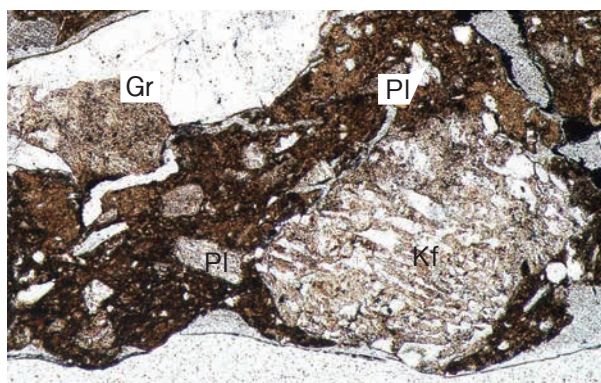
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真図版48
胎土分析

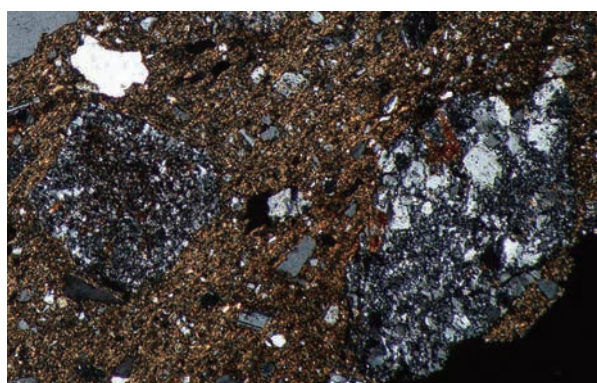
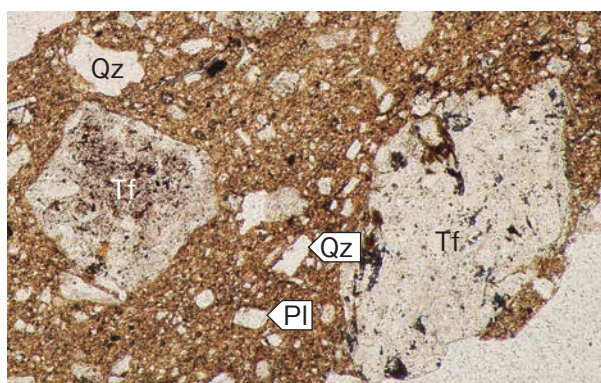
胎土薄片(4)



13.資料No.13(土師器 壺 C地区 SH07 報告No.94 実測No.30)



14.資料No.14(土師器 甕 C地区 SH09 報告No.107 実測No.14)



15.資料No.15(土師器 甕 C地区 包含層 報告No.127 実測No.50)

Qz:石英.Kf:カリ長石.PI:斜長石.Zr:ジルコン.Tf:凝灰岩.P-Qz:多結晶石英.
Gr:花崗岩.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

報 告 書 抄 録

ふりがな	かついせき											
書名	加都遺跡Ⅲ											
副書名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ											
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告											
シリーズ番号	第422冊											
編著者名	渡辺 昇・深江英憲・青木哲哉・パリノ・サーヴェイ(株)・(株)加速器分析研究所・(株)パレオ・ラボ											
編集機関	兵庫県立考古博物館											
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号			TEL 079-437-5589								
発行機関	兵庫県教育委員会											
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号			TEL 078-341-7711								
発行年月日	2012(平成24)年3月21日											
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因				
		市町村	遺跡番号									
かついせき 加都遺跡	兵庫県 朝来市 和田山町 市御堂	28225	730751	34° 49′ 34″	134° 32′ 58″			一般国道483号北 近畿豊岡自動車 道和田山八鹿道 路				
									調査番号			
									確認調査	2002209	2003.1.28～3.14	246m ²
									本発掘調査	2004181	2004.12.6～3.18	2,587m ²
			2005150		2005.10.6～11.10	1,008m ²						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項						
加都遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	縄文土器								
		古墳時代	竪穴住居跡	土師器・須恵器・鋤先								
		鎌倉時代	掘立柱建物・土坑・柱穴	土師器・須恵器・北宋銭								
要約	<p>状文時代から鎌倉時代にかけての集落跡である。加都遺跡の北西端に位置している。地区名は宮ヶ田地区になる。状文時代は後期の埋甕1基を検出しており、古墳時代は前期末から後期にかけての100棟を越す集落跡である。今回の調査でも9棟検出しており、土師器を主体部とした遺物が出土している。鉄製鋤先が出土していることは特筆される。鎌倉時代には掘立柱建物13棟や銭貨を伴う地鎮遺構を検出しており、中世比治庄に属している。</p>											

兵庫県文化財調査報告 第422冊

朝来市

加都遺跡Ⅲ

— 一般国道483号豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ —

2012(平成24)年3月21日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39

